
価値を知るもの

勇寛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

価値を知るもの

【Nコード】

N69160

【作者名】

勇寛

【あらすじ】

異世界に召還された八木孝和やぎたかかずは自身の才能の希少性、重要性を理解し、できるだけ自分の力を隠して生きていくことを決める。その一方、異世界の生活は思った以上に危険で困難であった。孝和の異世界での穏やかな日常と、巻き込まれるトラブル・事件を書いていきたいと思います。

現在、第2部に入りました。

第零話 異世界へ行く前に彼のことを話そう(人物批評)(前書き)

初投稿です。いろいろ間違いもあると思います。暖かく見守って
くれることを期待します。では、よろしくお願いします。

第零話 異世界へ行く前に彼のことを話そう（人物批評）

本来、多くの場合ある世界から他の世界への移動というのは大別して2種類に分けられる。特定の理由をもった何者かによる召還か、奇跡にも近い偶発的事故のどちらかに分けられる。

今回の場合については前者であった。

八木孝和（25歳）、事務職2年目、彼女なし、趣味はネットサーフィン・ゲーム・雑学・ベランダの家庭菜園の世話・食べ歩きである。

仕事については事務職とは名ばかり、ほとんどは先輩の後ろにへばりつき荷物運び・修繕といった体力仕事を任されていた。まあ、採用時の面接時に

「キミ、体力に自信ある？」

と問われ、

「はい！」

と答える前に、

「うん、ダイジョブそーだね」

と面接官が勝手に判断してしまった。

ちなみに186cm87kgの体格がその判断基準だったようである。

ただし、先にも述べたとおり趣味は基本草食系男子（オタク寄り）のためそこまで評価されるのは先走りすぎではないかと本人は思っている。スーツ姿があまりにもスポーツマンぽく見えたのも一因であろう。まあ、確かに体力はある。だが、面接の内容としてはあんまりではないだろうか。

ちなみにこのときに一緒に採用された同期の佐伯は「鍛えているやつ以外の何に見える」

と、呆れながらもそう教えてくれた。（佐伯は面接時の質問はキツ
チリ答えさせられたとのこと）

孝和自身は勝手に企業側が判断したのだから「ま、別にいつか」ということでそのまま内定をもらい、大学を卒業し、そこに無事就職したのである。

ほぼ雑用という職場ではあるが孝和自体はそんなに不満はなかった。他の多くの学生と同じく就職活動という戦場が目の前に広がり、なかなか内定という次へのステップが手に入らない者も多い中で社会人への第一歩を踏み出すことができたのだから。

どちらかというと職場への感謝のほうが多い。自分自身は口下手で人付き合いも不得手としていたから、対人関係の多い営業や窓口対応をしなくても良いこの職場はまさにピッタリだった。

15年前、家族は死んだ。姉の小学校の卒業式の帰りに自動車事故に巻きこまれたのだ。相手側のトラックがハンドル操作を誤ったのが原因ということだった。そのときの事故に孝和は巻き込まれることはなかった。卒業記念に、デリバリーのピザを頼んでいたから家で留守番をしていたからだ。

自宅ですべて帰ってこない家族を待っていた孝和は、警察からの電話が鳴り響いたあのかのときの光景を今でも夢に見る。

相手側のほうの責任が大きいということが多額の賠償金と、掛けていた保険のおかげで多額の財産を手に入れた彼のもとには多くの“自称”親戚たちが集まることになる。それらの多くはまさに“自称”であり、孝和とは今まで接点がなかった者達だった。

よくある三文小説のような話、まったく理由のわからないことで失った家族、金のおいに敏感な親戚連中、そして誰も助けてはくれないことへの絶望から彼はあまり誰とも話さなくなった。軽い対人恐怖症になったといってもいい。

誰も愛さない、誰も信じない、そんな孝和の不幸な日常に一筋の光がさした。

祖母の弟という人物が現れたのだ。最初は孝和もそれは反発した。今まで自分の周りに来た“自称”親戚と変わりないと思っていた。ただ、その時点で今までの孝和にあったはずの資産はほとんど残ってはいなかったたので、真意を掴めないことも事実だった。

だが彼、結城法寿は違った。まず第一声が

「こつちを向け、バカモン」

だったのである。いままでの孝和にとって初めて出会う人物は、すべて敵であった。目を合わせず過ぎ去ってくれることを唯一の解決策だった。

今度もまた同じ日々が続くのか、と何度も繰り返された転校により少なかつた友人も全ていなくなり、孝和の心はゆっくり、確実に腐っていった。

「まずは挨拶。次に笑顔。最後に鍛錬」

保護者となつた法寿の言葉である。孝和は挨拶と笑顔を叩き込まれた。このことがいい影響を孝和に与えたのは間違いない。

「人生どうにもならないなりに、何とか生きていけるもんだ」

これは、2年ほどして悟つた孝和の座右の銘である。大きな声で挨拶をして、バカみたいに笑い、足腰が立たないほどの拷問（？）に近い鍛錬。これが卑屈だった心を前に進めることを乱暴であったが可能としたのだ。

保護者の法寿は陶芸家であり剣術家であった。陶芸自体は60を過ぎてから始めたが国内ではそこそこの評価を受け、日常の生活を支えていた。

家の中では法寿はバラエティ・音楽番組の好きなファンキーなジジイであった。最新式のミュージック・プレイヤーにはダウンロードされた曲が演歌からJポップ、洋楽の最新チャートまでぎっしりだったことがその一例といえる。

孝和に某漫才コンテストに二人で組んで出ないかと誘ってきたと

きにはさすがに引いたが。

孝和にとつて楽しい暖かな家族であったが、法寿は剣術家としては鬼だった。引き取られた中学2年からの鍛錬は壮絶であり、週3で通うほかの弟子と違い、放課後はみっちり鍛えられ夏季・冬季休暇は武道場の床でほぼ雑巾になっていた。

そんなこともあり

「皆伝を与える。明日からは師範だ」

となるまで時間はかからなかった。

20歳で鍛錬からの卒業となり、抑えていた反動で一気に草食系男子の道をまっしぐら。

「俺はっ！自由だー！！」

と叫んだ翌日、自由だと考えてはいたが、だからといって人見知り程度にまで落ち着いた軽度の対人恐怖症の人間に、急に自分の未来像を描けと言われてもピンと来る訳がない。

そのため、オタク趣味以外は、それまでと変わらず日常と化していた鍛錬を続け、そんな日々がそのまま続いた。

孝和が大学を卒業してすぐの3年前に法寿は亡くなった。脳卒中であった。それを予期していたわけではなからうが、
「なかなかこの人生は、楽しかった。有意義というのはこういうことだな」

という夕食の会話が最後の言葉となった。

孝和はそれに、軽く照れ笑いを浮かべ、穏やかに最後の会話をすることができたのを非常に幸運だったと感じている。

仰々しい場が好きでなかった彼のため、簡素な葬儀を終え、身の回りの整理をした。

道場は高弟の一人に引き継いでもらい（年若い孝和よりも、彼のほうが適任だと納得している）、自分は道場兼自宅を譲り渡した遺産をもとに一人暮らしを始めた。楽しかった思い出、日常のちょっとした感謝、鍛錬に対するちよつとした不満、その他もろもろの感

情を胸に孝和は法寿との生活に終止符を打ち、新生活を始めた。

そして新生活2年目、スーパーの帰り道から物語が始まる。

第1話 目の前に広がるのは？（前書き）

とりあえずここからが、本題です。何とかかんとか書いていますので、かなり無茶な書き方になっています。

暖かく見守ってください。

よろしく願います。

第1話 目の前に広がるのは？

さて、八木孝和は自分の置かれた状況がまるでわからなくなっていた。

まず、第一に足元の岩肌はなんだろうか？確か自分は近くのスーパーで買い物をして、その帰りのはずだ。手には瓶で買った醤油とパック牛乳に今日の夕飯にと思って2割引の惣菜がある。

だから足元は現代日本のありふれたアスファルトの路面でなくてはならないはず。電柱の1本でも生えてなくてはならない。そのはずだ。

第二に、あつてはならないものが見える周囲に目を凝らす。なんだかボーッと薄い光が自分の前方約5メートルから周りの壁に広がり、キラキラ光ってとっても綺麗だった。

……壁？……いやいや、少し待ってほしい。孝和のスーパーから自宅までの帰り道は徒歩5分だ。その5分間にこんな壁はない（そんな壁はない！！うん。洞窟に見えてもきつと気のせいだ。気のせいなんだ！）

ぎゅっと目を瞑り、その後ゆっくりと瞼を持ち上げていく。

そこには先ほどと変わらず、キラキラした岩肌が広がっていた。

（……………よし、とりあえず現実逃避してみたが、これじゃあ先に進まない……………）

もうこれは最初に気づいた最大級の疑問点に聞いて見るしかない。

そう孝和は覚悟を決め、恐る恐る声を上げる。

「あの、すみません。教えてほしいんですが、此処どこですか？あと、いまの状況について何か知ってたら教えてください」

孝和はそれに聞いてみた。声が震えたのは気のせいではないだろう。じつとりと手に握り締めたスーパードッグ袋が汗でヌルヌルしている。そしてそれは孝和の声にゆっくりと“首を持ち上げて”答える。

「よかるう。汝にはその権利がある。我が古の契約に連なる地に住まう者よ。」

それは一言一言に巻き上がる風とともに、柔らかくも強い感慨と寂しさを感じさせた。

伏せてはいても見上げるような巨躯、それ自体が薄く輝く光の鱗、アクアマリンのような透き通った瞳と巨大な顎。

孝和の偏った知識の中で、そして日本人が考えうる限りこんな生物は現実に存在しない。だが、創作物の中では最もポピュラーといえる。

そう、最大級の疑問点、それは、

神々しいまでの気高さを、美しさを、強さを、感じさせる“ドラゴン”であった。

孝和自身は、一般的な日本人である。いたって健康で、幻覚をみるような病気や高熱はない。昨今問題になっていく危ない薬に興味を持つようなバカではないし、そんなものと出会う機会も今までなかった。では、これは現実だと認識するに到るしかない。

本当に残念な結果ではあるのだけれど。

「あの、あなたドラゴンでいいんですよね？私はあなたのような方とであったことがないもので」

孝和はまず、確認しなくてはならないことがあった。目の前のドラゴン（？）の存在自体が自分の理解の範疇ではないからだ。

だからまずは良好なコミュニケーションを取ることが大切だ。

自分と目の前のそれが違うものでありことを理解し、自身に悪意

がないことを証明しなくてはならない。だから相手の受け答えの反応を確認する。

それも孝和ができてくる限り下手で。今までの人生で培った下手に出る技をフルに活用するのだ。

はつきり言つてこの目の前の存在は孝和より強い。それは絶対的な差である。自信の鍛錬がすべてこの目の前の存在には通用しないことが、ありありと判る。

これも非常に残念な結果だが。

「なるほど、確かに汝の世界にて我のような存在は稀であろう。確かに龍という種族自体もこの世界では少ないがな…我はドラゴン、真龍と呼ばれるもの。汝の推測は正しい」

大体50～60mの巨躯の全身に白く輝く鱗が生えている。よく見ると1枚1枚の鱗それ自体には色がない。地面には抜け落ちた鱗があり、時間がたつたせいなのか、透明なその表面はくすんで見えた。つまり鱗自体は無色透明であり、白く発光して見えるのは直接竜自体の体表から生えた鱗のみであった。

体型はアジア方面でよく見られるタイプではなく、所謂西洋龍であった。背中から生えた翼は今はたたまれているが、広げればこの洞窟の広間を包み込めるくらいのサイズではないだろうか。天井には夜空が広がっている。どうやらこの竜の出入りはこの天井の大穴から出入りしているようだ。雨風とかはどうやってしのいでいるのだろうか、とつまらないことを考えてしまったが、まあ今はいいだろう。

薄くこの龍は笑ったようだった。もつとも孝和は混乱と、龍から発するオーラを受けてそれどころではなかった。

孝和は頭を抱えた。目の前の存在が龍であることはわかった。だが此処に至つてひどく自分がこの場において、この気高く美しい龍と会話していることが不条理である気がした。

そんな葛藤をしている孝和を見て初めて竜は感情のある声を出し

た。

「そんなにかしこまることはない。我は汝に謝罪と償いをせねばならぬ。すでに気づいているようだが、此処は汝のいた世界ではない」やはりか。孝和はがっくりとひざから崩れ落ちるように四つんばいになった。

「えっと、そういうことならあなたが俺を呼んだということではないですか？」

疑問形ではあったが、ほぼ回答はYESであることはわかっていゝる。敬語のままなのは孝和自身の性格だ。一人称が私から俺に変わった以外は何も変わらない。

そして、回答はYESであった。では、次の質問だ。わかることについてこの気高く美しい”自分を召還した”竜に聞かねばなるまい。

この世界について、この召還の意味について、そしてこれからについて。

孝和を召還した龍は名前をシグラスというそうだ。

オスなのだそつてある
彼によると、この世界に孝和を召還したのは簡単に言つと

「死が近いから」とのことだった。

しかし孝和にはそれが信じられなかった。目の前のこの竜からは圧倒的な生命力を感じられる。死というものから最も遠い存在をひとつあげるといわれれば、間違いなく自身の世界の神々ではなく、この目の前の龍を選ぶだろう。

「あなたの都合でこちらに呼ばれたのはわかりました。あなたがもうすぐ亡くなるということも事実だとします。ですが！何で俺なんです！？俺は普通の人間です！！あなたが俺を呼んだことの理由がわからない！！」

孝和の感情が爆発した。理不尽な理由で拉致された。此処には自分の友も、知り合いも全てが存在しない。体全体で不満を目の前の

龍に叩きつける。自分がこの目の前の龍より弱いであろうことも忘れて大声を張り上げる。

その様子を見てシグラスは、苦惱と申し訳なさを含んだ声色で語りかける。

「全て、私のわがままだ。許すことはない。恨め、蔑め、罵れ。汝にはその権利がある。だが、この罪が必要だった。汝が、我の魂を受け入れられるだけの同格の魂を持った汝が、だ」

大きく竜が息を吐き出す。そのときになって孝和は気がつく。先ほどまでの生命力が感じられない。ひどく目の前の巨大な龍が希薄になった。

なにか大切な単語が語られた気がした。だが、それ以上にこの自分を呼び出したこの龍が消えてなくなる感覚がなぜかはつきりと理解できた。先ほどの圧倒的な生命力が急激に失われていく。少しずつ回りに柔らかな光を放っていたシグラスから光が消えていく。

「な、なにが？」

いきなりの変化に孝和はうろたえる。

「どうやら時間がないようだ」

龍の言葉に諦観が混じる。

いきなりこのわけのわからない世界に召還、呼び出した神竜は死にかけて（？）いる。まだここに召還された理由も聞いていないのに。これからのこともまったくわからないのに。帰れるのかどうかもわからないのに。

「すまない。汝を此処に呼び出したことで最後の力を使い果たしたようだ」

「待って！あんたの死に目を見せるのにわざわざ俺を呼んだのか！？何がなんだかわかんないだろ！！説明もなしに俺に何を求めているんだ！！」

孝和の憤りはもつともだった。

シグラスは語る。自身の一族のこと、この世界のこと、孝和の世界のことを。

シグラスは真龍の一族であった。龍族の中でもっとも力のある一族であり、地位もそれに準じたものである。弱肉強食のこの世界の中では、自然の成り行きといえた。

だが、その状況に変化が現れる。あるときを境に真龍に子が生まれなくなったのだった。なぜかはわからない。今までも繁殖力に関しては何の龍の一族より低いことはわかっていた。

100年新たな子が生まれないうちに一部のものが気づく。その時点ではまだ大きな問題とは考えられていなかった。龍族は長命であり、かつ強靱な肉体と高い知性により死んでゆくものも少なかったからだ。

200年が経過して、事態は緊急を要することになる。長老の一派が死を迎えることになり、次代の長にその力と地位を継承することになった。だが、継承は失敗した。継承は長の魂に詰め込まれた長年の知識と真龍の管理する“エナジー”を次代が受け取ることでなされる。

この際の継承者はその時点でもっとも強く、賢く、若さにあふれたものであった。その継承者が“エナジー”を受け止め切れなかったのだ。

この継承の儀式の“エナジー”は途方もない大きさであった。受け止めるものがいなければこの“エナジー”は制御を失う。

たとえ制御を失っても“エナジー”は強者には影響を与えないだろう。だが、この世界には強者ばかりではない。弱者が存在する。おそらくはその弱者は耐えられず、消え去ってしまうだろう。この地域があまり生物の少ない過酷な土地とはいえ、その数は膨大な数になる。それを死滅させるわけには行かない。

この問題が発生した原因は長年にわたる“エナジー”の蓄積と、それに反する強者たる真龍の種族としての進化の少なさにあった。

結局、この時は真龍の中で最も若いシグラスのみが継承の儀式に

耐えうることができた。しかし、このときの儀式は成功した一方、次回以降は非常に難しい結果になるであろうことがわかった。

なぜなら、継承に成功したシグラスは力を増した一方で、他の真龍がその力に耐えられるだけの子孫を残すのは難しいからである。かといって他の龍族や他種・下位竜族ではこの儀式に耐えられない。種族としての数の減少は止められない。700年という真龍の寿命がある一方、次が生まれえない。ならばどうすればいいか。

多くの時間がこの問題の解決が費やされた。

そして、多くの犠牲を伴う、この問題の解決策が生まれた。

「それが、俺の召還ということなのか？」

シグラスが話した内容はあまりにもスケールが大きすぎる。どんなにがんばっても80年程度の寿命の人間にとって、100年以上のスペインの話はどうしたって対応できるものではない。

「すこし、違うな」

先ほどよりさらに光を失ったシグラスが答えた。

「すこし？召還という行為自体はその解決策の一部なんだろう？」
孝和は自分の中の怒りを抑えた。自身の召還が真龍の種族にとつて仕方ない行為だということがなんとなく感じられたし、シグラスが死にかけているのはそのせいなのだろう。命を掛けたこの行為に關して、少なくとも敬意は払うべきだろう。

そう考えるのは孝和の甘さであり、優しさでもあった。

「問題の解決には、真龍の一族が制御している“エナジー”の暴走を二度と起こさないことが大前提だ。そのためには、制御した“エナジー”を大地に返還することが必要となる。神々より授かった“エナジー”を大地に帰すのには許可が下りている。これは真龍の一族の最後の仕事だ。だが、それを行うには継承の儀式のとき、制御

権の譲渡時にしか不可能なのだ。しかし、継承者は真龍の一族からは生まれてはこないだろう。種族としての成長はもう望めないからな。

故に、新たな可能性に賭けた。異世界にその可能性を」

シグラスは罪を告白するように、孝和に語りかけた。

「真龍の半数の命を糧として異世界への扉を開いた。300年前のことだ。残りの半数は自身を純粋な力として異世界の住民に宿し、その世界で生まれる住民の魂に真龍の一族のかけらを与えた。この世界でその方法を取らなかったのは他の種族の妨害を考慮してのことだ。結果、可能性の果てに後継者たる汝が生まれた。汝は今回の継承の儀式の主役ではあるが、問題の解決という意味では、補助的な役割に過ぎぬ」

罪には罰を。その言葉どおりに真龍の犯した罪はその一族を滅ぼした。そしてシグラスは最後の長として300年を生きた。孤独の中、残された可能性にかけて。

「じゃあ、あんたが俺を選んだのは？」

「偶然というよりは運命といえるかもしれぬ……。この世界と汝の世界が、汝を選び出した。言葉が通じるのは、我と汝が大きな意味で同族であるからだ。汝の先祖に我等の一族が宿り、子を生し、汝が生まれた。命を、尊厳を、世界を汚す行為だということは重々承知だ……。すまぬ、汝には謝ることしかできぬ」

「……構わないよ。そんな謝らなくていい」

その言葉にシグラスは驚いた。先ほどまで大声を上げていた孝和がいきなり自身に好意的、とは言わないまでも落ち着いて返答しているからだ。

だが孝和自身は、この気高い真龍に強い憧憬を覚えていた。単純な性格だな、と自分でも思うがシグラスの思いも十分にわかってしまった。もしこれが大叔父の法寿が存命なら違っていたのだろうが、今の自分は独り者で、家族もいない。友人や職場の同僚とはいい関係を築いてはいたが、このシグラスの命をかけた思いに答ええないの

は“違う”と思った。

「あんたが、やるべきことはこの世界に必要なことだったんだろう？なら、胸を張れ。人生どうにもならないなりに、何とか生きていけるもんだ。俺は俺で何とかして見せるさ」

軽口を言ってみた。もう口調も砕けたものである。どうにでもなれだ。

「それでも謝らなくてはならない。すまぬ、汝はもとの世界には……」

「……帰れない、だろ？」

シグラスは驚いた顔をしたようだ。龍の表情などわからないので断言はできないが。

「さっきの話からすると、異世界の扉を開くにはすさまじい力を持つあんたたち真龍達が、死にも狂いで開くんだろ？今回俺を召還したのだってあんたのその様子じゃ、ぎりぎりだったんじゃないか？死が近いと言ってるのも、それは俺を呼んだからじゃないか。また同じことができるとは思えないし、命を張って送還してくれるような物好きもいなさそうだ」

シグラスは確信した。この者が召還されたとき本当に後継者として大丈夫か不安だった。だが杞憂だったようだ。判断力もあり、基本的にはお人よしとっていいほどの善人だ。まさに後継者としてふさわしい。

ほっとした安心感ですこし気が緩んだようだ。力で抑えていた自身の崩壊が始まってしまった。全く、本当に時間がない。

「そういうことだ。汝をこの世界に縛りつけたことを申し訳なく思う。だが、それに見合わぬかもしれぬが、我が力を譲ろう。エナジ―は大地に還り、我等からは失われるが、代々継承のときに引き継がれてきた知識と、死すべき我が身のみではあるが残された真龍の生命力と心の強さを譲る。この世界で生きていくには有用であろう……」

「ああ、すまない。……でも、それって人間の俺が受け取っても問

題ないのかな？」

確かに魅力的だが、受け取った瞬間に頭が風船のようにはじけたり、全身から鱗が生えても困る。異世界で生きていく前にスタート地点でバッドエンドなんて遠慮したいし、人間として生きていきたい。そう説明すると、

「それは問題ない。それに耐えられる器を持つのが後継者だ。そうでなくては此処に呼んだかいがない」

なるほど、それはそうだ。

「では、継承の儀式を始めたい。もう時間は残り少ない」

「ああ、そうか。わかった。はじめてくれ」

孝和は覚悟を決めた。もとの世界に未練はあるが、まあ何とかなるだろう。“人生どうにもならないなりに、何とか生きていけるもんだ”。

「では、まっすぐに立ち、その場を動くな。しばらくすれば、終わる」

「おっ」

緊張はしているが、目の前にいるシグラスを信じるしかない。

時間にして数分間シグラスが呪文(?)を唱えた。足元が光ったと思うと、正面のシグラスが展開した魔方陣(?)が現れた。キラキラした光が孝和を包み込む。おお、と息を呑んだ瞬間に背骨がなにかに引っ張られるようにピンと伸びた。そこで孝和は意識を手放した。

次に目を覚ましたときには硬い岩肌に顔面をこすりつけていた。

正直、痛い。

ゆっくりと起き上がり、服についていた細かな砂を払う。どこか動かないところがないか屈伸を行い、確認した。

問題がないことを確認すると、正面にいたシグラスに話しかける。もう、最初に見た光はもう見えなくなっていた。

「大丈夫なのか、シグラス？」

「ああ、儀式は成功した。汝が我の力を使いこなすにはもう少し時間がかかるだろうがな。ともかくこれで、真龍の、一族の義務ははたされた……」

疲れ果てた様子のシグラスに話しかけたが、もう息も絶え絶えになっっている。

大きく息を吸い込んだ彼は話し続けた。

「これで、全部、終わった。汝には感謝している、あり、がと……」

「……ああ」

孝和は何もいえなかった。今此処に息絶えようとする気高い龍がいる。それに掛ける言葉を持っていなかったのだ。無力感とは違う、自分の学のなさを恨んだ。

「では、汝を、近くの町まで、送ろう……」

シグラスの提案に乗るべきか孝和は迷っていた。こんな状況の彼にさらに無理をさせるのか。しかし、彼は今までの途切れ途切れの口調がうそのように力強く言葉を発した。

「死に様を、汝に見せられない。それは呪いとなって汝の心を縛るだろう。すまんが、聞き分けてくれ……」

そこまで言われては反論できないではないか。孝和に残されたのはただうなずくだけだった。

「準備ができたよう、だな……。用意はいいか？」

孝和は召還されたとき持っていたリュックサックにシグラスの鱗を詰め込んで背負う。

持っていけといわれたのはパンパンになった財布に詰め込んだグランド帝国の通貨。右手には薄紫色の直剣、左手に魔力でコーティングされた籠手をはめている。ちなみに剣は鞘がなかったので、抜き

身のままである。

通貨と直剣、箆手は過去シグラスたち真龍に挑んだ戦士たちの持ち物だ。他にもいろいろあったが、ひん曲がっていたり、ひびが入っていたり、さび付いていたりと使い物にならなかった。

討伐という名目で龍殺しの名声を欲した者から何度も襲われ、仕方なしに撃退していたそうである。まあ、真龍の一族自体は悪事を行っていたわけでないらしいので、これは正当防衛の範囲だろう。多分。

龍殺し用に集められた装備らしく、なかなかの品々から、一級品までそろったそれらを持っていけといわれたのは、これからシグラスが転移魔法で転送する場所がどんな場所かわからないからだそうだ。

転移先自体は人間種の集落ということだが、ここ50年の間にシグラスは訪れたことは無いらしいのであくまで念のため、ということだった。

だが、50年もあれば、村自体がなくなる可能性も十分に考えられる。

「いろいろ良くしてもらって、悪いね。ありがとう」

これから、不安はあるがいろいろと良くしてくれた彼に礼を言う。おそらく、これが最後になるだろうから。

「では、転移先はルミイ村だ。汝の行き先に真龍の導きがあらんことを……」

地面に転移用の簡易魔方陣が描かれる。さっきまでとは違い、継承の儀式を終えたため、様々な知識が孝和の頭に浮かぶ。どういった属性のものか、どのように発動するかといったことも良くわかることに、単純に感心する。

「じゃあ、さよならだ。これからの人生だつて決して悪いもんじゃないさ。だから、ここは、ありがとう、かな」

その軽口はただの照れ隠しだ。少し頬が赤くなったのがわかる。それを見て、シグラスはかすかに笑った。本当に優しい青年だ。

自分の最後の話し相手がこの青年でよかったと思う。本当に。

孝和が光に包まれる。最後の力を振り絞った簡易魔方陣が発動。カツと強い光が洞窟を輝かせる。光が収まると、孝和の姿はそこから消えていた。

それを確認すると、気高く強く生きた龍がゆっくりと目を閉じ、大きく大きく息を吐き出した。そして、地面に首を横たえた。地響きがなり、そしてそこに静寂が訪れた。

「……ありがとう、かな」

カツと強い光が孝和を包む。最後に見たシグラスは笑っていたようだった。ああ彼は強いんだな、と思った。自分ではああはいかない。誰かそばにいてほしいと思うだろう。

だが、彼は孤独を選んだ。それは尊重しなくてはならない。

「さて、と」

孝和は周りを見渡した。付近には轍の残る道があった。道の向こうにポツポツと家が見える。どうやら廃村になっているわけではなさそうだ。歩いていくには少し距離があるが、覚悟を決めて行ってみよう。

いつの間にか朝日が昇り始めていた。村につく頃には、朝になっているだろう。

こうして、孝和のこの世界での生活が始まった。

第2話 ルミイ村 村人エンカウント（前書き）

第2話です。R15とか、残酷な戦闘描写とか書いてあったのに、まったくそこまですんでません。テンポが遅いので申し訳ないです。内容もこんな感じです。

第2話 ルミイ村 村人エンカウント

その日、ルミイ村に孝和が着いたのは日がだいぶ昇ってからだった。時刻にして8時ごろだろう。

「やっと着いた…。思ってたよりも遠かったな…。」

村の入り口に着いたときにはすでに孝和はぐったりしていた。肉体的には鍛えているため、そんなでもないが延々と続く森の小道と見知らぬ人どころか、見知らぬ世界の人とこれからうまくやっていけるのか、不安で不安で心のほうぐ疲れ果ててしまったのだ。

その上、村の入り口に着いたばかりで

「そのの者、それ以上近づくな!!」
と言われてしまった。

入り口に立っている人物は大体20代前半の男性に見える。金髪、碧眼でゲルマン系の容貌だった。両手で槍を抱え、こちらに警戒心を顕にしている。

初めての異世界の人間との遭遇であったのに、それは敵意全開の修羅場とは一体どうすればいいのか。

「待つて、待つてください。俺、いや私は怪しいものではありません。落ち着いてください」

そういうと孝和は持っていた直剣を地面に突き刺し、その場所から5歩ほど離れた位置に移動した。

しかし、門番は警戒を一切解かなかつた。

「貴様、いったい何処から来た？この先にはこの村の墓地以外には何もありませんだ。他の町から来たにしても、この北門ではなく、正門になるはずだ!!」

なんと、そうか、そういう可能性もあった。これは、印象最悪じゃないか。

「い、いやあ。それがですね。実を言うところから来たかちょっとわからないんですよ」

「何だと！！貴様ふざけてるのか！！！」

正直に打ち明けてみたところ、さらに怒りに火をつけてしまったようだ。どうしよう。

やいのやいの門番さんと押し問答している間に、村の中にいる住人が集まってきたようだ。村の入り口に何人か遠巻きにこの様子を眺めているのがわかる。

「で、でも本当なんです。信じてくださいよ」

もうほとんど半泣きである。唯一の救いは言葉が通じることである。継承の儀式で真龍の知識を得たときにこの世界での言葉も覚えることができたようである。

もし、誰とも話ができれば、半泣きどころか、全力で号泣してただろう。

ほんとに良かった。人見知りではあるが、かといってこの世界で孤独というのは悲しすぎる。下手をすると死んでしまう可能性さえあるのだ。

「信じてほしいならまずはプレイスカードを見せんか。それからだろうが。ほれ」

後ろの村人のおじさんが、この状況を見かねて助け舟を入れてくれたようだ。

「ぶれいす？カード？ですか……。えつと…、何ですか、それ？」

“ぶれいすカード”とはなんだろうか。真龍の知識にはそんな言葉はない。いったい何のことだろうか？真龍の知識は過去の英知の結晶ではなかったのだろうか？それともこの地方独自の風習や、それに関したもののことだろうか？

「なにを冗談を言っておる。これのことじゃ。持っておらんのか？」

おじさんは、自分のズボンのポケットから手のひらサイズのカードを取り出した。

遠くからだが、それを見せてもらう。赤い色をしたカードで名前やいろいろいるなことが書いてあるようだ。おそらく本人の身分証のよ

うなものだと判断した。(ちなみに門番さんはしっかりと構えた槍をいつでも突させるよう準備をされている。冷や汗ものである)

ちなみに、文字のほうも読解できるようだ。真龍の知識、すごいな…。

「すみません。俺、そんなの初めて見ました……。今その、プレイスカードでしたっけ？持っていないんです」

孝和のその言葉にざわめきが大きくなる。どうやら今の一言で不審者レベルがさらに上がったようだ。どうしよう。

だが、村人のざわめきは違う方向へむかったようだ。

きっかけは「まさか！」と言った老人だった。その老人から回りに「もしかして…」とひそひそ話しが始まった。

「でも、あんなに元気だし…」「でも、もしかしたら…」「嘘だろ」とかひそひそ聞こえる。聴覚もどうやら継承の儀式で向上したようである。あんまり聞きたくないことも所々聞こえてしまった。「…呪われた」とか「瘴気の影響…」とかである。

「あの、どうしたんですか？なんか、皆さんだけで話が進んでるみたいなんですけど」

急にみんなからの視線が不審者を見るものから、かわいそうなものを見る目が変わったのを感じる。とても強く、本当に強く。

「あの……」

不安に駆られて質問をしようとしたところ、それをさえぎる声が聞こえた。

「聞きたいことがある。私家で話を聞かせてもらおう」

「「長老!」」

村人みんなの声がそろった。

みんながその方向を見ている。孝和も顔をそちらに向けると、杖を突いている長老と呼ばれた老人がいた。隣にいるのは奥さんだろっか。

結局、その長老の鶴の一声によって、孝和は入村を許されたのだ。

「さて、とりあえずお掛けなさい。いま、なにか飲み物を用意させよう」

先ほど長老と呼ばれたこの老人、ゴラムは自宅に孝和を案内し、今のテーブルに座るように勧めた。ちなみにゴラム宅の外には門番の青年（名前はタンというらしい）が念のためといって控えている。孝和の剣と籠手、リュックは彼に一時押収されてしまった。

まあ、さすがに客人扱いとなった者の荷物を漁るような失礼なこととはしないだろう。

いすに座ると程なくして、暖かなお茶と簡単なお茶請けが運ばれてきた。それらを用意してくれたゴラムの妻は、お茶の用意を整えると、奥に下がった。どうやら、ゴラムが孝和と二人きりで話せるよう、配慮したようだ。

「まず、自分の名前はわかるかね？」

お茶をすすり、多少落ち着いたと思われるところでゴラムは孝和に尋ねた。

「あ、孝和。八木孝和といます。先ほどはどうもありがとうございます。いました。あと、このお茶もですけど」

「いやいや、安物の茶ですよ。しかし、家名がありなさるか。どこかの貴族、武家の出かね？」

ゴラムはそう言うとう自分の茶を一口のみ、お茶請けの果物に手を伸ばした。

「いえ、貴族とかそういうわけではないんですが……」

どう説明したらいいものなのか。私は異世界の住人です、なんて気が触れたとしか思われないうだろう。

「ふむ、答えにくいか。まあ、その髪の色からしてもこの辺りの人間ではあるまい。エルフや精霊族、魔族の特徴も無いようじゃし、やはりあの可能性が一番高いか……」

エルフ！精霊！魔族！おお、この世界にはそんなのがいるのか、すごいな。孝和がそう考えた瞬間、真龍の知識が発動した。ただし、

これは本を読んでいるような感覚に近い。自分の頭にしっかりと染み込んでいるようなものではない。

あまり、過信し過ぎないほうがいいな、と孝和は判断した。便利ではあるが、真龍の一族の生活・興味に関係ない分野についてはかなり穴だらけのようだ。

なんとなく、それらの固体についての情報が手に入ったがこれはじかに体験したほうがいいと思われた。よし、楽しみにしておこう。うん。

そんなことを考えていたせいか、油断してしまっていたのだろう。ゴラムの次の質問にまったく無防備な状態になってしまった。

「おぬし、もしかして真龍の山から帰ってきたのではないか？」

「うえええ、何でわかつたんですか!？」

言っただけでしまったと思った。俺のバカ!できるだけ現状把握してから自分のことを話すべきなのに!!

後悔先に立たずである。言ってしまったものは仕方ない。最初から全部説明するべきか? いや、でも異邦人がどんな扱いを受けるかわからない。隠しておくべきだろうか、いやここは正直に、と孝和が迷っている間にゴラムが続けた。

「なるほど、真龍の討伐で名を上げようとした冒険者が、あんたははい？」

「いや、おそらくそうじゃろうと思っただけ。あんたが持ってたあの剣、無銘ではあったがなかなかの業物、しかも魔法剣じゃった。片方しかないが箆手にも魔力が感じられる。さらに言うならそんな服装の異国人がこの村に来るなど、龍殺しで名を上げるぐらいしか考えられん」

おいおい、もしかしてこれって勘違いしてる?

「あの山に行くには瘴気の谷を越える必要があつたな、精神に異常を与えるのだ。無事にその谷を越えても、龍など人の力の及ぶものではない。その恐怖と瘴気の影響で自分の名前以外は良くわからなくなっているのであらう。まったく若いのに命を危険にさらすなど

愚の骨頂、嘆かわしいことだ……」

完璧に勘違いしてる！！間違いない！！なんとかごまかせるかも！？

ゴラムが言うには、この村には毎年龍殺しの名誉を手に入れようとするパーティーが来ていた。ほとんどは真龍の住む洞窟（孝和が召喚された所である）に辿り着くまでに瘴気にやられ、辿り着いてもぼろぼろの状態となる。龍の中でも上位の真龍にそんなコンディションで勝てるわけがない。無謀な特攻で命を散らすものも中にはいたが、近年はほとんど無益な殺生を嫌うシグラスにより、この近くに転移させられていた。

「今までも何人かの冒険者があの山から帰ってきた。だが、ほとんどのものは心をやられてしまったの。自分の名前すらわからぬものがほとんど、おぬしのように会話ができるものもいなかったからのまあ、不審者の類には違いないが、すまんかったのお」

そんな哀れみを持った目で見ないでほしい。孝和は山から帰ってきたが心は健康そのもの、別におかしくなっているわけではない。

だが、これはかなりの好機。自分がこの世界の常識を知らなくても、山で心を病んで混乱していることにしてしまえばいい。

「いえいえ、俺自身も自分が何でこんなことになっているのかわからない状況でしたので、仕方ないですよ。日常の常識も少しあやふやなので、いろいろ教えていただけるとありがたいのですが……」

顔がニヤけそうなのを必死に抑えて絶望した顔を作るのはなかなか難しかった。

ゴラムが孝和に提案したのは、少しでもこの世界で生きるあれこれの思い出すまでゴラムの家にはどうだろうか、というものだった。

実は1週間後に村の特産である毛織物を取引するのに最も近いマドックの町まで馬車で行くことになっていた。それと交換で日常品も持ち帰るとのことだった。

そこで少し頼りないが、冒険者であろう孝和と一緒に町まで付いていってもらえないかという話である。

それまで日々の生活を村で行うことで今の現状から回復するのはないかと考えたのである。それに対し孝和は

「本当ですか？では、ご迷惑をおかけしますがよろしく願いします」

と答えた。

もともと知りもしないことを、思い出せることなどありはしないが、この提案をありがたく受けることにした。

ここで生きていくのに最低限必要なことだけでも何とか習得できるかもしれないと考えたからである。

では、まずは自分の持ち物の価値である。龍の鱗や武具についてはもっと大きな町で調査したほうがいだろうが、ポケットの中のものについては知っていたほうがいだろう。

「では、出発までの1週間お世話になるのですから、わずかではありますが料金をお支払いしたいのですが。いくらくらいになりますか？」

この問いかけにゴラムは

「まあ、ここは宿ではないのでね。銀で3枚といったところか。ただでもいいのだが、君も律儀じやのう」

それを聞くと孝和は財布をこそごそ漁った。何枚かの貨幣を手にとり、ゴラムに見えるように軽くもてあそぶ。

「いや、やっぱり助けてもらった上にただで泊めてくださいなんていえませんよ。あ、じゃあこれをお願いします。おつりつてありますか？」

孝和は金色に輝くコインをゴラムに手渡した。

財布を探っていたのは演技であった。実は金、銀、銅貨全部そろ

っている。しかも全種類かなりの数をシグラスの洞窟から回収していた。財布以外にもリュックのサイドポケットに突っ込んでおいた。これらがそれなりの価値があるなら、しばらくの間は資金面での不安はないだろう。

だが、貨幣価値がわからなかった。各貨幣の交換比率や、金貨については形の違うものが3種類、銀貨と銅貨は2種類にもなっていた。

これがわからなければ、日々の買い物にも不自由してしまう。

「ふむ、では銀で17枚。ほれ、受け取るが良い」

受け取った銀貨を孝和はしげしげと眺めた。受け取った銀貨の全部が2種類のうち一方だけであった。

これを確認すると孝和は次の確認項目に移った。

「あ、すいませんが旅立ちに必要な買い物もしたのでこの銀貨、銅貨と交換してもらえないですか？」

そう、銀貨・銅貨の交換比率である。

「ははは。ここにはそんな数の銅貨はない。外に出て正門付近にいれば商店もある。ここで両替してどうする。買い物も昼を食べてからでかまわんだろう。後で行ってみるといい」

どうやら銀・銅貨の交換比率は10枚程度ではないようだ。詳しくは言われたとおり昼飯の後でいいだろう。他の形の貨幣が使えるかもそのときに試してみればいい。孝和はそう考えた。

一方ゴラムは、やはりこの青年は心をやられてしまったのだなと思った。普通銀貨3枚の買い物で金貨など出さないだろう。しかも出した金貨は10年前まで製造されていた旧貨幣で、今のものより価値は高い。

チャラチャラと手の中でもてあそんでいた中には今の貨幣もあったのにためらいもなく旧貨幣のほうをよこしたのだ。

道理に合わないし、おつりで渡した現在の銀貨に文句も言わない。ああ、常識などにもいろいろと問題が出ているのだな、と勝手に勘違いを深めてくれたのである。

そんなこんなで、昼食である。

メニユーはパン、魚と野菜の煮込み、スープであった。

パンは小麦をきれいに挽いたものではなく、昔世界史の教科書で見た黒パンと呼ばれるもののようなだった。味自体はぱさぱさとしていたが焼きたてのものを、お金を払ってくれた客人に出すものだからと用意してくれた。

魚は村に程近い川でとれる魚で見た目はヤマメそっくりだった。

鱗やワタ等を取り除いたあとに臭みを消すハーブと野菜類をふんだんに使った一品であった。

スープはコンソメスープが一番近いものではないかと思われた。透き通ったベーススープに煮込みに使った野菜のくずを刻んでコトコト煮込んだもので、味はともかくボリユームはかなりのものだった。

「うまい!!」

「……薄い……」

ふたつの声が重なった。

前者は先ほどまで見張りをしていたタンであった。そしてタンの大きな声でかき消された後者は孝和であった。

「どうした、タカカズ？」

そういつてタンはバシバシと孝和の背中をたたいた。

せっかくの焼きたてのパンを用意したのだから一緒に食べて行つてはどうかと、ゴラムがタンを招き入れたのだった。タンは何一つ遠慮することなく

「いただきます!!!」

とのたまったのだった。

長老であるゴラムが村での行動を許可したため、警備は不要とのことで、タンはこのまま村の北口に帰るのだからと考えていた孝和

は拍子抜けした。

北口の警備は朝の騒動でもう引継ぎしているし、彼の分担時間はもう過ぎていた。このまま帰るよりは、不思議なこの訪問者と一緒の食事のほうが面白そうだと考えたのだ。

「いや、なんていうか俺の住んでいた地域ではもう少し濃い目の味付けだったからね。なんとなく、口に合わないというか…。あ、もちろんマズイというわけじゃないんですよ。ただ、あんまりなじみのない味だったので……。おお、そういえば!!」

孝和は何かに気づいたように、立ち上がるとリュックのほうに向かっていった。

その様子を見て他の三名は何事かと食事をとめた。

孝和がテーブルのうえに、ガラス製のビンを置いた。そのガラス瓶に書かれていた文字は彼らには読めなかったが、日本語でこう書かれていた。

“本醸造醤油”と。

さすがに牛乳や惣菜は持つてくると邪魔になりそうなのであきらめたのだが、醤油に関しては別である。孝和は日本人である。異世界の食事が口に合わない可能性がある。だが、繰り返すが孝和は日本人である。ぶっちゃんけ、どんなに変な食材でも醤油をぶっかければ食えるだろうという自信があった。

余談ではあるが、このときに醤油の代わりにあきらめたのは装飾過多のナイフであった。切れ味自体は錆び付いてほぼゼロに等しかったので、まあいいかと醤油を選んだ。孝和は知らなかったが、そのナイフ、美術品としての価値は美術館で展示品のメインを張れるものであった。

まあ、それを知っていても多分彼は醤油を選んだだろう。

「これは俺の国の調味料です。少し料理の上からかけて食べてみてください」

孝和は手本として自分の分の魚とスープに少量の醤油をかけて食べた。うん、美味しい。醤油は最高の調味料だなあ、と痛感していた。孝和は知らないうちに笑顔になった。それを見た三人は恐る恐る試してみることにした。

この中で、少し機嫌が悪くなった人がいた。ゴラムの妻アマンダである。自分の料理に難癖をつけられたのである。当然のことだが、

「うまい!!!」

「おおおおお!!!すごいぞ、これは!!!!!!!」

「あら、あら、あら。いいわねこれ」

結果は以上のとおりである。

この後、伝説の調味料“シヨール”は孝和のたびに必要な分を除いて、アマンダに譲られたの言うまでもない。さらに孝和が覚えていた醤油の製造法は、このルミイ村に伝授され、数年後大規模な生産が始まった。後年、アマンダ印のシヨールはルミイ村が誇る特産品に成長するがそれは、また別の話である。

ちなみに、孝和が醤油の製造法を覚えていたのは趣味の雑学クイズのおかげであったが、一年以上も前にテレビで見ただけだった。

どうやら継承の儀式の副産物のひとつとして、孝和自身の持つ知識をより鮮明にする効果があったようである。

おかげでほとんど子守唄と変わらなかつた学校の授業がいまさらではあるが、理解できた。

高校時代にこの能力がほしかった。本当にいまさらとしか言いよ

うがない。

第2話 ルミイ村 村人エンカウト（後書き）

がんばります。皆さんの反応だけが、気がかりです。

投稿したその日に誤字を見つけたので修正しました。閲覧してくださったかた、申し訳ないです。 閲覧してく

第3話 準備は大切

孝和がルミイ村で生活を始めて3日が経った。いろいろな問題があったが、孝和はそれなりにこの世界での生活になれることができた。

懸念のひとつであった貨幣価値については、大体銅貨1枚は30円程度といったところだろうと判断した。そして、銅貨100枚と銀貨1枚、銀貨20枚と金貨1枚というこの世界での交換比率から計算すると、銀貨1枚は3000円、金貨1枚は6万円といった程度である。

これから推察される孝和の現在の所持金は金貨18枚、銀貨60枚、銅貨が15枚である。日本円にして100万円を超える。

これは、はつきりいつて大金である。孝和自身も、いきなり100万を超える金額をタナボタで手に入れたのである。幸運と考えるよりは、良心がひどく痛む。

いい悪いは別にしてお金がなければ生きていけない。なくなった冒険者からの追いはぎではあるが、そう考えて自分を無理に納得させた。貨幣に別種類があったのは他国の貨幣、旧貨幣であったが、大きな町に行けば両替商がいるらしいのでそこで交換ができるらしい。まあ、各国の通貨はほぼ同価値らしいので、種類が違ってても深く考える必要はなさそうだ。

「マントと、携帯用のナイフをください。マントは裏地がしっかりしてるのがいいです。ナイフは片刃で鞘もほしいです。あと、大き目の水筒ありますか？腰に括り付けられるタイプがいいですけど」

ゴラムの隣の家に住むスパードさんは10年前まで冒険者であっ

た。冒険中に足を負傷し、引退して故郷であるルミイ村に戻ってきた。

村の中ではゴラムに次ぐ立場の人物であり、門番のローテーションや訓練を担当していた。治安部門の長、といったところだ。旅立ちに際し、いろいろなことを聞くことができた。

冒険者である孝和が、旅に必要なものを自分に聞きに来たときには、疑問を覚えた。しかし、彼が真龍の山からの帰還者であると分かると、惜しげもなく自分の経験で必要になった道具類を教えてくれた。今孝和はスパードが教えてくれたメモを基に必需品の購入に来ているのである。

「そうしたら、マントは緑と茶のどちらにする？ナイフは申し訳ないけど、これしかないんだ。ただ、切れ味は保障する。なかなかの品だよ。水筒は木製と皮製の２種類ある。木製のほうは、別にベルトが必要になるが、皮製はそのまま紐で腰に括り付けられる。丈夫さで言えば、木製のほうをお勧めするけど」

「では、マントは茶色のほうでお願いします。ナイフはそれでいいです。鞆は付属品ですよ？水筒は皮製のほうをお願いします。あ、あとこの皮財布ください。」

村で唯一の雑貨商店ではあるが、なかなかの品揃えだ。テントや食料、宿泊用のもろもろは村の特産品の馬車と一緒に積んでいくとのことなので孝和は自分の装備を整えることにした。今はこの世界の服装に身を包んでいる。通気性、吸水性、丈夫さについては孝和のもともとのＴシャツやパーカー、ジーンズのほうが優れているが、この世界で生活する以上あまりに普通でないそれらはできれば着用を避けるべきだろう。

毛織物の産地ということもあり、布製品などの服飾関係の生地は豊富なようで、孝和の長身にあう服も簡単に作ってもらうことができた。

最初、孝和を遠巻きに見ていた村人も、人見知りの強い孝和が顔を真っ赤にして話しかけてくるのを見て好意的な顔を向けるように

なっていた。

昨日などは、6歳くらいの子供達がいきなりイモを「あげる」と手渡ししてきた。いきなり手渡された孝和はびっくりしたが、それを見て子供たちはくすくす笑いながら走って行ってしまった。どうやら、なんか面白い異国の人が村に来た、という感覚らしい。

「タカカズ、全部で銀貨8枚銅貨4枚になるね。あと、この火石、サービスしとくから。タバコや酒とかはいいのかい？」

「いや、結構です。どちらも飲まないもんで。じゃあ、これ代金です。ありがとうございます」

孝和は購入したものを全部ひとまとめにした袋を、よつと肩に担ぎ簡単な挨拶をして商店からでた。ちなみに魔法剣は布にくるんで袋と別に背負っている。

サービスしてもらった火石はこの世界では一般的な着火用具だ。火打石とは違い、それ自身を砕くと炎を発する。最初はその便利さと不思議さに驚いたのだが、それに大騒ぎしたところかわいそうな眼でみんなから見られたため、自制している。

やはり異世界なのだかと深く痛感した。通常の物理法則を魔力などである程度無視しているようなものがこの村の中でもいくつか見受けられた。

真龍の山の帰還者だという言い訳がなければ、いろいろとまずいことになっていただろう。それほど異世界での生活は孝和の常識を覆したのだった。

「ええと、次は防具屋だな。確か、雑貨屋さんの奥のほうだったってたよな。赤い屋根の家だろ……。お、あれか」

孝和の目の前に赤い屋根の防具屋が見えた。スパードの知り合いだと言えば安くしてくれるとのことだったので、紹介状を書いてもらった。その紹介状をポケットから取り出し、その店「ダンブレン防具店」に入店した。

防具店の主人ダンブレンは50歳ぐらいのひげを蓄えた白髪の男性で、自作の防具を作るタイプの店主であった。武器・防具の店主は大まかに2種類に分けられる。何処かから品物を購入し販売するタイプと、材料を集め、自作の防具を作る職人タイプの店主である。もともと、このような田舎の村にある防具としては、高額な金属鎧よりは低額で柔軟性のある軽装鎧のほうが需要が多い。

孝和も、自分は防御を固めるより、細かな移動を繰り返す戦い方をするのでそのような軽装用の防具を求めている。

「いらっしやい。何をお探しかな？」

ダンブレンは中に入ってきた孝和の体格、立ち振る舞いから防具の見立てをすでに始めていた。どうやら戦士、しかも体術を主体にした剣士であろうと判断した。背中に背負った袋のほかに布にくるんだ剣を持っていたこと、下半身の筋肉のつき方から足を使うことが多いのではないかと推察したのだ。

「えと、上半身用の鎧がほしいんです。できればあまり重量のないもので、肩が自由に動くものがないでしょうか？あと、この剣を収められる鞘とベルト、長旅に耐えられるブーツをお願いします」

ダンブレンはそれを聞くと立ち上がり、孝和の魔法剣とスパードからの紹介状を受け取った。軽く紹介状に目を通したあと、魔法剣の布をくるくると解き、重量、重心の確認を行った。軽く素振りをしたあとにブーツと孝和に聞こえない程度の独り言を言い始めた。「あの、どんなもんでしょう？」

その様子に孝和はダンブレンに尋ねるか迷ったが、声をかけてみた。

「どうやら集中していたようで

「ああ、すまん。どんな鞘がいいかと思ってね。少し待っていてくれるかい？」

と言うと奥の収納庫に行ってしまった。

大体15分ほど待ったところで、奥から肩当部分のない黒い皮鎧

と鞆、ベルトに深緑色のブーツを台車に載せてゴロゴロと孝和の元に戻ってきた。

「まあ、これが私の店の中で君に合うものだろうな。一度全部つけてみてはくれないか？もし、きついとか動きにくいとか有れば2日で直しもできるからな」

言われたとおり、全部の装備を着込んでみた。頼んだ鞆とベルトはまさに自分の希望通りだった。

一方、上半身用の黒の皮鎧は軽く孝和の動きを邪魔しないものではあったが、重心が少し右側によっているような気がした。それをダンプレンに尋ねると、

「君はこの前北門で騒ぎを起こしていた冒険者だろう？紹介状にも書いてあった。確か左手に、魔術付与された箆手をしていたからな。その分の重量を考慮したのだよ。右利きだろうから剣を佩くのも左側のはずだ」

なるほどそれもそうだ。

「でも、何で俺が右利きだってわかるんですか？」

それを聞くとダンプレンは

「そんなもん。この職業をすればいやでもわかる。わからんようなら、そいつは三流だ」

なるほどそれもそうだ。

……そうか？かなり特殊な技能であろう。現に立ち振る舞いで利き腕を見抜くようなレベルの人間はそんなにないんじゃないかなるか。もとの世界でそんなことのできる人間は、彼の知る限り大叔父の法寿や3人の高弟、道場のベテランクラスの数人であった。

ちなみに皆そろいもそろって化け物だった。全員が斬鉄まで修めた者たちで、鍛錬中に気を抜けば死を覚悟せねばならないレベルであった。

ブーツのつま先が少し余っていた所を直してもらうことにして、
ゴラムの家に帰ることにした。

何かこのダンブレンさんがあの人たちと同類のような気がした。
正直ちよつと怖かった。

ブーツ以外はそのまま購入して持つて帰ることにした。

正直、あの化け物たちと同格の化け物と同じ場所にいるのはいい
気分はしない。孝和は、支払いを終えると2日後にブーツを取りに
来ることにしてその場を離れた。

ダンブレンから感じる気が、少々剣呑なものになっている気がし
たのは気のせいだ。そうだ、気のせいであってくれ。

ダンブレンは孝和が帰っていくのを見て残念そうな表情を浮かべ
た。スパードからの紹介状にはこう書いてあった。

『こやつ、なかなか面白い。試してみればどうだ？』

確かに面白い、あの状態の私に感づいたようだ。逃げられたのは
残念だが、また2日後にはここに来る。そのときを楽しみすると
しよう。

バトルマニアというのはどこの世界にもいるものだろうか？

孝和の旅路は始まる前から前途多難であった。

第3話 準備は大切（後書き）

ちよつと短いですが、切のいいところまでで終えたいものでござりました。次回からやつと戦闘シーン入れられるかもしれません。誤字、脱字あつたらすんません。

第4話 警護任務と襲撃と（前書き）

やっと、戦闘シーンが入ります。

第4話 警護任務と襲撃と

さて、孝和がルミイ村に到着して1週間、長老のゴラムの依頼であるマドックの町まで毛織物の納品に護衛として同行する日がやってきた。これからの生活を考えると、やはり人の多い場所での生活のほうが何かと都合が良い。この村での生活もなかなか快適で、村人も親切だったので捨てがたいものはあるのだが、大きな町で仕事を探したほうが良いだろうというゴラムやスパードのアドバイスに従うことにした。

もともとあまり多くの荷物を持ってきてはいなかったため、荷物は簡単にまとめることができた。

買い込んだ最低限の必需品と、ダンブレンの店の防具、魔法剣、左手の籠手を身にまとい、孝和は馬車に乗り込んだ。

出発に際して村人たちが見送りに来てくれた

「まあ、何か近くに用事でもあれば訪ねてくるが良い。お主の料理もまた食べてみたいしの」

ゴラムがそう言った。旅立ちの買い物が終わって暇になったので、アマンダに頼んで何品か料理を作らせてもらった。それが大変好評であった。もともと孝和は大叔父の法寿との男所帯であったので、法寿が自分の好きな酒のつまみしか作らなかつた。必然的に食卓には孝和の料理が並ぶこととなった。

「いやあ、もしかしたら耐えられなくなってすぐにでも戻ってきて、ゴラムさんの家で料理人してるかもしれないですよ？ホントに」

この異世界ではあまり見られないような斬新ともいえる料理法が、珍しがられたということであろう。ちなみにこの異世界での食材はほぼ孝和の知っているものと同じものが存在していた。ただ、品種改良などはあまり進んではおらず、本来の味が出なくてかなり苦労した。

「はははは、そうじゃったら歓迎するぞ。村の皆もお主ならかまわんといつてくれるじゃろう。なあ？皆の衆？」

豪快に笑っているゴラムの後ろから「そだ、そだ。疲れたりしたら帰って来い」とか「土産は酒で頼むー」とか声が聞こえた。

なんか、このままだと泣きそくだ。いかん、いかん。湿っぽくなってしまう。

「がんばりますよ。皆さんもお元気で」

後ろ髪を引かれる思いだったが、ぐっとこらえて別れの挨拶をした。

馬車が動き出す。村から出る道が森に入る曲がり角まで、村人の皆さんは手を振って見送ってくれた。いい人たちだ。目元を赤くして、孝和は鼻をすすった。

村を出てから3日でマドックの町に着くとのことだ。1日目は特に問題なく順調に旅は進んだ。平坦な道がある以外はまったく何もないう草原と思い出したように小さな森を抜け、野営地にたどり着いた。

「なあ、タカカズって本当は強いのか？」

いきなりそんなことを聞かれた。

「何だよ、いきなり。急に話しかけるなよ」

孝和は本日の野営地のかまどの設置に挑戦中だった。

「いや、スパードさんとダンブレンさんの二人がさあ、お前のことほめてたんだ。昨日の訓練のあとにこっそり話してるのをちょうど聞いてさ」

「な、なんだそりゃ」

「ダンブレンさんが、訓練終わったスパードさんに会いに来ててさ。木陰のほうに引っ込んで行ったんだよ。それで気になって、こっそり後つけていったら、お前の話になって」

今回の護衛に志願したタンがそう説明した。ちなみにタンが今回の護衛に志願したのは、孝和の料理目当てであった。初日に醤油に魅入られたこいつは、訓練のない日にはゴラム宅で昼食を取りに来ていた。ゴラムもアマンドも食事は多いほうが楽しいというスタンスで、まあいいだろうと認めてしまっていた。

「それで、何だった？」

なんとなくげっそりして尋ねた。

「なんか、スパードさんは『怪我が無ければわしも…』とか『やはり面白かったろう』って言って残念そうにした。ダンブレンさんは『若いうちのほうが伸びる…』とか『基礎はしっかりしてるから無茶しても…』って言って楽しそうだった。なかなかの高評価だなお前。あの二人がじかに訓練なんて聞いたことないぜ。」

勘弁してくれ。本当に。

先日の逃走劇から、なんとなくいやな予感がしていたのだが、ブーツの直しを頼んだ手前、ダンブレンの店に行かねばならなかった。予想通りといえはいいのかわからないが、ダンブレンは2本の木剣を持ってにこやかな笑みを向けてきた。

“死合”形式の試合結果はダンブレンの勝ち、ではあったがその内容はダンブレンの昔の血を騒がせるには十分なものであったようだ。その日はそのまま実戦形式の鍛錬へと移行した。結果、もとの世界での鍛錬後と同様、孝和はボロ雑巾と化していた。

まあ、何も得られなかったわけではない。刀を前提とした戦闘術を得意とする孝和にとって、西洋剣の技術をじかに感じられる有意義な時間であった。だが、孝和はマゾではない。あんな厳しいのは現代っ子として断固拒否したい。

……死んじやうし。

「うらやましいか。なら、お前がやれ。帰りまでに俺が会心の一筆をしたためてやる。“このタンという人物の才能は大変すばらしく、才ある師に巡り合えば千年に一人の戦士に…”」

がっしと肩を掴まれた。

「やめろ。ほんとにごめんなさい。ほんとに」

真剣なまなざしで言われた。わかればいい。わかれば。

なんだかんだでタンとは同年代ということもあり、今では普通に会話することができるようになった。同年代の若者が彼以外にはいなかったこともあるが、明るい性格と毎日のように食事をたかりに来る彼に親しみを覚えていたのも確かだ。だが、

『何か、おかしい。ここまで短期間に人とタメ口で話せたことあったっけ？』

かまどに薪をくべながら思索に引ける。

そう、人見知りか激しかった孝和は友人もあまりできなかった。

しかし、ここまで短期間で友人ができたためしなどなかった。

『ルミイ村のみんなとも最初は無理だったけど、最後はフレンドリになってたし。ダンブレンさんと鍛錬で、そんなこと昔だったらやらなかったんだけどな。あと、この旅で初めて会った人とも話せてるし』

パチパチ薪が爆ぜる音がする。まあ、それは今度考えることにしよう。今は鍋の準備だ。

夜間は昼と違いモンスターの活動が活発になる。交代で仮眠を取りつつ、野営地の不寝番に当たることになった。次の日に最終の不寝番を担当したものが、馬車の中で睡眠をとり、できうる限り全員が昼の時点で活動できるように準備をする。昼に全員が活動できる状態にしておくのは、モンスター対策ではなく野盗対策だ。ここ数年はこのルミイ〜マダック間の交易路に野盗がでたことはないが、

一応念のため警備は万全にといいことらしい。

不寝番は2台の馬車に6名がいるので、2名ずつ3交代制で行うこととなった。記憶がいまいだと思われている孝和は、交易路の護衛任務の経験があり、仲の良いタンが相棒に選ばれた。

「不寝番でもっとも大切なことって何だ？」

孝和はこういったことは初めてだったので、経験者であるタンに注意事項を確認しておくことにした。

「大切なことはいろいろあるが、もっとも大切なのはひとつだけだつー!!」

タンが意気込んでそう断言した。

「ほお、なんだ。一体？」

「それは！寝ないことだつー!!!」

胸を張ってそう答えた。おい。

「そ、そんなのか？」

なんか、出足をくじかれた気がする。

「旅の疲れや緊張がピークに達して、野営中にうとうとするのは結構あったりするんだ。片方が起きてればもう一人を起こしたりもできるけど、毎回必ずペアで不寝番ができるとは限らんしな。寝たらもう相方が口聞いてくれなくなったりする。眠気は死ぬ気でこらえる」

なるほど、言われてみれば納得である。このように3交代制でなければ、もっと長い時間不寝番をしなくてはならないこともあるだろう。

しかし、この言い方はもしかして……

「なるほど、そうだな。で、お前今まで何回寝入ってしかられた？」

「2回ほどだな。はははははー!!」

「威張るなよ。情けない」

孝和は額に手を当てた。この交代の分担はつまり、この1週間で孝和を信頼したほかの護衛メンバーが、失敗の多いタンのお目付けとして組み合わせたというのが本当の理由だろう。タン自身は孝和

のサポートと信じ込んでいるのが悲しいものを感じさせる。

そんな会話をしたり、周りの警戒に気を配りながら過ごしていると次のメンバーとの交代時間になった。結局この日は孝和の不寝番の練習も兼ねていたため1番最初に分担されていた。そのため、夕ンと孝和は十分に睡眠をとり、2日目の朝を迎えたのだった。

と、云う訳で2日目の朝である。この日は、馬車の御者に挑戦した。現代人の孝和は馬を見るのは初めてだった。そのため、御者に選ばれた孝和は馬車どころか馬の動かし方すら知らない状態だった。ああ、またかわいそうな目で皆こっち見てるんだろうな、と思っていたのだが、そういうわけでもなかった。

指導役の雑貨店のマニッシュによると大きな町で生まれた者の中には、馬に乗ったりせずに一生を終えるものも普通にいるとのことだった。

「馬とかそういうのって、移動とかで普通に皆使うもんだと思ってたんですよ。そういうわけでもないんですね」

「まあな、日常的に馬なんかの移動手段使うのは商人や野良作業をするようなものだけだろう。趣味、という形で貴族が乗ったりもするが、それ以外では戦争のときくらいだろう」

おっかなびつくり馬を御することができるようになった孝和にマニッシュは説明した。馬自体が個人で購入するには高価なこともあるし、ロバや牛、騎竜にウマドリなんかもいて乗用の動物はそれぞれに乗り方も違ったりする。

ちなみに、この馬車2台を引いている馬はルミイ村の共有財産だ。「へえ、じゃあ馬を生産するような人は結構お金持ちだったりするんですか？」

「いや、育てるのに時間もかかるし、そこまでもないんじゃない

かな？野生馬の大群も森にいたりするから、1頭の価格もピンキリになると言っていた」

暇になったのだろう。友人の商人の苦勞話をしてくれた。なるほどこれは為になる。商人がもってる情報はこの世界ではすごい財産だ。今度からお店で店員さんと話するときはもつと気をつけよう。

お昼近くになり、不寝番の最終チームが起きてきた。簡単に昼食を取り、日が沈む前に野営のできる場所にたどり着くことができた。2日目の野営地はいつもマダックに向かう際に使う場所で、近くには小さな川が流れている。朝食を早めにとってから出発すれば昼前にはマドックに到着できる。

つまり、これがルミイ村の皆と過ごせる最後の夜だ。

孝和はこの世界に召還されたことに不満がある。シグラスの都合で今までの生活が消えてなくなり、自分を知る者は誰もいない。向こうの世界には孝和がいなくなつて悲しむ人、迷惑をこうむる人がいる。その人たちのことを思うと申し訳なさでいっぱいになる。

だが、それと同じくらいこの世界に親しみを覚え始めている。日本ではありえないくらい純粹で暖かな住人たち。人と人との繋がりが大切であることがわかる世界。今までになかつたくらい安らぎを感じる。日本では起こり得ない問題もあるだろうが、それでも生きていける。だから、それを教えてくれたこの人の世界で生きていこう。

孝和たちの不寝番は3番目、最後となつた。食事は村から持参した食材と醤油を使い、明日の朝の分を含め、孝和が作った。

結果皆からは大盛況で、醤油の偉大さがさらに孝和の中で膨らんだ。

そして、最後の夜はそうして更けていった。不寝番に後を任せ、孝和は用意されたテントの中で眠りについた。

……ッ！！！！ダアアッ！！起きろ！！！！モンスターだ！！！！！！」

孝和は外の怒声で目を覚ましたと同時に剣を掴み、テントの外に飛び出た。

「何だ！！！！いまどうなってる！！！！」

起きたばかりでどうなっているかわからない。夕食時に作ったかまどの焚き火が見えた。誰かがいるはずのその場所に向けて、とりあえずそこに向かって全力で駆け出す。

無理やり眠気を打ち消し、焚き火付近にいた槍を構えた衛兵の男性と、鉄剣を持った道具屋の主人の周りに集まる。

「すみません！！遅れました。何が襲ってきてるんですか！！！！？」

先ほどの怒声がおそらく衛兵の男性からのものだと判断し、襲撃したモンスターの数や種類を尋ねる。

護衛は焚き火付近にいる3名と馬を守りにいった3名に分かれた。どうやら向こうの馬の守りにについている3名はもう戦闘状態になっているようだ。

一方、孝和の合流したこちらの組は全員が焚き火を背に輪になるように襲撃に備えた。

「暗くて数はわからんが、襲ってきてるのはワイルドドッグとスライムのようだ。さっき、1匹切りつけたが、とどめまではいかんかったようだ。背中は見せないようにしておけよ」

「わかりました。襲ってくる奴だけ狙って切り伏せればいいんですね！どれくらいたおせばいいもんですか？」

初めての命のかかった戦闘のうえ、急な襲撃でもあり孝和はいやな汗が止まらなかった。

とりあえず、真龍の知識には今道具屋のババンの言ったモンスターへの情報はなかった。まったく、いざというときに役に立たない。

まあ、真龍一族に挑むようなバカなモンスターというのもし少ないだろうからこれは予想通りだった。ワイルドドッグは、地球の大型犬

くらいの大きさで牙と爪はとんでもなく鋭い様子だった。一方のスライムはバレーボールくらいのサイズからでスイカ程度の大きさ、ゼリー状の外皮の中に核が浮かんでいる。

「ワイルドドッグは群れで行動しているからな。自分たちの群れが維持できない状態になるまでの無茶はしないはずだ。スライムはわからん。一応の知性はあるようだが、近くによっても襲ってくる場合と襲ってこない場合があるからな。まったく相手にしなくてもいいかもしれん」

衛兵のギリズがそう孝和にレクチャーする。

その間にもババンは襲ってきたワイルドドッグの前足を半歩後ろにぎりぎりの位置でかわし、カウンター気味にその首めがけて剣を振るった。その剣は完全にワイルドドッグの首を落とすにはいたらなかったが、その息の根を止めることには成功した。それなりに戦闘に長けた人物である。

槍のリーチがある分警戒したのか、ワイルドドッグはギリズを避けるように、孝和とババンに目標を定めていた。

ワイルドドッグの群れは、ギリズのけん制を警戒してか、そのリーチに入らないように遠巻きに様子を見ているばかりで、自分から積極的には仕掛けようとしなない。その逆にババンと孝和は常に2〜3匹のワイルドドッグに襲われていた。

「クソツ！！邪魔だ！どけよ！」

孝和は剣を振るい、焚き火の反対サイドのババンの援護に行こうとしたが、なにぶん相手の数が多い。なかなか思うように援護にいけない。ただし、襲ってきたワイルドドッグは、ほぼ一撃で絶命していた。右側から飛び掛ってくるスライムたちや、単体で襲ってくるワイルドドッグに関しては魔法剣の一振りで、きれいに2等分にされていた。

逆に左側から一斉に飛び掛ってきたワイルドドッグに関しても魔力付与された籠手の殴打で頭部や致命傷とも言えるダメージを受け、屍をさらした。

孝和が、馬車から飛び出してから20分ほどの間に10匹近くのワイルドドッグ、4匹のスライムが倒された。

鬼神ともいえるほどの強さを持つ孝和に、衛兵の男性は自身の助けが要らないと判断しババンの援護に回った。これにより、ワイルドドッグの群れは自らの狩が失敗したのを悟り、引いていった。

「大丈夫ですか！ここを強く押さえてください！！」

孝和が自分の敵に集中し数を減らすことに苦心している間、ババンは左腕に牙による怪我を負っていた。孝和が左腕の怪我に布を当て強く圧迫止血をした。

「いったた。やられちゃったね。結構深めにいったからな」

「すいません。ギリズさん、止血の続きお願いしていいですか。俺は、馬の守りに行った3人の援護に行きます」

強く圧迫止血していたところをギリズに任せた。ギリズは衛兵の経験が長く、簡単な応急処置に関しては詳しいとのことだったので安心して任せてもいいだろう。

孝和はすぐに立ち上がると左手に足元の石を握りこみ、馬を守る3名のほうに全力で駆け出した。

タンは今、窮地に立たされていた。寝ていたところを怒声でたたき起こされ、睡眠をとっていた馬車から飛び出したところ、孝和が全速力で焚き火に向かって駆け出して行くところだった。

ならば、自分は孝和とは逆、馬の係留してある場所を守るべきだろう。タンは槍を手に馬が騒いでいる係留所に走りこんだ。

現場は馬の周りにワイルドドッグが飛び掛っている状況だった。自分のほかのマニッシュと農夫のウィスラーは槍を突くのではなく横に振り回してワイルドドッグを追い払っていた。どうやらあまり荒事に向いていないウィスラーを守るのに、マニッシュが負傷して

しまい、片手で槍を構えることになったからのようだ。

だが、その攻撃は彼らを追い払いはするが、倒せるまでの威力はなかった。必然的にこの二人は戦力として除外して考えなくてはならない。自分の役目は向こうの焚き火の3人がこちらに加勢に来るまで馬と、彼ら二人を守ることだ。

「二人とも、背中合わせになって前方に槍を突き出すんだ！！どうしてもよけれない体当たりが来そうなら横に振り回せ！！！」

本来の槍の使い方ではないが、ワイルドドッグ相手に混乱している二人にこれ以上の指示は更なる混乱を巻き起こすだけだろう。何とか時間を稼ぐんだ。大怪我しなければいい。

馬たちには悪いが、守りきれないかもしれない。何とか飛び跳ねてワイルドドッグの攻撃から身を守ってもらうしかない。

自分の力で減らせるだけは減らすしかないだろうが、全部は無理だろう。大怪我しないように時間を稼ぐんだ。

「さあ、かかってきやがれ！！」

ワイルドドッグを威嚇する。できるだけ大声で、向こうがひるむように攻撃的な氣勢を上げる。

だが、向こうのほうが多いことと、二人の農夫がおびえきった様子でいることであまりその威嚇も意味を成さなかった。

「うわああ！！か、噛まれた！！助けてくれ」

UISラーの右腕に軽い噛み跡が残っている。今まで何とか保つことができていた戦意が一気に薄れ、恐怖が彼らを襲い始める。

どうやら、ワイルドドッグは標的を怪我をした2人に定めたようだった。馬に手を出していたものまでが彼ら二人に襲い掛かってきた。タンも彼らの援護を行っているが、間に合わない。

このままでは……

そんなことを考えたのがいけなかったのだろう。狙って突き出し

た槍が目標のワイルドドッグから外れる。まずい。先ほどの指示も忘れて二人はもう槍を横に振り回すだけだった。背中合わせになれという指示などもう覚えてもいない

大きく開けた口が先ほど右腕を噛まれたウイスラーの背後からその首筋に迫る。駄目だ。間に合わない。そう思った瞬間。

「ギャンツ!!!」

ワイルドドッグの頭部に握りこぶし大の石が命中した。それを見たほかのものは野生の勘からか、少し距離をとった。

そこに孝和が全力で駆けつけてくる。彼が走りながら全力で投げつけたようだ。

「大丈夫か!!!」

息を切らしながら、その場に駆け込みつつ、右手の魔法剣で近くのワイルドドッグの胸を薙ぐ。その一撃で胴体部分から血が噴出す。ぎりぎり援護が間に合ったようだ。

「タン。お前は二人を守れ!!!俺はあいつらを何匹か倒す。それまで踏ん張れよ!!!」

「わかった。無理すんなよ!!!」

「今やらなくて、いつ無理するんだよ!!!」

投げやりな冗談を言い放って無理やりに笑顔を作り、3人に余裕を見せる。それを見てタン以外の二人は多少落ち着いたようだ。軽いパニックになっていた二人を何とか自分の後ろにかばいながら、タンは守りを固めた。

その間にも孝和は剣を振るい、ワイルドドッグを切り裂いていく。こちらのほうにはスライムの連中はいないようだった。負傷者はタンに任せて、孝和は全力で勝負に出た。

最初に5匹くらいの群れの真ん中に突っ込んで剣を振るう。連携を分断し、一気に2匹を切り伏せると、飛び掛ってきた残りの3匹を相手に正面から迎え撃った。タイミングを合わせて襲い掛かってきたが、最初の1匹を籠手の裏拳で迎撃し、2匹目を逆袈裟で切り伏せる。3匹目は振り上げた剣を力任せに振り下ろす。ドンピシャ

のタイミングで飛び込んできたところに全力の一撃を合わせる。

ほんの数秒で5匹が瞬殺されたのを見て、ワイルドドッグに恐怖がよぎった。圧倒的な戦力差、近づけばそのまま骸をさらす。その一番手になりたいものはいなかった。野生に生まれたものはプライドより生存を優先する。一斉に後退を始めるのにそんなに時間はかからなかった。

敵の撃退からすぐに全員の状況と、馬の怪我の状態を確認することになった。怪我をしたのはババンとマニツシュの二人だけ、馬も傷を負っているが歩行ができないほどではないことがわかった。噛まれたといっていたウイスラーは、腕をまくってみると実はそこまです深い傷ではなく少し赤くなっていただけだった。

「さて、どうするか。マニツシュの手首と右足の捻挫は馬車に乗せていけば問題ないが、ババンのほうはな。かなり深く切れてる。まあ、とりあえず痛み止めと止血剤でごまかしながらマドックまで行くしかないだろう」

ギリズの指示でとりあえず、日が出たらすぐにもマドックまで一気に進むことにした。馬の怪我が若干不安ではあるが、マニツシュの怪我はギリズの顔色を伺う限りかなり深いようだ。簡単な応急処置をただけなので、感染症やこの世界にあるかはわからないが狂犬病のようなもの、細菌感染も考えられる。危険を冒しても、少し明るくなった段階で動き始めるほうがいいだろう。

「では、俺は周りの警戒に当たります」
タンは槍を持って周囲の警戒に向かった。

ウイスラーは野営地の撤収準備を始めていた。孝和はそれに協力して、撤収準備をサポートすることにした。前日の夕食の残りで携帯用の朝食を用意して、かまどを崩し、移動の準備を整えた。

マニツシュはババンの状態を見ている。ギリズは、タンと一緒に

少し離れたの警備に当たっていた。そのため、それに気づくものはいなかった。

結果、それはウイスラーに向かって一気に近づいた。

ウイスラーは、片付けに夢中でそれには気づかなかった。

物音がして孝和が振り返ると、それはウイスラーに襲い掛かろうと近づいているところだった。

「伏せろ！後ろから来てるぞ！！！」

叫んでもこの位置からは遠すぎて手が出ない。

孝和にはそれに手を出せなかった。

周りの石を拾って投げつけるのでは間に合わない。ただ、腕を伸ばすしかなかった。

そう、”腕を伸ばすしかなかった”のである。

第4話 警護任務と襲撃と（後書き）

初めて戦闘シーンを書きました。稚拙な文章ですいません。更新はできたら週1〜2回ペースの予定です。基本仕事が忙しいと1回になるときも多々あると思います。

読んでいただいてありがとうございます。
精一杯努力させていただきます。

第5話 旅は道連れ？（前書き）

誤字脱字申し訳ないです。自分でもひどいな、と感じてますので直せそうなら直していく次第です。

第5話 旅は道連れ？

「伏せろ！後ろから来てるぞ！！！」

ウイスラーはいきなりの孝和のあわてた声に驚き、後ろに体を向ける。野営の片付けのため、ウイスラーはかまどに残った炭の中から使える炭を選別していたところだった。そのため中腰になって作業をしていた。急な忠告に即座に反応できるわけもなく、ウイスラーは後ろから襲ってきたその攻撃を避けきることはできなかった。「うわあああ！！！」

ほんの少しだが体が孝和の忠告に反応した。何とか体をひねってその体当たりから身をかわす。襲ってきたのはスライムだった。どうやら急いで撤収するためギリスとタンが付近の捜索に出た際に野営地まで侵入してきたらしい。ウイスラーは撤収の準備のため、何も武器は持っていなかった。身を守るものが何もないウイスラーは、ただぎゅっと目を硬く閉じて動けなくなってしまった。

「くそ！！ウイスラーさん！！逃げて！！！」

孝和の位置からはウイスラーまでは距離があった。しかも今は魔法剣は馬車に積んであった。さっきのように投石で攻撃しようにもここからでは少しでも外れればウイスラーに当たってしまう。

そんな状況に孝和は走り出した。武器はないが駆け出さずにはいれなかった。

しかし、遠い。遠すぎる。これでは、間に合わない。

いやだ。俺は、いやだ。こんなことは許さない。俺は、

『助けたいんだ』

そう思うと、ウイスラーに向けて純粹にただ、助けたいという気持ち湧き上がった。その想いが、何かを掴むように腕を前に突き出した。

ドンという何かが大きく爆ぜる音が聞こえた。それと同時に夜だというのにそこから強烈な光があふれた。

タンは日が昇ればすぐにも出発するため野営地から離れ、マドック方面の道の先に状況確認に出ていた。ギリズのほうは先ほどの襲撃してきたモンスター死体の確認と、再度の襲撃がないか先ほどの馬をつないでいた場所にいた。二人は同時にその音が野営地の方向からのものだと思いき、いまだ光を放つ野営地に向かって走り出した。

「タカカズ、いったい何があった？皆は無事なのか!？」

息を切らして駆けつけたタンの前にはすでに野営地に到着したギリズと他のメンバーがそろっていた。

「あ、ああ。皆無事だよ。心配かけて申し訳ない。ウイスラーさんにさっきのスライムが襲い掛かってきたんだけど、怪我もないよ。ちよっと落ち着きな」

なぜか、他のメンバーから少し離れた場所にいる孝和がそう答えた。

その様子が少し気になったが、誰も怪我はなかったようだ。その言葉を聞いて足元から崩れ落ちる。襲撃からこれまで張り詰めた緊

いた。

「とりあえず、聞きたい。どういうことだ？」

光の爆発があつたときに最も遠くにいたタン以外には一応の説明は終わっていたし、日も昇り始めていたため、野営地から2台の馬車はマドックに出発した。

それで、タンは孝和と同じ馬車に乗って説明を受けることになつた。ちなみに御者はギリズ。

「まあ、簡単に説明するとだな……」

ウイスラーを助けようと腕を伸ばした。そのとき、体から何か得体の知れない力を感じた。それがウイスラーに襲い掛かったスライムに向かつて腕から放たれた。放たれた力が大きな音と光を生み出した。光が収まつたときには、目をきつく結んだウイスラーがそこにいた。襲い掛かつてきたスライムは少し離れた場所に転がっていた。土色のスライムに近づいて、様子を伺っていると次第に色が白く変化した。真珠のような滑らかな光沢を放つスライムに警戒を払っているとぴよんとその体が跳ね上がった。そして警戒する孝和の前にピョンピョン跳ねながら躍り出ると

『はじめまして。ますたー。よろしくおねがいします』

と、頭の中に語りかけてきたのであつた。

「……というわけだ」

孝和の説明を聞くと、タンはポカーンとした表情をしてしまった。

「すると、このスライムはもともとは敵だったんじゃないか？ 大丈夫なのか？ 本当に？」

確かにそうなのだ。孝和が考えるには、あの瞬間にいたのは自分とウィスラー、スライムの三者のみ。こいつがウィスラーを襲ったスライムに間違いないのだが……

『このスライムじゃないの！！ぼくはキールっていうんだ！！』

このスライム、キールはそう答えた。

「キ、キール？名前があるのか？お前」

タンはさらに“ポカーン”度合いを深めた。

『うん！！ますたーにきめてもらっただんだ！！』

うれしさ前回の様子でそう周りの皆に念話で話しかける。どこか誇らしげである。いや、スライムの誇らしげな様子がどんなものか知らないが。

「タカカズが決めたのか？どんな意味のことばなんだ？」

この世界では名前というのは偉大な先人より借りうけたり、何らかの意味づけがされているものがほとんどである。そこで孝和がどんな意図でキールと名づけたか気になったのだ。

「いや、まあ、頑張りやさん……かね？そんな感じの意味が一番近いかな」

なんとなくキールの方を直視できない。キールは『ますたー。ありがとう』と伝えてきてくれている。それに対してははは、と苦笑した。

本当は、名前をつけてくれとねだられたので某RPGの6番目の努力家のスライムの名前をひっくり返したのだ。まあ、努力家の偉大なスライムの名前にあやかっただから、そんなに悪いわけでもない。何せ、本人がとても喜んでいいるのだ。変なことを言っただけ悲しませることもないだろう。それにRPGといってもわからないだろうし。

「だけど俺、意思疎通のできるスライムなんて始めて見たぞ。こんな友好的なもの初めてだし」

タンは孝和のひざの上に乗ったキールをなでなでしてその触り心地を堪能している。ぷにぷにしているとても気持ちいいのだ。

キールもなでなでされるのは好きらしく、気持ちよさ気な念が感じられた。

「そうなのか。やっぱりこういったことは稀なのか」

孝和は膝の上のキールを見てキールに尋ねた。

ヒーストマスター

「まあ、稀だろうな。そんなことができるのは従魔師くらいだが、そんなスキル持つてる奴なんて1000人に1人いるかいなかだろうしな。タカカズがそうだとは思わなかったから驚いたもんだ。はははは」

キールではなく御者席のギリズが答えた。

「そんな少ないんですか？その従魔師っていう職業の人」

孝和はそう質問した。衛兵の経験が長いギリズは物知りで、過去にはギルドに所属して冒険者もしていたことからそういった情報も持っている。

「俺が冒険者をしていた10年前には現役の従魔師はこの国に4、5人くらいだったと思うぞ。そのスキルもどういった理由で身につくものかいまだにわからん」

「へえ〜。そうなんですか。結構貴重な能力なんですね。これ」

もつとも、とギリズは前置きして、

「モンスターは別だが」

と続けた。

「へ？」

間の抜けた声がでてしまった。

「あ、上位モンスターの優位性ってやつでしたっけ？」

「なんだそれ？」

タンがいった単語が気になった。ギリズが答える。

「ああ、モンスターは本来単独で行動する。群れを作るものがないとしても、それは同じ種族のモンスターだけで構成される」

「はあ、でもさっきの襲撃時はワイルドドッグとスライムの混合チームでしたよ」

孝和はギリズの話の途中で疑問をぶつけた。

答えはタンが引き継いだ。

「例外もあるんだよ。戦ってる2種類の野生モンスターがいた場合、戦闘で勝利した奴に負けた奴が従うんだ。何でか知らないけど、戦闘の相手が人間や亜人種、魔族の場合はあてはまらないんだ。どうしてなのかは、頭のいい連中がどれだけ調べてもわからないんだってさ」

孝和は冷や汗が出てきた。多分だが、俺は従魔師じゃない。

キールが仲間になったのは俺が真龍の後継者だからではないだろうか。そのほうが自分が希少なスキルの持ち主だといわれるより、お前は強いモンスターだからだと言われるほうがすつきりする。

「ほー。そーなんだー」

感情のまったく入っていない声色でそう答えた。

とりあえずこの話題から抜きたい。なんかいろいろメツキがはがれてぼろが出そうだ。

「あと、もうひとつ聞きたいことがあるんだが」

タンが話題を振ってきた。

「なんだ。なんか聞きたいことあったか!？」

孝和の若干前のめりの姿勢にタンは戦慄を覚えた。

「な、なんだ。その勢い。どうした?お前」

少しあせりすぎた。落ち着け、俺。

「すまん。なんかさつきからいろいろありすぎて良くわかんなくなつた。それで、何だ?」

「ああ、キールが仲間になつた理由はわかつたんだが、あの大爆発つてなんだつたんだ? 駆けつけてみたけど、どこにも穴の一つも開いてなかったし、あんな大爆発だったらウイスラーとキールも無事じゃないはずじゃないか」

そうだ、いろいろあつて後回しにしてたが、何でだろう?

「それはだな……」

困ったときの解説役ギリズが答える。ありがとうギリズさん。

孝和は、ギリズの知識の深さに感謝した。

「……、おそらく無意識の気功術ではないかと思う。気功術の光によく似ていた。力の練り方が足りなかったから、周りに広がってほとんど威力が出なかったんだろう。その代わりに音が鳴り響いたんだ。多分」

「でも、それじゃあキールが吹き飛んだことと色が変わったのはおかしくないですか？意思疎通できるスライムが偶然あの場にいたこともです。説明がつかないですよ」

「そうだな。それじゃあ、説明がつかんか。うーん」

……これもか。いや、なんとなく説明ができそうな気がする。多分、気功術って言うのは間違ってる。真龍の知識の中にもあったし、体内にみなぎった力を放出した感じはそうとしか言えないと思う。

ただし、違うのは“人間の”気功術ではなく、“真龍の”気功術だったんだろう。確かシグラスが最後に“自分の生命力”を譲るって言うてた。人間と真龍の生命力ってどのくらい違うんだろうか。多分10倍とかでもきかないだろう。

そんな気功術をモロに正面からキールは受けた。無意識のものだったが、あの時考えてたのは、ウィスラーを助けたいという一念だけだった。

自分で言うてて恥ずかしいが、誰かを守りたいという莫大な守りの光エネルギーを俺は放出した。そしてそれを奇跡的にキールが全部吸収したのではないだろうか。攻撃的でなかった上、真龍の持つ光のエネルギーの相乗効果でこのキールの性格が出来上がったのだろう。推測でしかないがほぼ間違いないだろうと思っている。

「まー。考えても仕方ないですよー。いーじゃないですかー。皆無事だったんですからー」感情のまったく入っていない声色でそう答えた。二回目ではあったが、それに二人は気付かなかった。

何かしっくりこない感じだが彼らには推察できる材料がない。話はこちらまでにしようとギリスが一連の話を打ち切った。

「ますたー。おはなしおわったのー？」

「どうやらキールは難しい話に飽きてしまい。退屈していたようだった。」

「いや、お前の話してたんだがな。まあいいか。ギリズさん、あとどれくらいでマドックに着くんですか？」

「ギリズに行程がどの程度進んだか確認する。初めての町なので今どの辺りなのかはまったくわからなかった。」

「あと、2時間ほどだな。しかし早目に到着しないと。けが人もいるしな。命に別状はなさそうだが、医者に診察を頼むものにも早めのほうがいい」

「そのとおりだ。今ババンは痛み止めを飲ませて寝かせている。止血剤も効いているので大丈夫そうだがけが人を長い間馬車で揺らすのはよくないだろう。」

「……？ますたー？」

「キールが念話で話しかけてきた。」

「どうした。キール？」

「けがしてるひとがいるの？」

「ああ、お前は見てないだろうけど後ろの馬車の中に一人寝てるんだ。タンが帰ってきたときも横になってたからな」

「いきなりモンスターと一緒に馬車で旅をさせるのは厳しいと考え、けが人は後ろの馬車でキールと別になるように人員配置をしておいたのだ。」

「ふーん。そうなんだ。ぼく、けがなおせるよ」

「と、このようにキールは何気なく言った。」

「へえ。そうなのか。キールはすごいな。……ちょっと待て、今なんてった？」

「これは孝和だけへの念話だったので、ほかの二人には聞こえていなかった。」

「どうした、タカカズ。キールが何か言ったのか？」

「孝和の様子からキールが何か言った様子がわかった。何を言った

のかはわからなかったが。今度は一人のも聞こえるようにキールが話した。

『だから、ぼく、けがなおせるよっていったんだけど。だめだった？』

「なににいいいい！！！！！！」

ギリズとタンの声があたりに響いた。

第5話 旅は道連れ？（後書き）

スライムが好きです。ほんとに。

キールの精神年齢は7〜8歳とお考えください。たどたどしい口調も徐々に普通に話せるようにしていけるネタを必死に考えていますので。

ここまで読んだ方。ありがとうございます。

第6話 キールの底力(前書き)

誤字脱字は申し訳ありません。楽しんでいただけると幸いです。

第6話 キールの底力

キールが、

『うしろのばしゃのひとたちの、けがをなおせばいいんだよね。ますたー』

と簡単に言ってくれたので、孝和の乗った馬車は大騒ぎになった。孝和はギリスとタンの二人が何でこんな大騒ぎしているのか理由がわからなかった。

実は怪我や病気を治すことができる能力を持つのは、神官職についている者か、一部の上級術者のどちらかの回復術しかないのだった。それが何か特殊な能力を持っているとはいえ、スライムに可能であることではないはずだ。大声を出した二人はそんな常識があった。

一方の孝和はそんなこと知りもしなかった。ただ、キールはやらせてほしいといっているし、もし駄目でもこのキールが他人に危害を加えるようには見えなかった。ならば、やらせてみてはどうかと二人に提案した。

二人は最初はどうするか悩んだ。しかし、キールが『ぼくをしんじてくれないの？』

と、悲しげな念を送ったことで、ものすごい罪悪感に襲われてしまった。

「わかった。キール、お前を信じる。だから、その悲しさ全開の念を送らないでくれ」

念話というのはこういうとき不便だと思つ。どうやらすねてしまったキールが、無意識に感情をダイレクトに周りに放っているようだ。が、その感情がダイレクトに感じられて馬車の中がなんかどんよりしてしまっていた。

結局、町に入る前の最後の休憩時に怪我をキールが診てみることに決まった。

『ぼく、がんばる。みててね、ますたー!!』

と、機嫌を直したキールがやる気満々でいるのでがんばれよ、とちょうど核の上の辺りをなでなでしてやる。

『へへへへえ』

と、とても気持ちよさそうに、キールが喜んだ。うむ。かわいいぞ。キール。

「いや、お前までへらへらしてんなよ、タカカズ」

どうやら、にやけ顔を見られてしまったらしい。後ろからタンが声をかけてきた。

「あ、ああ。すまない。ババンさん達の様子はどうだ。OK出たかい?」

さすがに、重症のババンにいきなりキールの治療法(?)を施すわけにもいかない。まずはマニッシュの怪我の治療を試みて、次にババンにしてみようということになった。

だけど、本人の了承なしはさすがにマズイだろうという事で今、タンとギリスが説明に行っていた。

「ああ、別に問題なしだ。二人とも怪我が治ればもうけもの思っている。むしろ好奇心で正常な判断できなくなってないか少し不安なんだが」

がしがし頭をかきながら、そう言った。

「じゃあ、行くぞ。キール。自分でできるって言ったんだ。バッチリ決めて見せるよ」

『うん!まかせといて!!』

元氣よく答えたキールは孝和とタンを引き連れて、ババンたちの馬車に向かって勢いよくぴょんぴょん飛び跳ねていった。

「おお、君がキールかい？はじめまして」

怪我をして馬車で寝ていたせいで、直接キールの姿を見ていなかったババンはそう最初の挨拶をした。

『おじさんがババンさん？はじめまして。まかせておいて。ぼくがなおしてあげるからね』

とりあえず、両者の顔合わせが終わり、治療に移ることになった。どうやってキールが怪我を治すのか、全員がその様子を見守っていた。

まずマニツシュの怪我から直すということなので、キールの正面にマニツシュが座った。右手首と左足の捻挫があることをキールに伝え、どうするのだろうかとうと皆が注目する中、

『じゃあ、なおしまーす』

緊張感などまるでない口調でキールが言つとマニツシュの全身を球状の魔法陣が包んだ。それと同時にババンの全身にも同様の魔法陣が現れ、全身を包み込んだ。

「おい、キール！なにやってる！！」

あわてたのは、それを見た孝和だった。孝和がキールにやってみれば、と言ったのだ。二人いつぺんに治療するのは決め事と違つし、もし何かあつては大変だ。

『ひとりひとりなおすより、いつぺんのほうがじかんかからないんだよ。ますたーたち、はやくまちにつきたいんでしょ？』

どうやら、キールが気を利かせてくれたようだ。いや、でもこれはまずい。本当に治るのかもわからないものなのだ。

「タカカズ……」

ギリズが小さく体を震わせながら話しかけてきた。

「すみません。ギリズさん。すぐに止めさせます」

その様子から、ギリズが怒っていると思つたのだ。だが、

「いや、そのままでもいい。キールのこれは回復術に間違いない」

「え、そうなんですか？」

孝和は瞬時に真龍の知識の中からこれと同じ術式を探った。しかし、どうやら該当する術式の情報は無いようだった。かろうじて、この魔法陣の構成組織に光と土の属性が利用されているということしかわからなかった。

「ああ、この術式は私の想像ではないが、再生と体力回復リペアの光術ヒールに大地の恵み《アースグロウリー》の土術の複合術式だ……。しかも本来すべて一人にしか効果がない術を複数同時発動したものだろう」

ひざからギリズが崩れ落ちる。タンはそれを見てあわてて駆けつける。

「だ、大丈夫ですか？ギリズさん」

「大丈夫か……か。ああ、まあな。自分が正気なのどうかは、あやしいが」

そういうと肩を腕で押さえるようにしてゆっくりと立ち上がった。

「この今キールの使っている魔法陣だが、化け物のようなもんだ。複合魔術を使えるだけで天才と言われるんだぞ。そのうえ、属性の違う術式を2種類どころか3種類も使い、それぞれが反発しないように纏め上げ、有効範囲も複数に使えるように拡大・増幅しているんだ。こんなことができるのは、魔術大国リーンプルグの宮廷魔術師たちぐらいじゃないか！！なんだこれは！！」

どうやら、先ほど小刻みに体が震えていたのは戦慄であったのだろう。そんなギリズの葛藤の一方、ババンとマニッシュを包んでいた魔法陣が光を失い消えていった。

「完璧ですね。痛みもないし、どこか動きにくいところもない。あれだけ血が出たはずなのに、貧血のような症状もないようですし。キール、ありがとう」

ババンは寝ていた馬車から外に出て、体の状態を確認しながらキ

ールにお礼を言った。

『えへへへ。すごいでしょ。ますたー、ほめてほめて!!』

キールは孝和に飛び掛りその腕の中でなでなでをねだった。

「おう。よくやった。キールはすごい魔術を使えるんだな。びっくりしたぞ」

要望どおり、キールをなでてやった。疲れているような様子も見せない。ギリズの話によると、あんな超高等回復術を使えば術者は立ち上がれないほどの状態になるはずだ、と言っていたので少し心配していたのだ。

だが、キールの様子は先ほどまでとまったく変わらず元気いっぱいであった。どのくらいの魔力を持っているのだろうか？やっぱり特殊なスライムだからだろうか？本来、世界の澱みから生まれるスライム類に、光の属性の術が使えるのは絶対におかしいのだそうだ。そうは言ってもできている以上どうしようもないじゃないか。

ギリズは自分のキャパを超える現状に頭を抱えているし、タンはそのギリズを一人にできずそばについていた。

「考えてても仕方ない。とりあえずマドックに向かおう。あと1時間くらいだ」

何とか自分の中で整理をつけたのだろう。ギリズが出発を皆に告げた。全員が馬車に乗り込み、マドックに向け出発した。

最後の休憩地から移動してすぐに道は小高い丘に向かって伸びていた。がらがら音を立てて馬車は進む。ちなみに馬たちもキールの回復術、神の祝福ユッドブレス（キールに頼まれて孝和が命名した）により完全回復して休憩前よりも力強く道を進んでいた。

「あの丘を越えればマドックが見えてくるぞ。タカカズ、御者席にこないか？どんなところか見てみたいだろう」

「いいんですか？じゃあお言葉に甘えて…」

ギリズの提案に孝和は乗った。どんなところなのか興味はつきないし、ただ馬車の中に缶詰というのにも飽きたのだ。

ギリズから御者を変わってもらい、丘の上に向かって馬を進める。キールも『ぼくも、ぼくもまちがみたい!』と興味津々で、いまは孝和の横で小さく体を揺らしている。

ちょうど丘の上についたところで一気に周りが開けていった。そして孝和とキールの視界にマドックの町が見えた。

「おおお! すげえ! あんなに大きいんですか? マドックの町って」
そこには、かなりの大きさの町があった。この丘からかなり離れていると言つのにその大きさは町の端がかすかにかすむくらいの大きさで、町の西側には麦畑と、おそらく果樹園であろう広大な農地が広がっていた。中心部から東側にかけてはかなりの長さの石壁が広がっていた。かなりの年月が経過した威風堂々とした建築物がどんと真ん中にあり、見張り台があることから、何らかの治安目的で建設されたものであることがわかる。

そのことをギリズに聞いてみると、

「ああ、元々はこの地域一体を支配してたパーン王国の城砦があったんだ。その跡地に今のマドックが築かれた。ここが発展したのは城砦の一部がそのまま治安維持に役立つことから自然とひとが集まったからだ」

「でも、城壁なんて、東側の一部だけですけど」

孝和は自身の気づいた点を質問した。

「昔は真ん中の城砦を囲むように在つたらしいんだがな。それが70年くらい前のことだが、王家の直系が絶えた。それで王位継承権をめぐつて先王の王弟の公爵家と、王妃の実家の伯爵家の間で荒れに荒れて、結局10年の内乱で両者はぼろぼろ。結果、そんな惨状を見た現在のリグリア王国がパーン内の混乱を収める名目で侵攻。今じゃリグリアがこの王様なんだわ。これが」

「じゃあ、そのときの内乱の影響で?」

「そういうことだ。リグリア王国の当時の王妃がパーンの王族と言

うこともあつたんで、内乱に参加しなかった日和見の貴族連中の指示を得て一気に全土を制圧。ま、そうは言ってもほとんど戦いになることはなかったようだ。国民もいい加減王族の都合で国がたがたになつてるのに耐えられなかつたつてことさ。他国から批判は受けたが、おおむね国内も好意的だったし、今じゃ不満を持つてるのは旧王族の貴族連中と隣国のグラノイア公国だけだ」

なるほど、なかなか複雑な状況なんだな。現在はリグリア王国が統治しているが、旧王族はそのまま貴族としてリグリアに属したと言つことだ。その連中は自分たちの国を取り戻したいが、国内の信頼は地に落ちた。現状で復権の兆しはまるでないが、王族としてのプライドがそれを許さない。グラノイア公国はリグリアの領土拡大には反対。

「いま、現時点でここらの国は平和、ということでもいいんですかね」
「まあ、そんな火種は今のところない。“平和”というよりは“平穩”だな」

そんな話をしていたら、マドックの門の前まであと少しのところまで来ていた。

なんとなく感慨深い。命のやり取りをした仲間たち。彼らとはこの町で別れる。

ここからは、自分ひとりの生活が始まる。

さあ、ここからが俺の冒険だ。やってやろうじゃないか。

『ますたー。おっきなもんだね。すごいなー』

……すまん。キール、お前がいたな。

第6話 キールの底力（後書き）

やっと町に着きました。本来4話まででここに辿り着いてた筈なんですけど。テンポが悪いうえ、文章構成も悪いんです。私。よりのっそうの努力を心がけようと思います。

第7話 ギルド（前書き）

誤字脱字すみません。発見したら直していきます。

第7話 ギルド

マドックの南門に到着した。これから、ルミイ村の皆は北側の商業区へ向かうということなので、ここで孝和とキールとはお別れになる。

「じゃあ、ここでお別れですね」

自分の荷物を馬車から降ろし、キールと一緒に皆を見送ることにした。

「ああ、じゃあまた村の近くにくる用事があれば寄ってくれ。お前の飯、楽しみにしてるからな」

タンはそういつて馬車の中から手を振った。

「いやいや、お前の中で俺は料理人か。どうということだよ」

苦笑しながら別れの挨拶をする。まあ、こんな感じのお別れもいだろう。湿っぽくなるよりずっといい。

「まあ、冗談だけど。お前はこれからどうするんだ？」

「ああ、とりあえずこのマドックでやってみようと思う。スパードさんから冒険者ギルドへの紹介状書いてもらったからな。冒険者で稼いで生活していこうと思う。キールもいるし、冒険者の肩書きのほうが何かとよさそうだから」

これからのどうするか考えていたことをそのままタンに話す。それを聞いてうなずいたタンは、

「俺たちも入荷なんかで1ヶ月に1回ほどはマドックによるから、もしかしたらあえることもあるだろ。見かけたら声でもかけてくれ」
「わかった。村の皆さんにもありがとうございましたって伝えといてくれ。ルミイ村まで3日だし、もしかしたらちよくちよく行くかもしれないから」

そういつと、タンから右手が差し出された。孝和はその手をしっかりと握り返す。

「では、そろそろ出発だ。タカカズ、気をつけてな」

ギリズがそう御者席から話しかけてきた。孝和は2〜3歩下がって馬車の通行に邪魔にならないようにした。

「では、皆さんありがとうございます。また、元気で会いましょう」

がらがら音を立てて馬車が進む。全員が手を振ったり“元気で”、と語りかけてくれた。孝和はそれに馬車が見えなくなるまで手を振って答えた。

「ますたー、これからどこに行くの？」

キールが孝和に質問した。

ここは、皆と別れた門から西側の居住区画に向かっていた。居住区画は北側の商業区画と隣接していることもあり、個人の商店が並び大通りにはかなりの人込みができていた。どうやら、ここまでの人を見たことのないキールはそれに驚いているようだ。今は孝和の冒険用背負袋の中からちよこんと顔を出して周りの様子を見ている。

「ああ、これから行くのは冒険者ギルドって所だ。ルミイ村のスパードさんという人が、紹介状を書いてくれたんで、そこで冒険者登録をするんだ。一緒にプレイスカードをもらえるそうだから、いろんな場所に行ける様になるぞ」

「へえー。そうなんだ。たのしみだね」

「おう。それとな、キール。どうやらギリズさんの話だとお前も冒険者登録できるそうだ」

「そうなんだ！！ほんとにたのしみだね！！ますたー！！！！」

ギリズによると、従魔師に従うモンスターも冒険者登録ができるらしい。ただし、一緒に従魔師本人が責任を負うことが条件となるらしい。それに関しては、孝和はキールを信頼している。出会ってから半日足らずではあるが、キールの純粋さは十分わかるし、最高クラスの光術が使える精神の持ち主が邪悪なわけがないだろう。

「それで、ますたー。 “ふれいすカード” ってなあに？」

“プレイスカード” これは、個人の情報が書き込まれた本人確認のIDのようなものである。孝和がルミイ村に始めて訪れた際に提示を求められたのもこれだった。

商業・冒険者・魔術の各ギルドと、各国の神殿、宮廷の発行する5種類があり、商業が赤、冒険者が黄、魔術が緑、神殿が黒、宮廷発行のものが金色であり、見た目どこに所属している人物なのかわかるようになってる。

最初にルミイ村でみたプレイスカードは赤だったので、それを持っていたあの人は商業ギルドの所属だったのだろう。

マドックに入るときにギリズは黄色、ババンは赤を提示してたので前者は冒険者、後者は商業であるとわかった。ちなみに他のみんなは何も持っていなかったが、商品の納品とその護衛と言うことでそのままマドックに入ることができた。

記載される内容は各ギルドによって変わるらしい。時間もなくてそこまで詳しく教えてもらえなかったので、これ以上はわからなかった。

「ますたー。ものしりなんだね。すごい。すごい」

キールが尊敬のまなざしで背負袋越しに孝和を見つめているのをひしひし感じる。孝和としては、又聞きの情報なのでなんとなく背中がこそばゆい。

「ありがとな。キール。ほら、あれが、冒険者ギルドみたいだな。

ギリズさんの言った青い屋根の建物だ」

孝和の前には大通りの突き当たりにある、大きな酒場が併設された建物が見えた。ちょうど昼食時ということもあって、多くの人がそこで食事を取っていた。ただ、昼なのにすでにアルコールの入っている様子の人も見える。人種はルミイ村のようにゲルマン系の人間だけではないようだった。かなり身長の高い人種の人やドワーフだろうか。その隣のテーブルの人たちは緑の髪に尖った耳の人だ。もしかして……

「エ、エルフだあ……。すげえ……」

感動である。現実にはエルフなんて見る事ができるなど思いもしなかった。だが、ここでは本当に存在している。本やゲームにあるように耳は尖っている。細身で、真っ白で、とても美形で。

「ああ……。本当に異世界なんだ。でも、なんか嬉しい……」
場違いであることはわかっていたが、魂まで震えるほどの感動が全身を包む。うっすらと目じりに涙まで浮かんで来た。

『ますたー？たちどまってどうしたの？』

孝和はキールに話しかけられるまでのしばらくの間、この異世界を堪能することができたのである。

感動から立ち直り、孝和はギルドの中に入った。どうやらギルドの受付は酒場を越えてその先。少し奥まった場所にあるようだ。そこに向かって進むと周りで食事をしていた冒険者たちが孝和を値踏みするように観察してきた。なんとなく居心地が悪い。

「すみません。ギルドの登録場所ここでいいんですか？」

目的の受付にたどり着くまでに周囲からの注目を浴びてしまい、少々孝和は疲れ気味だ。周囲の人間が注目していたのは、ただ始めてみる顔だったからだ。この商売、人との係わり合いは重要なファクターのひとつである。いざというときの縁は大事にしておくことが大切なのだ。

ただ、孝和自身はそんなことはわからないので、なぜ自分がこんな注目を浴びているのか不思議で仕方なかった。何か自分が皆の気に触ることをしてしまったのだろうか、ビクビクしながらこの受付にたどり着いたのだった。

「はい！冒険者登録ですね！こちらでOKです！」

受付のおねーさんにそう答えてもらって孝和はほっと安心した。

「あの、実は紹介状があるんです。登録に行くときに受付で渡せつて言われてまして。これなんですがお願います」

そういうと、スパードからの紹介状を受付嬢に手渡した。受付嬢は受け取った紹介状を読んでいく。すると、ニコニコとまさに営業スマイルであった顔が、読み進めるにつれ、だんだんと固い表情に変わっていった。最後には紹介状と孝和の顔を行き来し始め、「どうかここでお待ちください」と一方的に言い放つと小走りで奥の事務所に駆け込んでいってしまった。

……5分ほどそのまま放置されてしまった。いい加減どうなったのかなと痺れを切らして、奥に声でもかけようかと考え始めると、「どうもすみません。長くお待たせしてしまいました」

と、奥から先ほどの受付嬢と一緒に40代くらいの男性が現れた。なかなかの恰幅で頭部にいたっては見事に禿げ上がっている。その一方、身につけている装身具や洋服の生地にはかなりの高級感が漂っている。どうやらこのギルドのかんりの地位にいる人物のようだ。「いえ、そんなに待つてはいないですが。なにか私の紹介状に問題でもあったのでしょうか？知人からそれを渡すようにと言われただけですので……」

不安になり、それとなく自分は“その紹介状には一切係わり合いないんだ”とも取れる言い方をしてみた。孝和は心の中でスパードに謝罪した。

「いやいや、そうではありません。スパード氏からの紹介でしたので、どんな方なのかと思っただけです。登録に関しては何も問題はありません。すぐにでもあなたの登録書面と試験用クエストを用意させていただきます」

このギルドの偉い人はそう孝和に説明した。どうやら、登録に問題はないうようだ。ただ、

「試験用クエストって何ですか？」

今までの話からすると、試験を受けないと冒険者の登録はできないシステムになっていられると思われ。内容があまり難しいと自分ではクリアできないのではないかと少し不安になった。

「では、それについては私から説明させていただきます」

それまで奥にいて邪魔にならないようにしていた受付嬢が前に出てきた。それを見て隣の偉そうな人が軽く会釈をして奥に帰っていく。

「まず、失礼なのですが、文字の読み書きはできますか？」

孝和はうなづく。

「そうですね。では登録書面の代書は必要ありませんね。内容に關しましては、必要事項を記入いただきます。もし、伏せておきたいことがありますたら、名前以外の項目に關しては空欄でかまいません。もし、本名以外で記入いただいてもこちらとしては問題とは考えていませんので、記入が終わりましたら、私にご提出ください」

これに關しても孝和はうなづく。名前以外は記入が不要と言うのは、冒険者という職業が理由であろう。仕事の中には本名やその他の情報が、危険につながる可能性があるかとギルドが思っているからだろう。この点は、異世界の人間である孝和には好都合であった。登録のときに、自身の出身などを根掘り葉掘り聞かれたらどうしようかと内心心配していたのだ。

「ここまでで、質問はありますか？」

「いえ、大丈夫です。次の説明をお願いします」

とりあえず、今のところ質問はない。

「では、試験用クエストについて説明させていただきます。今回挑んでいただくのは、3名でモンスターのいる洞窟に挑んでいただくものです。最奥には、ギルドの用意した石碑がありますので、その内容を写して帰還する。これが試験になります」

「質問してもいいですか？」

「はい。何でしょうか？」

孝和の質問に受付嬢が答える。

「洞窟には何を持ち込んでもいいんですか？」

「はい。個人で持ち込めるサイズであればかまいません。後は常識の範囲内で行動をお願いします、ということでしょうか」

「そうだろう。まあ、バカなものは持ち込むな、ということだ。洞窟が崩れるようなバカなものや攻撃はするなということだ。当然のことだろう。」

「試験はいつ出発になりますか？」

「洞窟自体はギルドの管理ですので、ここから2時間ほどの距離になります。明日の朝一番で出発も可能なのですが、貴方の他には、1名の方がお待ちになっているだけでして。チームの人数があと1名足りませんので、待機していただくことになります。人数さえ足りていれば、その方に連絡して明日の挑戦も可能だったのですが……。申し訳ありません」

「そういうと、受付嬢は深々と頭を下げた。それを見ると孝和は、
「実は私のほかにもう1名冒険者に登録したいものがいまして。そのものと一緒であれば明日出発で試験が受けれるんですよね？」

「ああ、ご一緒の方がいらっしゃったのですか。では、その方にもこちらに来ていただいて登録書類に記入いただきたいのですが。どちらにおられますか？」

受付嬢は孝和の連れを探そうと周りを見渡した。しかし、周りには誰もいないようだ。不思議そうな顔をしている受付嬢にむけて申し訳なさそうに話しかける。きつと驚くだろうなあ。

「驚かないでくださいね？」

「はい？」

孝和は背負っていた袋を床に下ろし、その中から取り出したものを受付の机に載せる。

「キール。悪いが起きろ。冒険者登録しないといけないからな。シヤキつとしろ」

『うーん。ねむいなあ。ますたー、おはよう』

「ああ、おはよう。この人が冒険者の登録してくれる人だ。挨拶しておけよ」

孝和はキールに話しかける。どうやら、待たされている間に眠ってしまったようだ。最初の印象が大切だ。挨拶はそのまま大きなものを決める。きつちりしてもらわないと。

『はい！おねーさんがとうろくのひと？はじめまして、ぼくキールつていいます！』

元気いっぱい、とてもいい挨拶だった。

「……え？」

受付のおねーさんは目の前のことに対応できず、呆然とその場でマネキンのようになってしまった。

受付のおねーさんことカルネさんに孝和が従魔師であること（本当は違うが）、キールはその支配下にあるスライムで危険がないことを説明し、登録用の書面を記入した。プレイスカードは試験に合格した後で、受け渡しになるらしい。

カルネに、キールも一緒に宿泊できる宿と食堂、本屋を紹介してもらい、明日の朝7時に東門の前に集合することを確認してからギルドを出た。（時間は朝6時～夜8時までの間は中央の治安区画の鐘がなるのだそうだ）

孝和は荷物を置いてくるのにまず宿に向かった。キールに食事はどうすると聞くと『ぼく、おみずとおひさまがあればごはんいらないよ？』とのことだった。光合成でもしているんだろうか。あとで確認しておこう。

「ここだな。『陽だまりの草原亭』ってのは」

紹介された宿に到着した。食堂も併設されているので少し遅くはなったが、ここで昼食にしようと思い、孝和は『陽だまりの草原亭』のドアをくぐった。

「いらっしやいませ！お食事ですか？それとも宿泊？」

ドアをくぐると、正面の受付から大きな声が響いた。この店の女将さんだろうか、こちらに気づいて声をかけたようだ。孝和はその受付に近づき、

「両方ともなんですが、まずは宿泊をお願いします。荷物を置いてから食事にしたいものです。あとこいつも一緒に泊まらせてほしいんですが」

そう答えると、孝和はキールをギルドのときと同じように取り出し、受付に置いた。ここでも同じように驚かれるだろうなと思ったが、少し目を開いたと思うと

「あんだ、従魔師なのかい？珍しいねえ。ここ2、3年の間はそんな人見なかったからねえ」

と話した。どうやら、長年の経験で従魔師と関係のあるプロの宿屋、そしてなかなかの人物であるようだ。

「驚かないんですね。さっきのギルドの受付でもものすごい驚かれましたけど」

「それは仕方ないよ。あたしだって従魔師の人なんて何年ぶりだからね。ギルドの受付なら、カルネだろう。あの娘は2年前にあそこに雇われた娘だから、従魔師なんて見たこともないだろう。ま、何事も経験さね。気にすることはないよ」

「はあ、ならいいんですが……」

「なんだい。そんなことじゃ冒険者なんてやってらんないよ！！しつかりしな！！」

バシバシと大声で笑いながら、孝和をたたく。

「ははは。そうですね。じゃあ、部屋を1室お願いします」

「ああ、部屋は二階。登って右の一番奥の部屋だよ。夕食は別料金、朝食はあんまり早い時間でなければ簡単なものを用意できるけど、

「どうする？」

「夕食はお願いします。明日の7時には試験のクエストに出発するので、6時に朝食を作って作ってもらえますか？」

孝和がそういうと女将さんはにんまりと笑い

「わかった。そうしたら、明日の昼食用の弁当も作ってあげるよ。でもさ、あんた本当に冒険者らしくないわ。なんかおかしくなってきたよ」

クスクスと女将さんが笑う。

「そ、そんなに変ですか？」

「まあ、自分じゃ気づかないのかもしれないけど、宿屋の女将なんかに敬語を使うような冒険者なんて、聞いたことないしね」

「普通はもつと碎けてるんですか？」

「まあ、力が有り余るような連中が冒険者なんて無謀な商売してるんだから、自然とそうなつちまうんだろ。でも、あんたはあんただそのまんま自分らしく生きていくのが一番さ」

それもそうか、と孝和が考えていると、

「じゃあ、無駄話はこちらまで。料金は1名につき1泊銀貨1枚。オプシヨンの朝食・夕食付きになるから追加で銅貨30枚になるよ。何泊の予定だい？」

「とりあえず2泊をお願いします。このキールは食事は要らないので、俺だけオプシヨンつきをお願いします。合計で銀貨4枚と銅貨60枚ですね。今から昼食取りたいので上に荷物持っていく間に用意してもらってもいいですか？」

孝和は、皮財布の中から銀貨5枚を女将に渡した。昼食代はおつりから支払うつもりだった。

「ああ、じゃあ荷物もっていきな。これが鍵だ。出かけるときには私を受付のものに渡しておくれ。あたしはタバサっていうんだ。これからよろしくね」

「あ、俺は孝和です。これからよろしくお願いします。ありがとうございます。じゃあ、いこうか。キール」

いままで孝和とタバサの会話に入れず退屈そうにしていたキールは受付からぴよんと床に飛び降り

『うん。にかいにいくよ。ますたーもはやくね』

そういうとぴよんぴよん跳ねながら、二階へ上っていった。それをみて孝和も二階へ上った。

『陽だまりの草原亭』は、はつきりいつてかなり良質の宿ではないかと孝和は思う。通された部屋はベッドが2台置かれ、簡単な書き物のできる小型の机と椅子。鍵のかかる個人用の棚があった。ベッドのシーツは洗い立てのにおいがしたし、上掛けもふかふかであった。

荷物を置いて昼食をとったが、食事もしっかりとボリュームがある肉料理とスープ、黒パンであった。希望すれば、白パンも出すことができるとのことで食事面でもまったく不満はない。はつきりいつて資金が許すなら、ここを常宿としたいなあとも考えはじめていた。キールは自分で言ったとおり水だけでよかったようだが、何も食べないというのもどうかと思ったので何か食べれないかいろいろと食べさせてみた。肉はどうやらお気に召さないらしく、すぐに吐き出してしまった。そこで、スープの野菜や、肉の付け合せのハーブを与えてみたところ、『おいしい！おいしい！』とむしゃむしゃ食べていた。

ここまで聞くと、ただのベジタリアンのようだが、どう考えても元々モンスターだったとは思えない食生活だ。やっぱり、キールは変わっているんだなと思って昼食は腹八分目どころか十二分目くらいまで食べたところで終えることにした。

食事の後に、孝和はいろいろと買出しに行くことにした。キールは『おなかいっぱいだから、ねむたいのー』とのことで部屋でお留守番してもらうことにした。

「まあ、キールには退屈な場所だろうしな」

今回の主目的は実は本屋である。やはり聞いただけではなく、いろいろな手段で情報は集めるべきだろう。この周辺の地図や、風俗文化、宗教、歴史。もしかしたら初心者向けの魔術の入門書なんかもあるかもしれない。今の孝和にとって、もっとも大切なのは情報を身につけることだ。後継の儀式で知識力の向上がきているのだ。これを生かさない手はない。まあ、

「金がないから立ち読みになりそうだけど」

と言う状況なのだ。装備や出発の準備、宿の支払いなど出費ばかりで一気に懐がさびしくなり始めている。まだ、スツカラカンまではいかないが、このペースではそんなに長くは持たない。節約は大切だ。うん。

孝和は、自身の知識欲と明日以降のご飯のため、全力で立ち読みをすることを決めた。

その夜、孝和はベッドの上で数冊の本を横のテーブルに載せ、1冊の本をぱらぱらと読みふけていた。結局孝和の全てをかけた立ち読みは、開始後10分ほどで書店のオヤジに阻止されてしまった。まさか本の角で後頭部に全力の攻撃が来るとは思わなかった。

あまりに驚異的なスピードであったため、孝和の頭頂部にはこぶができている。

「あのオヤジ、あこまで本気でドツいてこなくてもいいのに……」
かなり痛い。ヒリヒリどころかジンジンというレベルである。

「でも、なかなかいい本が手に入った」

本屋のオヤジとの出会いは最悪だったが、探していた本をたずね

ると態度が変わった。どうやら、このオヤジは趣味で本屋を開いているらしい。本人のこだわりなのか、入荷しているものかなりの偏りがあった。その偏りは孝和の望んでいた魔術の入門書から様々な武術の技巧書、モンスター生態研究書にまで及んでいた。

その名も『戦人の学び舎』というその店はまさに孝和の欲した情報宝库であり、オヤジからすれば孝和は自身の趣味の貴重な理解者であった。

それもあり、オヤジは孝和に自身のコレクションの中でわかりやすく且つ、かなりマニアックなものをセレクトしてくれた。そのコレクションは孝和のツボにバッチリはまってしまい、宿に戻ると同時に一心不乱に読みふけてしまった。

おかげでキールは退屈してしまい、自分のベッドの上でまたもやすやすや眠ってしまった。

そういったわけで、次の日の朝、タバサに起こされたときに孝和は、本を握り締めたままベッドから転げ落ちることになってしまったのである。

第8話 試練（前書き）

やっと若い女性キャラの登場です。何か今まで男性とおばさんしか出てこなかったのです…

第8話 試練

彼女の名はアマリリア・クラウ・ウエルローという。愛称はアリアである。透き通った銀髪は光の加減できらきら輝いて見える。それと並ぶほど、肌の色は透き通って白さを際立たせている。だが、病的な白さではなく、それは母方の血筋がもたらしたものである。顔は少々ツリ目ではあるが、美人の部類に入るだろう。意志の強さを感じる瞳は濃い青色である。体型は、猫のようなしなやかさを持ちながら、程よく胸や腰周りに肉がついている。一方、身長自体はさほど高くはなく、せいぜい155CMくらいであった。今ではあまり聞かれないトランジスタ・グラマーと言えはわかりやすいだろうか。そんな彼女、アリアは貴族であった。

家名であるウエルロー家はリグリア王国において伯爵位を叙される名門であった。古くは200年前のグラノイア公国からのパーン王国の独立建国時に、大きな役割を果たしたことにより貴族となった。パーンの北部地域一体を治め、国王からの信任も厚かった。北部には、魔獣が生息する広大な森林地帯と、グラノイア公国と隣接する山間部が存在し、魔獣の討伐や公国軍との小競り合いが絶えることはなかった。

そのせいもあるのだろう、ウエルロー領の軍は精兵であり、その長であるウエルロー家も武門の鏡とまでいわれる人物を次々と排出した。70年前のリグリア侵攻時には、グラノイア公国が救援を騙りパーンに侵攻することを阻止することに努めた。

結果、10年の内乱時には中立を保ち、領民の安全と生活を守ったその姿勢を評価されたウエルロー家は、そのままリグリアでも領地と爵位をそのまま受け継いだ。この配慮には、ウエルロー家の軍事力を、引き続きグラノイア公国と魔獣の脅威の盾とする思惑があ

つたのは想像に難くない。さらには、この地域の領民がウエルロー家に絶大な信頼を持っていたことで、ウエルロー家の爵位の降格による彼らの反発を防ぐ狙いもあった。

そのような武と仁の家に生まれたアリアは、幼少のころから武術の鍛錬に明け暮れた。現伯爵の父に母、二人の兄と、年の離れた妹がいた。

上の兄ラディウス・クラウ・ウエルローは5年前に、第3騎士団長となった。二番目の兄オーラム・クラウ・ウエルローは、その補佐として同時に副団長に昇格し、兄を助けている。

アリアはその二人の兄と共に自身も、ウエルロー領の騎士となることに一片の疑いも持たなかった。実際、数は少ないが女性の騎士は存在するし、第1騎士団長のアレイアは女性だ。他の地域では知らないが、実力主義のウエルローでは強く、気高く、誠実でありさえすればどんな出自でも気にしない風潮がある。2代前の第1騎士団の副団長は剣奴の出自でもあった。

しかし、

「何故なのです！何故、私の騎士団への入団は許されないとおっしゃられるのか！？」

アリアは叫ぶ。ここは伯爵家の書斎である。目の前には机に座った壮年の男性が座っている。よく見るとアリアとよく似ている。「わかってくれ、アリア。私とて、お前の剣の腕は知っている。騎士としての力量は十分だということも」

彼女の父、グラム・クラウ・ウエルロー伯爵は苦々しくそう言った。

アリアは怒りが収まらず、自身の剣の腕はその辺の騎士では相手に

すらならない。今では、隊長クラスの騎士が練習相手となっているというのに！と、続けた。

「では、何故です。私が女であるからですか？そんなことは理由になりません！アデレイアとて女の身でありながら、騎士団長という職を全うしています！！」

「落ち着け、アリア。だが、お前が女だからという理由もまんざら間違いではない。実はな……」

そこからの話はアリアにとって納得すると共に、自身の未来を閉ざす絶望でもあった。簡単に言くと、リグリアの第2王子がアリアを妻に娶りたいという話が持ち上がってきている。そして、現在の聡明なリグリア国王と比べ、お世辞にも第2王子は賢いとはいえない。むしろ、暗愚ともいえる。国王の聡明さを受け継いだ二人の兄と姉と比較されることが多く、幼少からの劣等感が彼を愚かな道へと走らせた。女遊び、賭け事は言うに及ばず、うわさでは禁制の死夢薬にまで手を出しているそつだ。

「しかし、私はそのような暗愚にお前を差し出すつもりはない」

「ですが、父上！私が行かねば後々この地にとって災いの種となりませんか？」

アリアはそついつて父の言葉をさえぎった。それを見るとグラム伯は右手を机の中に入れ、一通の手紙を取り出した。

「これは我が家が懇意にしている戦神の神殿への紹介状だ。このままこの地に騎士として留まるのであれば、あの愚物もいるところちよつかいを出してくるだろう。だが、これはお前が生まれたときに16の誕生日に戦神に仕えることになっていた、という内容のものだ。まあ、便宜を図って書いてもらったものだが、正式な書面として通用する。来月にはお前は16だ。騎士となるために払ったお前の犠牲や努力も知っている。民への愛情もだ。だが、この父の頼みを聞いてくれ。すまん。このとおりだ」

そつ言つとグラム伯は頭を下げた。アリアの前では強い父、領主師であった。そのいずれもアリアにこのように謝ることはなかった。

アリアが頭を下げたこの父に、これ以上の何を言えるだろうか。ふと気づくと両目から涙が流れていた。悲しみでもなく、怒りでもなく、ただ、父のこの行為に深い愛情を感じてのものだった。

それから4年の月日が流れた。戦神ラウドの神殿でアリアは生活を始めた。ラウドの教義は『この世の戦いに尊厳と敬意を払う』というもので、神官となるものには高い戦闘技術が必要とされた。その点でアリアは下地ができていたので、有利であった。日々の生活と鍛錬、戦神ラウドへの祈りを通してアリアは神官として成長した。剣だけではなく、棒術、神官方術を修め、アリアはついに神官として最後の試練に出ることになった。

冒険者として1年の修行に出て世界を学ぶのである。その旅を終えて神殿に戻り、戦神ラウドの神託が下れば晴れて一人前となるのである。

そして、今アリアは旧パール王国の南部の町マドックより冒険者をはじめることとなった。これは神官長がラウドの神託を受け、それに従ったからだ。神官長は、

「ラウドの神託によると、『マドックから全てを始めるべし。始まりを違えればこれからの大いなる糧を逃す』、となっております。何があなたにとつての『大いなる糧』であるかはわかりませんが、このような具体的な神託は初めてです。やはり、従うほうがよいでしょう」

とのことで、不安で仕方ないがこのマドックにアリアは到着したのである。

そして、ギルドに到着したその日に登録申請した。宿で、一緒に試験クエストを受けるメンバーが集まるまで待つことになった。そして、メンバーがそろったので次の日の朝に出発することになった。「なかなか、私はツイテいる。うまくいけば明日には私は冒険者

だ。これも戦神ラウドの導きか……」

「どうやら多少、自信過剰気味ではあるが彼女はやる気だった。そして、夜は更け、朝がやってきた。」

試験クエストに出発する朝になった。アリアは約束の7時に間に合うよう、東門へと歩みを進めた。神官であることを証明する薄い緑のローブに白の胸鎧、右手に背丈ほどの長さの杖を持った姿は旅の神官そのものであるが、腰に刷いた長剣が異彩を放っていた。

顔は冒険者として旅を始めるまでは隠しておかねばならない。神殿の中では問題ないが、外に出るときは隠しておくのが教義であった。荷物自体は日帰りができる深さの洞窟ということで、あまり多くは持つていかないことにした。最低限の持ち物にしたのは、チームを組むほかのメンバーが何を持つてくるかわからないからでもある。あまり多くを持ち込み、いざというときに動けないのでは意味がない。

「でも、いったいどんな人が他のメンバーなのかしら？」

アリア以外のメンバー（孝和とキール）は、昨日の午後にやってきたとのことで、午前中に申請をして宿に帰っていたアリアとは入れ違いになってしまったのだ。

「できれば、あまり私の足を引っ張らないでくれるとありがたいのだけれど……」

自分は戦闘に関しては自信が有る。しかも、こういった洞窟は神殿の修行で何度も訪れたことがあり、それなりに経験を積んでいる。一方、冒険者申請をしたばかりの初心者に何ができるのだろうか。せいぜい、村で一番力があるとか、現実味のない夢見がちな若者であるう。頼むから自分の試験の邪魔だけはしないで欲しい。

「まあ、いざとなれば怪我をしないうちに、途中で帰るように説得するしかないわよね？」

そういうと、アリアはふふつと軽く悪戯っぽい笑みを浮かべた。

アリアが待ち合わせの7時少し前に東門に到着すると、もうすでに他のメンバーの一人は到着している様子だった。竜車の横にいるその男性は剣士のような様子である。腰にある剣をみると、使いやすいうに柄に布が巻かれ、何度も握りを確認したような跡が見て取れた。しかしその布が新しく、手の油や汗で黒ずんでいないのを確認すると、やはり初心者が気立ての良い武器屋で教わったのだろうと判断した。

その傍らに居るのは昨日ギルドで受付をしていた、確かカルネという名前の女性だ。今回の試験クエストは彼女が馬車で連れて行ってくれるのだろうか？

「ああ、アリアさん。こちらです」

カルネは背伸びをして両手をブンブン交差させて自分をアピールしている。場所はわかったし恥ずかしいので止めて欲しい。ちなみにギルドの登録は『アリア』で登録した。ウエルローの名前を使うことなく、自分の実力で冒険者になるという決意の現れである。

「ああ、すまない。時間通りだが、まだもう一人の受験者はきていないのか？」

他のものがもう到着しているのに遅刻とは、まったく初心者はこれだから。と、自身も初心者のアリアは思った。

「いえ、その、実はアリアさんが最後なんです。もう一人(?)はすでに馬車の中にいらっしやいました……」

「？」

カルネが変な場所で疑問系のイントネーションを使ったのを不思議に思いつつも、もう一人がどんな人物なのかを確認するのに馬車に向かう。何故かカルネともう一人の剣士が苦笑いしている。何故だろう？まあ、挨拶すればいいだけだ。

『はじめまして。カルネさんからきてます。おねーさんがアリアさんですか？』

そこには真っ白なスライムがいた。そしてアリアに向かってその丸い体を起用に少し折り曲げ、挨拶してきた。

「な、なんなのよ。これ……」

アリアはおそらくこれまでの人生でもっとも長い呆然とした時間を過ごすことになった。

簡単な挨拶のあと、アリアは今回チームを組む2名と一緒に竜車の中にいた。目的の洞窟までは、カルネが案内してくれることになっている。現地に到着後は、そのまま、チームが帰還するまで外でカルネが待機するということなので、彼女の安全確保の為に馬ではなく、下位の竜種であるランド・ドラゴンに車を引かせているのだ。

アリア自身は今回のこのチームの構成には不安を禁じえない。現に目の前のタカカズと名乗った黒髪の剣士は、こちらをちらちら見ながら初級の魔術入門書を読みふけている。そして、もう1名(?)は、なんとと言ってもモンスターだ。キールと名乗ったこのスライムには邪気は感じられない。確かに従魔師という職業があるということは知っている。だが、しかし！しかしだ！！仮にも神官候補ともあるう者がモンスターと一緒に活動するのはいかなものか。

「はあ〜」

これが戦神ラウドの神託が指し示した始まりなのだろうか。アリアは竜車から外を覗き込み、天高くさらにその向こうにいるという戦神ラウドに自身の今の状況を深く嘆いた。

一方、孝和は目の前のアリアというこの人物の機嫌を損ねたのではないか、と困り果てていた。キールが彼女に挨拶したあと、カルネが双方を簡単に紹介した。そして孝和とキールと共に電車に乗り込んだあとは、孝和たちと対角線上に座り込まれてしまったのだ。はつきり言ってこういつた状況下に置かれてしまうと、孝和には現状を打破する能力がない。ただただ「忍耐」のみである。そして現在、孝和は昨日購入した『魔術師への第一歩』へと意識を向け、試験の洞窟へ到着するまでのこのいたたまれない空気に耐えることを決意したのである。

ちなみに、キールは『アリアさんとおはなししたいんだ』とアリアの隣へ向かおうとしたのを孝和によって阻止されている。『アリアさんはおなか痛いんだ。話しかけないであげたほうがいいぞ』と諭すと、『じゃあ、ぼくがなおしてあげるんだ！』と逆に意気込ませてしまった。その意気込みを説得するのに、孝和はかなりの労力を必要とした。

『はやく、着かないかな……。なんか腹も減ってきたし。……。弁当食べちゃおうかな。でもな、昼飯なくなっちゃったらキツイなあ。』

……。まあいいか。食べちゃおう。うん』

そう思うと孝和の行動は早かった。持込用のカバンからタバサの弁当を取り出し、ふたを開ける。中からはレタスと、濃い目の味付けの魚をパンでサンドしたものが出てきた。このような携帯するタイプの食事は、どんな世界でもそんなに変わらないものなんだなあ、孝和はしみじみと感じた。

『ますたー。ごはんたべるの？』

キールがその様子を見て話しかけてきた。アリアがこちらをあまり見ないようにしているせいで、キールは暇だった。孝和も何やら本を読んでいたので、話しかけづらかったのだ。

『ああ、キールもどうだ？タバサさんからキールに、ってもらったものもあるからさ』

『ほんとう？やっぱりタバサさんはいいひとだね。かえったらおれ

いをいわないと』

アリアに聞こえないように念話で話をしている。昨日キールと宿で話しているときにわかったのだが、声に出して言わなくても、当人同士が話したいことであればこのようにこっそり話すことができるようだった。

まあ、何も言わないスライムに話しかけている大人がいる光景とこののはよく考えるとかなり怪しい。それを考えると、これは本当によかった。

『ほら、これだ。井戸の水にハーブを漬け込んだものだ。帰りの分も考えないといけないから、あんまりたくさん飲むんじゃないぞ』
キールにハーブ水を上からちよろちよろ掛けてやる。その一方でサンドイッチを口に運び、モグモグ食べた。アリアからの視線が痛い。いや、でもやることもないので。

『ますたー。おいしかった。ありがとう。もうじゆうぶんでーす』
『ああ、わかった。多分もう少し時間があるはずだから、どうする？寝ておくか？』

そういうと、キールはびよんと孝和の膝の上に乗った。

『じゃあ。ますたー、ついたらおこしてね。おやすみなさーい』
どうやら、キールは到着まで孝和の膝で寝ていくようだ。それを見て苦笑すると、空になった弁当を竜車に残しておくことにして、空いたところに置いた。代わりの干し肉を取り出しやすいように、カバンの中で調整する。

その出発準備を終えると、孝和はまたも『魔術師への第一歩』を開いてページの上の文字を目で追い始めた。決して顔を隠しているアリアからの、冷たい視線から逃げるためではない。逃げるためではないと孝和は自分に強く言い聞かせた。

竜車がゆっくりとスピードを落とすのに気づいた。どうやらそろ

そろ目的地付近のようだ。つい先ほどまでの草原地帯から、少し草木の少ない荒地に周りの光景が変化していた。

「皆さん。試験の洞窟に着きましたよ。今から試験クエストの説明をしますので、外に出てきてください」

カルネの声が聞こえたのか、キールが孝和の膝からゆっくりと起きた。

「ますたー。これからどうくつにはいるんだね。がんばろうね！」

「ああ、頼りにしてるからな。がんばろうぜ、キール」

「うん！！」

孝和と一緒にキールが出てきたのを確認し、カルネは説明を始めた。すでに外に出ていたエリアはもう準備を始めながらその説明を聞いていた。孝和はそれを見て準備をどうしようかと考えた。ここまで読んできた本は置いていこう。ああ、毛布はどうしようか。中で寒かったら嫌だしなあ。

「……ズさん。タカカズさん。聞いていますか？」

「ああ、すいません。何でしょうか」

「どうやら考え事をして聞き逃したかもしれない。

「まったく。自信も過ぎれば命を落としますよ。もう一度説明します。今度は聞き逃さないでください」

「はい……。ごめんなさい」

シユンとしてしまった孝和を見てカルネは気を取り直す。

「おほん。では、こちらの洞窟の最奥にギルドの用意した石碑があります。簡単に言うとその石碑に刻まれた一文を確認後、帰還していただくのが試験になります。ただ、この洞窟内は最奥まで2時間ほどの長さがあり、モンスターの生息も確認されています。例年、試験に挑んで大怪我をされる方、たまに亡くなる方もいらっしゃいます。危険や自分の実力不足を感じたら、すぐに引き返してください。内部の地図はこちらになります。チームで1枚なのであなたが持たれますか？」

「私が持とう」

アリアが機先を制してそう答える。孝和としては、初めての洞窟である。経験のありそうなこの神官候補に任せるのに不満はない。軽くアリア、カルネに頷く。

「では、皆様ご無事の帰還をお待ちしております」

カルネは深々と頭を下げた。そうして孝和にとっての初めてのクエストは開始された。

第8話 試練（後書き）

次回は洞窟内部での戦闘の予定です。楽しんでいただけるよう、がんばります。

投稿後5分で間違いに気づきました。修正しました。ごめんなさい。

第9話 暗き地の底に白銀の光を（前書き）

先に謝ります。ほかと比べて異様に長いです。誤字脱字はご容赦ください。

第9話 暗き地の底に白銀の光を

「では、出発しましょう。準備はよろしいですか？」

先頭に立ったアリアは、後ろの2名に確認する。この初心者の2名を無事に帰還させることこそ、戦神ラウドの神官としての第一歩である。気合が入らないわけがない。

だが、そんなアリアの内心とは裏腹に孝和はカルネと話し合っていた。少し距離があるため内容まではわからない。しかし、アリアの呼びかけに反応し、小走りでこちらまで駆け寄ってきた。

「すみません。ちょっと確認しておきたいことがあったもので……。では、行きましょうか」

どこか申し訳なさそうな態度であったので、アリアはその行動に注意をするのを止めた。これから一緒に洞窟に入ろうというのに、いきなり仲違いすることもないだろう。

「じゃあ、よろしく願います。タカカズ、キール」

「こちらこそ。何にもわからない初心者ですけど迷惑かけないようにがんばります」

『ぼくもがんばるから、アリアさんも、けがしないように、きをつけていこうね!』

そういった三者三様の挨拶がすみ、いよいよ洞窟へと侵入するこ
とになった。

アリアはまだ洞窟の入り口が見える位置で立ち止まった。そして、腰に挿した約80cmの金属性の棒を取り出した。竜車の中でそこ

にあつたはずの長剣は今はない。この洞窟の中で、杖、長剣、さらに今もっている「これ」を全部使うというのは、なかなか不便であるうとの考えからだ。

「あの、それなんですか？」

「松明ですよ。あなた方は何か持ってきていないんですか？」

洞窟に入るのだ。照明器具のひとつくらい持ってきてきているだろう。

「ああ、カンテラです。とりあえずはこれしかないんですけど」

…… 本当の初心者だ。やはり私が説明すべきだろう。

「いいですか。タカカズ、キール」

「何ですか？」 『なーに、アリアさん？』

同時に二人が答える。

「カンテラなどの照明器具は、洞窟でのクエストには非常に不向きです。何故か分かりますか？」

「いえ、お恥ずかしいですが全く……」

「そうですね……。では、このような洞窟の中で戦闘状態になった場合、そのカンテラをどうしますか？」

「それは、地面において……。あああ！！そうか！！！！」

孝和はそのことに気づいて大声を上げる。

「どうやら気付いたようですね。そう、カンテラの場合には敵と遭遇したときに片手がふさがった状態になってしまうのです。投げ捨てたときに壊れてしまうことも考えられます。」

一方、松明の場合は、そのまま敵を殴れますから。火のついた鈍器ならば、急な襲撃の際にも十分戦闘にも耐えられます。作りも単純ですから火も消えにくいですしね」

「ああ、そうだ、そうだ。思いつかなかったなあ」 『アリアさんすごい！！ものしりなんだあ』

孝和とキールの尊敬のまなざしに耐えられなくなった。こそばゆい。アリアに知らず知らずのうちに頬に赤みが差している。

「で、では行きましょう。私が先頭で行きますので。二人は後からついて来てください」

照れ隠しにちょっと強い言い方になった。松明にまず火をつけなくては。

「すみません。キールにちょっと試してもらいことがあるんです。もう少しだけ待ってください」

「何ですか？」

アリアが尋ねる。こんな入り口にいつまでも居たくは無いのだけれど。

「キール、頼む」

「はい。やってみます。きたいしててね」

そんな会話がなされると、キールが薄く輝いた。

『灯火ライト！！』

「え！？嘘………」

キールの唱えた灯火ライトにより、周りの壁面に光があふれた。

「よし！やったな、キール」

「えへへへ。すごい？すごい？」

「ああ、すごいぞ」

そういうとキールを思い切りなでてやる。キツチりほめてやらねば。当然だ。

「な、何で、キールが光術を使えるの？確かに少し不思議なスライムだけど、こんなことできるわけ無いじゃない！！」

アリアが目の前にあるこの状況を認めようとしない。だけど、

「出来てしまってるんで、仕方ないじゃないですか。一応、これで照明が消える心配も無くなったわけですし」

『そうだよ？アリアさんなんでおこってるの〜？』

実はこの灯火ライトは、先ほど孝和の読んでいた『魔術師への第一歩』の中の光術のページに書かれていた。回復系の上級術が使えるキールならば使えるだろうと、今朝アリアを待っている間に教え込んでみたのだ。初心者用の術であるから、簡単に習得できたようである。ほかにも攻撃系の術も教えてある。灯火ライトは解除するまでは半日近く光り続けるらしいので、休憩を含めても帰還するまでは持つだろう。

持ってきたカンテラは念のためであった。

「い、いえ。申し訳ないです。取り乱しました。ありがとうございます、キール。感謝します」

『じゃあ、じゃあ。アリアさんもなでて。なでて』

「いいんですか？」

『うん！おねがいます！！』

恐る恐るキールに触れる。するとプルプルとした感触が心地よい。アリアは最初の警戒を忘れたように、手のひら全体でキールをなでなでしてあげた。

キールはその感触がくすぐったいのか、その身を擦じらせている。

「あの、出発しませんか？まだ入り口ですから」

アリアによるキールのなでなでは孝和が静止するまで続けられた。

結局、洞窟の中に進む順番はアリア・キール・孝和の順番になった。キールが真ん中なのは灯火ライトの術の効果が術者を中心に広がるからで、アリアが先頭なのは彼女の意見を尊重したからである。孝和もキールも、その順番について特に不満は無かった。

さすがに、緊張感を持って進まねばならぬだろうと思ひ、全員が黙ったままで進んだ。

洞窟内は、初心者用の簡単なものであるため、ほぼ最奥部までは一直線である。何箇所か二股になる場所があるが、その場所についてもアリアの持つ地図で確認して進んでいく。どうやら、不正解の道の先は深い穴が開いていたり、行き止まりであったりするらしい。

『ねえ。アリアさん、ますたー』

大体1時間ほど洞窟を進んだところで、キールが二人に呼びかけた。

「ん？どうした」

「どうしました。キール？」

足を止めて、キールの返答を待つ。ちょうど道がカーブに差し掛かるところで、地図によればこの先にはこの洞窟の中でもっとも大きな空間が広がっているはずだ。

『んとね。んとね。なんかね。このさきにへんなかんじがするんだ。なんていうか“ぐぐぐ”てからだが、おさえつけられそうなかんじなんだ』

それを聞いて孝和は身構えた。

「キール、お前ほんとにすごい。ここから帰ったらタバサさんに山盛りのハーブと野菜のサラダ用意してもらおうから。約束だ」

『え。ほんとう！？ありがとう、ますたー』

「ち、ちよつと。確かにカンも大切だけど、孝和はそこまでキールを信じるの？一応危険かもしれないから用意しますけど……」

孝和のキールに対する反応と違い、アリアは念のため戦闘準備をしている。

一方の孝和はもう腰から剣を抜いて握りの確認と、軽い屈伸運動まで始めている。

「ああ、俺はキールを信じます。洞窟内にモンスターの生息は確認されているんですから、キールがそれを感じ取ったとしてもおかしくは無いでしょう？」

ただの人間よりは、モンスターのほうが知覚能力が優れているのは広く知られている。それを考えると今回の判断もさほど間違いともいえないだろう。

「それもそうですね。では物陰から様子を見て、何とかなりそうなら一気にけりをつけましょう。いいですね？」

孝和とキールがうなづく。キールのほうはその丸い体が少し傾いただけのようにも見えたが。

「どうやら、ゴーストが1体に、ヘビーワームが2体のようですね」
「はあ、では1人1匹の形で当たりましょうか」

アリアがこっそりと通路の脇から中を覗き込んだ結果をもとに、
孝和はそう提案した。

「私はゴーストの相手をします。タカカズとキールはヘビーワームの方をお願いします」

「質問があるんですが」

「何ですか？」

孝和は“ゴースト”と聞いてアリアに疑問をぶつけてみた。

「ゴーストって剣とかで切れるんですか？所謂、霊なんでしょう？」

「ええ、確かに霊体タイプのモンスターには通常の攻撃は効果がありません。攻撃術、気功術を載せた攻撃、魔力が込められた武器、これらであれば撃破は可能です。まあ、今回は私がいいますから大丈夫ですよ」

「アリアさんはどれか使えるんですか？」

「私は神官ですから。これがあります」

そういうと右手に握った杖を見せた。杖の柄頭には銀色に輝く彫金された金属がつけられている。

「神官候補のたびに出る者に与えられるものですが、杖の先の金属は魔法金属のミスリルです。これに気功を乗せて打撃を与えれば倒せるでしょう」

孝和はうなずく。それを見てアリアもうなずいた。

「では、一気に前に出ましょう。うまくいけば奇襲で勝負をつけられるでしょう」

『うん。みんな。けがしないでね。きをつけようね』

キールの言葉を聞くと、全員が一斉に走り出す。

「行きます！！！」

アリアの小さく鋭い掛け声が先頭の口火を切った。

最初に気がついたのは3匹のモンスターのうち最も通路に近いヘビームであった。体長は約2m、頭に当たる部分から全身に灰色の甲殻に覆われ、頭部にはびっしりと牙が生えていた。間違いない、地球では見られないモンスターである。分かりやすく言うと、牙の生えた巨大な灰色ダンゴムシにしか見えない。それは、3人の姿を確認すると、警戒音を発した。

「K W E E E E E A A ! !」

甲高く、耳障りな音が周囲に響く。どうやら奇襲は失敗のようだ。残りの2匹もこちらに気づいて戦闘の準備に入ったようだ。アリアはもつとも奥にいるゴーストに当たるとはため一気に2匹のヘビームを避けて、全力で走り抜ける。キールはそれを援護するように2匹目のヘビームに対する位置に陣取った。

「つらあああつ!!!」

孝和はそれを見ながら、駆け込んだままの勢いを持って、ヘビームへ剣を振り下ろす。その勢いはかなりのものであった。しかし、倒したと思った相手の甲殻は想像以上に固く、ガキンという音と共に跳ね返されてしまった。

「えええ？マジかよ。こんなに硬いのか」

孝和は相手のあまりの固さに驚嘆した。確かに孝和の攻撃はヘビームの甲殻に傷をつけている。しかしそれは、本体までは届いていない。剣の当たった感じからすると、生物というよりは、金属と植物の中間のような感触だった。

「なら、これでどうだ!!!」

孝和はその硬さから、剣での攻撃を斬撃から刺突に変更した。傷は付いたのだ。ということは、力を一点に集中しさえすれば、その甲殻を貫くことも可能であろう。

「キール!!!そっちは大丈夫か?」

「うん!だいじょうぶ!ますたーもがんばって!」

今回は、キールのサポートは必要ないだろう。『魔術師への第一

歩』の中の光術ページには攻撃術の光輪もあつた。ヘビーワームの攻撃は、体当たりと口から吐き出す腐食性の酸であると、ここに入る前にカルネに確認した。この洞窟内にいるモンスターの情報はすべて確認している。ゴーストに関しては、情報が無かったが、幽霊なんて人が死んでいる場所ならどこでもいるだろう。

そんなヘビーワームの情報は二人に移動中に教えてある。キールは情報を参考に、攻撃が届かないところから遠距離光術の光輪を当てている。孝和の剣での攻撃は効果が薄かったが、キールの光輪はかなりの効果を發揮しているようで、ヘビーワームの体からは、なにか紫色の液体がところどころ噴出し始めている。この調子なら、全く問題は無いだろう。

つまり、人の心配するくらいなら自分のほうを心配したほうがよいようだ。集中だ。集中。

先ほどの奇襲により、背中の中殻に傷をつけることができた。その傷に全力での刺突を繰り返せればよい。だが、対象はずっと止まっているというわけではない。現に、先ほどの攻撃でどうやら相手も本気でこちらに対応するつもりようだ。1箇所には留まらず、見た目に反した機敏な動きでこちらと一定距離を保っている。

孝和はそれを相手側の攻撃の意思であると同時に、怯えでもあると受け取った。まずは、先ほどとは違い、剣を自らの背骨に垂直になるような気持ちで構えた。ジリジリと距離を詰めつつ、前に出した右足の力を抜く。それと同時に左足に力を込める。

その構えに反応してヘビーワームは口腔内から、液状の酸を孝和めがけて吐き出してきた。力を入れた左足から一気に力を出し切る。吐き出される酸からほんの少しだけ離れたギリギリの位置に踏み出す。その一歩でヘビーワームの中殻の傷が真正面に見える位置に移動する。同時に左足にこめた力を重心移動で右足に移動する。それを感じ取ったヘビーワームは仰け反るように後方へと身を翻した。

それは隙だ。自分に傷をつけた相手に対する本能的な恐怖。もし、孝和に対し恐怖を感じていないなら、距離を詰め、その中殻による

体当たりを選択しただろう。そうではなく、酸を吐きかけ距離をとる。この恐怖からの隙を見逃す手はない。

重心移動で右足に渡した力を持ってさらに前に出る。今度はヘビームが体勢を崩している。さらには孝和の飛び出した位置は、最初の移動した時よりもさらにヘビームに近い。つまり、

「これなら、イケんだろ！！セイツ！！！」

渾身の力を込め、重心移動、移動の際に生じた遠心力、孝和自身の体のバネの全てを利用し最高の速度で且つ最高のタイミングでだ。その攻撃は見事に甲殻を貫いた。

「GYAAAAUUUU!!!」

ヘビームは断末魔の悲鳴を上げる。孝和は刺し貫いた箇所から、一気に上に向かって剣を持ち上げる。内部の組織はズタズタだろう。

ビクンビクンという気持ちの悪い動きをして、ヘビームはその動きを止めた。

「よし、キール。お前はどうか？」

自分と戦っていたヘビームの死を確認して、キールが戦っていたもう一匹のヘビームはどうなったかと顔をそちらに向ける。そうすると、こちらの方もどうやら勝負がついたようだ。

『あ、ますたー。こっちはだいじょうぶだよ。それよりアリアさんのほうにいかないよ』

キールの相手であったヘビームは、あまり見れたものではない状態になっていた。ブレイズ・リング光輪のダメージで甲殻にはヒビが入り、あちこちから紫の液体が出てすでに息絶えていた。スプラッターな惨状である。

「ああ、援護に行くぞ」

そういうと、キールと一緒に駆け出した。どうやら、奥ではまだゴーストとアリアの戦闘は続いているようだ。

アリアはゴーストの目の前に躍り出た。孝和とキールがヘビークラスをひきつけてくれている間に何とかこのゴーストを片付けねばならない。

「予想はしてたけど、どうやら兵^{ホーン}クラスのゴーストのようだわ。これじゃあ、会話は無理ね」

霊体のモンスターはその霊子の総量によって、強さが変わる。総量が大きければ大きいほど強い。さらに言えば、霊子の総量が大きいと意思を持ち、その輪郭もしつかりとしたものに変わる。

先ほど出た兵^{ホーン}というのは、霊体型モンスターの中では最下級に属する。このクラスの霊体型モンスターは、ほとんど理性はない。自分の死を受け入れられないために狂ってしまうのだ。元々は人や動物、モンスターの成れの果てであるうが、原型は全くわからないほど虚ろである。

「では、行きましょう。あなたの居る場所はここではないですから。戦神ラウドの名の下に、戦の中で散り逝きなさい。彼の神はあなたを迎え入れてくれます」

そういうと、その言葉に反応したのかわからないが、目の前のゴーストがこちらに向けて敵意を放つ

『U W O O O O U W O ! ! ! ! ? 』

その叫び声は、アリアに向けて吹き荒れた。霊体型モンスターの叫びは精神に対し、強いダメージを与える。大まかに言っていると混乱、狂乱、恐慌を引き起こす。さらに強力な上位の霊体型はその言葉に呪いを載せて放たれる。

「戦神ラウドよ。我に戦人の加護を与えたまえ」

アリアは戦神ラウドの加護を願う。神官としてのアリアはかなり有望である。戦士としての実力が戦神ラウドにとっては好ましいのであるう。それもあり、ラウドからの加護はかなりのレベルの精神攻撃を無効とした。

杖を両手で握り締め、自身の中の気を高める。そしてそれを体内

から両腕に移し変える。これが気功術である。自身の生命エネルギーに当たる気を増幅することで利用できる戦闘術であり、死の属性にあるゴーストにとつては天敵といえる。

「さあ、覚悟なさい！」

杖の先のミスリルが淡く光る。そしてアリアはゴーストに向かい、杖を横に一閃した。その攻撃は本来、物理的な攻撃でダメージを受けるはずのないゴーストに触れた瞬間、カン、という乾いた木をたたいたような音を立ててゴーストの霊体を吹き飛ばした。

「HYJYAAAAA!!」

ゴーストはその攻撃に対し怒りを覚えたようだ。先ほどよりも強い叫びをアリアに叩き付ける。その攻撃にアリアは怯む。戦神の加護はいまだアリアを包んでいるが、長引けば危ないかもしれない。

さらには、ゴーストは自身の霊子を固め、アリアにぶつけてきた。殺意を持ったその攻撃はアリアの構えた杖によって受け止められた。魔力の込められた霊子は鈍器と変わらない。かなりの衝撃を受け止めたアリアはそれでも平然としている。

本能で動くゴーストは、アリアの様子を見て少し距離を開けた。アリアもどのように攻めようかと、一旦距離を置く。その際に通路の付近にいる孝和とキールの様子を確認する。どうやら、そちらの勝負はついたようだ。こちらに向かって駆け出してくる様子が見える。

「では、私もやって見せないかね」

二人が自分の相手を片付けたのを見て、腹が座った。よし。

いきなり、ゴーストの目の前まで一足飛びで距離を詰める。急なアリアの行動にゴーストは霧状に見える自分の霊子を固め、横に振り回す。タイミングは直撃のコースだったが、アリアは当たる寸前に体を少しだけ沈め、ブレイキをかける。そのブレイキの勢いを利用し、全ての気を杖の先端に集中した攻撃を仕掛ける。

「セイツ！」

短く息を吐き出し、ゴーストに杖の先端をぶつける。さらには接

触の瞬間にその気功術のエネルギーを一気に放出する。

気功術は身体の強化と、もうひとつ、纏ったエネルギーを炸裂させて相手にダメージを与えることができる。身体の強化とは違い、エネルギーの放出は気の消費量が大きい。

「どう！これで！」

アリアの攻撃を受け、ゴーストはその存在を保てなくなっていった。だんだんと霊子が希薄になっていく。どうやら、倒したようだ。この哀れなゴーストにアリアは戦神ラウドの導きがあらんことを祈った。

ちょうど孝和とキールがその場に駆けつけた。アリアは振り返り、二人に向かって微笑みかけた。

「大丈夫でしたか、タカカ！」

「危ない！後ろだ！」

「え？」

孝和が悲鳴に近い声を上げる。とっさに振り返ったアリアは、その存在を失いつつも、最後の恨みをぶつけようとするゴーストの一撃を目の前にした。

その瞬間、とっさに両手を顔の前にかざしアリアは目を閉じた。マズイ！これは間に合わない！

目の前のギリギリで爆音が響いた。あまりの衝撃でアリアはその場に尻餅をついてしまった。

『だいじょうぶだった？アリアさん。けがはない？』

キールがアリアへ話しかける。恐る恐る目を開けると、ゴーストは全くそこに存在していなかった。

「どういうこと？確かにいま、ここにゴーストが」

「よかった。アリアさん。間に合ったみたいだね」

焦った様子で、孝和が膝をついてアリアの目線に合わせる。アリアは尻餅をついたまま孝和の肩を掴み揺さぶる。

「い、今、何が起こったの？」

「キールにお礼を言うてください。危険と判断して、とっさに光輪

プレイズ・リング

の術でゴーストを攻撃したんですよ。まあ、反動はあったようですが大きな怪我はなさそうですね」

アリアに手を貸して立たせて、その周囲をぐるりと見渡す。

「キ、キール。あなたが？」

「えへへ。まにあつてよかつた」[『]

^{ライト}
ブレイズ・リング

アリアは呆然とした。初級の灯火ライトだけでなく、光輪まで使えるとは。術者としてはそこの新人など足元にも及ばないだろう。戦闘中に術式の展開ができる時点でかなりの熟練が必要になるはずだ。

「ありがとう。キール」

「んにゅ〜。あの、ちよつとくるしいんだけど。アリアさ〜ん？」[『]

本心からの感謝を全力でキールに伝える。キールの丸いからだがアリアの胸鎧と腕の間でつぶれる。さらに、その手でキールの体をなでなでしてその感触を堪能する。

「ますたー。たすけて〜」[『]

キールからの悲鳴が孝和に届く。少し苦笑しながらキールを、アリアの抱きしめ攻撃から脱出させてあげた。

「で、では。先に進みましょう」

顔を隠すベールの向こうは見えないのだが、アリアの頬が赤くなっているのはなんとなくわかる。孝和もキールもそれには気づいていたが、あえて気づかない振りをした。所謂、武士の情けという奴だ。

この場所で倒したヘビーワームの甲殻は、ギルドでそこそこの値段で取引されているそうなので、アリアに習って孝和が解体して通路に纏めて置いてある。行動の邪魔になるので帰り道にピックアップしていくことにした。キールのほうは細かなヒビがあり使えなさそうだったが、孝和のほうは傷のない部分は引き取ってもらえそうだとのことだった。

しかし、孝和の倒し方は本来のヘビーワームの倒し方ではなかったようである。本当はヘビーワームの後方に廻り込み、甲殻と甲殻の間を狙って剣先を差し込むのが簡単な倒し方なのだそうである。アリアが言うには

「こんな倒し方出来るような人、始めて見ました」と、言われてしまった。

普通の剣では甲殻の硬さに負けて折れてしまうのだそうだ。アリアは孝和の魔法剣を見て、その業物にとっても驚いてた。どうやらそれもあり、アリアの孝和とキールを見る目は出発前とは違うものになっていた。

「タカカズはどこで武術を収めたのですか？」とか「キール、私と一緒に人々を救うたびに出ませんか？」などである。

ヘビーワームの解体中にそんな話をされたので、孝和としてはのりくりらりと返答をばぐらかした。キールは「ますたーといっしょじゃなきゃ、ヤダ！」と答えたので、スカウトは孝和に集中している。

アリアは「絶対にこの二人のことを逃すまい」と固く決意していた。

冒険に関しては素人同然ではあるが、ヘビーワームの甲殻を貫く剣技を持つ従魔師、純粋で可愛らしくさらにはベテランクラスの術の行使が可能であるスライム。これを逃しては、戦神ラウドの神官としては失格であろう。2名ともその心根は善人であり、しかも若い。これからの成長と経験があれば歴史に名を残す冒険者となるだろう。

戦神ラウドの神託と、この役目に着くことの出来た我が身の幸運に深く感謝した。行きの馬車の中での恨み節などもうすっかり忘れてしまった。

孝和はそういったスカウトを意図的に無視しながら、残りの行程を進んでいった。評価してくれるのは嬉しいが、孝和自身は生活できるだけのお金が稼げればそれでいいと考えていた。チラチラと後方の確認と、同時に向けられるアリアの視線は熱を帯び、とても居心地が悪い。若い女性にこういった視線を向けられる経験のなかった孝和は、どうしていいかわからなかった。

『なあ。キール』

『?どうしたの?ますたー』

孝和はアリアにわからないようにこつそりとキールに念話で話しかけた。

『いや。アリアさんのことなんだけどな。このクエストが終わったら、もしかしたら俺たちをスカウトするんじゃないかと思ったんだ。キールはどう思う?』

『ぼくはアリアさん、すぎだよ?ぎゅーってだきめられるのは、もうすこしやさしいといいなあっておもうけど。いいにおいするし、やさしいし。ますたーはアリアさん、きらいなの?』

『そういうわけじゃないんだけどな。アリアさんと一緒にになると、自然と戦闘も増えるし、ずっと旅に出てなくちゃいけないらしい。

それは、ちよつと……』

『ふーん。ぼくはどっちでもいいよ!ますたーといっしょなら』

『……キール。お前って、お前って』
『?』

孝和はキールのあまりのけなげさに深い感動と愛情を覚えた。よし、帰ったらサラダの野菜とハーブには金に糸目はつけないぞ、と孝和は深く深く心に決めたのである。

そんなアリアと孝和の決意がなされた場所からさらに1時間ほど

が経過した場所にたどり着いた。ここまでの間に肉食のジャイアントバットに襲われたが、キールの光輪ブレイズ・リングを受けると、そのまま退散していった。襲撃はその1回だけで、地図によるともうそろそろ最奥部にたどり着く。そんな時にまたしても、キールが気づいた。

「ますたー！アリアさん！このさき、なにかいる！！！」

「何だ。キール、さつきと同じ感じなのか？」

孝和は剣を抜き放ちキールに尋ねる。アリアもすでに戦闘に入る準備は万全だ。

『うっん。さつきより、すごくつよいかんじがする。“ぐぐぐ”じゃなくて“ぐぎぎ”ていうかんじなんだ。たぶん、すごいのがいるとおもっ』

キールの感じ方からすると、この先の最奥部には“すごい”がいる。それはかなりマズイのではないだろうか。ここは初心者ギルド試験の洞窟のはずだ。何故そんなのがいるのだろう。

「さつきと同じようにまた、物陰から覗いて見ましょう」

アリアのその提案に孝和とキールは賛成した。

最奥部を覗き込むとアリアは孝和とキールに報告した。

「ここからでは一番奥までは見えません。ですが、どうやらボーンソルジャーが2体ほどいるようです。装備からしてこの洞窟で命を落とした冒険者のようです。ギルドで確認した内容では、この2年の間には死者はいないそうです。ですから、あの2体は別の目的でこの洞窟に来たのでしょうか」

「この洞窟に？何のためですかね。ギルドの試験に使われるだけの洞窟に来るなんて」

孝和の疑問はもつともだ。しかし、ここ誰もそれに答えることは出来ない。

今はキールの灯火ライトを限りなく小さく絞ってもらっている。そのた

め、ポーンソルジャーが2体確認できただけでも儲けものだろう。
「ですが、先ほどのゴーストはこの先の“すごい”に引かれてきたのでしよう。この周辺の安全のためにもその“すごい”は倒しておくべきでしょう。おそらくは霊体のモンスターでしょうから私が相手をお願いします」

孝和はうなずく。この周辺には人の住む場所はないだろうが、このまま放置すれば、さらに霊体のモンスターが集まって対処出来なくなるだろう。大事になる前に処理しておくことは大切だ。

「じゃあ、俺がポーンソルジャー2体を引き受けます。人の形しているなら、多分何とかなるでしょうから」

「では、私はキールと一緒に一番奥まで進みます。ポーンソルジャーを倒したら、援護に来てください。彼らは頭蓋骨を砕けば倒すことが出来ます。痛みを感じないので傷をつけても向かってきますので注意してください」

「はい。アドバイスありがとうございます。キール、俺の代わりにアリアさんを頼む。任せたぞ」

『うん！いっしょうけんめいがんばる！！』

3名は最奥部に飛び込む準備をした。孝和が、灯火ライトを解除した状態で身を隠しながらポーンソルジャーに近づき、その目前になったらキールを抱えてアリアが最奥部に走りこむ。それにポーンソルジャーが気づいたら、灯火ライトを部屋全体に広がるように唱え、孝和が奇襲を行う。計画通りに行くことを願い孝和は匍匐ハイパー全身でポーンソルジャーに向け前進を開始した。

計画通り孝和はポーンソルジャーの目の前の岩陰に身を隠した。すでに剣は右手に握り締められている。あとは、アリアのタイミングだ。2体のポーンソルジャーは、まっすぐ何も収まってない頭蓋骨の目で見つめている。この位置では奇襲で仕留められるのは1体だ

けである。もう1体とは真正面からのタイムマン勝負となるだろう。

そう考えていると前方の暗闇に軽い駆け足が聞こえた。それに気づき、2体のボーンソルジャーはそちらを向いた。まだ、早い。孝和は奇襲のタイミングを待つ。そつと物音が立たないように腰を上げ、ボーンソルジャーに剣を振り上げる。

急に部屋全体に光があふれた。周囲の変化に一瞬身構えたボーンソルジャーの1体の頭から股間までを一気に切り落とす。そのボーンソルジャーはなにが起こったかわからないまま、地面に骨の塊となって転がった。鎧を着けていたが、そこまで上物ではなかったよ、うで、真つ二つにすることが出来た。

そのまま孝和は2体目のボーンソルジャーに向かって、踏み込むと同時に剣を横に振りぬいた。しかし、その攻撃は一瞬の戸惑いから立ち直ったボーンソルジャーの頭部には届かなかった。左側の腕を切り落とすにとどまった攻撃は、ボーンソルジャーの注意を孝和に集中させることに成功した。これでアリアとキールは最奥部の“すごい”に集中することが出来る。孝和が今考えることは、このボーンソルジャーを倒すことだ。

「悪いけど、二人の援護に行かないといけないんだ。死んでるんだからおとなしく寝ててくれよ」

そういうと、孝和は死角になった左側に攻撃を集中する。バランスを崩したのかボーンソルジャーの動きは鈍い。頭部への攻撃は何かか右手の剣でかわしているが、孝和の攻撃はボーンソルジャーへの傷を増やしていく。

『駄目だな。どれだけ斬りつけても引こうとしないか。やっぱり頭を砕くしかないか』

ボーンソルジャーと切り結びながら力で押し込んでいく。腕一本と両腕では力が違う。相手の剣は鋭くなかなかの業物のように見えるが、こちらにも業物の魔法剣だ。あとは馬力の勝負。体重をかけ一気に押し込んだ。ボーンソルジャーはそれに耐え切れず地面に転がった。その瞬間、孝和はボーンソルジャーの右腕を踏みつけ、剣を

振るえないようにする。

「じゃあ、これで最後だ。ごめんな。ゆっくり眠ってくれ」

孝和はこのボーンソルジャーに南無阿弥陀仏と唱え、剣を頭部に振り下ろした。この世界の宗教とは違っだろうが、このボーンソルジャーがどうぞ成仏できますように。

頭部を砕いた2体に手をあわせてから、2体目のボーンソルジャーの剣を左手に掴み、立ち上がる。さあ、2人の援護に向かわなければ。

そう孝和が思った瞬間、絹を裂くような悲鳴が奥から聞こえた。

孝和は先ほどまでの戦闘を頭から追い出し、奥に向けて駆け出した。

孝和が2匹目のボーンソルジャーと戦闘しているころ、アリアはキールとともに、この洞窟の最奥部にたどり着いていた。

最奥部には土を盛り上げた場所があり、おそらくクエストの課題である石碑があるのだろう。なぜ“だろう”なのかと言うと、石碑があるであろうところに人が寄りかかって倒れている。その人物は真っ黒なローブを羽織り、崩れるようにして倒れている。

「キール、ここで私の援護をお願い。危険だと判断したらすぐに攻撃して欲しいの。いい？」

「うん。きをつけて。どこかはわからないけどさっきよりやなかんじがする」

どうやらキールの口調からすると危険はあの倒れた人物からは感じないようだ。アリアはジリジリと石碑に向かって進む。両手でしっかりと杖を掴む。すでに戦神ラウドへの加護は付加済みだ。さらに、いつ襲撃されてもいように杖は気功術で淡く輝いている。

周囲への警戒を最大限にしたまま漆黒のローブの人物に近づく。

目の前にたどり着くと杖でそのローブに包まれた顔をむき出しにする。

予想はしていたが、やはりすでに死亡していた。その遺体はミイラと化していた。そこにアリアは疑問を感じた。先ほど襲われたジヤイアントバットは肉食である。こんな場所で息絶えれば、その身は啄ばまれ、骨だけになるのが普通であろう。たとえば先ほどのポーンソルジャーの様に、である。

疑問を感じ、その人物を観察すると、黒のローブで遠目にはわからなかったが、黒の装丁の本を両手で抱え込んでいた。どうやら大切なものだったようだ。アリアはその本に手を伸ばす。その瞬間、
「アリアさん！うえ！！！」

キールに呼びかけられなければ避けられなかっただろう。さらに避けられたのは偶然に近い。避けられた最大の理由は、キールが呼びかけるとともに上からの攻撃に光輪を躊躇なくぶつけたからだ。

転がるように石碑の前から逃げる。真上からの攻撃に明確な殺意を感じる。

「ありがとう。キール。危なくなったらすぐに逃げなさい。これは不味過ぎるわ」

キールに感謝しつつも、目の前の存在から目を放せない。これは

……

「これは、騎士クラス！？いえ、貴族クラスですって！！？何でこんなところにこんな上位モンスターが！？」

絶望感がアリアの心に広がる。霊体型モンスターは兵、騎士、貴族に分かれる。騎士クラスのモンスターまでは個人の力量とチームワークで倒すことが出来る。アリア自身も騎士クラスには何度か神殿の神官と共に挑んだ。神殿にはそういった依頼も来る。人々に害をなすモンスターの討伐も戦神ラウドの教義のひとつとされていた。しかし、貴族クラスに関してはこれに該当しない。なぜならば、

討伐隊に犠牲が出るからだ。間違いなく。絶対に。自身の霊子のみで物質化できるほどの貴族クラスには国の騎士団と、冒険者ギルド、神殿のトップクラスの中から選抜したメンバーで挑み、それでもさらに犠牲を覚悟する必要がある。それほどまでに貴族クラスは強い。

その強さは世界最高クラスの魔術師、または戦士と考えればいい。しかも、死者であるため生半可な攻撃では滅することはかなわない。この状況では、逃げるしか策はない。どんなにみっともなくてもいい。逃げ切つて、ギルドに連絡するのだ。そして、チームを組みこの化け物に挑む。それまでにどれほどの犠牲がでるだろうか。考えるだけでぞつとする。

『我の前に立つのはラウドの使徒か。なるほど、そこそこは楽しめそうだ』

その貴族クラス、ソウル・オブ・シャドウはアリアに話しかけた。その姿は先ほどの兵クラスとは違い、しっかりとした輪郭を持っている。それからアリアは判断した。書物の中でだけではあるがアリアはその存在を知っていた。

ソウル・オブ・シャドウ、その容貌は骸骨である、しかしその上に禍々しく金色に輝く鎧と漆黒の剣を持つ。その剣術は一流をさらに超える。唯一の弱点は術を使えないということだが、そんなことは関係ない。振るう剣には呪いと闇がこびりつく。普通の剣で打ち合うだけでその身は蝕まれる。彼に殺されたものは、その魂をむさぼられ、その死体は彼を守護する奴隷となる。

この目の前の化け物についての逸話は伝説級だ。倒せれば英雄だが、挑むのは狂人か愚者とされる。戦えば、『死』以外には何も無い。

「見逃していただくわけには参りませんか？ソウル・オブ・シャドウ？」

何とか妥協点を見つけれないものだろうか。逃げるにしてもチヤンスを待たねばならない。

『そうつれなくするな。ラウドの使徒よ。我は今、久方ぶりの現世を楽しみたいのだ。それには贄がいる。汝のような若く美しいものを僕としてそばに置くのも一興であろう？これからは、血と慟哭、恐怖がこの大地を覆う。それを我が側で眺めるがよい。まずはこの近くの町を滅ぼし、我が同胞となそう。もし、それを望まぬなら…』

…』

ドンという音と共に、アリアの足元に剣閃が翻る。彼女のつま先のほんの少しだけ前で地面が裂けた。

『汝の魂を賭けよ。その全てを燃やしつくし、ラウドに祈るがいい。彼の者はそれこそが尊いと汝に教えたのだらう？前回の宴は素晴らしいものだった。ラウドの使徒はその身を盾としてあの男の前に立った。我が剣はその身により止められた。そして、あの男は我を倒し、世界と世界の間封じたのだ。幾年月があれから流れたかはわからぬ。だが、我はここにある』

「あの男？誰のこと？」

『確かレドナ…であつたか。なかなか強い男であつた。剣士としては最高のものであらう。あれほどの男はなかなか居らぬであらう。此度の宴もあれほどの男が居ればよいな』

アリアは最悪の状況に気づいた。この話は戦神ラウドの神殿では最強の神官ドローラの伝説で聞かされている。

「もしかしてなのですが、あなたはデューク殿ですか？」

一筋の希望を込めて、たずねる。違うことを祈って、だ。

『ほう、我が名は今でも伝えられているのか。光栄なことだ』

「ええ、しっかりとね」

最悪だ。ソウル・オブ・シャドウのデューク。500年前の大陸動乱期の勇者レドナと神官ドローラの伝説によると、現在のグラノイア北部地方に現れたデュークはその領主を殺害。5年の間にその地方一体を制圧し、住民の虐殺を行った。彼に殺害されたものは彼の魂の奴隷となる。結果、強大な軍事力を持つ恐怖の軍団を作り上げた。それに対し、時のグラノイアは全軍を上げ、彼に挑んだ。中核をなすのは勇者レドナ。当時最強といわれた戦士であつた。多くの犠牲を払い、デュークの目前に勇者レドナと神官ドローラは立つことができた。結果は勇者レドナが勝利した。その際にレドナの恋人でもあつた神官ドローラが彼の盾となり、その犠牲でレドナはデュークを封じることが出来たとされる。

勇者であるレドナですら滅ぼせなかつた伝説の化け物が、目の前に

いる。この状況の打開策を必死に考える。何も思いつかない。そうであれば、やることはひとつ。

「では、デューク殿？一手ご教授願えますか？」

特攻だ。この状況を誰でもいい。外に伝えてくれる時間を稼ぐのだ。幸いキールはデュークに気づかれてはいない。チャンスだ。自身の命を賭け、キールと孝和を逃がすことを決意した。

『よからう。ラウドの使徒よ。汝は殺さぬ。我がもとで我が敗れるまで共に狂奔に明け暮れようぞ』

「それは、遠慮させていただきます」

そういい終わる前にアリアは全力でデュークに殴りかかった。スピード・タイミング共に完璧な一撃であった。これ以上の攻撃はアリアには無理である。

しかし、その一撃はデュークの漆黒の剣に受け止められていた。片手のその剣と両手の杖のつばぜり合いは一瞬で勝負がついた。軽く腕を振ると、アリアは吹き飛んだ。まるでボールのように地面を転がり、やっと止まったときには全身が痛んだ。どうやら杖を握っていた両腕のうち、右腕は折れているようだ。左腕に関しては肩が脱臼している。

時間を稼ぐどころか、一撃で勝負がついてしまった。これではどうしようもない。

『全く、あのとときのラウドの使徒はもつと楽しませてくれたのだがな。この程度か。まあいい。汝はこれから我が物だ』

アリアの目の前にデュークが舞い降りた。彼は迷いなく彼女の首を掴むと自らの目線まで持ち上げた。デュークの身長は2m近く、アリアは155cmであり、かなり高くアリアは持ち上げられることになった。両方の腕は先ほどの一撃でもう持ち上がらない。

そのことがわかつているのだろう。アリアの絶望を楽しむようにデュークは笑ったようだ。その姿は死神が哀れな罪人にその手の鎌を振り下ろすかのようだった。

『では、始めさせてもらおう』

そういつとデュークはアリアの首を掴んだ右手に自身の闇を集め始めた。その闇がだんだんとアリアの白い肌に染み込んでいく。

「うあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

怖い。怖い。怖い。アリアは恐怖に震えた。死ではなく永久の隷属。永久の殺戮。永久の絶望。彼女の未来が塗りつぶされていく。その恐怖は闇色の悲鳴となって部屋中に響き渡った。

「ふはははは！そうだ！その声だ！！心地よいぞ！！ラウドの使徒よ！！！！！！」

狂戦士の王は笑う。楽しい。戦の上での蹂躪こそが彼の生きる証であった。

このことに油断していたのだろう。とつさに放たれた光輪ブレイズ・リングがデュークの右腕に直撃した。その威力は微々たる物であったが、アリアを取り落とすには十分なものであった。

「ほう。汝は我に挑むのか？小さきものよ。見逃してやろうというものに。外に助けを呼んでこさせるため、この娘は命をかけたのだぞ？」

全てはお見通しだったのだ。更なる贄の為、デュークはキールを見逃すつもりだった。

「だ、だめなんだ。ぼくはやくそくしたんだ！アリアさんをまもるんだ！ますたーがここにくるまで！ぜつたいに！アリアさんをまもってみせるんだ！！！！！！」

キールはアリアを守るため、伝説の狂戦士に挑んだ。自身の使える攻撃術は光輪ブレイズ・リングしかない。それでもかまわない。ぜつたいに引けない。キールはアリアの命令を無視した。逃げない。なぜなら。

「ますたーは、かならず、おまえなんかぼこぼこにしてくれるんだ！！！！！！」

孝和を信じている。彼はこんなへんてこな幽霊なんかには負けない。絶対にだ。

「夢は寝てから見るものだ。小さきものよ。深き眠りにつくがいい」
デュークは剣を振り上げる。それに対しキールは光輪ブレイズ・リングを放つ。初

級の光術ではこの剣を食い止めることは出来ないだろう。それでも放つのだ。最後まであきらめない。それこそが孝和の命令、いやお願いは『アリアを守ること』である。当然だ。優しく強い主人はたとえ、逃げても自分を怒らないだろう。だが、それをキールは選ばない。彼と共にいることが“幸せ”なのだ。逃げることだけは絶対にしない。決めたのだ。

『ぼくは、あきらめない!! あきらめないんだ!!』

その言葉と同時に光輪ブレイクス・リングを打ち砕いた漆黒の剣がキールを襲う。

その勢いはキールを真つ二つにするだろう。それでも、キールはあきらめない。

ザンツと地面に剣が刺さる。キールの目の前に見覚えのある剣が地面に突き刺さっている。デュークの剣が振り下ろされたところに、剣が飛んできたのだ。その勢いにデュークはキールに振り下ろした凶刃を止めた。

キールは叫ぶ。ただ一言を。

『ますたー。がんばって!!』

「ああ、お前はアリアさんの様子を見てくれ!! 頼むぞ、キール!!」

そういつて彼の主人は目の前のへんてこな幽霊に切りかかっている。

だから、大好きなのだ。キールは孝和に言われたとおりアリアのほうに向かって、後ろを振る向くことなく、ぴよんぴよん飛び跳ねていった。

『ほう……。汝、なかなかの腕前のようにだな。剣に対しかなりの修

練を積んだと見える。名を、聞いておきたい』

デュークは目の前の黒髪の青年に名を尋ねた。先ほど切りかかった際の、剣の鋭さは油断していれば、鎧を切り裂いていたかもしれない。

「八木孝和。あんたもかなりのもんだ。俺も名前を聞いておきたいな」

キールに振り下ろした剣はかなりのスピードと威力であったと思う。投げつけた剣に勢いがなければ、投げつけた剣ごとキールは両断されていただろう。奇襲気味の斬撃も後方への跳躍で見事回避されてしまった。孝和はキールの前を駆け抜けながらボーンソルジャ―の剣を引き抜き、二刀流の状態でデュークの前に立っている。

『我が名はデューク。冥府魔道を行く者。現世に呼び戻されてから、その剣の剣士たちを倒したが、汝ほどではなかった。楽しませてくれることを期待するぞ。タカカズ？』

「そうだな。ご期待にこたえられるよう全力で相手させてもらうよ」
孝和は両手の2本の剣を手の中で滑らないよう握りなおす。ひりつくような緊張感、自身に浴びせられる強烈な殺気、それらを受けて恐怖に震えるどころか、逆に高ぶりを覚える。やっぱりこちらの世界に来てから、何か精神のたがが外れるような影響があったのだろうか。

とりあえず今を生き残らねばならない。霊体型のモンスターだと突入前にアリアが言っていた。通常の攻撃は無意味なのは聞いている。ならば、この方法しかない。ぶつつけ本番だが、やるしかないのだ。

「うあああああっ！！！」

気合をこめる。先ほど見たアリアの気功術を今度は全身で再現する。要するに自分の中の力を全身に循環させ、纏うことで霊体への攻撃力とするのだ。キールと最初にあったときに放ったあの力。真龍の生命力を自身に纏う。出来るかどうかではない。やるのだ。

『ほう。素晴らしい！素晴らしいぞ！！ここまでの気功術の使い手

には出会ったことがない！タカカズ、汝は最高の贄だ！』

まさに神速。先ほどまでの剣閃が子供だましに見えるほどの速さで漆黒の剣が孝和を襲う。しかし、孝和はそれを左側の剣で受け止めた。その剣には孝和の気功術の残滓がほとばしる。

孝和の全身が生命力のオーラに包まれる。その色はアリアの金色と違い、純白に銀を混ぜ込んだ白銀色に輝いている。しかもジワリと染み出すような淡い光ではなく、体中から次々湧き出すような勢いの強い輝きであった。

（いけるのか！？こんな状態を最後までもたせれるのか！？）

不安はぬぐえないが、やるしかない。

全力で右腕を攻撃、左腕を防御に回し、デュークに向けて突撃する。孝和の剣速も神速と呼ぶにふさわしいものである。孝和自身こんな剣閃は始めてであった。しかし、不思議とこの体を使いこなすことが出来た。極限状態の精神状態が意識をギリギリの線で繋ぎ止めているのがわかる。

デュークの苛烈な攻撃を受け、それを返し、剣先が見えなくなるほどの速度で切り結ぶ。これに普通の人間は耐えられない。確実に数合のうちに切り伏せられるだろう。それに対応するため、孝和は二刀流に加え、体術を組み合わせた手数で勝負するヒットアンドアウェイを選択した。孝和の右から切り上げた魔法剣をデュークがその漆黒の剣で受ける。それを受けさせてから、左の剣をさらに加え、全身のばねを使い押し比べを行う。元々の馬力はデュークのほうが強い。身長差も10cmくらいあるので、どうしても孝和が押される形になってしまう。だが、うまくその力をいなし、距離をとる。その際に跳ぶのに必要な足とは、反対側にオーラをまとわせ、デュークの死角を狙って蹴りを放つ。効果はかなり少ないが、確実にダメージをデュークに与えることが出来る。だが、デュークの剣には闇がまとわりついている。この戦法で剣を切り結ぶたび、孝和の両腕には軽い凍傷のような痛みが走る。気功術で全身を覆っていなければ、すでに絶命するほどの闇の邪気が孝和を襲っていた。双方と

もダメージを受けてはいるが、決定打にはならない。

しかし、生身の孝和と、死者のデュークにはスタミナの差が出る。孝和はすでに肩で息をしている。デュークは全くその動きに変わりが無い。この差は大きい。

（これじゃ、駄目だ。やってみるか。失敗したら、死ぬけど……）

孝和は賭けに出ることにした。あえて左腕一本でデュークの右腕を狙う。

「おらああ！！」

掛け声と共に左の剣を一閃。その攻撃にデュークが反応する。

『甘いのだ！そうはいかんよ！』

デュークはその剣を打ち払うため、漆黒の剣を振り下ろす。それに合わせて孝和は左手の力を抜く。

『！！！！？』

勢いをそのままに、剣は振り下ろされる。それにタイミングをあわせ、左手から剣を素早く離し、デュークの刃を握る。しっかりと動かないようにそれを抑え、逆の右側の剣で左腕へ全力の一閃を放つ。

『何だと！！？』

その攻撃はデュークの左腕を切り落とす。地面に落ちたその腕は、紫色の瘴気を放ちながら、煙のように消えうせた。

孝和の奇策は成功した。しかし、剣を握った左腕は白銀の光に包まれていたにも関わらず、闇に浸食されていた。骨までしみこんだその闇は、孝和の左腕を完全に殺した。

捨て身のその攻撃に、デュークが提案をしてきた。

『今の捨て身はよかったぞ。タカカズ。どうだ。次で最後にしないか？このままでは、時間が経てば我が勝ってしまう』

「ありがたいね。それなら、俺にも勝ち目がある」

賭けには勝った。初めての気功術は徐々に勢いを失っているのが自分でわかる。デュークの過剰な戦闘の欲望を満たして、この状況に持ち込むこと。この状況以外では自分には勝ち目はない。闇はジ

ワジワと孝和の左腕から徐々に体を侵し始めている。

『ふふ。ここまで我に対し、抗し得たものはいない。過去の勇者たちと比べても遜色はないどころか、勝るほどだ。自信を持って逝くがいい』

「それは、本当か？ありがたいけど、死んだらそこまでだしね。こっちは俺が勝たせてもらうよ」

そういつと孝和はボーンソルジャーのほうの剣を腰の鞘に刺した。魔法剣は少し離れた場所に刺しておいた。

片刃の剣を使い、居合いで勝負することにしたのだ。孝和の全力の一撃ではデュークの全力に及ばない。残るは、速度と鋭さの二点。これを最大限に引き出すのだ。

一方のデュークは上段に構え、孝和の準備を待っている。その剣にはデュークの全力が込められているだろう。もし、孝和の刃がデュークに届かなければ、容赦なく孝和は両断されるだろう。

『では、そろそろ始めようか』

「ああ、いつでも」

二人に準備は整った。デュークは先の先。孝和は後の先。孝和は自らの力を制御し、外への放出を止めた。剣と居合いに必要な動きのみにその光を集中する。

デュークが動く。1歩、2歩、3歩。近づいてくるデュークを感じ取る。自然と、剣が鞘から抜かれる。日本の道場で何度も何度も繰り返した動きをなぞる。今までにない速度で、鋭さで。

ドン、という音が部屋に響く。デュークと孝和は二人ともが同じ場所で立っていた。そのうち、相手を切り抜いた剣が1本延びきった状態で見て取れる。

『よい、勝負だった』

「ああ、そうだな」

孝和は自分の胸元を見下ろした。ダンブレンの店で買い求めた黒の皮鎧は切り裂かれ、その下のシャツからは血がにじんでいる。

デュークはよろよろと後退した。その腹部から胸にかけて、白銀色の線が光り輝いている。

勝負は孝和の勝ちだった。

「最後にさ。聞きたいんだが」

孝和は疑問を投げかけた。

『何だ？時間はあまりないぞ』

「どうやらデュークにはもうこの場にとどまるだけの力がないようだ。膝について傷跡をなせている。

「俺に切りかかるときに、何で一瞬手が止まったんだ？あれがなければあなたの勝ちだったろう？」

そう、その一瞬がなければこの結果は逆だったはずだ。

『ふふ。あの小さな白き戦士に感謝するがいい。あの一撃が原因だと傷があるのを見つけた。先ほどキールが見せた意地。アリアを助けるのに放った光輪ブレイズ・リングの跡である。

「ああ、しっかりと感謝することにするよ。じゃあ、さよならだ」

『ああ、しかし惜しいな。汝ほどの戦士ともう戦えないとは』

最後の最後まで、デュークは戦いを求めた。それに孝和は苦笑する。

「大丈夫。あの世には俺の師匠がいるよ。今の俺なんか足元にも及ばないさ」

『はっははは！それはいいな！名はなんといいのだ？』

「結城法寿。会えたらよろしく言っといてくれ」

『よかるう。なかなかよい冥土の土産だ。ではタカカズ、汝が来るのを待っているぞ』

死を前にしてデュークは落ち着いていた。不思議なものだが、この狂戦士は死を恐れてはいなかった。

『最後に、汝に褒美をやるう。その剣を持ってゆけ。なかなか面白かった。では、な』

そういうと、死への最後の抵抗もなく、本当にデュークは消えて

いった。先ほどまでそこにあつた圧迫感も何もない。悪い夢であつたかのようだ。

しかし、斬り付けられ、鎧はもう使い物にならない。血も出ている。デュークの攻撃でアリアは倒れている。

……そうだ！アリアはどうなつた！？

孝和はそれに気づき、アリアとそれを任せたキールのもとに急いで駆け寄つた。

「キール！！アリアさんは！大丈夫か！？」

『うん！ますたー。アリアさんはだいじょうぶ。ますたーこそだいいじょうぶ？』

アリアはこの騒ぎの中、寢息を立てている。キールによると心に強い衝撃があつたのだろう、とのこと。確かに、ゴーストの目の前で戦つたのだ。ゴーストの叫びは恐慌状態を引き起こすと、アリアは言っていた。

孝和の左腕はボロボロだつた状態からキールの神の祝福ユ・ト・ナレスで元に戻つていた。胸の傷も元通りだ。

「悪いな。お前だつて怖かつただろ？ごめんな。こんなとこに連れてきて」

本当に悪いことをしたと思う。デュークの前に立つてアリアを守つたのだ。どんなに怖かつただろうか。

『きにしないでいいよ。だつてみんなぶじなんだよ？よかった、よかったじゃないの？』

確かに、キールがいなければ、皆死んでいた。孝和はキールとの出会いに深く感謝した。

それに気づき、孝和はキールをギュツと抱きしめた。本当に本当にいいとおしい。

『ますたー！？ど、どうしたの？』

キールの驚きに耳を貸さず、孝和はしばらくの間キールを抱きしめていた。

しばらく経って正気に戻った孝和は、最初の目的である石碑へ向かった。その横にはデュークの攻撃でボロボロになった黒ローブの遺体があった。

「この人、なに持ってるんだ？」

まずは手を合わせて南無阿弥陀仏。そのあと恐る恐るその両手に抱えられた黒の装丁の本を抜き取る。攻撃の衝撃で少し傷があるが、読むのに支障はないようだ。

……ばらばらとページをめくってみて、孝和は顔をしかめた。死者の蘇生、不老不死の手引書のようなのだが、どの方法も多くの命を犠牲とする邪法のような。読んでいて、気分が悪くなる。孝和は本を閉じた。

他に身分のわかるものはないか調べた結果、紋章入りの首飾りが見つかった。プレイスカードがないか調べたのだが、どうやら持つてはいないようだ。

「まあ、仕方ないか。無いものは無いんだから」

最後にもう一度遺体に手を合わせて、石碑の前に立つ。最初の目的、石碑に刻まれていたのは「初心こそ大切」であった。まあ、そのとおりだろうが、今回のクエストはどう考えても、「初心」とは程遠すぎないだろうか。あんなにゴーストが強いなんて思わなかった。

実は、孝和はデュークが伝説級のモンスターとは知らないのだ。せいぜい、「この世界のモンスターは強いんだなあ。俺も油断しないよう鍛えよう」という感覚であった。その間違いを知るエリアはまだまだやすやと眠りの世界である。

次に、ボーンソルジャーの2体も調べた。結果は先ほどと同じ。

ブレイスカードが無い。身分の判るものは全く持っていなかった。骨を一箇所にまとめ、これにも手を合わせた。

3名の遺体は後でギルドの人に回収・埋葬してもらえよう、頼むことにしよう。

「最後はこれなんだよな。どうしようか。キール？」

「そうだね。どうすればいいんだろ？こまったねえ」

二人が悩んでいるのは、デュークの褒美だった。漆黒の剣である。デュークが死んだので、消えてなくなるかと思っていたのだが、その剣は地面に突き刺さって存在している。

なぜ、二人が悩んでいるかというと、

『のろわれないかな、ますたー』

「呪われそうじゃないか、キール」

という訳である。流石にさっきまで殺し合いをしていた相手の剣だ。怨念とか染み付いてたら怖い。

『でも、あのゆーれいさん。ごほうびだっていったんでしょ？だいたいようぶじゃないかなあ』

キールはそう孝和に言った。キールは目の前の剣には、すごい魔力を感じるが敵意は感じないらしい。それを信じて、孝和は剣を握る。腰が引けてみつももないのは仕方ないだろう。まあ、結果は特に問題なかった。デュークには悪いが、怖いのだ。この剣をどうするかは、帰ってから決めることにしよう。うん。

もろもろにケリをつけて帰ることにした。休憩をかねてキールに残りのハーブ水をかけてやり、孝和自身は、自分の水筒の水を飲んで一息入れた。

「よつと。結構アリアさん軽いんだ」

アリアを背負い、都合3本になった剣を持って帰ることになったため、なかなか大変である。剣の鞘はボーンソルジャーのものを使

わせてもらった。使い物にならなくなった鎧は捨てていく。しかし、アリアが軽くてほんとに助かった。

『じゃあ、ますたー。ぼくがさきにいくね』

「ああ、迷うなよ」

『ますたー。そういうのは、しつれい、っていうんだよ。ふーんだ』
孝和のジョークにキールが軽口で答える。行きと違い、帰りの戦力はキールだけだ。落ち着いてもらおうとしたジョークはどうやら成功のようだ。

軽くお互い笑うと、かなりリラックスできた。では出発だ。

帰り道にはモンスターは出なかった。デュークの気配が急に消えたことで、さらに警戒を強めたようだ。全くといっていいほど、気配すら感じなかったとキールは話した。途中でヘビーワームの甲殻を回収し、カバンの中にあつたロープを利用して、アリアを担げるよう、簡単な道具を作った。それを利用できたので、途中からは孝和の負担も軽くなった。

洞窟の外に出るころには孝和は汗だくになっていた。時間ももう昼を過ぎ、夕方にさしかかろうとしていた。

「タカカズさん。キールさん。アリアさん。ご帰還おめでとうございます」

それを見つけてカルネがそう声をかけてくれた。

その後、アリアの様子を見て、カルネが大騒ぎした。結果、竜車のランドドラゴンがそれを見て、暴れてしまい大変なことになった。その大騒動を孝和は汗だくでげっそりとして眺めていた。

「もう、最初から説明してくださいよ。驚いたじゃないですか」

御者席で並んで孝和とカルネは洞窟内のことを話し合っていた。アリアのため、幌の中にはキールだけのほうがいいだろうとの判断だ。ただし、会話の中で最奥部の戦闘の詳細については孝和の勘違いで、敵はただのゴーストとされてしまったが。本や剣については、冒険者のクエストの報酬となるらしく、孝和がもらっているそう。首飾りについては、カルネに渡した。埋葬するときもしかしたら名前がわかるかもしれないからだ。やっぱりお墓に名前が無いのは悲しいだろう。

「あの、これでクエストは完遂でいいんですよ」

「はい、最奥部の石碑も見てこられましたから」

孝和はガッツポーズを決めた。これで、冒険者だ！

「プレイスカードは交付に3日かかりますので、当日に来てください」

「わかりました。いろいろありがとうございます」

竜車は朝の集合場所ではなく、ギルド前まで移動した。このあとカルネは、アリアを救護所に運ぶそうなので、ここでお別れになる。

「では、3日後にまた会いましょう」

「ええ、楽しみにしてます」

『ありがとうございます。カルネさん。アリアさんにもありがとうございます。うっていつておいてくださいね』

そんな会話をして3人は分かれた。

このあと、孝和は約束したとおり、『陽だまりの草原亭』のタバサに頼んで、キールに山盛りサラダを提供し、自分も久しぶりにめったに飲まない酒を飲んだ。真夜中近くまで他のテーブル客と騒ぎ、そのままベッドにダイブした。そして、最後には泥のように眠り、

次の日にはバツチリ二日酔いになってしまったのである。

第9話 暗き地の底に白銀の光を（後書き）

何とかこの試練の洞窟を1話に収めたかったです。ああ、構成力がほしい。

……努力します。今回も最後までお読みいただきましてありがとうございます。

第10話 一夜明け……（前書き）

今回はいつもの長さです。

第10話 一夜明け……

「し、死ぬ……。これは、キツイ……」

洞窟から帰還した翌日、起床した孝和は、頭から足先までの全身を襲う痛みを耐えていた。おそらく、この頭痛は昨晚の暴飲が原因だろう。さすがに、冒険者御用達の宿。冒険者の試験に合格したことがわかると、荒くれやら、ドワーフやら、酒豪の連中がめでたいとばかりにおごりの酒が孝和のテーブルに次々届いた。祝いの席ということもあり、それを拒むというのもまずいだろうと一緒に騒いだ。深夜までのパーティーはタバサによりお開きとなったが、かなりの飲酒量となった。アルコールの含有量もかなりの物ばかりだったので、今の孝和の状況は当然だろう。

その一方、全身を襲う痛みは、筋肉痛であった。生まれて初めて、指の一本一本、すべての関節を含む筋肉痛を味わった。どうやら昨日のあの無茶な気功術は体中を酷使していたようだ。特に、最後の居合いで力を集中した右腕は、動かすだけで泣きそうな痛みが走る。『ますたー。おはようございまーす』

孝和の呻き声で起こしてしまったようだ。ボロボロの孝和の一方、キールは昨日と変わらず元気だ。

『なにか、うんうんいつてたけど、だいじょうぶ？』

そういうとぴょんと反対側のベッドから孝和に向かってジャンプしてきた。その跳躍はスローモーションのように見え、孝和にとつて昨日のデュークの最後の一撃に匹敵する恐怖を感じさせた。

ぼすっ、軽い音と共に孝和の上にキールが着地する。

「うんぎゃあああああー……！！！！！！」

階下にまで孝和の絶叫は響き渡り、驚いたタバサにより扉が開け

られるまで、心配したキールの気絶した孝和の上でのジャンピングは続けられたのである。

時と場所は少し変わり、『陽だまりの草原亭』1階の調理場に移る。今、孝和は『陽だまりの草原亭』の調理場で、臨時コックになっていた。プレイスカートの交付までの3日間、暇な時間を潰す為と、金を少しでも稼ぐ為どこかで働こうと考えた結果である。

一縷の希望を託し、キールの神の祝福を掛けてもらったが、筋肉痛には効果が薄いようだ。

疲れが体に残っている状態で、外で仕事を探すのは面倒だったので、タバサに頼んで調理場で簡単な料理を手伝わせてもらうことにした。賄いで食事代も浮くし、願ったりかなったりだ。ちなみにキールは、タバサに連れられて宿の受付で「招きスライム」をさせられている。本人も楽しそうなので、まあいいだろう。

「では、やってみましょうか」

孝和の手元にはハンバーグのたねが中心部を少し窪ませた形で乗っている。新人の臨時コックに最初は食材の下準備が任されたのだが、手際がよかったので賄いの食事を任されたのだ。今日の酒場は牛肉と根野菜の煮込みだったので、仕込みの段階で切り落とされてあまった部分を丁寧に包丁で叩き、じっくり炒めたタマネギを少し冷ましてから卵、パン粉を混ぜ込み、塩コショウで味付けして成型。あとは暖めたフライパンに牛脂を塗りつけ、ふっくらと焼き上げるのだ。久しぶりの向こう世界の料理、楽しみだ。本当のところ、豚と牛の合挽肉の方が孝和としては好みなのだが、仕方ない。ソースはこの店のものにリンゴの摩り下ろし、トマトの絞り汁を加え温めたものを使うことにした。そのうち、ウスターソースのレシピを、何とか思い出せないかやってみようと孝和は決意した。

「うまい！うまいぞ！タカカズ！？なんだこれは！！？」
「俺の国で食べられてる肉料理です。気に入ってもらえてよかったですよ」

すさまじい勢いで、賄いのハンバーグをむさぼる人物は『陽だまりの草原亭』の料理長でダッチという。タバサの夫でもある。午前中の仕込が終わり、営業の始まるお昼に向けて、ほかの従業員もガツガツと食べている。ハンバーグはドイツとかモンゴルの料理が元になったらしいので日本発祥ではないが、説明も面倒だ。

付け合せにホウレン草のベーコン炒めと、ニンジンの甘露煮を作ったがそれも好評だった。ホウレン草のベーコン炒めについては、休憩時間が終わると手書きでメニューに付け加えられ、お客さんの反応も上々であった。

そんなこともあり、午後の営業時には孝和は戦力の一人として迎えられ、夜の営業前までの約束の臨時コックが終了したときには、明日も必ず来るようにダッチに確約させられ開放された。ちなみに明日からはハンバーグがメインのメニューリストに載ることが確定されている。肉屋の親父にもすごい量の牛肉・豚肉が発注されたのを孝和は見ていた。その様子に明日の自分の状況がどうなるか、薄ら寒いものを感じながら酒場をあとにした。

仕込みが終わっても、まだ3時ごろであったので、外で買い物でもしようと考えた。酒場から宿の受付に向かうと、キールの前にもすごい人だかりが出来ていた。

『あ、ますたー。おしごとおわったの？』

その真ん中にいるキールが、孝和に気づき、声をかけてきた。それにつられ、人だかりの全員が孝和のほうに目を向けた。20人近い人が一斉にこちらを向くのはかなり怖かった。その20名のほとんどが女性と子供たちだった。服装から近くの商店の人から、冒険

者、買い物に来た主婦とその子供といったところだろう。

「ああ、タカカズ。あんた仕込みは終わったのかい？」

人ごみの向こうからタバサが話しかけてきた。キールは受付の上から床に飛び降り、孝和のほうに向かっってきた。

最後にジャンプして孝和の腕の中に収まった。それを見た人ごみの皆様は、羨望と嫉妬を十二分にこめた視線を孝和にぶつけてくる。この状況に危険を感じ、孝和はキールを抱きかかえたまま、受付の奥に逃げ込んでタバサに尋ねた。

「仕込みは終わっただんですけど、何なんですか？この人だから。俺、ものすごい勢いで睨まれたんですけど」

タバサはカラカラと笑った。

「皆、キールちゃんを見に来てるんだよ。朝から呼び込みのお手伝いを頼んだんだけど、午前中に来たお客さんから噂を聞いた人が続々来ててね。酒場のほうも忙しかっただろ？」

確かに、ダツチさんが「料理が足らん。急げ！」と調理場をせかしていた。一緒に働いていた料理人に聞くと、今日は特別忙しいと言っていた。なるほど、キールが原因か。

「すみません。ご迷惑をかけたみたいで」

こういったとき腰が低いのはまさに日本人だ。

「なにいつてんだい！お客が来て、文句言う商売人がどこにいんのさ！？キールちゃんには稼がせてもらったよ。ありがとうね」

キールはそう言ったタバサになでなでされて嬉しそうだ。

「そ、そうですか。じゃあ、これから買い物に行こうと思っただんですけど。キール、お前ももう少しタバサさんの手伝いをするか？」

なでられているキールはその提案に

『うーん！ますたーといきたいなあ。タバサさん。いい？』

「かまわないさ。行ってきな。帰ってきたら、あたしの特製サラダ用意しておいてあげるから。楽しみにしてるんだよ」

『ほんとに！？ありがとう。たのしみにしてるね』

そんな会話がされたあと、真剣な表情でタバサは

「タカカズ。キールちゃんのこと、しっかりと見てるんだよ。怪我でもさせたら、拳骨じゃすまないからね」

とおっしゃられたのである。受付の向こうでは聞き耳を立てていた、冒険者と思しきお姉さま達からも同様の圧力を感じ、孝和は全力で頷いたのであった。

『陽だまりの草原亭』から脱出した孝和の手には1本の剣があった。腰の2本の剣と違い、その剣は鞘と微妙に形が合っていない。そう、デュークから受け取った漆黒の剣である。ポーンソルジャーの持っていた鞘に入れて持ち帰ったが、その鞘に剣の形がしっくり来ないのでどうしようと考えていた。そんな昨晚のバカ騒ぎの時に隣の席にいたドワーフの爺さんが「では、ワシがそれを見立ててやろう」と言ってきたのだ。詳しく話を聞くと、ドワーフの爺さんと、ボルドは、武器屋を経営しているらしく、個人の武器に合った鞘を用立ててくれるらしい。剣の調整も行うらしいので、デュークとの激闘で使った武器のメンテもかねて、ボルドの店を訪ねる約束をしていたのだ。『陽だまりの草原亭』からは、通り一つ向こうにあるため、少し歩く必要があった。

「キールちゃん。どこ行くの？」

「おや、キール。お出かけかい？」

「キールちゃん。これあげるわね」

『陽だまりの草原亭』から出て、ボルドの店に向かうまでに何回もキールは呼び止められ、その度にキールは『ぶきやさんにいくの』『ますたーとおかいものなんだ』『ありがとう。あとでたべるね』

と律儀に受け答えをした。この通りの中でキールは今日1日で有名な人になったようである。みんなのキールへの挨拶のすべてに、母性本能や父性愛が感じられ、その一方で孝和にはものすごい嫉妬を含む鋭い視線が投げつけられた。

孝和はかなりの精神的ダメージを受けながらも、何とかボルドの店にたどり着くことが出来た。うなだれながらも、店のドアを押して開ける。中を見ると、剣や槍が壁に掛けられている。カウンターの脇には樽の中に剣が立てかけられている。それはどうやら中古の品のように、くすみが見てもわかる。壁の武器は一点物のようで、値札のほかに製作者の名前が書かれている。孝和には分からないが、きつと名のある名工なのだろう。

「いらつしやいませ。何かご入用です？」

中に入ってきた孝和を見て、カウンターの女性の女性がこちらに話しかけてきた。

「実は、この剣に合う鞘を選んで欲しくて来たんです。昨日『陽だまりの草原亭』でボルドさんに見繕ってやると言われたもので、お願いしようかなと思ひまして」

単刀直入に来店理由を説明する。

「ああ、ボルドはあたしのダンナなんだけどね。実は今、外に出てるんだよ。多分もうすぐ帰ってくるんじゃないかと思っただけ。どうする？このまま待つてる？」

「じゃあ、このまま待つてます。キールも待てるか？」

『うん。いいよ。なんかここ、いろいろあつておもしろーい』

「！？」

どうやらキールの来店には気づいていなかったらしい。孝和は簡単にキールのことを説明し、キールもボルドの奥さんに挨拶した。

「うーい。帰ったぞーい」

ボルドは、武器用の鉱石の仕入のため、北側の商業ギルドまで出

向いていた。今回はなかなかよい鉱石が手に入りそうだ。ホクホクで帰宅し、その結果を妻のミーナに報告しようと思っていた。

ドアを開け、店番のミーナの姿を探すと、店内には黒髪の間がいた。どうやら商品を見ているようだ。しかし妻はどこにいるのだろうか。

「あ、あなた。あなたにお客さんよ。昨日頼まれたんでしょ？」
ガチャリと音がしておくからミーナが出てきた。客？昨日？

少し考えて、そういえば冒険者になりたての奴の鞘を見立ててやるといっていたのを思い出す。確かに昨日、酒をたらふく一緒にこの黒髪の間と飲んだ。

「お願いします。これなんです」
そういつて剣を渡そうとするこの男に断りを入れる。

「すまん。忘れておった。用意するからもう少しまってくれ」

そいつは軽く笑顔になり、うなずいた。それはいい。

「なあ、ミーナ。それ、なんだ？」

ミーナの抱える真っ白な物体に疑問が出来た。すると、

『はじめまして！キールっていいです。よろしくおねがいます』

その真っ白な物体はボルドに向かって挨拶してきたのだった。

「ふむ、では剣のメンテナンスと、それに合う鞘を用意して欲しい、ということだな」

従魔師などしばらく見なかったもので、驚いていたボルドが立ち直り、改めて仕事の話になった。ちなみにキールは今、奥でミーナとお茶をしている。

「ええ、この3本なんです」

そういつと孝和は3本の剣を手渡した。シグラスのところの1本、ポーンソルジャーの1本、デュークから受け取った1本である。

「おおおう……」「ふむ」「ぬぬぬう……」

以上は順にボルドの鑑定した剣の反応である。全てを見終わったあと、孝和にボルドは尋ねた。

「のう。タカカズ。正直に答えてくれんか」

その真剣な表情には剣呑さすら漂っていた。

「な、何でしょう？」

その様子に孝和はひどく緊張した。

「実はな、1、2本目の剣についてはかなりの名剣だといえる。人の鍛えうるもので考えるのであれば、1本目は最上級、2本目は上の中といったところだ。だがな……」

なんかいやな予感がする。3本目の剣は、アレだし。

「この3本目、漆黒のこの剣だが。どこで手に入れた？人の手、どころか俺たちドワーフでも造れんぞ。こんなとんでもないもの」

そうか、やっぱりゴーストの持ってた剣だもんな。危ない剣なんだ。そう、孝和は判断した。

だが、ボルドの言おうとしていた事は、そうではなかった。この、孝和の漆黒の剣は多分、神話級の代物だと判断した。過去、一人立ちする前にドワーフの国で嚴重に封印されているのを見た神剣グラ・ビーに匹敵するのではないだろうか。

話からすると、昨日の孝和は冒険者になりたてのペーパーだ。こんな神器など所有してるわけが無いのだが……

「いや、デュークっていう戦士と一騎打ちになりました、勝った褒美だと譲られたんです。いやー、死ぬところだったんですけど」

そういうと孝和は、頭をぼりぼりかいた。今でも何で勝てたんだろう、と不思議なくらいの強さだった。

それを聞いて、ボルドは即倒しなかった自分をほめてやりたいと思った。デューク、北限の狂戦士、死を纏う黄金騎士。伝説の魔戦士だ。それに打ち勝ち、剣を譲られた。

つまり、この剣は……

「……ジ・エボニー」

「？なんです？ジ・エボニーって？」

「この剣の名だ。知らんのか!？」

武器を取り扱うものの中で知らなければモグリだ。

一般には知られていないが、ジ・エボニー。世界神より生まれた最初の2神のうち、闇を司る女神の血を使い鍛冶神グインが打ち上げたとされる魔剣。北限の狂戦士デュークと共に封印されたとされる剣。孝和がうそを言っている可能性は全く無視した。ボルドのこれまでの鍛冶人生全てを賭けてもいい。この剣は神器だ。

ボルドは自身の全ての人生を顧みて、今までのすべての修練は、この剣に出会うためにあつたと確信した。

「なあ、タカカズ」

「はい。どうしました」

ボルドは真剣そのもので話しかけた。

「この3本の剣は預かる。2日後に来てくれ。メンテも鞘の用意も完璧にする。ワシを信じてくれ」

「はあ、最初からそのつもりでしたし。お願いします。料金はいくらですか？」

「いらん」

「は？」

「いらん、と言った。手抜きはせん。安心しろ」

その後も、支払いについて何回も尋ねたが、いらん、の一点張りだった。孝和は、冒険者になったばかりの自分へのサービスなんだろうと自分を無理やり納得させ、帰宅することにした。今後もメンテナンスの際には、この店を利用しようと思いつきながら。

剣を預けると、ボルドは奥に引っ込んでしまったので、ミーナに挨拶して孝和は店を後にした。

この日から2日間、店の前には「閉店中」の看板が翻り、ボルドは工房から食事・トイレ以外一度も出なかった。ミーナはその様子を見て、何も言わず夫の行動を黙認した。ドワーフの武器職人ボルドは150年の自分の鍛冶の経験全てをこの2日間に賭けたのだっ

た。

第10話 一夜明け……（後書き）

誤字脱字、あった場合は申し訳ありません。ここまで読んでいただきまして、ありがとうございます。

第11話 闇は闇に 影は影として（前書き）

ちょっと毛色が違います。誤字脱字ありましたら申し訳ありません。

第11話 闇は闇に 影は影として

深夜、マドック、住宅地の外れ、あばら家としか言いようの無い古びた家の中。

「……様。ご報告いたします」

その男はどこにでもいる。例えば街中で出会えば見過ごされ、商店の中で見かければただの一般客として誰の記憶にも残らないほど、「普通」で「地味」な男だった。

先日、男にこの家を貸した大家や、たまに顔をあわせている隣に住む一家ですら、この男の顔を鮮明には思い出せないだろう。

家の中には部屋が1室。そこにはテーブルが1脚。ただそれだけがあった。生活をしているのであれば、ベッドや衣装棚などがあったしかるべきだがそれすらも無い。それ以前にこの家の中には“生”というものが全く感じられなかった。

いま、この「普通」で「地味」な男は、テーブルの上の手鏡にひざまずき、語りかけていた。手鏡は、ふちが銀で彩られたなかなかの品に見えた。この家の中には全く不釣り合いなその鏡は薄く光を放ち、室内を怪しく染めた。その鏡にひざまずく男の瞳は、全く「普通」で「地味」などではなく、濃厚な忠誠と、制御された狂気が隠れ見えた。

『……ああ、君か。どうしたんだい？』

テーブルの上の鏡から声が聞こえる。この手鏡は音と光を伝える魔道器であった。そこから聞こえる声は老獪というには若く、それでいて少年の声というにはがあまりに気だるげな妖しさを放っていた。

「申し訳ありません。……様の策でございますが、どうやら潰えたようでございます」

男は全く姿勢を変えず、低く抑えた声で話す。そのためひどく聞こえにくい。しかし、鏡の向こうの彼は、その声を十分聞き取れているようだ。

『顔を上げなよ……策というと、ウエルローのあの件だね。全く、僕はあのために3日もかけて封印の解除術を作ったんだよ？成って潰えたのかい、それとも成らずに潰えたの？』

その言葉をうけ、初めて男は顔を上げる。鏡の向こうの彼に視線を向ける。

彼の上半身は裸であった。天蓋つきのベッドの上に寝そべり、シルクのシャツが下半身を覆い隠している。その状態では全体を推察することしか出来ないが、彼のそれは見事に均整が取れ、鍛えられた体軀はまるで彫刻であるかのような印象を男に与えた。その顔は美しさよりも妖しさが際立っている。妖艶なその微笑と、時折見せる知的な表情が彼をさらに暗い魅力で包み込んでいた。

「あくまで私見ではございますが、成って、であろうかと……」

『……続けなよ』

彼はそういつて先を男に続けるように促す。そうして横になっているベッドから腕を隣に伸ばす。そこには、生まれたままの姿で寝そべる2人の女性たちがいた。あまりに露悪的なその彼の姿。しかしその一方、彼に相對している男は全く表情を変えない。その様子に、彼は静かに声を立てずに笑った。

「ギルド内協力者より通達がありました。昨日ウエルローの娘はかの地より帰還。しかし、心身衰弱、救護所にて治療を要しましたが、今日の朝に目覚め、命には問題なしとのことで退所したそうです」

その言葉に鏡の向こうからはどこか楽しげに声が響く。

『ははは。なるほど、武門のウエルローここにあり、というわけか……』

その彼は今、隣の女性の首筋にそつと舌を近づけていた。首筋を舌で触られ、ビクビクとその体が震える。その女性の背中がこちらに向く。人間の女性には普通存在しないものが、そこには生えてい

た。漆黒の翼である。もう一方の女性にも同じ羽が生えている。彼女たちはサキュバスであった。

「僭越ながら、本当にかの娘によるものでしょうか」

彼女たちの姿から男は目線はずし、自身の入手した情報から、いくつかの疑問点があることを伝える。女性たちの姿に照れたわけではない。サキュバスはその存在自体が誘惑の毒である。彼女たちが悪いわけでは無く、男は自身の安全のため、そうしたのである。

『それはどうということ？』

その一方で彼は、全く彼女たちから目を離すことなく、普通に応対している。今も一人をその腕に軽く抱き、もう一人からワインを受け取っている。

「は。いくらウェルローといえど、若輩にあれが破れるとは…」

『そうとも言えないさ。レドナの傷を癒す魂が、あの閉鎖された地にはないはずだよ。呼び戻した際の贄は、たったの3つ。完全に回復するなら、千は啜り喰らわないと。壊れかけのガラクタと、ラウドのお気に入りの新鋭。そんなに実力に変わりは無かったんでしょ』

ワインを口に含み、隣のサキュバスに口移しで注ぎ込む。その口付けを受けた彼女はトロンと目をとろけさせ、彼にしなだれかかった。信じられない光景である。サキュバスと触れ合っただけで普通の人ならば精気を抜き取られ死んでしまうはずなのに。

「しかし、相手は伝説の魔戦士。倒すことは可能なものでしょうか？」

そんな信じられない光景ではあるが、全く男は驚いていない。何度もこの光景を見ている。いまさら驚くことも無いだろう。

『そう、「伝説」なんだよ。後世に伝えられるよう、時の権力者が捻じ曲げ、削り、付け加えた「伝説」。本当にそんな「伝説」の力があれにあったのかなんて解らないよ？』

軽く彼は首を傾げる。その仕草の一つ一つが実に絵になる。

「そうですね。そういうことかもしれません。ですがウェルローの娘には、同行した従魔師と従魔の助けがあったようで」

それを聞いた彼の顔に初めて興味深げな様子が見て取れた。

「へえ……。従魔師か……。なかなか珍しいけど、彼らにそんな驚くような力が？」

「いえ、従魔はスライムのようなようです。従魔師本人も黒髪黒目ではありませんでしたが、人でありました。名前とて聞いたことはないような者です」

身を乗り出していた彼は、それを聞くとその身を再びベッドの上に横たえた。すかさず、両脇に2人のサキユバスが身を寄せる。彼のその顔にはつまらなそうな表情が浮かぶ。

「なんだ、それじゃ無理だね。やっぱりあれを倒したのは彼女か……。確かアマリリア、アリアだったけ？」

「御意。4年前のあの時も。・・・様の策を潰した娘でした……」

「覚えているよ。あの豚をせっかく焚きつけたのにね。全くウエルローの一族はしぶといんだから」

「しかし……」

「？なにか引つかかることあるの？」

「は。その従魔師、あのスパードの紹介です。もしや今回の件、奴が気づいたということはないかと」

「……無いよ」

彼は数瞬の後、そう答えた。

「確かに予想外の大物の名が今回、ここで絡むのは気に食わないけど、偶然、従魔師の推薦をした。偶然、それが今回の件と重なった。不自然さは感じるけど、ただそれだけと考えるほうが無難だ」

「……」

それを聞いて、男は黙り込む。

「君が納得いかないのは、わかるけどね。彼女の神託を確認してすぐにごっちは動いたんだ。向こうに対応できるだけの時間はないよ。それに、もし余計な手を出して、せっかく隠居した虎を呼び戻すことも無いだろう？しかも、スパードが動くなら一緒にダンブレンもだ。そんな危険な賭け、僕は乗りたくは無だよ」

彼の忠告はもつともだ。

一瞬の間が空く。

「今後はいかに？」

『明日からこれからのプランを組み立てなおさないとね。まあいい。僕らの汚点の尻拭いをしてくれたと考えようか。君は北だ。今動いてる策を一時止めないとね。僕らにはまだ次がある。マドックの後任は連絡係のみで構わない。』

「ウエルローの娘と同行した従魔師についてはいかがしましょう」
『君は始末しておきたいんだろう？でも構うな。後任には彼らの調査は不要と伝えてね。念のため、彼らとスパードには不用意に近づかないようにしといて。ギルド内で僕らと贄の関係に気づくのがいいようなら、処理しておいて構わない』

「御意。では明後日に、北で」

『では、ね』

男は深く頭を下げる。鏡の向こうから女性たちの甲高い声が聞こえ始め、鏡から淡い光が消える。それを見てようやく顔を上げた

部屋には沈黙と暗闇が広がる。男は音も無く立ち上がると、手鏡を袋に入れ家の外にでる。ちらりと屋根の上を見る。軽くうなずくと、闇の中で複数の何かが動く気配がした。

外にでると、ちょうど月が雲に隠れるところであった。ほんの10秒程の間、月が隠れる。

月が再び顔を出したとき、そこにはまるで何も無かった。涼やかな風と月明かりの道だけが闇の中に存在していた。

第12話 怠惰な2日目(前書き)

誤字・脱字にはご容赦ください。

第12話 怠惰な2日目

窓辺から差し込んできた朝日を浴びて、孝和は気持ちよく目覚めた。筋肉痛は2日目の朝には、すっかり回復していた。昨日の買い物後は、大人しく『陽だまりの草原亭』に帰り、夕食までの間、キールと一緒にごろごろベッドに寝転がりながら読書の時間を過ごすことにした。じゃれ付いてくるキールとの、まったりとした癒しの時間は、こここの所忙しかった孝和の心と体を十分に癒してくれた。

「ああ、よく寝た。い〜い感じだ〜」

体の節々を良くほぐし、ベッドから抜け出て大きく伸びをする。

ルミイ村から出発してからこれまで、いろいろあつて体に無理もきっていたのだろう。筋肉痛も無く、体が存分に動く幸せをかみ締める。「さて、顔でも洗って今日の仕込みの準備でもするか」

そういうとまだ寝ているキールを隣のベッドから抱きかかえ、1階に向かった。いまだ寝ぼけているのか、抱きかかえられ起きたばかりのキールの一言目は『ご、ごはんなの？』だったりした。

臨時コツクの孝和の2日目の最初の仕事は、ハンバーグの仕込みと調理法の伝授であった。焼き方については、時間をかけてしっかりと教え込んだ。この世界には、冷蔵庫が無い。食中毒を心配したからなのだが、この世界には魔術が存在していた。食材を保管するため、冷蔵庫の代わりに初級水術の氷結が普及していた。食堂や酒場の従業員には、大体1人〜2人くらいの割合でいるらしく食材は新鮮に保管することが出来るようだ。このことは、向こうの世界では、その入手に戦争まで起こったスパイス類が安価に入手できるこ

とに繋がっていた。昨日、剣を預けたあとに訪れた市場にはスパイス類を取り扱う商店もあり、安価で様々なものが売られていた。これにより、粗引胡椒と塩のみの、肉の味を楽しむタイプのハンバーグと、昨日のソースをかけたタイプのハンバーグを提供できることになった。

「じゃあ、タカカズ。今日のその賄い料理はなんだ？」

ダッチは、ハンバーグのレシピを書きとめた後、孝和に尋ねた。孝和の作る次の料理に興味があるようだ。

今日のメニューはまず、マヨネーズを卵、酢、油、塩、胡椒で作った。キュウリ、ジャガイモ、ハムのベーシックなポテトサラダをこれを利用して作る。

次に、トマトを加熱して裏ごし、コトコト煮込む。砂糖に塩、酢、胡椒を加え、玉ねぎのみじん切りを加えた。手作りのトマトケチャップだ。これでオムライスを作った。もちろん上の卵は「ふわとろ」でなくてはならないのだ。

この2品を作ったのには訳がある。この世界で生きていくと決めたのはいいが、それには食の充実が必須なのである。食材の保存にスパイスが要らないように、ソースや調味料、美味な保存用食料（ハムは有ってもサラミとか無かった。魚の干物とかも）も発展していない。とりあえず、この世界に無い調味料が受け入れられるのであれば、いろいろと自分の好きな料理も作っていくことが出来るだろうと思っただのだ。結果は、目論見どおり。むさぼるようにダッチ以下料理人どころか、なぜか午後出勤のはずの通いの従業員までがそれらを平らげた。大成功である。

これが発端となり、しばらくの間マドックにはこれらの調味料を利用する料理が次々と作り出されるのである。

午後には、かなりの数の客が『陽だまりの草原亭』にやってきた。

「招きスライム」のキールを目当てにである。さらには、それをターゲットとした酒場の新作メニューも一躍買っている。昼時の混雑がひと段落つき、休憩時間に入る。今日は、このまま臨時コックは休止して、外にいるいる見に行きたいものがあつた。その旨は昨日のうちにダッチに伝えてあるので休憩と同時に孝和は、軽く挨拶して外出することにした。

今日はキールは受付で留守番だ。タバサにもそれは伝えてある。どうやら、昨日孝和がキールを連れ出してから受付で一悶着あつたらしい。まあ、詳しいことは知らないほうがいいだろう。きつと、キールに嫉妬してしまうから……。

「ああ、ここがそうなのか。聞いたとおりわかりやすい場所にあるなあ。店構えもデカイし」

孝和が訪れたのは、マドックで評判の防具の専門店だ。店の中は冒険者や、そろいの制服を着たこのマドックの治安部隊と思われる人たちが溢れていた。昨日は武器のメンテ、今日はデュークに切り裂かれた皮鎧の代わりになるものを用立てに来ていた。

「へー。こんなの誰が着るんだ？」

孝和の目の前にあるのは、所謂フルメイルプレートである。ゲームなどでは、騎士なんかは装備している全身鎧だ。しかし、実際見ると防御力はあるそうだがどう考えても、これを着て移動なんてできそうに無い。暑苦しそうだし、もし火術とかで攻撃されたら全身大やけど確定である。形式美以外に実用性であるのだろうか？

冷やかして見ていたそれにそんな感想を抱いて次に移る。店内はぎゅーぎゅーだ。こんな場所にキールはつれて来れないだろう。やはり、今回は一人でよかった。

「これ、すごいな。どれ位するんだろう？真ん中の宝石つて、ルビィ？」

今見ているのは盾である。全体が白い金属だが、真ん中に大きなルビィが付けられている。よくみると、そのルビィの中には魔術式

が刻まれている。真龍の知識を利用して判断したが、高位の火術が封じられているようだ。

「お客様、そちらにご興味がおありですか？」

じつとその盾を見てみると、店員の男性がこちらにやってきた。ぱりっとしたスーツのような服装で、仕事が出来そうだ。

「いや、見てただけですよ。さすがにこんな高そうなもの、買えませんが」

冷やかしなんです。と正直に白状する。

「実は、先日皮鎧が壊れまして、代わりになりそうなものを探してるんです。できれば前までと同じような素材のものを探しているんです。これなんです、ありますか？」

そういうと、ダンブレンの店の鎧のパーツを店員に手渡した。一部だけだが、洞窟から帰るときに回収してきていたのだ。

「では、拝見します。ふむ、こちらは黒狼の毛皮をなめた物に、裏にマウラ杉の表皮で補強してあるものようですね。こちらはお返しします。お客様は剣はお使いになられますか？それとも槍でしょうか？」

孝和に鎧のパーツを返却し、店員は尋ねた。

「剣を使います。よくわかりますね。これだけで？」

孝和は感心した。さすがはプロだ。

「いえ、こういった軽めの素材に、補強だけということとは戦士職の方が多くですから。それにお客様の先ほどの足裁きはそういった方に多いもので」

どうやら、任せても大丈夫なようだ。孝和はその店員の見立てに従い、軽装の黒狼の鎧と、硬系を編みこんだ鎧の2種類を勧められた。実際に装着してみて、結局最初と同じ素材の軽装鎧に決めた。硬系鎧も、プロが選んだだけあって、かなりの品ではあったが、少し肩にかかる重量がネックとなり、剣を2本持って振り回すには難しかったため、あきらめた。

購入した鎧はそのまま着たままで、帰宿することにして料金を支

払い防具店を後にした。

帰りがけに、果物屋でおそらく柑橘系の果物だろう物を何個か選
び、購入して『陽だまりの草原亭』に帰った。鎧の寸法を合わせた
り、いろいろ寄り道したのですすでに周囲は真つ暗だ。戻ればちよ
うど夕食となるだろう。

「ただいま戻りました。キールいますか？」

食事の前に受付に寄り、キールを探す。しかし、どうやらタバサ
もキールもない。タバサの代理の受付女性に聞くと、どうやらす
でに酒場のほうに行っているらしい。

「今日は臨時で酒場のほうは閉めたんです。女将さんも一緒にそち
らに行つたみたいですけど」

とのことだ。臨時休業？そんな予定は無いはずだが？

「じゃあ、酒場に行つてみるよ。ありがとう」

礼を言うと、受付女性は満面の笑みを浮かべている。何だろう？
その態度に疑問を感じながらも孝和は酒場のほうに向かって歩き
出した。

「ばっはははは！どうだ！これが……！」 「そうだ！これがあれば、
あいつらに……」

酒場からものすごい大声で怒鳴り声が響く。誰か酔っ払って、暴
れているんだろうか？

そんなことを考えながら酒場に足を踏み入れる。そこには昨日は
いっぴいだつた客席がガラガラという光景が広がっていた。

「タカカズ！ やつと帰ってきたか！」

そういったのはダツチだった。孝和に気づき、奥のテーブルから

両手をぶんぶん振り回している。そこには20名ほどのグループが宴会をしているようだった。ダッチはどうやらかなりのアルコールが入っている。顔どころか首もとまで真っ赤であった。

他のテーブルの上には椅子が載せられ、奥のいくつかのテーブル以外は片付けられているようだ。タバサは、確か隣の雑貨屋の女性と話していた。キールはその二人の間ではむはむと野菜をついばんでいるようだ。

「何かあったんですか？今日は夜の営業をするって話だったんじゃない？」

そう聞いている。その分も含めて昼前に、ダッチと木製のジョッキが砕けるような豪快な勢いの乾杯をしている肉屋の親父が肉の納品をしているのを見ているのだ。

「実はだな、タカカズ」

がっしと、肩をダッチに掴まれる。かなり目が据わっていて怖い。なんだろう。

「まあ座れ。話はそれからだ」

そのまま、さっきまでダッチが酒を酌み交わしていたテーブルに拉致される。酔っ払いに逆らってはいけない。この対処法はひとつ。自分も酔っ払うしかない。

目の前に突き出されたジョッキの中にはエールがなみなみと注がれていた。あまり酒に強くないが、仕方ない。ぐっと一気に半分ほど飲み干す。混沌としたそのテーブルには、ダッチと同じような真っ赤な顔の親父連中が集まっていた。女気などまるで無い。隣のテーブルにはタバサのほか、それと同年代のレディたちが、キールと戯れながらチビチビとワインを嗜んでいた。できればあちらのテーブルのほうがありがたい。しかし、キールのお土産の果物は、すでに孝和の手から離れ、タバサの手に移ってしまっていた。

「実はな、タカカズ。お前はマドック商店祭の第3商店区画の実行委員《料理部門》に選ばれた」

「……は？え、と、状況が全く見えませんけど？何言ってるん

です？」

「まあ、簡単に言つとだ。昨日・今日とこの店の売り上げは過去最高額だった！完売万歳！皆！拍手！」

何が簡単に言つと、だったのか。ダッチは急に立ち上がり、周りに拍手を求めた。

おい。待て。酔っ払い。

そのまま、隣の親父と乾杯を始めたダッチはどうにもならない。

仕方なく放つておいて、まだ話を聞いても大丈夫そうなタバサに話しかけた。

「すみません。説明お願いします……」

「ああ、実行委員とかはジョークさ。酔っ払いだから気にしないでいいからね。まあ、来月にこのマドックで商店が主催するお祭りがあるのよ。そこで、今日から売り出されてるこの店の看板メニューで、他の通りの商店街に勝負を挑もう、ということになったのさ」

タバサもかなり酒が入っているようだ。顔はかなり赤い。

『ますたあゝ。がんばやれえゝ。えへえええゝ』

「！キ、キール？お前、酔っ払ってるのか？」

『ほおう、はつはあう。きもちいいかもおゝ』

念話であるというのに、その意思がふにやふにやで酷く判りにくい。いろいろな雑念が入ってきているようだ。完璧に酔っ払っている。

「タバサさん！なんで、キールに酒なんて……」

呆れ返つてしまう。とりあえずさっきのタバサの解説への説明は後だ。キールを正気に戻さなくては。

キールを持ち上げそのまま宿の受付に駆け出す。ここよりはいいだろう。受付の女性にキールを預け、テーブルから持ち出した果物と、水を手渡した。何とかこれで酔いが醒めればいいが……。

テーブルに戻るとさらに混乱は深まっていたようだ。タバサの横に座り説明の続きを聞くことにした。

キールが酔っ払ったのは不可抗力であった。テーブルにこぼれたワインから間違って吸収してしまったのだ。まあ仕方ない。

ダッチとタバサの言っていたことの要点を押さえてみた。わかったことは来月祭りがある。各商店街の対抗戦のようなものが行われる。その料理部門に『陽だまりの草原亭』が出場することが、昨日今日の客の入りで決定した。と、いうことであろう。多分。

「でも、料理じゃなくて、キールの人気で人が来てたんじゃないんですか？」

「まあ、それもあるんだけど。あんたの料理も結構話題だったのよ。今日の賄いも試しに出したら、大人気だったし」

あの二つを出したのか。まあ、シンプルで解り易いか。それに、マヨネーズとケチャップのお披露目としてはいいかもしれない。流行るといいなあ。

そんなことを考えて、ジョッキのエールをちまちまやりながら、ここまでの経緯を聞いていた。

「それで、あんたにはうちのシェフとして、大会にでてもらうことになったから」

「あ、そうなん……。ごはっ。ぐええ。な、何ですって？」

いきなりの展開にむせた。盛大にエールが床にぶちまけられる。

「ほ、本人の了承はないんですか!？」

「いいじゃない。結構、料理するの好きなんでしょ？その代わり来月のお祭りまで、あの部屋代と食事代は半額にしてあげるから」

「……やります。やらせていただきます」

よかった。冒険者で稼げなければ、そんなに長く資金がもたないはずだったのだ。調べたところ、孝和の奥の手だった竜の鱗は、王都の魔術ギルド以外では取引できる場所が無いようなのだ。王都までは馬車で15日ほどかかるらしい。そこまでの旅費も無いのだ。

何とかマドック周辺で拠点を見つけ、稼がなくてはならないと考えていた。この提案は願ったりかなったりだ。悲しいことだが、プライドだけでは食っていけないのだ。

その日は、マドックの商店祭に向け、第3商店区画の結束を確認する名目で深夜遅くまで宴会が続けられた。結果、孝和はかなりの寝不足で次の日を迎えることになる。

この次の日、そんな状態の孝和と、少量のアルコールに二日酔いとなったキールは新しい一歩を踏み出すことになる。目指す先は冒険者ギルド。こうして二人の前に、新たな道が開かれるのである。

第12話 怠惰な2日目（後書き）

ちょっと軽いノリの話ですが楽しんでいただけたら幸いです。

第13話 プロフェッショナル（前書き）

いつものことながら、誤字脱字ご容赦ください。

第13話 プロフェッショナル

孝和はいま、ボルドの店に向かっていた。先日の剣のメンテナンスと、鞆の用意が出来ているはずである。それが終わればギルドに向かう予定なので、今回は鎧も籠手も宿においてきた。今の所持品は、背中のリュックと、この中身だけである。ただし、今回は

「ますたー。ごめんね。ほんとにきもちわるくって……」

キールがそのリュックに入っている。昨日のバカ騒ぎで間違ってワインを吸収したせいで、完全に二日酔いになってしまったらしい。吸収したのはテーブルで倒してしまった1杯分だけらしいが、いつも朝に平らげるタバサの特製サラダは、そのままほとんど残されてしまい、デザート用のオレンジだけを食べて今の状況に至る。そのサラダは孝和が食べた。その際、昨日作ってみたマヨネーズをつけて食べているのを発見された。これにより、キール用の特製サラダはまた、酒場に看板メニューのひとつとして並ぶことになるのである。

まあ、それはそれだ。確かにキールは気持ち悪いだろうが、ギルドにプレイスカードを貰いに行かねばならない。

「いや、気にするな。でも、ほんとにキツイなら明日にするか？別に俺はそれでもいいけど」

『うっん。がまんする。たぶんだいじょうぶだから』

キールが強行に行くと言ったので孝和が背負って行くことになったのだ。まあ、午前中はこのままボルドのところまで剣の状態確認をしないとイケない。そこでキールだけでも休ませてもらうことにしよう。ミーナはキールのことを気に入っているようだし。

「もうすぐボルドさんの店だから。がんばってな」

『うん……。わかった……。』
やっぱり元気が無い。今後は絶対にキールの近くで酒盛りはしないぞ、と孝和は決めたのである。

そんなキールを背負って孝和はボルドの店に到着した。しかし、おとといは「商い中」であったドアの看板が、今は「閉店中」になっている。

「?おかしいな。確か、今日には全部仕上げとくって話だったのに」
そう思っ、ドアに手を掛ける。するとドアはキキイと音を立て、少し動いた。

不思議に思い、そのままドアを押し込む。ドアに鍵は掛かっていない。顔だけを店内に突っ込み声を掛ける。

「すみませーん!! 剣取りに来たんですがー! どなたか居ませんかー!」

「はい。今行きますねー」

カウンターの奥から声が聞こえる。バタバタ音が聞こえ、ドアが開いた。出てきたミーナが入り口の孝和に気付く。

「ああ、あなた。今日メンテナンスした剣を取りに来られたんですよ。どうぞ、お待ちしましたよ」

その言葉を聞いて店内に入る。今ボルドは寝ているそうだ。起こしてくる、というミーナについて二日酔いのキールを手渡し、しばらく見てもらうことにした。その際に一緒に「包み」を渡した。孝和たちが帰ってからボルドに渡してくれるようお願いする。

『じゃあ……ますたー。ミーナさんとやすんでるね』「大丈夫。私がしっかり見てるから」

ということ、キールはミーナと一緒に奥に引っ込んでいった。

「おう。待たせて悪いな。ちょっと疲れちまってな。すまん、すまん」

しばらく経ってボルドが、奥から布に包まれた剣を持って出てきた。その間、孝和は店内の品を見ていた。2日前に来たときより、壁に掛けられていたはずの名品が少なくなっている。なるほど、それでここのところ忙しかったのか。疲れるのも当然だ。大盛況だな。そんな風に孝和は考えた。

「じゃあ、説明があるからな。話してもいいか？」

「はい。お願いします」

まず、ボルドはシグラスの所の魔法剣を手を取った。そのまま孝和に手渡す。

「この剣、だいぶ長い間魔術店でメンテしてなかっただろう。ほとんどの力が放出されて、ただの切れ味のいい長剣になってたぞ」

繭を纏め、孝和をギロリと睨む。武器を取り扱う者としてこれは許せなかったのだろう。

「知人に譲られたのをそのまま持ってきたんです。そんな状態だったなんて知りませんでした……。すみません」

しょぼんとした孝和を見て、ボルドは大きいため息をついた。

「そうすると、お前。この剣の力どころか、名前も知らないんじゃないか？風の魔力が付与された名剣だぞ」

その言葉を聞いて孝和はうなずく。無銘だと聞いていたのだ。

「まあいいか。剣の名前は、ダウン・ブロウ。分解したら柄の下から出て来た。力は剣自体の重量を増大するものだ。使用者には重さが変わらないようになってる。かなり実戦向きに作られた品だな。製作者の趣味がなかなかいい」

そのとおりだ。剣に十分な重みを与えるのに、先人たちは腕力、重心の移動、剣術の修練などいろいろな努力や工夫を行ってきたのだ。シグラスの鱗を斬るために、重量を増やせる剣を用意した戦士

がいたのだろうか。結局は失敗したのだろうか、方向性として間違っているのではない。

「剣を握りめて、重量を増やすよう念じれば発動する。まあ、全部の説明が終わってから試してみる。次はこの剣だ。まあ、特に魔力も無かったから少し歪んでいたところを修正しておいた。名前はなにようだ。これも後で、な」

ボーンソルジャーの剣を渡される。なんか扱いが雑だ。これもなかなかの名剣のはずなんだけれど。どこかしらボルドが焦っているように孝和には感じられた。

「では、これが最後だ。ジ・エボニーとそれに合うよう俺が作った鞘だ」

ボルドは一言一言をかみ締めるように孝和に話しかける。

「おお。すごいですね。さわっても？」

孝和はボルドからジ・エボニーを受け取る。その鞘はジ・エボニーに合わせて、全てが漆黒であった。刀身を包み込むような闇色。無駄を省き、純粹にジ・エボニーのためだけの専用の鞘である。金属の感触があるというのに、全く光沢がない。かといってそれが変だと感じることは全く無い。軽く握り返すたびにしつとりと手に吸い付き、しかも予想以上に軽い。孝和の知る限り、こんな鞘を作れるような技術は無い。それは真龍の知識の中にも無いようだ。

「いい感じですよ。鞘自体の強度はどのくらいですか？」

「全力でやれば、鞘単体で岩を砕くくらいできるように魔術強化してある。鉄杖の様な形で利用できるだろう。後は念じれば、魔力を吸収、放射して攻撃魔術を無力化できる。防御に必要な魔力はお前じゃなく、ジ・エボニーから取り込む。まあ、無いと思うが戦略級魔方陣を利用した広域型の攻撃術でも無力化が出来る。安心して攻撃術を打たれたら体の前に鞘を構えろ」

……いや、そんなとんでもない魔術に攻撃されるようなことなんてないぞ。多分。

「あ、ありがとうございます。ものすごい物作ってもらったようで

……」

本当に悪いな。やっぱり「あれ」、渡しておいてよかった。

「気にするな。間違いなくワシの最高傑作だ。存分に使え。粗末には扱うなよ」

「当たり前じゃないですか。本当にありがとうございます」

深々と頭を下げた。では、一応ボルドを疑うわけではないがこれらを試してみなくては。

「全部の状態確認をしたいので、キールを呼んでもらえますか？」
そう、怖いけど確認は大切だ。

キールを呼んでもらい、それまでの間に軽く剣を振るうことにした。店内は素振りなどをするため、少し中心は広く作つてある。ダウン・ブロウト、片刃の剣（名前がないのはどうかと思うのでエッジと命名した）、ジ・エボニーの順で鞘から抜き、それを振るった感触を確かめる。全部微妙なところだが、少しだけ重心が自分の望むところとずれている気がする。ジ・エボニーに関しては振るうたびに剣閃に闇がまとわりついているのを感じる。呪われる事は無い、とボルドには言われたが、目視できるほどの闇を纏う剣は危なくはないだろうか……。ジ・エボニーは刀身に闇を纏う以外は通常の剣として使えるらしい。上級の魔術の媒体として、魔術も強化できるのがこの剣の特徴だ。しかし、
（俺、こないだから練習してるけど、1回も魔術使えてないんだけどな……）

と、いうわけなのだ。せっかく購入した『魔術師への第一歩』は孝和自身には全く無用の長物と化している。全属性の全ての初級術を試したが、まるで使える気がしない。

まあ、重心のずれだけをボルドに伝え、微調整をお願いした。ジ・エボニーを使うかどうかは孝和が判断すればいい。キールとミーナ

はそのやり取りの間にすでにこちらまで下りてきている。

『ますたー。すごいよ。かっこいい!!』

キールは剣の微調整の為に見せた、孝和の一連の剣舞に見とれたようで興奮した様子だった。ぴよんぴよんカウンターの上で飛び跳ね、孝和を賞賛する。大量の水をミーナからもらい、何とか二日酔いは治ったそうだ。これならば、頼めるだろう。

「なあ、キール。頼みがあるんだが」

『なーに？ぼくにできることだったら、なんでもするよ』

孝和は苦笑する。ここまで慕ってくれるキールに頼むのは少し心苦しい。腰を落とし、キールの目線に自分の目線を合わせる。

「お前、俺に光輪フレイズ・リングを撃ってくれないか」

『え？な、なにいつてるの？ま、ますたー？』

長い長い孝和の説得が終わり、やっとキールが光輪フレイズ・リングを撃つてくれることになった。最後のほうにはキールの念話は泣き出しそうな様子に聞こえた。あとでしっかりと慰めてやらなくては。

『じ、じゃあ。うちまーす。ますたー、あぶなかつたらぜったいに、よけてね』

いまだ、心配しているキールを安心させるようにニコリと笑う。

それを見て、キールの体が淡く光る。孝和の前にはジ・エボニーの鞘がある。鞘にジ・エボニーがなくても効力は変わらないらしいので、これでいい。

孝和も怖いには怖いだが、いざとなればキールの神の祝福ユット・プレスがある。

何とかなるだろう。

『光輪フレイズ・リング!』

キールから光の輪が放たれる。それと孝和の線上に鞘を構える。衝突の瞬間に力を込め、両足をしっかりと踏ん張る。

「!?!?」

いま、孝和に光輪フレイズ・リングが衝突した。しかし、全く何も変わらない。ぶつかつた衝撃、光、熱、全くないのだ。鞞フレイズ・リングに触れるか触れないかの瞬間、光輪が光を失い、消え去つた。実験は成功だ。知らず知らずのうちに、汗が背中から噴出す。よかつた、よかつた。

『ますたー！ー！』

かなりの勢いでキールが跳びかかってくる。それをしつかりと抱きとめる。ごしごし孝和に体を擦り付けてくるキールが可愛かつたので、よしよしとなでてやる。念話は『ますたー。ますたー。ますたー』としか聞こえないので甘えているのだろう。笑みが口元に浮かぶ。こんなキールもまた、良い。本当に、良い。

そんな孝和とキールの戯れの真つ最中に戻ってきたボルドから、再調整を行つた3本をまた受け取る。今度はいい感じだった。まさにぴつたり、孝和の要望どおりである。

今後もメンテの際にはボルドに頼めるか聞いてみると、「必ず、ここに来い」と物凄い圧力で言われた。確かにメンテは大切だし、ボルドは信頼できるプロのようだ。今後もひいきにするのは決定事項だったので、これもOK以外の返事は無い。

そのまま、お礼を言つて孝和とキールは店を出た。孝和は店を出てから、深々と頭を下げた。

「代金の代わりだけど、あれ、気に入つてくれるといいんだけどな」
『だいじょうぶだよ。ボルドさんもミーナさんもいいひとだから。』

きにいつてくれなくても、きげんわるくは、ならないとおもつけどキールもこう言っているし、大丈夫だろう。もし、駄目なら今度正式に代金を払えばいい。そう考え、二人は冒険者ギルドに向かつてたのであつた。

孝和とキールが帰ったあと、ボルドはミーナとお茶にすることにした。もちろんドアの看板は「閉店中」のままだ。

「なかなか、すごい奴だった。さすがジ・エボニーの持ち主だ」

ミーナに入れてもらった紅茶をずそぞつ、とすすする。

実はボルドは少しだけ3本の剣の重心を、孝和が好みそうな戦闘スタイルの重心からずらして、調整してみた。ジ・エボニーの持ち主としてふさわしい男か試したのだ。結果は見事その違和感に気付き、再調整となった。しかも孝和の素振りの剣舞は、思わず見とれてしまった。多くの戦士を見てきたボルドにして、あの実力で今日やつと冒険者になる、というのはたちの悪いジョークでしかなかった。

「どんな戦士だ、ありゃあ。アンバランスさが凄まじ過ぎるぞ。全く」

とはいえ、ジ・エボニーの鞘は確かに、今まででの最高傑作と断言できる。これを渡すのに技量の無い戦士では許せるはずが無い。何しろこの鞘の素材のハイ・マテリアルを精製するのに、かなりの数の店内の名品を鑄潰して用立てた。ドワーフの錬金術の中でも、ハイ・マテリアルはかなり上級の精製術なのだ。必要な金属が工房内だけでは足りなかった。だからといって、中途半端なものを作りたくない。ミーナに直に出向いてもらい、他の工房から金属を借り入れたが、それでも足りない。仕方なく過去の名工の作品に手を出したが、その名工たちにも言い訳の聞く見事なものができたと自負している。神器を収める鞘なのだ。自身の最高でなければ、ボルドは死ぬまで後悔しただろう。

「ああ、そうだ。タカカズさんが、あなたに代金の代わりだって言っただけで置いていった物があるのよ。持つてくるわね」

「なに、代金はいらんというのに……。律儀だな。珍しい奴だ」

ちょうど座っていたテーブルに立てかけてあったそれを膝の上に乗せ、ミーナは差し込まれた手紙に気づいた。手紙はボルドに手渡した。物自体は布にしっかりと包まれている。

手紙を開いてボルドは内容を読み上げる。

「なになに、」中にある一枚は、何でもいいから使いやすい装備を作って欲しいので、素材としてお渡しします。もう一枚は今回のメンテ代と、これを使った装備の代金としてお受け取りください。失礼かもしれませんが、直に受け取ってもらえそうになかったもので、また今度のメンテのときに取りに来ます。よろしくお願いします。』だ、そうだ」

「ほんとに律儀ね。タカカズくんも。キールちゃんも可愛いし。あんまり正直すぎる冒険者っていうのも苦労しそうだけど」

そういつて二人は笑い合う。しかし、これからどうしようか、というのが本当のところだ。他の工房からの借り入れの返還やら、仕入れの代金をどうしようかと迷っていた。ジ・エボニーの鞘を作ったことに後悔は無いが、明日以降の食事にも困りそうだ。

そんなため息をしたボルドの前で、ミーナが包みに悪戦苦闘していた。かなり頑丈に縛っていたので苦労している。その様子にボルドは、自分がその包みを開けようと手を伸ばした。

ゴロンと、布から孝和の依頼素材が出てきた。少しくすみがあったが、確かにそれは

「りゅ、龍の鱗？」

「あ、ああ。確かにそうだ。下位の雑種龍じゃなくて、野生の上位龍のものだ……」

さすがはこの道で生きてきた二人だ。まさにプロフェッションナル。そこまでは見ただけでわかる。しかし最上級の真龍の鱗であるとはわからなかった。

孝和は高級素材の工賃として真龍の鱗を譲渡した。換金できるところは限られるが、個人の譲渡はOKだということらしい。真龍の鱗は素材として50年に1回市場に出るかでないかというものであった。この時点で、ただの龍の鱗であっても、かなりの値段である。孝和の支払いによってボルドは、窮地を脱したことを、信仰している鍛冶神グインに感謝した。

後日、詳細な鑑定により、自分の手元の龍の鱗が真龍の物と気付いたときには、ボルドは呆然と立ったまま意識を失うことになるのだが、それは今、誰も知らないことである。

第14話 冒険者として(前書き)

誤字脱字ご容赦ください。

第14話 冒険者として

ボルドの店からギルドに向かう途中、昼の少し前だったので、入ったことの無い食堂をたずねてみることにした。来月の祭りの前までに、どんな料理がこの土地の人に人気があるのか、調査をしなくてはならない。日本にいた時の趣味は食べ歩きだったので、全く知らない店にいきなり行くことも多かった。ふと見つけた食堂に決める中に入る。

「いらっしやいませ。こちらにどうぞ」

店員さんに店の奥に案内される。キールの同席も許可してくれた。どうやら店長の奥さんが、昨日キールに会いに来ているらしい。店長からも直接挨拶を受けた。

それはそれとして、昼食である。

「うーん……。なんか、今ひとつなんだよね。薄い、というよりは旨みが足りないのかな？」

『おいしくないの？ますたー？』

『いや、そうじゃなくて。あと一味あればもっと美味しいのになあ、ってことだよ。この人には内緒だぞ』

『わかった。おこられたくないもん。しずかにしてまゝす』

そんな内緒の念話をしながら、黙々とテーブルの料理を平らげていく。

キールには果物の山盛りを、孝和は牛肉の煮込み系を一品と、スープを注文した。結果、口にした食事自体の塩味はある。ルミイ村の食事は塩の運搬の都合で入手に難が有り、ああいった極めて薄味のものとなったのだろう。

だが、このマドックでは塩は十分に手に入る。過去、戦争中はどうだったのか、ということとはわからない。しかし今現在、交易で港

町ポート・デイより安価に仕入れることが毎日の冷やかしの調査により判明した。このマドックより約5日の距離であるらしいので、海の幸を仕入れるついでに、昆布でも手に入らないものか行ってみようかと考えている。

旨みが欲しいのなら、ダシである。シイタケがどこかに無いか調べてみたのだが、このあたりの植生はアジア方面に近いようだ。しかし、不可思議な植物や動物がいるのだ。本当にもとの世界と同じものと断言できないところが怖い。それになぜかマドック周辺は広葉樹自体が少ない土地柄のようで、シイタケやマツタケの様なタイプの、きのこ類は見つかりにくいかもしれない。きのこの栽培技術については種菌を埋め込む、湿気の多いところで育てる、くらいしか覚えていなかったため、この世界で役に立つかどうかは微妙なところだ。ただし、麹は見つけた。ここより東の地域には麹菌があるようだ。つまり、醤油・味噌の生産も可能である。さらには、日本酒や泡盛もいけるかもしれない。

すこし話がずれたが、山のダシが無理ならば、海のダシである。あまりこの辺りには入荷しないが、この国があるフォロン大陸の北にある極寒のオクル諸島には、どうやら海産物が豊富にあるらしい。普段の食事だというのに、その辺りの海藻類に昆布があればいいな、と考えている。

来月のマドック祭に向け、真剣に準備を始めている孝和であった。

ギルドに到着したのは2時を少し過ぎたくらいだった。なんだかんだで、昼食から、かなりの時間が経ってしまった。最後のデザートのが常に果物などであったところに、不満感が残ってしまい、今後のティータイムのため、いろいろ作るうと材料がどんなものがあるのか、商店街でふらふらとしてしまったのである。キールはお買い物が好きなので、いろいろ連れまわしても文句も言わず、逆に楽

しそつであつた。

そんな本来の目的と全く違つことをしていたが、とりあえず、今日の本題。ギルドの入り口前に到着した。

「よし！カルネさんのところに行くぞ！」

『うん！いくぞー！！』

と意気込んだ割には、前回と同じようにこそそと、併設された酒場からの視線から逃れるようにカルネのいる受付に向かつた。

前と違い、今回は視線に違つものが感じられる。どうやらそれはキールに向けられるものであつた。数人のおねーさんがキールを優しい眼差しで見つめている。孝和のあとをぴよんぴよん飛び跳ねながら付いて来る様子を見て、ホウ、とため息をついていた。

一方、『陽だまりの草原亭』の「招きスライム」を知らないものは前回と同じように、新人の孝和とキールを値踏みしていた。

どうも、このギルド内は居心地が悪いので孝和は好きにはなれなかつた。ここで働いているカルネを本当に尊敬する。こんなところで毎日働けるようなカルネはやはりすごいんだなあ、というおかしな関心を孝和は抱いたのである。

受付にいろいろな視線を感じながら到着する。ちよつと、受付にはカルネが居た。

「カルネさん。プレイスカードの受け取りに来ました。キールの分と合わせて2名分、お願いします」

「お待ちしてましたよ。今日受け取りにこられるのに、全然来ないからどうしたのかしら、つて思つてたんですよ？」

「少しだけおどけて、不満げな様子をカルネは表してみたようだ。」

『ご、ごめんなさい。おかいものたのしくて、おそくなつちやいまして……』

ジョークであると解らなかつたキールが、本当に申し訳なさそうに謝る。それに、カルネが慌てた。軽いジョークだったのにキールが本気で受け取つてしまい、説明どころではなくなつてしまつたの

だ。

結局、キールに冗談であることを納得させるまで、プレイスカードの交付はストップしてしまったのだった。

「では、カードの説明に参ります。よろしいですか？」

場所を受付の中テーブルに移し、カードの交付になった。

孝和は軽くうなずく。キールのテンションも元に戻り、うきうきしている様子が伺える。

「こちらがタカカズさんのカード。こちらがキール君のカードになります。名前の確認をお願いします」

テーブルに名前の記載された黄色のカードが置かれる。キールも文字は読めるので、本人に確認させる。よし、間違いない。

「大丈夫です」『だいじょうぶだよ』

二人の声が重なってカルネに届いた。

「名前が間違いなければ、次に進みます。カードを胸の前にかざして軽く念を注ぎ込んでください。そんなの解らない、って人は大体のイメージをお願いします。結構それでOKだったりするので」

かなり適当であるが、念じるのは個人個人なので一概に「これ」というやり方は無いのかもしれない。言われたとおり二人はカードを持って念じ始めた。キールは自身にカードを立てかけ、念を送る。しばらくすると、キールのカードが、ふっ、と一瞬光った。そのすぐあとに孝和のカードも光を放った。

「では、これでカードの交付は終了です」

唐突にそう言われた。これで、終わり？

「あ、交付は終わりましたけど、この後はカードの説明ですから「そうですね。あれで終わりだったら困っちゃいますし」

冷や汗が出た。もしかしてプレイスカードの説明なんて、この世界では常識なのかも知れないと思ったのだ。

「じゃあ、二人とも。カードの中身がさつきと変わっていると思うので、確認してみてください」

その言葉に従い、カードを確認する。先ほどまでは名前しか書かれていない状態であったのに、今はそれ以外に様々な項目が増えている。

「!!!?」

孝和は「それ」を見たときに声を出さなかった自分を褒めてやりたかった。

「どうかしましたか？孝和さん」

声はでなかったが、表情まではさすがに無理だった様だ。

「いえ、あの、聞きたいことがあるんですが。いいですか？」

「ええ、どうぞ。何でしょうか」

「このカード、いきなり書かれてあることが増えたんですけど。ギルドで書かれてたのが浮き出てきたんでしょいか」

カルネは孝和が驚いたのは、記載内容が光と共に変化したためだと思った。

「いえ、違います。プレイスカードに各ギルドが記入するのは名前のみ。新しく書き出された内容はこちらでは全く関知しません。冒険者のプレイスカードに新しく書き出されるのは、旅立ちの神ハムスト、誓約の神ホルの2柱がその人の身分と才能を記したものです。神々の保障した身分証ほど確かなものはありませんから。冒険者ギルドは仕事の関係もあって、個人的な強さや才能を明記されるんです。詳細は裏側に書かれています。後で確かめてくださいね。その辺りは魔術師ギルドや商業ギルドなどのほかのところのプレイスカードは全く違う様式になっていますから、戸惑う方もいらっしやいますけれどね」

「あはは。そうなんですか。（いやー、よかったあ……）」

深く安心のため息をついた。後半は消え入るような声の大きさだった。なぜなら、新しい項目にいくつか、どう考えてもまずいものがあるのだ。

例えば、【種族】。ここには普通、「ヒューマン」「人間」という単語が普通、入るはず。しかし、孝和の【種族】欄には、「龍血の異人」となっている。

さらには、【スキル】の欄には「ドラゴンソウル」という項目が存在する。これは、あまりにもまんまだろう。まあ、これで孝和はシグラスの後継者になった実感を深く感じたのだ。自身が微妙に人外だ、というのは少し寂しいものを同時に感じさせた。

カードに記入されたこれらが、ギルドの調査の結果であれば、孝和の身の上はばれている事になる。しかしこれらの項目の管理は神々のものだ。と、言うことはギルドの人は孝和のことを知らない。逆にこの世界の神々は、孝和が異世界の人間だと知っていることになる。さらに、「神様」が実際にこの世界には存在している。今のところ全くりアクションは無いが、異世界の人間をこの世界の神々は受け入れてくれるかどうか全くわからない。一応、冒険者として認められたのだからあまり心配することも無いだろうと、楽観的に考えよう。でないと、不安で仕方ない。

「では、続けます。自分の強さや能力を隠しておきたい仕事もあるでしょう。その時は、上から軽く念じながらこすってください。それで、他の人には見えなくなります。元に戻りたいときは同様にすれば戻ります」

すぐに試した。力を込めて、ゴシゴシと。すると、【種族】【スキル】の欄はぼかしたように、全く元々なんと書かれていたか見えなくなった。

それを見て、ほっとした。これで、他の町に行ったりするときに問題は起きないだろう。異世界人です、なんて見せびらかしながら移動するなんてぞっとする。

『ねえ、ますたー。ぼくのこれ。なんかかいてあるの、ちがうとお

もう』

キールがそう孝和に言ってきた。どこのことだろう。

「あれ？ここ、変だな。確かに……」

二人が不思議に思っているところをカルネに聞く。ただし、カルネに渡す前に、こっそり念話で、【スキル】欄に書かれていた「龍の加護」という項目はキールに隠してもらおう。【スキル】欄の詳細は宿に帰ったらゆっくりと二人で確認しよう。

「あら、キール君ってスライムじゃないの？ホワイト・ジエムってなってるわよ？」

本当だ。【種族】欄にはスライムではなく、ホワイト・ジエムと記載されている。どういうことか孝和もキールもわからず、カルネは手元にブレイスカードの手引書を取り出した。その結果、キールはスライム類のモンスターではないことが判明した。

「それって、どういうことですか？キールはスライムじゃないってことですか？」

「そうですね……。調べてみたら、ジエムと名の付くモンスターは鉱物系の高級モンスターです。ただ、ホワイト・ジエムという種族はギルドの登録にも無いようです。スライムも広義で言えば鉱物系ですから。キール君は新種、といえるんじゃないかと思います。まあ、こんなにお話できるスライム君なんて聞いたこと無いですからね」

「ほー、と二人して感心した。当事者のキールは『なに？なに？』と心配そうに二人の間をうろろろしている。どうやらよくわからなかったらしい。これも後で宿に帰ったときに説明してやろう。お前はすごいモンスターなんだぞ、と。とりあえず落ち着けるためにキールを抱き上げ、なでなでしてやる。しばらくなでなでして、どうやら落ち着いたようなので話の続きをカルネにお願いした。

カードの各項目は他には力や体力、技術、魔力や知性などの項目がSS〜Gまででランク分けがされている。一般の人間の平均はDといったところらしい。しかし……

(F!？俺、F!？)

孝和の魔力はFクラスだったのである。これははつきり言うとして、才能が無い、ということでしょうね。残念ながら……」

カルネの孝和を見る視線が哀れみを帯びる。

……お願いだからそんな目で見ないでください。

「ますたー！だいじょぶだよ！ぼくががんばるから！」

キールが励ましてくれる。確かに嬉しいが、何でだろう。とても悲しい……。

ちなみにキールの魔力はBであった。これはベテランクラスの熟練者に匹敵する。さらに言えば、孝和とキールの知性は共にCである。これらの項目は今後の努力でも伸びるらしい。まだ20代なのだ。今後の成長の余地も少しはあると信じたい。

……がんばろう。俺。

こうして軽い心の傷と共に、これからの勉学と修練に励むことは確定事項となったのである。

「スキルについては、個人の資質や肉体的形質が現された物といえます。具体的には裏面に説明が出ますので、確認しておいて下さい」

「はい、ありがとうございます。後は何ですか？」

カルネの説明もこれで終わるらしい。次は……

「称号については、全て神々の気まぐれで授けられます。ほとんどの方はいつの間にか授けられていますので、気づかずそのままにしてしまう、なんてもったいないことがあります」

カルネは、そういつてカードの最後の辺りを指差す。ちなみにキールのカードには特に記載は無かった。しかし、孝和には一文が書き込まれている。

「あの、俺『食の開拓者』って書いてあるんですが」

「え？タカカズさん、称号持ちなんですか！！？」

かなり驚いた様子で、カードをひったくられる。あまりの勢いに驚いて座っていた椅子から転げ落ちそうになってしまった。

「タカカズさん……。これ、食の神フズの称号です。何かフズに関心をもたれるようなことをしましたか？」

カルネに尋ねられたが、どのことだろうか。調味料は何種類か作つたし、料理もかなり試作してダッチたちと話し合いをしている。そういつたことをカルネに説明すると、カルネは得心した様だ。

「おそらく、タカカズさんの料理が斬新であったのでしよう。その行為が、食の神フズに気に入られたのでしよう。人の生き様のうち、神々が自分の担当する分野に大きく影響を与えた人物に与えるものが、称号です。王家・神殿の授与する称号は、その国や神殿の信仰する神の代理人が許可を与えます。ですので、この場合はかなりの実績が必要でしょうね。そんな冒険者になれるようがんばってください」

なるほど、称号は神様が与えるものなのか。いくら自称しても認められなければ、無意味なのだろう。精進せねば。

「この称号って意味あるんですか？」

「ええ、さまざまな恩恵が受けられるのです。この場合も裏面を見てください」

そう言われて裏面をしてみる。この称号の効果は、「料理の細かい味がわかるようになる」であった。

「な、なんか微妙……」

「そ、そうですね……。ですが！もし称号で神に選ばれば、その神の亜神として死後天界に招かれるのです！！永久の命を得ることが出来るのですよ！！すごいじゃないですか！！」

正直、その意見には賛同しかねる。孝和は日本人である。諸行無常、盛者必衰、形あるもの全て壊れる、というスタンスなのだ。絶対なんてものはこの世には存在しない。永遠の絶対者などあるはずが無い。当然だ。

「いや、あんまし興味ないんで。これ、次の称号が手に入ったら無くなっちゃうんですか？」

「いいえ。一度手に入れた称号は、授与した神が取り上げない限りずっとそのままです。安心してください」

まあ、これもゆっくり理解していけばいいだろう。情報が多すぎて少し混乱してきたし。

とにかくカルネの説明は終わった。最後にここまでの説明をまとめた書物をもたらった。というか最初から渡してくれれば、中を確認しながら話が聞けたのに何でこのタイミングだったのだろうか？

がやがやと後ろのほうが騒がしくなってきた。なんだろうかと後ろを向くと、2階から多くの人が降りてくるのが見える。

「あの人たち、2階で何してたんですか？」

「ああ、講習が終わったんですよ。今日で3日目ですから、テスト中だったんです」

カルネはそう言った。講習？テスト？何のこと？それをカルネに尋ねる。

「一般の冒険者登録者の順序です。お二人は紹介状があったので、被紹介者と、その従魔として即席登録になったんじゃないですか」

「知らないですよ！あっちの方が安全だったんじゃないですか!？」

「そうですね？名づけての冒険者であったスパード氏の紹介があったので、最低限必要な戦闘力を確認したのがあの洞窟だったんです。スパード氏から何も聞いていなかったんですか？」

がくり、と首が落ちる。紹介状を出さなければ、あんな危険なことしなくてもよかったのに……。

「冒険者といっても、一概に戦闘力だけが全てではないですから。戦闘が全く駄目な学者さんも結構いたりするんですよ」

そうですね……。そうですね……。

普通に考えればそうだ。多種多様な依頼をこなすには、頭脳戦も必要であろう。さらに聞いてみると、遺跡調査の依頼もあるらしい。そのときには考古学の知識も必要だ。多くの人材の登竜門であるギルドの成り立ちを考えるべきであった。

「大丈夫ですか？タカカズさん」

「いえ、大丈夫です。ちょっと自己嫌悪しただけなんです」

「……がんばろう。俺。」

このあと、自己嫌悪からなんとか立ち直り、ギルドを後にした。

この後はボードセンターに向かう。孝和は冒険者ギルドで依頼が受けられる、と考えていたのだが違っていた。依頼はそのボードセンターで受けるのだ。ギルドは登録と、依頼達成時の報酬の支払い、素材の引き取りの際にしか利用しないそうだ。

「すごいな……。これが依頼用のボードなのか……」

孝和は目の前に広がる依頼の山に驚いていた。建物自体は冒険者ギルドと同じくらいなのだが、酒場のような付帯施設は全く無く、以前テレビで見たハローワークをさらに巨大にしたような施設だった。その壁や、通路の一面に依頼内容が簡単に書かれた紙が、雑然と張り出されていた。これらの依頼は、冒険者や魔術、商業ギルドや神殿、変わったところでは貴族から出されている。そのため、様々な内容の依頼をまとめてこのボードセンターで確認できる。自分の受けたい依頼を受付にはがして持って行き申請する。問題が無ければ、手付金を支払い依頼開始となる。失敗したときは手付金は没収になり、成功時は返金される。

「ねえ！ますたー！はやくGのぼーどにいこうよ！ね！ね！」

キールがそう孝和を急かす。今日はどんなものがあるかの確認で、受注はしない。そうは言っても、キールはものすごく興奮している。

実は孝和もつずつずしていたので、そのままキールと一緒にGのボード前に突撃した。初心者の2人は最低ランクのG、1ランク上のFまでしか受注できない。まあ、最初の肩慣らしではあるが、どきどきする。

「おう！楽しみだなあ」

「そうだね！たのしみだね！」

とことこ足早に二人はGのボードに向かうのであった。

「やっと来た！ずいぶん待ってたんですよ？」

Gのボード前に2人が到着すると、後ろから声が掛けられた。少し不機嫌そうな声色であったので、孝和はビクンとしてしまった。

「？え、と。どちらさまですか？」

「おねーさん。だーれ？」

2人は振り返るなり、同時にそう語りかけた。そこに立っていたのは、肩の辺りまでのさらさらの銀髪の女性であった。肌は透き通るようで、意志の強さを現す碧眼はこちらをまっすぐ見つめていた。地球では北欧系の部類に入るであろう。それを十分に生かしきる整った顔立ちに、ローブを羽織ったその姿は「美少女」の称号こそがふさわしい。もし自分が美をつかさどる神ならば迷わず、授与を決定するだろう。要するに、孝和の好みのド真ん中だった。

「私ですよ。アリアです！あの時は冒険者でなかったから、ベールしてましたけど！」

非常に心外だといわんばかりの勢いで返答を返す。

「アリアさん！？」 『アリアさんだ〜』

驚いてポカーンとした孝和と、嬉しそうなキールの声が重なった。

こうして3人は再会を果たしたのである。

第14話 冒険者として（後書き）

また、長々と伸びてしまいました。次回もがんばります。あと、お気に入り登録してください。皆様。ありがとうございます。ご期待に沿えるよう、誠心誠意がんばらせていただきます。

第15話 そして物語は走り出す(前書き)

誤字脱字ご容赦ください。

第15話　そして物語は走り出す

ボードセンターの中で、アリアは孝和たちが来るのをずっと待っていた。冒険者ギルドの受付では、冒険者同士のイザコザを避けるため、連絡先を教えることは厳禁だったのである。しばらく食い下がった結果、3日後に二人のプレイスカードが完成することを、こっそり教えてもらうことに成功した。アリアは自分の神殿で作った黒のプレイスカードの更新だけのため、2日で冒険者の登録が終了していたので、3日目の今日は朝からずっとこの場所で待ち伏せしていたのだ。

「とりあえず、場所を変えませんか？私、話したいことがあるの。ちよつと長くなりそうだし、ここじゃちよつとね……」

孝和が周りを見ると、男性陣が輪になるようにして周囲を取り囲み、聞き耳を立てていた。孝和とキールは知らないことだったのだが、朝からこの時間までボード前に佇んでいたアリアには多くのお誘いがあったのだ。「一緒に冒険しないか」といった仕事のお誘いから、「そこらの店でお茶でも」というナンパまで、考えうる幾通りもの提案を受けていた。その全てに男性として当然の下心があったのは言うまでも無い。ことごとくそれらの誘いを「待っている人がいますので」の一言で撃墜した来たため、「どんな奴がこの美人を……」という野次馬根性でこの場の全員がアリアと共に待っていた。

（またこのパターンか……。キールで女、アリアさんで男の嫉妬を受けるって……。俺、冒険者の友達とかできるのかなあ）

孝和にまったく責任は無い。だが冒険にも出ていないというのに、この嫉妬の嵐はたまらない。できるなら逃げ出したいのだ。提案には全力で賛成だ。

「じゃあ、外に行きましょう。アリアさん、どこか店知ってますか

？」

疲れた様子も見せず、笑顔になりアリアは答えた。

「ええ！少し距離はありますが、いい店があるんです。そこへ行きましょう」

年頃の女性ににこやかに笑いかけられ、その様子を見た孝和は目を伏せ真っ赤になったのだった。真っ赤になり反応が無くなった孝和を、キールは不思議そうに見つめることになったのである。

さて、時間は少しさかのぼる。具体的には、孝和たちが洞窟より帰還した翌日である。

「……ここは？私、どうしたの？」

目覚めるとアリアは周囲の状況を確認して、そう言った。目の前には神殿の職員がいるようだ。服装でそう判断した。確かマドックの神殿の職員のはずだ。

「よかった。目を覚まされましたね。外傷自体は全く無いようでしたので。これは祝福を受けたものです。ゆっくりと口に含んでください」

その職員は女性で、穏やかにアリアに語りかけ水差しとコップを差し出した。コップを受け取り、聖水を口に含み一気に飲み込んだ。どうやら体が水分を欲したらしい。もう一杯、水を飲み干して目の前の職員に先ほどと同じことを尋ねた。

「申し訳ありません。ここはマドックで宜しい？何故、私はこの場所に？」

「順番にお答えしましょう。ですが、まだ横になってくださいね」
そういつて職員はアリアの肩を掴み、そっとベッドに横になるように勧めた。ここは逆らわないほうがいい。そう判断し、横になると質問の返答を求める。

「まずここは確かにマドックの救護所です。あなたは昨日、冒険者ギルドの職員によりここに運び込まれました。その方の説明では、冒険者の審査クエストで騎士^{ナイト}クラス^の霊体にやられたあなたを、同行者の2名が連れ帰ったそうです。単身で騎士^{ナイト}クラスを討伐できるとは、流石は戦神ラウドの神官候補ですね。素晴らしいことです」

そういうと、彼女はきらきらした目でアリアを見つめた。神殿は世界神を頂点とする宗教である。どの神であれ全て世界神の神殿に所属している。彼女の首飾りから、癒しの神ヒラスティアの信徒であることがわかるが、戦神ラウドの神官候補のアリアにもその尊敬は及ぶのだ。神殿はどんな神であれ受け入れる。それは闇の神の眷属であつても例外ではない。

そこはいいのだが、間違えている。あのデュークを倒したのは自分ではない。両肩に手ひどいダメージがあつたおかげで、何とか意識を手放さなくてすんだのだ。闇を纏うデュークと、白銀のオーラを纏う孝和の一騎打ち。その光景は幼少時に憧れた勇者の姿であつた。最後の一撃がデュークの闇を打ち払った瞬間、アリアは気絶した。だが、あの光景が幻でないことは、ここに自分が生きていることが何よりの証拠だ。

「今回の試験に、初心者で対応できないモンスターが出た可能性がある」ということで、朝から調査にこの上級神官も借り出されたんです。他にもめぼしい町中の実力者がほぼ全員ですよ？全く大事になつているみたいですよ」

しばらく事態がどのように推移しているか、目の前の彼女から黙つて聞き取りを行つた。どうやら、今回の件は、チームで解決したことになつていゝらしい。しかも、報告した孝和が勘違いしたのか、カルネの記載ミスなのか知らないが、ソウル・オブ・シャドウの北限の狂戦士デュークの名前は一切出て来ない。それに、貴族^{ロード}クラスのソウル・オブ・シャドウではなく、騎士^{ナイト}クラスの霊体モンスターに格下げされている。これはどういふことだろうか。

その1日は話し好きのその職員から情報を収集することにした。神殿の側からも協力者を派遣したので、午後にはある程度のことかわかった。まず、洞窟内の3遺体については全く身元はわかっていない。身分証は無く、孝和がカルネに手渡した首飾りから1人が魔術師ギルドの所属ということしかわからなかった。それについても死亡後にミイラ化してしまい生前の顔はまるでわからない。しかもデュークの攻撃で顔の一部が損傷していた。これではわからない。一方、残りの2遺体の装備品は孝和の報酬として持っていかれた。これは各ギルドのルールのため仕方ない。残りの壊れた装備品も、個人のオーダーメイドのようで調査もほぼ不可能であった。この世界の調査力ではこの辺りが限界であった。

「まあ、あの状況で何かわかるとしても、だいぶ後でしょうね……」

ベッドの上でそうつぶやくと、明日からの行動をどうしようか彼女は悩み始めた。

そういった様々な情報の錯綜する神殿内での情報収集を終え、孝和とキールに会うことにした。救護所から問題無いことが確認され、2日目の朝にエリアは退所となった。実は恐れていた精神汚染もほぼゼロであることは、上級神官の診察によりわかった。神殿のプレイスカードの更新も終わったとのことで、ギルドに向かいカードを受け取りにいった。孝和の居所はそこで聞きだそうと目論んでいたのだが、それは不可能だったのである。

本来であれば、なあなあで教えてくれることもあるのだが、今回は大事になっている。そのこともあって、今回の情報に関して緘口令がギルド内に敷かれてしまった。この時点でギルドの外で聞き込みを行えば、すぐに「招きスライム」の情報が手に入ったのだが、

アリアはギルド受付での聞き込みにこだわってしまった。最終的に、根負けしたカルネが翌日に孝和の来訪を教え、アリアはボードセクターで待ち伏せすることとなったのだ。

「はあ……。大変だったんですね。でも、お元気でよかったです」
「そうだよ？ けっきょくアリアさん、あのあとおきなかったし……」
孝和はそういって、ズズズとオレンジジュースをすすった。キールは、はむはむとミントを用意してもらいそれを食べていた。

いま二人の新米冒険者は、アリアから紹介された少し高級そうなカフェ（？）に入っていた。カフェなので、何か甘いものでもないかと思っただが、よく考えたら女性におごってもらうわけにもいかない。高級そうなのは簡単に判った。周りの客が全員高級な服装なのだ。何とか少しでも安上がりにはしないとあとが厳しい。

「それで、今迄の流れは解ったと思います。その上で、ここからが本題です」

「ずいつ、と身を乗り出してアリアが真剣に語りかけてきた。

孝和はその様子に少しビビっていた。デュークはなんか解らんが、すごいゴーストだった。それをアリアが倒したことになっているが、本来のすごさを理解している者がこの3人以外はいない。

「……えと、俺にデュークはすごい奴だった、と報告して欲しいの
だろうか？ でも、デュークと一騎打ちする前に、キールの攻撃などの援護もあった。前回あの洞窟を使った人は2ヶ月前らしいのはカルネさんから聞いている。と、いうことはあの場所に甦ったのは約500年ぶり。本調子でなかったのも幸いしたのだろう。この真龍の不思議な力を人に知られるのも怖いし、あんまり騒いで欲しくないんだけどなあ。」

そんなことを孝和は考えていた。ただ、騎士^{ナイト}クラスの霊体モンスターであっても、単身での討伐が出来るのは各国のトップクラスの

戦士である。それにデュークは本調子でなかったが、貴族ロードに限りなく近い騎士ナイトクラスであった。普通、一騎打ちであったとして、援護があつたとしても凡人が勝てる相手ではない。

だからこそ、アリアはこのことをギルドに報告していない。神の神託により自身の目の前に現れた「英雄の器」である。なんとしても、戦神ラウドの神官として彼を導かねばならない。これは神の意思なのである。

目の前でオレンジジュースをすすり、テーブルに視線を落としたままの孝和を熱を帯びた視線で見つめる。誠心誠意、彼を説得しなければ！

「タカカズさん。キール。私と一緒にチームを組みませんか？ リーダーはタカカズさんで構いません。いかがです？」

ほへえ？ という気の抜けた音が孝和から聞こえた。キールは相変わらず、ミントに夢中だ。

「あの？ アリアさん？」
「アリアで構いません。あと、私も敬語は止めます。これから一緒にチーム組むんですから」

そういつてアリアはにっこりと笑いかけた。その笑顔が魅力的だったので、一瞬見とれてしまった。しかし、そのあと気を取り直してアリアに言った。

「待った！ じゃあ、アリア。君は俺とキールと一緒に冒険がしたいと。そういう訳なの？」

何か言わないとこのまま、なし崩し的にチームの結成になってしまう。

「ええ。冒険に神官職が居ると何かと便利よ？ ギルドクラスも私はEからだから、普通より多くの依頼が受けられるし。いいこと尽くめじゃない」

アリアはそう孝和を説得した。「説得」は新たな信者の獲得のため、身に着けた術だ。こんなことで使うことになるとは思わなかったけれど。

「わかった。その特典はすごい魅力的だ。ぜひとも君とチームを組みたい」

孝和はまるで表情を変えず、ジュースをすすりながらそう言った。カランと空になったコップが中の氷とぶつかって音を立てる。

「そう！ありがとう！がんばろうね！」

アリアはその孝和の言葉に喜びと共に感謝を述べた。

逆に。孝和はなぜか冷めた目線でアリアを見ている。

「と、俺が言うとき……。問題があるんだよね」

カラカラとコップを回して、氷を融かす。少し解けた水を行儀悪く舌の上に数滴落とす。

「え？」

孝和は説明を始める。

「いや、一緒に冒険するとなるとき。いろいろまずいことがあるし。ちよっときついと思うんだよね」

「な、なにが？別に何も問題ないわよ！？」

まさか、孝和が断るとは思わなかった。アリアは驚きと共に叫ぶように理由を尋ねる。

「だって、俺、男だよ？キールもいるけど、そこそこ考えてる？」
「……あ」

どうやら気づいてくれたようだ。一緒に冒険するとなると、数日間の野営になることもあるだろう。その状況で、女性が男性と一緒にというのはマズイだろう。身だしなみとか、入浴とか。まあ、多分大丈夫だとは思うが、アリアに孝和が襲い掛かる可能性もある。孝和自身はそんな鬼畜ではないつもりだが、アリアはものすごいタイプなのだ。外見も、元気で自分を引っ張ってくれそうな性格も。万が一が絶対に無い、と言い切れないのは自信を持って言える。だから、アリアにはそこを考えて返答して欲しい。それは出会って数日の孝和を、信頼していいのかどうかということだ。

あえて冷めた様子で言い放ったのはそうだった。キールにはこそこそ念話ですでに静かにしておくよう言い聞かせてある。

あとはアリアの判断だ。本心で言えばアリアとのチーム結成はこちらからお願いたいくらいなのだが、仕方ない。

きつと冷静になったアリアはこちらを気遣いながら、断ってくるだろう。残念だが、縁が無かったのだ。心の中で涙しながら孝和は返答を待ったのである。

「構わないわよ。そんなこと？」

そう言ってきた彼女に孝和は驚いた。

「へ？いや、結構重大なことだと思っんですけど」

平然と言い放った彼女は「何を言ってるんだ、この人は」という目線を孝和に見せた。アリアは4年前まで騎士となるため、男に混じって野営や、訓練を行ってきた。そういった点で普通の女性よりも耐性がある。さらに言えば、戦神ラウドの神殿は他の神殿よりも男性の比率が高い。孝和が心配しているより、アリアは男性と共同した旅に慣れていたのである。

そのことをアリアから説明され、孝和側にはもう拒否する強い理由は無かった。アリアさえよければ、色々教えて欲しい旅のアドバイスを手に入れるチャンスなのだ。しかも、彼女はかなり強い。その実力のある上、美女は居てくれるだけで嬉しい。ならば、返答は一つしかない。

「では、改めまして。アリア、キール。今日から俺たちはチームだ。よろしく」

「こちらこそ。タカカズ、キール。がんばりましょうね」

『アリアさん、がんばろうね！ぼく、とってもうれしいなあ』

3人は新しく注文したドリンクで乾杯する。キールはサラダボウルであったが、こうして孝和とキール、アリアはチームとして冒険者を始める事となった。

これから先、彼らの道行きはどのようになって行くのだろうか？
この不思議な物語の幕はこうして上がる。

そして物語はマドックから走り出したのであった。

第15話　そして物語は走り出す（後書き）

ここまでを第1部とさせていただきます。次回は設定の一部を軽く紹介するつもりでしたが、製作者の復習もかねて少しがんばって書き出してみようと思います。

本編はその後となりますので、いま少しお待ちください。

ここまでお読みいただきました皆様。本当にありがとうございました。

第2部もがんばりますので、どうか暖かい目で末永く見ていただきますようお願いいたします。

設定集（前書き）

設定集です。読まなくてもまあ大丈夫なものだとは思いますが。矛盾とかあるかもしれませんが、一応こんなこと考えて書いています。誤字等ご容赦ください。

設定集

人物

ヤキ・タカカス
八木孝和

本作品の主人公。25歳。身長186cm体重87kg。滅び行く真龍の一族の計画により異世界に召還される。日本人と龍の力を刻み込まれた人間の長年の支配により、シグラスの後継としてそれに耐えられるだけの魂の器を持つ。一方それだけの器を持ちながら性格は、ある程度内気。興味のあることに関しては集中して取り組む。細かい作業を好む。

少年時代の家庭環境の影響により、軽度の人見知りとなる。中学から大学までの間は大叔父の結城法寿が保護者となり、彼を鍛える。大学は4年制の地元の経済学部。20歳のときに法寿から皆伝を得る。その後はオタク趣味に走る。主にゲームはRPG、S・RPGを好み、やりこむタイプ。読書は興味があれば何でもOK。園芸・料理・小説まで幅広く読みこむ。

戦闘技術に関しては、法寿の受け継いだ道場でみっちり教え込まれる。孝和が龍の因子を保持するため、鍛錬内容を普通の人間よりもハイスピードで習得していた。剣術道場ではあるが、「刀を主体とした戦闘術」ではなく、法寿の方針により実践的な「刀程度の長さの棒を使う総合的な戦闘術」を仕込まれる。そのため、剣術以外にも棒術、体術に優れる。興味のあった古武術や合気道をビデオや本で独自に習得している。体術のみであれば、法寿を除けば道場内で最も強い。

ルミイ村では記憶の混濁を装い、自身の常識の不自然さをごまかしたが、マドック到着後は外国の田舎者を装うことで追及をかわし

ている。

プレイスカード

【種族】 龍血の異人

【スキル】 ・ドラゴンソウル

恐慌・幻惑・誘惑等の精神系攻撃について完全防御

・龍の血脈

毒物が体内に入ると解毒される。ただし、酸を含む毒物に関してはダメージを受ける

【称号】 食の開拓者（食神フズ）

味覚の鋭敏化。微細な味の違いを詳細に認識できる。

（このクラスの称号では亜神になれない）

【基本情報】力 C + 体力 C + 技術 B 魔力 F 知性

C 器用 B +

プレイスカード未記載事項について

・真龍の知識

シグラスより受け継いだ真龍の英知。とはいえ、真龍の興味ある分野に偏っていることもあり、かなり扱いづらい。さらに、外界に興味の薄い真龍が溜め込んだ知識のため、情報の混濁が起きている。例えば、術式の構成を理解することは出来てもその使用法は知識の中に無い（龍族は念のみで術を起動するため）。

モンスターが強さも、スライムと下位龍のワイバーンが「弱い」という扱いになっていたりするため人の基準と真龍の基準の誤差が大きい。

世界情勢も、最後の真龍のシグラスが洞窟内で、後継者が育った時点で転送陣を開くため、外界に出歩かなかったため、昔の情報しかなく、あまり役に立たない。

一方、メインではないはずの知識の鋭敏化については、様々な知識・経験を全く損なうことなく思い出すことが出来る。さらには、

この世界の言語に関しては、真龍の生まれた時代から存在した、通常語・下位神官語・古代聖霊語の3種を完全に読解できる。このため、多くの書物の読解が可能であり、孝和本人はこれが最も役立つと考えている。

・気功術（孝和の使用するもの）

人間の使う「気功術」と似ているが実際は全くの別物。白銀のオーラを纏うこの技術は、真龍が無意識に纏うものである。初めてシグラスと出会ったとき、シグラスが薄く燐光を放っていたのもこれにあたる。これを纏った状態（真龍状態）の孝和は通常よりも各項目が上が昇する。

真龍状態の基本情報

【基本情報】力 B + 体力 B 技術 A + 魔力 F 知性 C 器用 A

キール

体長約30cm、体重約5kg。

ルミイ村とマドック間の交易路で孝和をマスターとする。

ルミイ村のウィスラーを襲撃したスライムを、孝和が気功術で撃退した際に彼の従魔となる。本来は自意識の無いただのスライムであつたが、真龍のオーラを受けて体組織が変質、オーラを受けた部分を核として知性を持つ生命体として再構成された。

すこし潰れた球形をした真っ白なスライムのように見える。しかし、種族としてはスライムではなく、より上位のホワイト・ジェム

となる。

本体は体内の核の部分。周りを包むぷよぷよとした体組織は感覚があり、何らかの形で喪失しても核が無事ならば「光・水分」がある限り、再生できる。

孝和の非攻撃的なオーラにより生まれた突然変異。その為、会話が出来ることや上級回復術が出来るのは、ダウンコンバートされた真龍の知識が、キールの核となったと考えられる。術者としての才能はかなりのもので、初級術ならば簡単に習得できる。

性格は純粹無垢。子供のような口調ではあるが、戦闘行為に関して拒否的な意識は無い。一方、他人から嫌われることを極度に怖がる。これは、キールの核を構成する際に少年期の孝和の深層心理が影響を与えている。

食事は「光・水分」以外は本来必要無いが、野菜・ハーブを好む肉が「食べられない」のでは無く、「嫌い」である。魚は同様に「嫌い」だが、卵は「好き」な様である。要するに、ただの好き嫌い。

プレイスカード

【種族】 ホワイト・ジエム

【スキル】 ・光あふれる世界

光がある限り、魔力があふれ出す

・龍の加護

龍の加護により、恐慌・幻惑・誘惑を完全防御。さらに龍族のエネルギーが、

フィールドバックされる。

(キールの場合、エネルギーを魔力に変換している)

【称号】 なし

【基本情報】力 F 体力 C + 技術 D + 魔力 B 知性

C 器用 C

プレイスカード未記載事項について

・神の祝福（属性：光・土）
ユック・プレス

この術式はババンによつて、再生と体力回復リペアの光術に大地の恵み
《アースグロリー》の土術の複合術式と説明されたが、実はキールは全くこれらの術を使えない。

実際は完全にキールのオリジナル。キールは真龍と同じように、
念で術を起動しているので、自分で使いやすい「傷を完全に治す術」
をオリジナルで構成して使用している。ただし、かなりの魔力を一
気に消費するため、真龍の知識のレプリカ体であり、孝和のエナジ
ーのフィードバックを受けているキール以外は、ここまで自在な使
用は不可能と思われる。

アリア（アマリリア・クラウ・ウェルロー）

身長155cm、体重51kg。20歳。

リグリア王国の伯爵位を叙される名門ウェルロー家の長女として
生まれる。兄が2人、年の離れた妹が1人いる。本来は爵位継承権
第3位であったが、16歳となった際に戦神ラウドの神官となるた
め、継承権を喪失した。

幼少時から騎士となることを夢にもち、それに足るだけの努力を
重ねてきた。戦神ラウドの神殿内でも、武術の鍛錬に抜かりは無く、
同世代の神官候補内では最も戦闘技術に長ける。それもあり、ラウ
ドの加護も受けることで上級神官とほぼ並ぶほどの実力を誇る。

一方、貴族生活と神殿の生活が長かったこともあり、策略や陰謀
といった人の裏を掻くようなことに対してはきわめて弱い。正々堂
々、正面から問題を解決することを信念とする。

性格は良くも悪くもまっすぐ。人を教え導き、民草に奉仕するこ
とが、自らの全てと信じている。これらは人の上に立つ貴族という

立場のものが感じる義務感からであるが、本人は重荷と感じていない。

孝和・キールとは神官となるために、巡礼に旅立つための冒険者登録時の試験で出会う。洞窟内の戦闘で両者の実力を認め、ラウドの神託に従った自らの判断により、2人をスカウトすることに決める。洞窟内最奥部にて、伝説の狂戦士と孝和の戦闘を意識を失いながらも確認。孝和を「英雄の器」と確信し、過去の自分の夢を孝和に重ねている。

孝和・キールに関しては、戦神ラウドの神託などの打算的なものもあるが、それ以上に洞窟のクエストで信頼を感じ、好意を抱いている。それもあり、3人でチームを組み、冒険者として活動しているよう提案する。

プレイスカード

【種族】 人間種

【スキル】 ・気功

自身の生命力を利用し、戦闘力に転化する。その際の攻撃属性は個人により変化する。

・戦神ラウドの加護

戦神ラウドに祈ることで、自身の精神力を高める。精神攻撃に対し、ある程度の耐性を得る。

【称号】 なし

【基本情報】力 C 体力 C+ 技術 B 魔力 C 知性 C
+ 器用 D

異世界（一部終了まで）

・フォロン大陸

孝和たちの現在地。この世界では最も多く人間種が居住する。大陸中央部は、人間種の国家が支配権を争う。大陸の北部山岳地帯から、ステップ・荒野には亜人種・精霊族の連合体が国家を形成する。南部は湿地帯であり、多くの少数民族の支配下のため、いまだ未踏の地とされているが何故か古代の遺跡群が存在している。

・オクル諸島

フォロンの北部に存在する諸島。この地域は夏でも気温はさほど上がらず、冬場には凍てつくような寒波が襲う。そのため、農耕業は全く行われず、漁業・工業により得られる物資を交易を行うことで住民は生計を立てる。

国・街・村・その他

リグリア王国

約60年前にパーン王国に侵攻し、その領土を奪い取る。しかし、ほぼ無血革命に近いその手法は住民の多くに指示され、大きな抵抗も無く現在の統治状態を維持している。

現国王はかなりの名君。しかし、次世代の継承権を持つ3名の王子・王女の間で後継争いが勃発している。

パーン王国

70年前に国王が死亡したあとの混乱により、内乱が勃発。10年ほどの内乱が続いたため、国力は低下。内乱に参加した貴族は完全に民心を失い、王家の血脈をわずかだが受け継いでいるリグリアの侵攻により、滅亡する。旧王族と、内乱に参加しなかった一部の

貴族以外は貴族の位を失った。

グラノイア公国

リグリアとはウエルロー領のほか数箇所領土紛争をしている。パイン王国は元々公国の領土であったこともあり、国是として、旧パイン王国の正統な所有権を主張する。そのため、現在も小規模な軍事的衝突を繰り返している。本格的な戦争状態にはなっていないが、火種はそこかしこにある。大陸の北部森林地域を領土としているため、温暖で良質な草原地帯に激しい領土的野心を持つ。

リンブルグ

魔術ギルドの総本山がある。その影響で国民に多くの魔術師を抱える強大な軍事国家。リグリア・グラノイア双方と領土の不可侵条約を結んでいる。

・マドック

正式にはマドック自治区域。マドックを中心とした周辺地域の各ギルドの代表者による自治が認められている。中心部の治安部隊はパイン内乱時にこの地域の民兵がそのまま従事した。他の貴族領と違い、商売をするには課税が少なくて済むため多くの人が居住している。

・ルミイ村

孝和が異世界にて初めて辿り着いた集落。主産業は毛織物・農産物。マドック自治区域に所属している。代表は村民が選んだ人物が村長となる。

・港町ポート・デイ

自治区域に隣接している貴族領のため、かなり発展している。海軍の軍港・基地がある。10年前に支配者の悪徳貴族が国家命により、更迭されたため現在は治安回復の真っ最中。そのため、領地経営に多少の問題を抱える。海産物の交易で発展しているため、商人

の町といえる。

宗教

世界神を頂点としてこの世界で唯一の宗教。全ての神々は世界神より生まれ出た。世界神とその実子である光の男神・闇の女神の3柱には名前が存在しない。これらを原初の3神と呼ぶ。

その下の神々より個別の名前が存在する。第2階位、第5階位までの200柱が神とされる。それ以外は亜神として神々に仕える。神殿は全ての神々を信仰する場所とされるが、各神々の本殿は各地に存在する。神官となるための条件はそれぞれ違う。

術

魔力を消費して術式を起動する。その際に身振りや、言語により式を整えて発動させる。これを丸々ショートカットするには、ある程度の熟練か才能が必要とされる。

自身の限界を超えて使いすぎると、精神に影響がでて、ひどい場合衰弱死する場合もある。

・光

再生^{リベア}

損傷した部位をそのまま再生する。血液の喪失分はもとには戻らない。

体力回復^{ヒール}

疲労感を一気に回復する。ただし、肉体的損傷は元に戻らない。

光輪^{ブレイズ・リング}

手のひらに収まるくらいの光る輪を発射して攻撃する。通常の殺傷力は低いですが、術者の力量によってはかなりの威力まで上昇させることが出来る。

灯火^{ライト}

術者を中心として光を放つ。通常、屋外では半径10メートル。屋内では壁に反射させて利用する。術者が解除しない限り、半日ほど効果は続く。

・土

大地の恵み《アースグローリー》

肉体の再生能力を一時的に増幅する。血液の喪失分も回復する。生命力が足りない場合、術を掛けても回復しない。

・水

氷結^{アイス・クリエイト}

大気中の水分を凝縮し、氷を作り出す。水分のみを集めるため、ミネラル分などの余分なものは全く存在しない。

・火

火炎球^{ファイア・ボール}

読んで字のごとく。「火炎」の「球」を発生させ、対象にぶつけ

る。球体にするのに技量を必要とするため、中級に区分される。

設定集（後書き）

ある程度ガチャガチャですが書かせてもらいました。

後々、書き直したり付け足したりはするかもしれませんが。
次回からは本編になりますので、よろしく願います。

第16話 キャラバン（前書き）

ここから2部とさせていただきます。
相変わらずですが、誤字脱字ご容赦ください。

第16話 キャラバン

「あなたなにしてるの？出発は明日なのよ！？」

アリアは大声を上げる。その相手は孝和。ここは『陽だまりの草原亭』の酒場の厨房であった。あのチーム結成から3日が経っていた。

「え？アリアじゃないか。約束の時間は4時だよ？さっき3時の鐘がなったばかりで、時間はまだあるはずじゃあ？それに駄目だよ、厨房に勝手に入ってきたら」

孝和は急に厨房に入ってきたアリアに驚きつつも、素でそう注意した。ちなみに今、孝和は厨房でダッチ達と一緒にアップルパイの試作品を作っていた。

これから焼き上げたパイを切り分け、仕事のない人はお茶にしようかとしていたところだったのだ。

「少し早めに来るのは、礼儀でしょう？それよりあなたのほうよ、問題は！冒険者でしょう？あなたは？なんでここで料理なんて作ってるのよ？」

仁王立ちになる。胸の前に組んだ腕にはキールがすっぽりと収まっていた。その服装はいつもと変わらないが、やる気に満ち溢れた彼女は孝和との約束の時間より1時間も早く、『陽だまりの草原亭』に到着したのだ。

アリアは孝和たちと違って、神殿側の専用宿泊施設があるため、そちらに宿を取っていた。実はアリア自身は『陽だまりの草原亭』に来るのは初めてである。

神殿で宿がどこにあるのか聞いてみたところ、近頃話題の宿ということで有名になっているようだった。受付で可愛い「招きスライ

ム」が出迎えてくれ、酒場の食事が斬新でかなりの美味であるらしいことが理由らしい。

「招きスライム」はキールのことだろうことは予想が付く。一方の料理は新しくコックでも入れたのだろう。アリアは貴族ということもあり、食事の良し悪しは一般人よりもよく判るつもりだ。それであつたので料理はかなり楽しみにしていた。

受付でキールを発見し、孝和の居所を尋ねた。キールの周りには多くの女性や子供たちがいたのだが、アリアを見ると、

『アリアさんだ〜！いらっしや〜い』

と、受付を放棄してアリアの胸元めがけてダイブした。孝和であれば、いつも焼け焦げるほどの嫉妬で満ち溢れるはずであつたが、今回は違った。

飛び込んできたキールを受け止めたあと、「仕方ない子ねえ」と柔らかな笑顔を浮かべたアリア。窓から差し込む光が、アリアの銀髪と、キールの白い体を照らし出す。キラキラ周りに光の粒子が飛び散る。まるでその様子は幼子をあやす聖女のようにあつた。

おそらくこのままの光景を切り抜いて描くことが出来るなら、明日にでも神殿の宗教画家として安泰な生活を得ることが出来るだろう。その暖かな光景に対し、邪な嫉妬を発するものは誰もいない。それどころかその場の皆の視線は何故か優しさに満ち溢れていたのである。

ちなみにデカイ・ゴツイ、孝和と違い、見た目だけで言えば間違はなく美人のアリアではここまで反応が違うのかと、タバサは少しはなれたところから苦笑していた。

そんなキールを抱き上げぶよぶよの感触を堪能しつつ、孝和のところに案内してもらった。そうすると、酒場に向かっているようである。しかし、どこの席にも孝和の姿はない。不思議に思っているキールが

『きょうはますたーはね、“かいしんでざーと”をつくるんだって』

と言ったのだ。

「え？タカカズが作るの？」

疑問をそのままぶつけてみる。どういうこと？

『ますたーはね、ここの“りんじこつく”さんなんだよ？みんなおいしいって、いつてくれるんだ』

自分のことのように喜びを表すキール。信じたくはない。信じたくはないのだが、これは事実なんだろうか。そんな恐怖と共に、アリアは厨房に足を踏み入れた。

と、いうことがあったわけで、アリアは大声を上げたのだ。私の未来を懸けた「英雄の器」は、この宿の「臨時コック」という立場なのだ。そのことがわかってアリアのテンションは見るからに下がってしまった。

今は酒場の職員用のテーブルでアリアは視線をテーブルの木目に落としている。テーブルの上にはアップルパイとお茶が湯気を上げている。冷めてしまっただけはおいしさが半減してしまう。せつかく仕込みの用意をしているダッチに断りを入れてオーブンを1つ用意してもらったのに……。

「とりあえず、食べません？食べながら明日の話もすればいいし」
孝和の提案にのろのろとパイに手を伸ばす。サク、という音を立ててパイにフォークが刺さる。一口、ゆっくりと口に中に入れて味を確かめる。

アップルパイはこの世界にないデザートである。フルーツのデザートがメインのこの世界では初めてに近い味だろう。

孝和はアリアの様子を注視する。アリアがそれなりに身分のある

人物なのはわかっている。そうでなくては、あんな高級カフェに余裕の表情でいけるはずがない。このアップルパイは孝和にとって、この世界の女性全員への挑戦状でもある。なんとしても勝利を収めたい。

「おいしい……。おいしいんだけど……」

アリアの表情は曇ったままなのだ。もしか、この味は駄目なのか！？

「……なんで、なんで。あなたが！料理人をしてるのよ！？冒険者でしょう！？」

どうやら、喜びと同時に憤りが襲ってきたらしい。アリアのあこがれた勇者・英雄はどのような人物であれ、料理人ではなかった。ガラガラと理想の勇者像が崩れていくのを現実の音として感じた。

「じゃあ、明日からの予定を再確認したいんだけど、2人ともいいかい？」

結局、アリアはパイをきれいに平らげ、お茶まで優雅に嗜んで落ち着いた。この様子なら、酒場でなく宿の喫茶用の品として出せるレベルだろうと、孝和は満足している。

キールは皮をむいたオレンジをそのまま食べている。キールは聞き逃しても、夜にでも説明すればいい。

「まず、ポート・デイまでは片道5日。帰りのキャラバンの出発はその3日後。帰りは向こうで護衛依頼を探すことになる。帰りも5日だから、合計13日。約2週間はマドックを離れることになる。これが大まかな予定だな。護衛は北門前に、8時集合。食事・荷物の輸送手段はキャラバン側で用意してくれるらしい。だから、ある程度の装備と日用品を用意すればいいみたいだな」

一応のチームリーダーである孝和は、ボードセンターで受けたポート・デイまでのキャラバンの護衛依頼書をそのまま読んだ。皆、

分かっているが一応の確認だ。

実はあの時、アリアと3人のチームを組んだのは良かったのだが、アリアはいきなりDクラスの討伐系依頼を受けようとしたのだ。国境付近を根城にする盗賊団や、街道沿いのモンスター殲滅参加などである。

だが、孝和は港町ポート・デイにどうしても行きたい理由があった。もし、Fクラスまでに護衛依頼がなければ、キャラバンに料金を支払って客として向かう予定だったのだ。

理由は2つある。この港町に行つて来月のお祭りの為に、海産物を探してくることがひとつ。それともうひとつ、この町にはある人物がいるのだ。

「それで、向こうに着いたら自由行動でいいのね？私もポート・デイで会いたい人もいるし、あなたたちもギャバンさんだっけ？その従魔師に会いに行くんでしょ。こっちとしても都合はよかつたわ」

アリアはそう孝和に言った。その目は依頼書の不備がないか真剣に文字を追っている。ちなみに、アリアには海産物の調査に件は伝えていない。

そう、ポート・デイにはこのリグリアで最も有名な従魔師ギャバンが住んでいる。

本人は10年前に45歳で冒険者を引退したのだが、マドックを拠点としてかなりの荒稼ぎをして、成功者としてポート・デイに居を構えているらしい。

「まあね。でも、ギャバンさんの評判自体は芳しくないな。そうはいつでも、従魔師としていろいろ情報も欲しいからさ。何とか話だけでも聞けたらいいんだけど」

現在のギャバンの情報は今のところ所在意外は全くとっていないほどない。冒険者の頃から人嫌いで有名だったようで、親しくしていた者も特にはいないようだ、タバサが言っていた。

一方、ギャバン自身は従魔師ということもあり有名ではあった。その看板を利用して多くの依頼をこなし、引退。冒険者としてはか

なりの成功者といえるだろう。そこら辺に「一人で儲けやがって……」といったやつかみもあるのではないだろうか、孝和は考えていた。

「手紙は出したの？いきなり、会ってくれませんかって、行ってもまずいんじゃない？」

「いや、手紙は高いんだよ。しかも頼んだものが確実に届く保証も、読んでもらえる保証もないし。それならいきなり訪ねたほうが会えるかも知れないから」

孝和の言ったとおり、この世界の郵便はかなり高価だ。業者や、場所によって価格は変動する上、届くかどうかは比較的近場のポスト・デイであつても大体7割くらいらしい。

郵便業者が起業したり廃業したりするかなり激しい競争と、町の外への移動時の危険がその理由だそうだ。もしモンスターに襲われれば荷物を捨てても構わないとされているのが到着率の低さに繋がっている。

そんなことを聞かされて、銀貨5枚も掛かる郵便を出す気にはなれなかった。

「まあ、それはそれだ。ここからが本題。アリア、具体的に何を持っていていいのかな？」

そう、これが今日集まった理由だ。アリアに何が5日の旅で必要になるかレクチャーを受ける。孝和の前にはメモ帳と羽ペンがあった。

「とりあえず、依頼書を見る限り食事は出るみたいだし、嗜好品を少しと、念のための保存用食料。あとは防寒用の衣類に2日分の着替えとあったところでしょうね。あ、言っておくけど本は駄目よ」

「え、なんで？おもいきり持ってくつもりだったんだけど」

孝和はアリアからのその注意に敏感に反応した。

「はあ、と大きいため息をつく。」

「あのね。一応護衛なんだから、そんなもの読んでる暇がどこにあるのよ！？日中は馬車でなくて徒歩で護衛するし、夜間の不寝番だ

つて割り当てられるわ。予定では護衛は20名。キャラバン全体で150名弱になる大所帯で、そんな暇そうにしてたら殴られるわ。間違いない」

確かに。本は置いていくべきだろう。ポート・デイで何か薄めの読むものを探して我慢しよう。せつかくこの護衛期間のために面白い本を探し出したのに……。

「試験のときにも何か読んでたでしょ？今回は何を持ち込むつもりだったの？」

「もちこむつもりだったの？」

キールがアリアの口調を真似て繰り返す。アリアに軽く苦笑されて「ごめんなさ〜い」と、悪びれずに謝る。クスクス二人して孝和のほうを見て笑う。どうやら二人はもうだいぶ仲良くなったようだ。「ああ、実はこれを持っていこうかと」

隅に積み上げられていた本の上から3冊持ち上げた。いつの間にかその隅っこのスペースは孝和の専用になっていた。ここでレシピを書き記したり、お茶を飲みながら本を読んだりしていたのだ。タッチからはすでに許可を得ていたのだが、たった数日でその辺り周辺がカオス状態になっていた。酒場の客からや、書店でかなりの数の本を入手したため、全く統一性がない。本自体の価格は高いため、ほとんどはバイト代を使って孝和が購入した。こればかりは止められないのだ。節約もしているが、本だけはどんどん増えていく。

ちなみに昔の孝和のアパートにはかなりの蔵書量があり、さらにはゲームの類の山がうずたかく積まれていた。そのせいでより広い場所に引越す予定でもあった。

今回孝和がチョイスしていたのは、『野草大全』『ナイフでの戦闘術』『毛皮を上手に作るには』の3冊だった。サバイバルに特化した実に有意義なものだと思ったので用意したのだが、どうやら読書自体がアリアのお気には召さなかったようだ。

「駄目？」

下からアリアを見つめ、何とか妥協点を見つけようと孝和は挑戦

する。

「駄目」

全く効果はないようだった。

「でも、サバイバルには役立つんだよ？」

「……はあ。分かった。1冊だけよ？」

孝和は心の中でガッツポーズをとった。やはり思いは通じるのだ。あきらめないことこそが大切である。

「じゃあ、じゃあ。これ！」

選択したのは『毛皮を上手に作るには』だった。まるで子供のようにはしゃいでいる孝和の様子を見て、アリアは

(戦神ラウド、ほんとにこの人でいいんでしょうか?)

と深く深く悩んだのだった。

そして翌日、孝和たちは北門の前に集合していた。予定時間より少し早めに来たのだが、もうかなりの数の馬車や竜車がそろっていた。

「すごいなあ。俺、キャラバンなんて始めてだからな。気合入れないと」

孝和はその光景を見て気合を入れた。キールも

『うん！ぼくここいがいのまちって、はじめてなんだ。はやくつくといいよね！』

と、今回の旅にワクワクしているようだ。ほとんど日の出と同時に起きだして、窓の外を見て『まだかな？まだかな？』と太陽が昇っていく様子をつずうず眺めているような状態だった。その横で孝和はベッドの中で見事に熟睡していたのだけれど……。

「タカカズ！キール！こっちよー！」

声のするほうを見るとアリアが手を振っていた。その周りには今回の護衛任務に参加しているだろう、ガタイのいい人たちが集まっ

ていた。

「これで皆、集まったようだな」

護衛の中で孝和たちはかなり後のほうだったらしく、到着して数分後に最後の護衛が到着し、説明が始まった。

「……では、以上が簡単な説明だ。詳細は手元の紙を見てくれ。各担当の馬車に自分の荷物を積み込んでもらったなら、すぐに出発だ。先頭はもう出発を始めているからな。初心者だろうが、ベテランだろうが今回は全員が仲間だ。やるべきことをやって、最後まで気を抜かぬよう細心の注意を払え。以上！解散だ！」

担当の馬車の明記された紙を配った人物が簡単に説明した。年齢は50を少しすぎたくらいだろうか。顔に走る傷跡が威厳を感じさせる。彼、エーイが今回の責任者となるそうだ。エーイは護衛の責任者だが、キャラバン全体の責任者は別にいるらしい。全体の移動はそちらに決定権があるため、休憩もそちらにあわせるようだ。

「じゃあ、キール。行きましょ。タカカズはその荷物を運んでこないとね」

「ああ、わかった。積み込んだら俺も追いかけるから、キールを頼むよ」

キャラバンがかなりの行列のため、もう中頃まで出発している。

『ますたーもはやくね。ぼくたちのたんとう、だいたいまんなかみたいたから』

「おう。キールもアリアもこれから5日よろしくな」

孝和は自分の荷物を積み込みに、キール・アリアは担当の部署に向かったのだった。

これが、5日間のキャラバンの護衛任務。孝和たちにとっては初めての「本格的な冒険者としての仕事」だったのである。

第17話 野営地での出来事（前書き）

少しいつもより短くできていますが、きりのいいところまでとじました。

誤字脱字ご容赦ください。

第17話 野営地での出来事

キャラバンはA・B・Cの3に分けられている。毎日のローテーションで順番に先頭に立つものが変わる。このため、もっとも経験の少ない孝和たちのチームはBに割り当てられた。5日間のローテーションであれば、このBが最も殿を務める回数が少なくなるからだ。殿が襲撃を受けたときに最も被害が大きくなる可能性がある。それもあって、Bには孝和たちのほかに、エーイのチームが参加して護衛を勤めることでバランスを取った。さらにはキャラバンの中でも経験の豊かな商人がそれをサポートした。これらを見ても、キャラバンの責任者はかなりの熟練者であることが伺えた。

最も先頭のチームが、野営地についてからの宿泊施設の設営を行い、最後尾チームがその日の不寝番を担当した。その為、真ん中に位置するチームと設営が終わったチームが十分な休息を取ることが出来る。翌日には最後尾のチームが真ん中になるので、翌日・翌々日は十分に休めるような体制を取っている。

孝和のBチームは、そんな完璧な布陣の中で最も恵まれている場所なわけで、偶然遭遇したモンスター^{ナイト}の群れと威嚇程度の戦闘があった以外、初日は順調に工程は進んだ。野営についても孝和たちは真ん中のチームだったため、余裕を持って初日の夜を迎えることが出来た。

そんな中、アリアは困っていた。自分の周囲に人の群れが集まってきたてしまい、その対応に追われていたからであった。

「うわさは聞いていますよ。騎士^{ナイト}クラス^{ナイト}の霊体を単身仕留めたルー

キーは、マドックで今、最も話題に上がっていますからね」

そういうのは、確かCランクの槍使いの冒険者であった。彼だけではない。先日の試験クエストの顛末は、ギルドが大々的に動いた結果、瞬く間にマドック中に広まった。そのせいで今回、この護衛に参加している者や、商人たちの一部はアリア個人をスカウトしようとするチャンスに殺到したのだ。

「いえ、私はそこまでの者では……」

そういつて場を鎮めようとしたが、それが謙遜に聞こえた周りはさらにヒートアップする。

「あんたそんなに謙遜するなよ。相手はレイスとかファントムナイトとかのレベルだったんだろ？ どうやって倒せたんだ？ ぜひ、俺たちにその極意を教えてくれねえかな」

「いやいや。こいつん所の奴らはそんな技術なんざ持ってねえ。筋肉しか特技がないんだぜ。俺たちならあんたのその実力を十分に生かせる！ 魔術師だけじゃなくて、ハーフェルフの精霊戦士もいるんだ。どうだ？ しばらくの間だけでも俺たちと！？」

「私たちは皆、女だけでチームを組んでるのよ。あなたも男だけしかいないチームは遠慮したいでしょ？ ぜひウチに加入してみない？」

「はははは。皆さん、彼女の求めているものが全く分かっていませんね。どうです？ 私どもの商店の専属となっていただければ、あなたの信仰への寄付を十分行いますよ？ 多くの信者の獲得という点でも、私どもの商店の流通ルートが存分に利用できることでしよう。後はあなたの踏み出す勇氣だけです」

やいのやいの、そんな提案がなされる中、この場をどのように切り抜けようかアリアは困っていた。この状況になった途端、孝和はこっそりとこの場を抜け出していたため、助け舟を出す人間も、逃げ出す理由も無くなってしまった。しかも、自分はあるの洞窟では全く相手にされず、仕留めたのは孝和のうえ、最後の時には意識を失ってしまっていた。詳細に付いてもあまり詳しくは語れない。孝和の強さをこの場で言ってしまうえば、今度は孝和の争奪戦になるだ

ろう。それだけは避けなければならない。

就寝の時間までの間、アリアはこのスカウトの中で苦笑いを浮かべるしかなかったのである。

孝和はランタンを吊るした馬車の下で黙々とページをめくっている。ここは少しアリアたちから離れた孝和たちに与えられたスペースである。アリアが捕まったのを見て、それから逃げ出してきたのだった。アリアがこちらを遠くから睨んでいる気がするが、きつと気のせいだ。キールは今朝の早起きが効いたのか、食事が終わるとすぐにテントに引っ込んでぐっすり寝入ってしまった。それよりも

……

「あの。その人、何か用ですか？そつちの人もですけど……」

一見誰もいないように見えたテントの向こう側に声を掛ける。さらに少し離れた草地にもう1人いるようだ。

ガサツ、ガサリ。

草地に伏せて、こちらに近づいていた人物が立ち上がり、こちらに歩いてくる。テントの向こうも気配がいきなり現れ、足音が聞こえた。

「いやあ。バレてないと思ったんだがね。流石と言っていていいだろうな」

「……。すみませんね。この人がどうしてもって聞かないもんで」
そういつて2人の男が孝和の座っていた前に胡坐を掻いて座り込む。2人のうち1人は今回の護衛の責任者、エイだった。もう一人は確かAチームに入っていた人だろう。エイとも親しげに話していたのでよく覚えている。30後半のどこかとぼけた様子であるが、なかなかの実力者であることは足運びから容易に推察できたし、

その身から発する雰囲気は普通の冒険者とは格が違う。へらへらし
ているように見えるその細目の奥に鋭い光を感じた。

「それで、俺に何か用ですか？」

疑問は直接ぶつけてみた。まさかこんなところで「気に食わない
から、顔貸せや」というわけでもないだろう。ただ、念のため本は
置く。その代わりに腰のナイフをすぐに抜けるように右手を軽く腰
に当てる。あくまで念のため、だ。

「そう緊張するな。ほら、これでいいだろう？」

孝和のその緊張を敏感に感じ取ったのだろう。エーイは腰の剣を
孝和に鞘ごと手渡した。もう一人の細目の男は元々何も持ってこな
かったようだった。手を孝和に向けてニギニギとしてみせる。

「一応、自己紹介しておこう。俺はエーイ。こっちの細目はククチ
だ。ポート・デイの領主エリスティア・クラ・デイカの傭兵団に所
属している。キャラバンの護衛はマドックからの仕事帰りのついで
でな。まあ、小遣い稼ぎだよ」

「それで、責任者押し付けられたのに本気でやってんですよ。人が
いいにもほどがありますよね。あなたもそう思いませんか？」

エーイをククチがそう言っただけで茶化す。軽くエーイがククチを小突
いたところで、2人は同時に孝和を見つめる。それも、先ほどまで
和やかに話していたとは思えない鋭さでだ。

「2人とも怖いですよ？何がしたいんですか？……な！」

孝和は何かを感じた。はっきりは言えないが、とてもとても嫌な
感覚だ。軽く腰を上げてすぐに遠距離での戦闘ができるように身構
える。この間の気孔術を使ってからというもの、感覚が昔よりも鋭
敏になったのを感じている。今回もそのことがなければ気づきはし
なかつただろう。

警戒のために周囲を見回し、いやな感覚が先ほどククチの居た所
よりさらに遠くにあることを感じとる。ナイフをゆっくりと体の正
面に構え、目の前の二人も視界に入るよう位置取った。

「やはり、君。強いね。しかもこれが解るのか……。驚きだな」

驚いた表情でエーイが右手を上げる。そうすると、先ほどまでのいやな感じが、すっと消えたのを感じる。

「いやはや。面白いものを見せてもらいましたよ。あなたの提案に乗って正解でしたね」

ククチもエーイも先ほどの剣呑な雰囲気はどこにもない。いったい何がしたいのか、孝和は二人の意図がわからなかった。

「では、タカカズ。君はこれを覚えているかね？」

孝和がナイフをしまったのを確認してからそうエーイは切り出した。

エーイが胸元から取り出したのは手紙だ。しかもそれは、

「スパードさんの紹介状？なんであなたが持つてるんです？」

そう、確かにそれは孝和がギルドに出した紹介状に間違いない。

紹介状の端のインクの染みが特徴的でよく覚えていた。

「スパードが昔、冒険者だったのは知ってるな」

うなづく。確か足の怪我で引退したのだと聞いた。

……もしかしたら！

「なんとなく理解したようだな。あいつは俺たちと一緒にチームを組んでいた。傭兵団の結成前のことだ。君の今回の試験クエストに便宜を図るようにあいつから頼まれたんだ。ちょうどギルドの試験官を頼まれていてね。それで、まあ君の実力が知りたかったんだ。昼の襲撃で、ある程度出来るのは判ったが、君をずっと見ているわけにもいかないからね」

にこやかにエーイが孝和に笑いかける。ククチのへらへらした様子は変わらなかったが、これはもうポーズの一種だろう。ククチは会話は全部エーイに任せるようで、観客としてその様子を眺めていた。

「それで、この悪戯なんですか……。そんなにすごいわけでもないですよ。ただ勘がいいだけです。あんまり期待しないでください」

そういつてごまかす。これで何とかならないだろうか。

「スパードの奴の紹介状に、君があまり過去に触れて欲しくないよ
うだと書いていたよ。わざわざ無理のある記憶障害を装うくらいだ
から、聞かないようにしておけと書かれているから、これ以上は聞
かないことにする。だが、最後にひとつだけ聞いておきたい」

「やっぱりバレてたのか。少なくともスパードとダンブレンは気づい
ているだろうな、とは思っていた。」

「その生き方は楽しいか？力を隠し続けることは難しい。こうして
私たちも気づいた。望むにしろ望まざるにしろ、その若さでその力
だ。いつか誰かが君を求める」

じつと孝和を見つめる。その言葉には若人への警告と羨望があっ
た。おそらくエーイと孝和は戦えばほぼ同じくらい、もしくはほん
の少しエーイが強いだろう。真龍の力を出さなければこのくらいが
孝和のレベルだ。それでも、人として強者といえるクラスのエーイ
に20代で比肩する孝和には、いずれ多くの勧誘が来るだろうこと
は、想像に難くない。

「まあ、かなり難しいかもしれませんが、出来るだけ穏やかに生き
たいですよ。今でも十分充実はしてますし。こっそり生きていける
ならそのほうがいいですし」

そういつて笑う。それにつられて目の前の2人は笑顔になった。

「そうか。いろいろあるだろうが、君の人生だ。楽しんで後悔の無
い様に生きればいい。何かあれば、傭兵団の宿舎に來たまえ。何か
の助けにはなるだろう」

その後は、共通の話題で過ごした。今のスパードとダンブレンの
様子、ルミイ村での壮絶なしごきに、防具の調整。ほぼ孝和の話だ
けではあったが、話は尽きず、酒と簡単なつまみをククチが持つて
きたことで程よく盛り上がり、その日の夜は更けていった。

そうして2日目は全くモンスターの襲撃も何も無くキャラバンは進んだ。順調な旅であったので、夜の間のアリアに対するスカウトはほとんどんエスカレートする一方だった。

しかし、その一方で孝和の存在は見事にスルーされ、ものすごく読書が進んだ。その本『毛皮を上手に作るには』を読んでいる時に、ちょうどいいタイミングで元狩人の冒険者と親しくなることが出来た。彼による実演を交えた毛皮製作法はかなり為になったので、孝和自身としてはなかなか充実した夜を過ごすことが出来たのだった。ちなみにキールは夜になると眠くなるので、すぐに寝てしまった。なんとなく孝和としては寂しいものを感じてしまった。目的地に着いて自由時間はキールと遊ぼうと決めた孝和であった。

問題は5日目、最終日のポート・デイに向かう最後の最後で起きたのだった。

第17話 野営地での出来事（後書き）

開始当初の目的でもあった、「お気に入り登録150件」が1部の終了時に超えることができました。皆様ありがとうございました。

これからも鋭意努力しますので、最後まで見捨てないでいただけると幸いです。

第18話 突破(前書き)

誤字脱字ご容赦ください

第18話 突破

マドックくポート・デイのキャラバン隊は順調に行程を消化し、最終日の朝を迎えた。

「あーあ。もうすぐ着くかあ。なんかいろいろ疲れたよなー」

『そうなの？ぼく、けっこうたのしかったけど？』

そんな朝の語らい。昨晩は不寝番ではなかったたので、夕食後はぐっすりと睡眠をとった。キールと2人きりというのも久しぶりだったので、少しふざけてキールの触り心地を十分堪能して遊んだのである。キールのほうも久しぶりに孝和に、じっくりと構ってもらえるのが嬉しかったようで、触ってくる孝和に擦り寄って甘えてきた。結局、夕食後にそんな感じで憩いの時間を過ごした2人は、今朝完全に気力充実して目覚めたのだった。

まあ、その一方でかなりのダメージを受けている人もいたのだが。

「お、おはよう。2人とも元気なのね……」

そういつて隣のテントから出てきたのはアリアだった。女性用のテントは別にキャラバンの方で用意してある。アリアはそちらで寝ていた。

「だ、大丈夫？ものすごいクマだけど……」

『まだねててもいいよ？ぼくら、おこしてあげるから』

目線の先にはアリアがいた。口元を押さえてよろよろと水瓶のほうに歩いていく。そのまま柄杓を掴み、水瓶からくみ出した水を音を立てて飲み干す。

「不寝番の無いときは毎回、酒盛りだったから。キツイわ。正直」

見事に二日酔い、しかも寝不足も加わってまるでゾンビのようだった。スカウトの最後のチャンスとばかりにかなりのアルコールを摂取させられたようだ。

「いや、だから寝てなよ。キツインでしょ？多分あと2時間は大丈夫なはずだよ」

アリアがこうなった理由は、孝和側にもある。無理を言っただけでアリアに試験の際の当事者を引き受けてもらっているのだ。出来ることがあるのなら、孝和がキツチリフオローするのが筋だろう。

「大丈夫よ。これくらいなら、1時間もあれば十分動けるくらいになるわ。ありがと。キールもね」

心配して近くに寄ってきたキールを安心させるようにその体をなでてやり、柄杓から水をかけてやった。

ふるふると身震いしてキールが水しぶきを飛ばす。ごく少量だったのでアリアにはかからなかった。

『でもさ、でもさ。かお、すっごいくまだよ？ゆっくりねてなよ』

実際、調子は良くなさそうだ。試験の際の詳細を多くは語れないため、注がれた酒を断るのが難しかった。さらにストレスも重なっているのだろう。肌のほうにもすこし荒れが見て取れる。

「そう？じゃあ、ごめんなさい。やせ我慢はしないわ……。ほんとにごめんなさい」

結局、彼女はそのままテントに引込む。二日酔いだろうが、何とか出発までに回復して欲しい。

「どっかに確か乳牛いたよな。どこだったっけ？」

「んと、たしかうしろのほうに、やぎさんといっしょにいたけど。ますたー、どうするの？」

「たしかホットミルクって二日酔いに効くんだよ。冷えてると駄目なんだけどな」

日本のネット情報の類だ。昔、大学の飲み会で二日酔いだったときに調べた。ホットミルクは気休め程度だろうと思ったが、そこそこ効いたので、ネットの情報ってスゴイと驚いたのだ。ターメリックも探してみようかと思ったが必要摂取量がどのくらいなのか判らない。何かあつたら大変なのでそちらはあきらめた。

そんなわけで、孝和はキールをひょいと持ち上げて、牛乳を手に

入れるためとことこ交渉に向かうのだった。

朝食後、ポート・デイへ向かう者と、さらに北に向かう者に別れた。この野営地までで護衛は2手に別れる。キャラバン隊はポート・デイと北部方面3の割合でなっている。北部方面はこの後、現在の野営地でキャラバンを組みなおし交易を続ける。ポート・デイから出発する交易隊は、ここで明日合流することになるらしい。

「結構、回復したみたいだね。動けるみたいだし、馬車でそのまま運んでもらうかもって、一応御者さんに頼んでただけど」

その孝和の前には朝よりも少し顔色の良くなったアリアがいる。

「ふふふ。だいぶ楽になったし、ほんとに助かったわ。水分も十分取ったからまあ、昼には元に戻るんじゃない？わざわざ取りに行ってくれたんですって？ありがとう」

にっこりと孝和・キールに笑いかける。その笑顔に孝和は癒された。

ホットミルク作ってよかったなー、と孝和は幸福感に包まれる。美人の笑顔は良い。良いものだ。うん。

その一方、スカウトに失敗した皆さんと、その他の男性陣はものすごい顔でその様子を眺めていたのだが、それは余談です。余談ですとも。ええ。

準備が終了し、ポート・デイ隊が出発する。その様子を野営地から北部組が見送ってくれたので、しばらく孝和たちポート・デイ組は手を振りながら出発することになった。互いの無事を祈る意味でもこういったことは大切なコミュニケーションのひとつといえる。将来また、一緒に旅が出来るように願いを込めるのである。

一部の移動時の混乱があったが、最終的には円満にキャラバンは別

れて移動を開始した。結局、ポート・デイ組は40名ほどのグループになった。護衛は12名。馬車の積載した荷はかなりの量になった。北部組は野営地でポート・デイ組と商談を行い、その後のキャラバンを続ける上での必要分を除いて、この場所で現金化することで身軽となり、逆に荷を満載したポート・デイ組は町へと向かうのであった。

では、こちらはポート・デイを目指す孝和たちである。ポート・デイに向かう護衛は孝和と、エーイたちのチーム、野営で仲良くなった元狩人のポターたち個人冒険者たちを合わせたの12名。商人はこの町とマドックの交易を主とする者達であった。

「では、先ほども言ったとおりだ。ここから先が最も危険な地域になる。モンスターは考えなくてもいい。出てくるのはほとんど、ポート・デイを塙にした盗賊や荒くれたたちの襲撃だ。あちらが必要なのは俺たちの命ではない。積荷だ。到着直前のギリギリを狙ってくる。奴らは奪い取ってそのままスラムに直行する。だから、奴らを見つけたら『逃げろ』。町まで全力で逃げ切れればいい。戦闘は最小限。護衛が無理だと思ったら、いくつか荷を放り出して奴らにくれてやれ。商人の皆さんもそこは想定内の範囲内として、契約時にサインしてる。まあ、守れるなら守れ。以上だ！」

出発前の訓示で、エーイはそう言っていた。交易路の危険は、大人数のキャラバンである程度カバーできる。しかし、到着直前の最後の少人数での移動こそが、危険なのだ。薄皮を削るように荷を分捕る。その後に、全力で逃げる。これはポート・デイの周辺ではそんなに珍しくない野盗のパターンだ。

「でもさ。そんな治安なのに誰も対策しないの？どうなってんだい？」

孝和はそう考える。治安維持とかという概念はあるはずなのに……

…。
その疑問はアリアから返答があった。

「ここは、領主の私兵である傭兵と、国王の直属の海軍があるのよ。どちらも主導権を誇示してるの。でも、スラムの連中もこの経済活動に役立つてるからね。表立って非難はしても殲滅はできない。実は、スラムの暴走を抑えてるのが、非合法の盗賊ギルドってわけよ。持ちつ持たれつ微妙な感じだね。どれも、そこそこ仲良くそこそこケンカしてるのが今の状況。10年前に現領主が変わってからいさかいても少なくなっただけだ」

「すらすらとポート・デイの情報がアリアから出てくる。そのことに驚きを孝和は隠せなかった。」

「そこまで驚かないで。いろいろ知ってるのは、私の用のある人がここにいるからよ。その人からの又聞き。実際の経験じゃないから、違っても文句言わないでね」

なるほど。そういったこともあるか。
とりあえず、そういう微妙に治安に問題を含む地域なのは間違いないのだろう。用心に越したことはない。

『あと、どれくらいたつたらつくのかな？』
キールはそう聞いてくる。いま、キールは御者台の横にちよこんと乗っけられている。ほとんど手荷物扱いなのだ。孝和と、アリアの2人はその馬車の横を歩いている。

その馬車は荷物が満載されて車軸もギシギシいつている。積載量とか考えて積みよ、とか思ったがこの世界ではそんな法律なんてないだろうし、仕方ないだろう。

なんとなく、横を歩くのに少し怖さを感じる。
「多分、もう少し先の川を越えた先らしい。結構予定より早いみたいだし、昼食前に着くんじゃないかな？」

「そうね。地図上ではもうそろそろ。ここの先は草原だから、川を越えれば襲撃も無い筈よ。そこから先じゃあ門の警備にも気づかれらるだろうから、そこまでが今回の警備任務でしょうね」

きっかけは、キールの一言だった。キールの気配の察知能力はずば抜けたものがある。試練の洞窟のような閉鎖された空間で敏感に敵の気配を感じ取れる才能は、こういった外の開けた場所ではあまり役には立たないと、孝和は思っていた。

孝和個人は自分の前方、しかもある程度の攻撃的な敵意のみを察知するだけなのだ。しかし、キールは自身を中心とした気配を察知する。その範囲はかなり広い。遮蔽物がなければ、目の届く範囲内の生物の気配をそのまま読み取れてしまう。個人の特定は無理でも、体格や性別くらいならば完璧に、である。

そんなキールが孝和に話しかけた。

「ますたー」

「ん？なんだ？町の様子でも見えたか？」

そのときのキールは孝和に頼んで、積載された荷物の上に放り投げてもらい、高い場所から風景を楽しんでいた。

「あのね。あつちのはやしのむこうがわとね、おかのむこうにね。」

おとこのひとがいつぱいいるんだけど、おはなしにあった、とうぞくさんかなあ？」

キールの指摘したのは進路方向の右手と左手の両方である。このまま進めば、両側から挟みこまれる。

「大体、何人くらいだ？馬とかはいそうか？」

孝和は簡潔に尋ねる。少しでも分かることをあの場所に着くまでに、皆に知らせなくてはならない。

「たぶん、20にんくらいで、はんぶんくらいうまにのつてるとおもうけど、もうすこしちかくないとわかんないや。ごめんね、ますたー」

申し訳なさそうにそう孝和に報告する。いや、全く気にする必要はない。

「十分だよ。ありがと。ほんとに助かった。キールはそこにいて、襲ってきたら光輪をぶちかませ。気をつけてな。ふりおとされるなよ?」

『うん!がんばるね!』

元気のいい返事をしたキールに軽く手を振り、孝和は先行しているエーイに報告に行く。

「それは本当か?確かにあの辺りは怪しいが、あくまでキールの直感だろう?モンスターの野性の勘とはいえ信用できるのか?」

エーイはそういった後、孝和を真剣に見詰める。念のため、不自然でなくらいに速度を少し落とす。全体はゆっくりと問題のポイントに近づいていく。距離にして後、700mと言う所だろう。

「はい。信じてください。あの向こうに、襲撃者がいます」

孝和も真剣に見つめ返す。隣のエリアも賛同の頷きをエーイに見せる。

その様子から、エーイは襲撃に備えることを了承し、全体に伝えた。あくまで自然に、且つこっそり迅速確実に。エーイはエリアを同行させて各馬車に説明に回る。ベテランのエーイと、話題のルーキーの説明ならば皆の同意も早いだろう。

「おそらく、あの問題のポイントを越えて、少し行ったところで一気に襲ってくるはずだ。あの先を越えれば川まで一直線だ。襲撃には最後のチャンスといえるだろう。行き足をつけて、襲撃前に俺が合図を出す。そこから一気に駆け抜ける。向こうの虚をつけるようにスピードが最優先だ」

現在、各馬車の上にはキールのほかに4名が隠れている。元狩人ポターと、ククチの2名は弓矢を装備し、向こうから判らないように布をかぶり伏せて迎撃の準備をする。他には魔術師が2名。つまり5台の馬車の上に遠距離迎撃が出来るように各員が位置に付いた。そうして問題のポイントを超える。何気ない様子ではあるが、全

員がいつでも駆け出せるよう準備をする。合図があれば馬車に飛びつき、後方からの襲撃に備えることになっている。

準備は万全。後はエーイの合図待ちであった。

「全員！全力で走れ！馬の足は気にするな！！川を越えるまで持てばいい！！」

ある程度の距離をポイントからとつて、エーイは怒鳴る。後方を一切見ることなく全力で走った。それに続き、馬車の馬や鳥馬に鞭が入られる。全員が死ぬ気で前方に駆け出す。遅れれば襲撃者によつてどうなるか判ったものではない。

川の付近に到着したら、エーイのチームの魔術師が火炎の爆裂術、ファイアー・ボール火炎球で、ポート・デイの門番に気づくように分かりやすく火柱を上げて、救援を引き寄せる予定だ。さすがに、その距離で略奪行為が行われていれば、警備の部隊が駆けつける。そこまで逃げ切れれば大丈夫だ。

「行け、行け、行け！！」

孝和は合図と一緒に、隣の馬車の荷台の紐に？まる。襲撃者の動揺が伝わる。この距離ならば、方向さえわかれば孝和にもある程度の様子が感じられた。

こんなこともあるつかと、用意していたものと一緒に、飛びついた馬車の空きスペースで足場を固める。

「その袋、何！？さっきまで持つてなかったけど！？」

アリアは孝和とは別の馬車の御者台に居る。道を駆け抜ける轟音に負けないよう、声を張り上げる。

荷台の孝和も出来ることは追いつかれるまで何も出来ないはず。本来ならば、御者台でアリアと同じように追いつかれてからの戦闘要員のはずだ。

「手ごろな石、用意してたんだ！おもいつきりぶつけてやる！！」

孝和もアリアに聞こえるよう大声を張り上げた。腰にくくりつけたズタ袋の中をアリアに見せる。中には丸みのあるこぶし大の石が入っていた。毎日、夜間に足元を見つめながら、「石、石」と呟き

ながらウロウロしているその様子を多くの者に見られていた。そのせいで、孝和の評判は「なんか危なそうな人」という非常に不本意な認識となっていた。

まあ、それはそれ。投石で襲撃者の迎撃を試みるつもりだ。気功術でピッチングの際に必要となる部位にだけ強化を掛け、思い切り投げてみよう。近距離であればある程度のコントローラは利くだろう。

「……じゃあ、始めるぞ。気は乗らんがね」

目標の交易隊は、順調にポート・デイに向かって進んでいるのは斥候の報告で分かっている。そのとおりに交易隊は、遠方に姿を現した。徐々に襲撃の予定ポイントに近づいている。しかし、最後の最後で彼は踏ん切りがつかなかった。しかし、やらねばならない理由がある。

いまいち乗り気でないこの人物は、40代の男性であった。このような仕事をするもの特有の野卑さは感じるが、その中にも蛮勇の気品といえるようなオーラが漂う。赤毛に少しだけ白髪の混じる頭髪は短く切りそろえられ、こめかみには薄く傷跡が見て取れる。口元には無精ひげが生えているが、それがみっともない風情ではなく、逆にワイルドな男らしさにつながっている。体つきもがっしりとした筋肉が、粗末な皮鎧を下から押し上げ、少し窮屈そうに見える。馬の手綱を左手に掴み、逆の手には少し短めのカタールを握り締める。印象としては馬賊の親玉といったところだろう。

彼は、大きいため息をついて周りに話しかける。

「予定通り、奴らが完全に通過してから一気に後方から襲い掛かる。目的を達成したなら、各自バラバラに散って予定の時刻に集合場所に。分かっているな？」

分かっているのだろうか。赤毛の彼の他は三流もいいところだ。

この状況下で酒瓶から直接口をつけ、いまだに座り込んでいるのだ。彼が声を掛けねばそのまま寝てしまうのでないだろうか？

「言われなくてもわかってるさ……。だがな、お宅は気負いすぎなんだよ。こんくらの仕事でやる気出せつてのは、無理なんだよ。なあ、お前ら！」

そういつて勢いよく立ち上がったのは、この即席襲撃部隊の核を成すゴロツキどものまとめ役である。まあ、彼らにはただの交易隊の襲撃ということだ。命令が出てはいるはず。襲撃のメインは彼らに頼むのだ。周囲の一団もそれにつられて笑い出す。

自分のほか数名だけに「あの命令」が出ている。その者達は一目で分かる。その緊張はひしひしと伝わってくるのだ。仕方ないとはいえ、この落差はかなりテンションに影響してしまう。

「出来るのなら、構わん。仕事はやってくれよ」

「フン。有名人さんは違うね。何でこんな所にいるんだよ？あなたの本職はこれじゃないだろう」

どうやらこの男は、自分の本分に赤毛がかかってくることに不満がある様子だ。まあ、今回限りなのだから構うまい。

「さあな。そろそろなんだ。準備はしてくれ。もう時間がない」

「仕方ねえ。おい、お前ら、準備しろとよ」

彼の合図でノロノロと騎乗する部下たち。酒瓶を一気にあおり、空のビンを投げ捨てる。もしかしたら、これからの凶行に怖気づかないようにしているのかもしれない。しかし、ここまでの酔いでは仕事にならない。やはり、三流だな。

今回の「命令」を受けたのは、ギルドの主流派からは外れている。まあ、捨て駒扱いなのだろう。その点からしても赤毛の男はテンションが上がらない。

「行くぞ。あのポイントを過ぎれば駆け出せ。仕事は完璧にな」

彼らの実力に期待はしていない。自分は自分の「成すべき事」を完遂するだけだ。やらねばならない理由があるとはいえ、掛け金はなんと大きなことか……。

赤毛はさきほどより大きくため息をつくのだった。

「！！？なんだと！？何故だ！？」

赤毛は大声を上げた。事前に決めた襲撃のポイントにいたるまで、あとほんの少しだけであつたが、交易隊のスピードが乗っていた。それだけなら、不自然ではなかつたのだ。

しかし、いきなり全力で駆け出したのだ。しかも、馬をこれで潰す勢いのスピードである。この草原地帯はポート・デイまでで襲撃が出来る最後の地点だ。

後方からの奇襲は間違いでない。地形や、人員などで変わりはするが、今回の場合、前方から襲い掛かれれば、襲撃された側の選択肢は「迎撃」「強行突破」となるだろう。つまり、どちらも正面からぶつかる戦闘行為を選択するのだ。

しかし、後方からであれば選択肢はさらに増える。今回であれば、「迎撃」「強行突破」「逃走」「救援待ちの防衛」となる。その増えた選択肢に迷う数瞬間に、全員が同じ方向を向いて行動することなど不可能である。そこに全力をつぎ込み一気に襲撃を終わらせる。それが計画であつた。

襲撃者たちは、完璧に虚を突かれ、全員が棒立ちになる。それを見て、赤毛は舌打ちと共に馬に騎乗し、走らせる。この騎乗の動作すらも、ロスとなつた。もし、彼らが川の辺りまで逃げられれば、自身の「命令」の遂行すら困難となる。

「何をしている！！追え！！命令がなければ動かんつもりか！？」
苛立ちと焦りを含む怒声を、三流どもの頭にぶつける。やはり、深酒が原因で頭の働きも鈍くなっているのだろう。唐突なこの交易隊の動きに対して全く対応が出来ていない。

駆け出せたのは赤毛のほかは「命令」を受けていたであろう数名。あとは個人で動く者だけで、組織だった動きを期待できない状態に陥っている。

「お、お前ら！！なんで追わないんだよ！！バ、バカ野郎！！！」
頭が叫び声をやっとなげると、その声で我に帰った一団が猛然と
交易隊に襲い掛かる。

だが、

（まづいぞ……。これでは、ギリギリだ。間に合うか！？）

相手を甘く見ていた。このタイミングは完全にこちらを認識した
逃げ方だ。どうやったかは知らないが、この速度では、追いつくのは
川の直前。しかも、荷の上に弓を持った護衛が見える。これでは
近づくのも一苦労だ。

（クソ！クソツ！！間に合ってくれよ！！）

赤毛は全力で馬を走らせる。その勢いは徐々に間を詰めるが、一
人では出来ないことも多いのだ。三流どもが追いついてからでない
と、行動などできようはずもない。隠れていた場所も、ある程度の
距離を取っていたことも、悪い方向に転がった。

孝和たちは交易の護衛最終日に、全力での逃走劇を演じることと
なる。今のところ、ごく僅かに孝和たちが逃走劇のアドバンテージ
を取っている。

川までの残り約5 km。この距離を競う緊迫のひと時がこうして
始まったのだった。

第19話 最後の襲撃者（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第19話 最後の襲撃者

「あと少しで追いつかれるぞ！！迎撃準備をしておくんだ！！狙うのなら、人ではなく馬を狙え！！」

エーイの怒号があたりを響く。かなりの大声であったので風に乘って赤毛の襲撃者まで声が聞こえた。馬を狙うのは常道。汚いとかそんなことは関係ない。護衛・襲撃者として、そんなことはわかってる。それなのにわざわざそう忠告するということは……。

（素人がいるな？狙い目はそこか！？）

赤毛はそう判断した。これはこの襲撃での数少ないよい情報だった。これが護衛の嘘ではないかと一瞬疑ったが、せつかく上がったテンションをわざわざ盛り下げる必要はないだろう。

しかし、まだ遠い。出遅れた襲撃部隊の本体がまだ追いついていない。土煙を上げ、勢いのままに突進してきているが、最初の出だしのアドバンテージをゼロにするまでにはいたっていない。

だが、これならば川で救援を呼ぶまでに本体が追いつく。ポート・デイの警備が気づいてここに来るまでに襲撃を終えることが出来る。向こうのスピードが徐々に落ちている。満載された荷物と、人員がネックとなっているのだ。しかも5日間の旅の終わり、溜まった疲れもここで一気に噴出すだろう。馬の状態もここから見る限り、足ももつれてきているようだった。このままでいくと、馬の足が限界を迎えるだろう。馬が潰れれば逃げることも出来なくなる。助かった。これなら十分に追いつけるはずだ。つまり、草原地帯のこの競争はもうすぐ終わる。

「いけるぞ！！狙いは各自に任せる！！」

赤毛は追いついてきた本体にそう声をかける。徐々に交易隊に焦

りが見て取れる。

そして、この逃走劇は襲撃者の勝利で終わるであろう。多くの血を流し、荷は奪い取られる。救援もこの距離では間に合うとは思えない。赤毛は目をつぶり、交易隊に降りかかる残酷な未来に祈りをささげる。少なからず、犠牲は出るだろう。自らの「命令」もあるのだ。手は抜けない。ただ、本隊と自分の目的は違う。そちらを優先させてもらうのだ。本隊には囷として役に立ってもらおう。

しかしながら、この勝利予測は、護衛側に起死回生の一手がなければ、である。

この時点で、襲撃者側の誰も知らないことがあった。キールが出来る「一手」のことである。

「いけるぞ！！狙いは各自に任せる！！」

その声が、後方から聞こえる。ただ一人、後方から勢いよく突出している赤毛の男が声の主のようだ。その騎乗している馬は滂沱の汗を流し、その後ろの襲撃者の本隊を引っ張っている。このままでは確かに追いつかれるのは、川のはるか手前になるだろう。警備に気づかれるかどうかは五分五分。こちらのスピードも落ちてきている。ならば！

「キール！！聞こえるか！？」

キールの乗っている馬車は全ての中で最も車高が高くなっている。こちらの声が聞こえるかは微妙だ。

『よんだ！？ますたー？』

こういったときの念話はとても役に立つ。全く雑音なくクリアに

聞こえるからだ。一方孝和側が念話を使う場合は、近距離でなくてはならない制限がある。少し離れているので念話同士で話は無理だ。「いいか！よく聞いてくれ！！馬車の引き手を全部回復するんだ！それが終わったら、交易隊の全員にお前の気づいたあいつらの居場所を伝えるんだ！キール、頼んだぞ！！」

孝和はキールのできるこの状況の打開策を考え出した。馬の回復、そして敵の位置をダイレクトに伝える念話を利用する。一応事前にそういったことが出来るということを、エーイだけには伝えた。何とかなつてくれればいいんだけど。

『わかった！！がんばるね！！』

キールからそう返答があった。そして、キールは淡く光を放つ。

『神の祝福！！』

ゴット・ブレス

馬車を引つ張る馬・鳥馬に神の祝福の球形魔方陣が発動し、その姿を包み込む。今にも倒れそうな様子であったはずのその顔に生気がみなぎる。先ほどまでの自分の疲れや、息苦しさが嘘のように消えていく。彼ら自身が不思議で仕方ない顔をしているのが分かる。話ができれば、「何？どうして？」とでも言ってくるだろう。

馬車の引き手が、全力で走り出す以前の状態に体力が回復する。それはつまり、襲撃者にとって全くの予定外のファクターであった。スピードが落ち、もうすぐ追いつこうとしていたのに、ここからさらにスピードが上がるのだ。

これは、見えたゴールがさらに遠のくことになる。かなりキツイだろう。死ぬ気で走った後に、また走り出せというのは厳しい。襲撃者はともかく、回復手段の無い襲撃者の馬は一度スピードを落としたのだ。再びこの競争劇を再開できる気力がもうほとんど残ってはいない。それでも、距離は徐々に詰まっていた。しかし、先ほどまでの鬼気迫る勢いはもう完全に無くなっていたのである。

「な、なんだ！どうしたというんだ！？」

もうすぐ追いつき、その刃を振り下ろすはずの、哀れな羊たちの群れが急に速度を上げた。その様子は、いつもの光景であった。襲撃者の中で本体を率いる頭は、こういった光景をよく見ている。全力で逃げる獲物が見せる最後の足掻きであった。少しでも刃の届かない遠くへと逃げるため、後先を考えず走り出すのだ。その悪足掻きはいつも長くは続かない。最後に残った全てをつぎ込む大博打。博打はいつも張る側にほとんど勝てないように出来ている。その博打に負け、今までの獲物は彼らの飯の種となった。

今回もそのはずである。しかし、スピードが落ちない。いや、むしろ最初の頃よりスピードが上がっている。こちらは最初の勢いが落ちてきている。なのに何故、あの連中の馬はどんどんスピードが上がっていくのだろうか。

こんなことはあつてはならない。自分たちはこの道のプロなのだ。こんな不条理を許してはならない。冷や汗が止まらない。襲撃している自分のほうが、恐怖を感じることは長年の経験でも初めてだ。

「お、お前らあつ！！急げ！！誰でもいい！！足を止めるんだ！！」
先程まで体の中に流れているのを感じていたアルコールなど全く感じない。心地よい酩酊感など何時のことであつたか分からないくらいであった。どんなことをしても、奴らを止めなくてはならない。そしてこの体中を流れる冷たいものを奴らの血で濯がなくては……。

ポターが矢を放つ。一射目、二射目は外れる。勢いはあるのだが、なにぶん足元は揺れ動く馬車の上である。しかも相手は馬に乗り、1箇所にはいない。しかし、あくまで当たるならラッキー、という程度の牽制の為に放っているのだ。馬車に近づけないよう、的を狙うように落ち着いて丁寧な、ではなくとにかく次々と数を射ることが目的である。

そんな中、前触れもなく振り向きざまに、今まで注視していた馬車の右後方とは反対側、左後方に矢を射る。これも牽制だ。そのつもりで射た矢は襲撃者の肩口を掠めた。襲撃者の肩には軽装化のためであるう、皮鎧のパーツとして本来あるはずの肩当がなかった。かすった肩に気を取られた。全くこちらに気づいていないようだった射手の一撃。当たった瞬間、見事にバランスを崩し、馬にすぐりつく。その状態で何とか体勢を整え、襲撃者は弓に矢をつがえ、ポターに向け矢を放とうとする。

しかし、
ブンッ！！

真横から普通はしないような音を立てて、石がとんでもない速度で飛んでくる。その投石はポターを狙う弓に直撃した。その結果、ポターを狙った矢はてんで見当違いの方向に飛んでいった。

その上、彼は見事にバランスを崩し落馬する。さらに、追いついてきた後続の馬に踏みつけられ、この競争劇から脱落した。

「うわあああああああつ！！！」

彼の絶叫が聞こえる。下手をすれば命を落としたかもしれない。

ポターは石が飛んできた方向を向く。そこには孝和が左腕一本で石を投げている様子が見て取れる。右手は荷台を縛る紐を握り締めているようだ。

しかし、どうしてあの不恰好な投げ方で、あの威力の投石が出来るのか全くわからない。

孝和は、ポターのほうを見て、軽く頭を下げる。それを見て、ポターはいまの状況にとりあえず対応することに決めた。感謝の意は後でも出来る。

「よし！次はどっちだ！？キール君！！」

『えーとね。ひだりがわからふたりと、2つむこうのばしゃに、ひとりはしつてきたよ。おねがいしまーす』

「分かった！ありがとう！」

ポターはそう大声で叫ぶと、次の矢をつがえるのだった。

このように、キールは迎撃の全員に自分の感じた敵の位置を念話で伝えている。秘匿性、確実性に優れる上、実は言葉だけでなくキールの感じたものを直接受け取れる。このことは各員の死角のカバーや、対応に大きな貢献を果たしていた。

そして川までは、残り2kmを切っていた。つまり、襲撃者の勝利の確信は肩透かしに終わり、更なる焦りを生む結果となったのであった。

「畜生ツ！まずいぞ、走れ！！何してるんだ！！手前エ！！」

襲撃者の頭ケネルは自分の騎乗するシャドウホースに蹴りを入れる。すでにシャドウホースは限界を迎え、流れ落ちる汗の量は尋常ではなかった。草原を駆け抜ける、このシャドウホースは、過去にケネルが襲撃した商人の商品であった。本来、シャドウホースはモンスターに分類される。だが、その黒々とした美しい毛並みとある程度の人語を理解する高い知能を持つため、貴族を中心に愛好家が多いのだ。Fクラスの冒険初心者でも余裕を持って勝利できる程度の戦闘力しかないのだが、傷が付けば、商品価値はほぼ無くなってしまふ。しかも、なぜか人工的に交配すると、毛並みの黒にくすみが出るのである。いまだにストレスや、食事のせいなのか全く分かっていない。そのため、野生のシャドウホースは大変高価になっているのだ。

このシャドウホースはケネルに忠誠を誓っているのではなかった。恐怖がシャドウホースを縛り付けていた。襲撃時にこのシャドウホース以外は全て処分された。ごくわずかな傷のものは、ばれないう様に秘密裏に闇市場で売られたのだが、目立った傷のものはその場で殺された。なまじ知性のあったため、死の恐怖を目前で見せ付

けられたことがトラウマとなっているのだ。ケネルは、今まで自分に逆らった場合、部下であっても容赦しなかった。シャドウホースには自分の周囲にまわり付く死の恐怖に逆らえる手段がなかったのであった。

「走れっつんだよ!? 止まんじゃねえよ!!」

しかし、生き物である以上限界はあるのだ。足はもう止まる寸前である。その絶望的な走りは最後の意地を見せた。ついに交易隊の最後尾にたどり着いた。

周囲を見渡すと、追いついたのは最終ポイントの川だったのである。全力で走り続け、引き返さなくてはならない限界点にたどり着いてしまったのだ。

だが、

「つめえっ！ トロイんだよ!? 愚図があっ!!?」

ケネルは周囲の状況を理解していないほどに、血が上っていた。先ほどから、先行した個人の襲撃者が次々と迎撃され、落馬している。その状況も彼の混乱に拍車をかけていた。シャドウホースから飛び降りると、苛立ち紛れに思い切り前脚に鞘ごと剣を叩きつけたのだ。

ヒヒヒイイイーーン

悲しげな嘶きが辺りに響き渡る。シャドウホースの脚が、本来曲がらない方向に折れ曲がる。この後に逃げることを忘れて、自分の逃走手段に苛立ちをぶつける、という行動を取った彼に誰も話しかけることが出来なかった。

一方、こちらは孝和たち交易隊である。迎撃作戦は予想以上の成果を挙げている。

「よし！ここで全員、防衛に専念しろ!! 頼むぞ!!」

エーイはそう言うのと下馬して、剣を抜き放った。今まではキールの位置情報を頼りに、近づいてくる敵にプレッシャーをかけて、で

きるだけ時間を稼ぐことに専念した。しかし、目的の川まで辿り着くことが出来た。しかも、ある程度の戦力を削ることに成功し、こちらは誰も負傷者はいない。

孝和は、荷台から飛び降りると、エーイのほうに向け、全力で走り出した。まずは後方を互いに守れるように、集合することが必要だ。馬車の上にいる迎撃の人員は、そのまま牽制に専念してもらうことになっている。

襲撃者側の勢いも鈍る。誰がこの状況下で先陣を切るのか踏ん切りがつかないようだ。完全に奇襲は見抜かれ、その後の追撃も一度追いつきながらみすみすこの地点まで逃すことになった。しかも、後しばらくすれば、ポート・デイの警備が駆けつけてくる。

一刻も早くこの場から逃げ出したいのは山々なのであるが、そうも行かない理由が相手にあるのがありありと見て取れる。

「くそ……。逃げてくれよ……。ここまで来てるんだ。逃げるのにも時間があるだろうに……」

孝和はそうつぶやくと、エーイを真似て商人たちの前に剣を構えて威嚇を行う。馬車で壁を作って商人の皆さんは奥に引っ込んでもらう。この状況で荒事に慣れていない彼らに出てきてもらっては邪魔になる。そのことは十分本人たちも理解しているのだろう。全員が1箇所に集まって、へっぴり腰で剣や槍を構えて、壁になっているところ以外からの襲撃に備えている。

「てつめえっ！ トロイんだよ！？ 愚図があっ！！？」

襲撃者の中からそういった怒号が聞こえる。そのあまりの大声に視線が自然とその方向に向く。

「え？ 何してんだ！？ あいつー！」

その視線の先には真っ黒な毛並みの馬が、思い切り男に脚を叩き折られていた。

崩れ落ちても、黒馬は小さくうめき、それが辺り一面に冷たく響く。

それを合図として一斉に全員がこちらに向かって突撃してきた。

それに見事、足をすくわれて襲撃者が前に倒れこむ。さらにその襲撃者につまずいて、隣にいたもう1人も巻き込まれる形で地面に倒れこむ。

その頃には、孝和はその現場にたどり着いていた。走りこんだ勢いそのままに、起き上がりかけた襲撃者にサッカーボールキックの要領で、全力の蹴りを顔面に叩き込む。首から上が吹き飛ぶのではないか、という威力であったためにその意識はあつという間に闇に沈んだ。もう1人は、1人目が吹き飛んだ光景を目にして、急いで立ち上がるうと焦った。しかし、その時には孝和は彼に向き直っていた。

「寝てる！邪魔だ！」

豪腕一線。エッジを持たない左腕には魔力の込められたあの籠手のはめられている。デュークとの戦闘時に闇に包まれたため、全体に微細なヒビが入っているが、まだ何とか使えるだろう。起き上がりにかけの顔面にアッパー気味の一撃を叩き込む。籠手から細かな破片が飛び散る。それと、相手のあごが砕けている感触もあり、かなりの衝突音がした。白目をむいてぐらついている相手の体を、気功術で強化した左腕1本の背負い投げで他の無事な襲撃者に投げ飛ばす。

「だあああつ！！」

「グワツ」

巻き込まれた襲撃者が息を吐き出して気絶する。

孝和は心の中でガツポーズをとる。これで3人を戦闘不能にしている。孝和たちのチームは襲い掛かってくるものをいなす形で対処している。孝和たちのように積極的には挑まない。この辺りはチームとしての経験の差といえる。力技でなく、計画的に相手を無力化できるだけの実力もある。と、いうことは……。

「私たちは、私たちががんばりましょう。ほら、また来たわよ！」

アリアのその言葉で我に返る。考えていたことが顔に出ているだろう。正面に向き直り、残りの襲撃者に備える。自分たちに足り

ないチームとしての連携は今後の課題として考えていこう。今はこの状況を切り抜けることが先決だ。

「そうだね。じゃあ、がんばりますか」

気絶した襲撃者3人は小さなうめきが聞こえるだけになっている。あれはほうつておいていいだろう。立て続けに3人が脱落した様子を見た襲撃者たちは逃げ腰になっている。あと4〜5人ほど片付ければこちらは逃げ出してくれるだろう。

アリアは周囲の襲撃者に狙いを定めた。孝和の先ほどの暴風のような攻撃でもうこちらには2名が残るのみだ。そのうち手斧を持つ男に向かい、長剣で切りかかる。

「ハッ!!!」

気合を入れてたたきつけた一撃は、相手の手斧により防がれた。しかし、受け止めた場所は、斧の刃ではなく木製の柄の部分である。その一撃の勢いで、柄にきしみが走る。ミシミシと音を立てるその様子に、男は力を込めて斧をアリア側に押しつけようと抵抗した。

「この！生意気なんだよ。女の癖につ!!!」

苛立ち紛れにそう怒鳴りつける。顔面を真っ赤に染め上げ、口角には唾がたまる。見苦しさを感じながら、それを無視してアリアは最後にこう言った。

「戦神ラウドよ。この戦士の魂があなたの御許に無事届きますように……」

バキッ

そんな音がして手斧の柄が砕け散る。勢いはそのままに、アリアの長剣が男の肩口に突き刺さる。さらに深々と剣が真下に向かう。アリアの手に骨と肉を無理やり断ち切る鈍い感触が伝わる。そして、彼に戦神の祝福が訪れる。戦いの中で敗れた戦士の魂はラウドの元に運ばれるのだ。抜け殻となった骸はそのまま崩れ落ち、返り血を

浴びたアリアはもうそれに興味を失い、次の戦士の魂を刈り取りに2人目の襲撃者に向かうのだった。

「こ、怖えー。アリアってあんななの？」

戦神ラウドの使徒として、無表情に剣を犠牲者に叩き込む様子を見て、やっぱりこの世界の戦士なんだなあ、と再確認した。

周りにいるほかの人にも言えることだが、命のやり取りにためらいがない。全力で斧や槍・剣を相手に振りかざす。その結果相手の命が失われても問題ないのだろう。あちこちから血飛沫や、断末魔の絶叫が聞こえる。

孝和自身はここにいたるまで、積極的に命を奪う行為を避けていた。結果として死ぬかもしれない攻撃はしているが、致死必至の攻撃はしていない。

なぜなら、どうしても自分の中で殺人を否定するものがある。出るなら、そういった行為に及ぶことを避けていたい。どうやら真龍の後継者となった際に精神が大幅に強化されているようで、殺傷行為に耐性が出来ている。初めてワイルド・ドッグを屠ったときに感じた疑問が、プレイス・カードを交付されたときに解決した。どうやら、「人」でなく「龍」に連なる生命体に孝和は変わってしまったためだろう。

だが、「八木孝和」という人間としての矜持であろうか。殺人に対する嫌悪感だけは残った。それが、いまだに孝和の剣を鈍らせている。いま、目の前にある骸に対してもあまり感情が高ぶったりすることもない。だが、これは危険だと感じている。

自身が急激に変わっていくことに対しての、拒絶ともいえる。今の精神が元々の自分の精神とは違うのではないか、といった恐怖すら感じているのである。アリアやエーイ達を否定するものではない。この世界での常識であることだろうから。しかし、殺傷行為には重責を負う。それがこの世界で生きていくために孝和が決めたことだ

った。これが、孝和を縛っていた。

「まずいよなあ……。俺、こんなでこの先皆に迷惑かけるんじゃないかなあ……」

誰にも聞かれないように、こっそりそうつぶやいた。戦闘関係のクエストに難色を示したのにはこういった理由もあったのだ。誰にも相談できない問題を心のうちに忍ばせて、孝和はエリアの援護に向かうのだった。

その頃、ケンネルは全体を統制しているのがエーイだということに気づき、事態の打開の為、そちらに突撃していた。取り巻きの数名は、エーイ以外の護衛に襲い掛かる。

結果、ケンネルはエーイとの一騎打ちに持ち込むことが出来た。統制役のエーイをここで倒すことが出来れば、少なくとも物資の強奪が出来るだろう。

「おらよつと！！死んでろ、貴様！！」

「フン。かかって来い！！」

両者共に剣を掲げ、打ち合いを始める。頭に血が上っているとはいえ、野盗の頭といえるだけの実力はあるのだ。ケンネルの剣戟はかなりの勢いで振り下ろされた。その勢いに逆らわず、エーイはその一撃を受け流した。

「お前、確かケンネルだったな？DOA（生死問わず）で手配書が出ていたぞ！賞金額も金貨で20枚だ。どれだけの罪を犯したんだ？」

「知ったことか！襲われて死んだのは運がねえだけのこと！！罪だなんだ言う前に、護衛の間抜けの責任を考えな！！」

「貴様、クズだな。この辺りでこれ以上仕事はさせん！！ここで終わりにしてやる！！」

エーイの剣とケンネルの剣がギリギリと鏝迫り合いを始めた。両者共に力は互角といったところだ。唯一違うのは、エーイのほうが知恵があるという点だった。

徐々にケンネルの剣がエーイに向かって近づいてくる。後ろに向かい後退する。他の襲撃者・護衛のいないところに向かって移動する。そしてついにケンネルの剣に押され、エーイはその場に倒れこんだ。

「ひやははは！！死ねよ！！」

倒れこんだエーイに馬乗りになる。とどめを刺すために剣を振りかぶり、ケンネルがそう勝利宣言をした。逆にエーイはその様子を見て落ち着いた様子だ。それを見たケンネルは覚悟を決めたのだろうと判断し、その剣を突き出そうとした。

ドスン！

「馬鹿が……。だからそうなる」

エーイはそうつぶやく。そして、笑みを浮かべたケンネルの首から生えている矢を見つめる。ケンネルは首から感じる激痛に疑問の声を上げようとした。しかし、その声は「クヒュー、クヒュー」と空気の漏れる音になり、音としてエーイに届くことはなかった。

馬乗りになったケンネルの胸を軽く押すと、後ろに向かってバツタリと倒れていった。もう彼には命の灯火は残されていない。ケンネルの骸をちらりと見るとエーイは声を張り上げた。

「ケンネルは討ち取ったぞ！！貴様ら、死にたいのか！！？」

あくまで今回は護衛を優先する。もし、傭兵団の討伐任務であれば全員を捕縛するか、殺すかが必要だが、護衛という仕事にはそんな必要はない。

エーイは矢の飛んできたほうに手を上げて、感謝した。ククチがタイミングを見てケンネルを射たのだ。狙いを定め、集中した一矢は見事にエーイの作り出したチャンスを射止めることが出来たのだ。

った。まさにチームならではの阿吽の呼吸である。それに気づかなかったケンネルを攻めるのは酷というものだろう。

「逃げるぞ!!ケンネルさんが死んだ!!急げ!!」

「マジかよ!?!ふざけんな!!」

その遺体を確認した取り巻きが周りに声をかけると、一斉に全員が逃げ出した。後退して様子を伺っていた者もそれにつられて逃げ出した。

どうやらケンネル自身はそんなに人望が有ったわけではないようだ。だれも振り返ることなく馬に飛び乗り、大怪我をしているものは荷のように抱えられて撤収していく。逃走劇で脱落した者はすでに逃げ出しているようだ。ポート・デイの護衛の声もそろそろ風に乗って聞こえてくる。ケンネルが死んでいなくても、引き際であるむしろ、ケンネルの意地のせいで、タイミング的には少し遅れているとすら言える。

そして、数名の骸と孝和のしとめた3名の怪我人を除いて全員がその場から撤収した。

と、全員が思っていた。この時点で全員が襲撃の終了を信じて疑わなかった。

ただ、まだ終わっていないと気づいた2名と、仕掛けようとした1名を除いて、である。

『エーイさん、よけて!!!』

キールからダイレクトに念話が伝わる。エーイはその勢いに驚き後方を振り返る。そこには地を這うようにして、赤毛の男が腰溜め

にカタールを構えて自分に接近してきていた。

「!?!?」

声にならない驚きと共に、赤毛と逆方向に跳ね飛ぶ。

ちょうど横薙ぎにされた剣の先が、首先を掠めるか掠めないかの位置を通り過ぎていく。急な襲撃のため、誰も赤毛の接近に気づいていなかった。しかも、あまりに近すぎて矢を射ることも出来ない。キールにしても位置が悪く、援護ができそうに無い。

2撃目がエーイに迫る。体勢が崩れたまま、エーイはその一撃を片手で持った剣で受ける。しかし、全力で振るわれたカタールはエーイの長剣を刎ね飛ばした。そしてエーイの左側が完全にがら空きになった。

「もらった!!」

赤毛がカタールをエーイの胸めがけて突き出す。その勢いは止められそうも無かった。

しかし、

「痛つてええええええ!!?」

突然、目の前のエーイが消える。その代わりに籠手に包まれた左腕が、カタールに串刺しになっている孝和が急に現れた。

「何!?!?どうい……!!」

赤毛が疑問を発する途中で、孝和はカタールを左腕から引き抜き、その肘を赤毛に向かい全力で落とす。ちょうど赤毛が低い姿勢であったので見事に肘が直撃した。赤毛は地面をその顔面で感じた後で、自分の首に腕が絡み付いてきたのを感じる。まるで抵抗することが出来ずに、首を孝和の右腕が締め上げる。ダメージを受けて一瞬意識が飛んだのは確かだが、ここまで見事な流れの体術は赤毛にとって初めてだった。

「グ……ウウオ……クウ」

「大人しくしろつて!!あ、痛つたあ!!痛い痛いつて!!」

左腕の痛みを我慢して首を締め上げる。しばらく赤毛が抵抗したが、隙を見て絡みつかせた右腕はガツチリ首に食い込んでいる。抵

抗むなく、孝和の腕を解こうとした赤毛は完璧に落とされた。

「あーもー。痛ったあ……。暴れないでくれよ、ホントに」

念のため、カターの柄を蹴って遠くに飛ばす。刺された腕を押さえ、キールがこちらに来るのを待つ。

「すまん。タカカズ、助かったぞ。大丈夫か？」

エーイがそういつてこちらに近づいてくる。ただし、わき腹を押さえてだが。

「いや、こつちよりも、エーイさんのわき腹は大丈夫です？ 咄嗟だつたんで加減せずに蹴り飛ばしたんで……」

襲われそうなエーイとの間に飛び込む際、エーイが攻撃を受けないようにそこから動かす必要があった。時間が無かったので、思い切り蹴り飛ばしたのだ。

赤毛はかなりの隠行であったが、モンスターのキールと、ほぼ人外の孝和の2人だけは赤毛の存在に気づいていた。その為、2人はエーイの危機にいち早く対応することが出来たのだ。

現地に到達するのに気功術を全力で足に集中し、その勢いの蹴りである。下手をすれば、内臓破裂しても不思議は無い。現に足には肋骨を折った感触がある。

「ははは。まあ、これは痛いな……。後で診てもらわないとな。君もだろっ？」

「ええ。こつちも痛いんです……。籠手が無かったらヤバイとこでした」

2人して顔を見合わせ力なく笑う。

「キールに治してもらいましょう。あいつ、こついうの上手いんですよ」

「ほう……。興味深いな」

立ち上がり、彼らはキールの元に向かう。

周りにいた護衛は気絶した赤毛を拘束し、怪我をしたものを手当てするために走り出した。

「……………」

「どうした？タカカズ？」

手当てを担当したキールの治療が終わった孝和が、自分たちの来た道を見ているのに気づき、エーイはそう尋ねた。

「あ、いえ。たいしたことじゃないです。もう居なくなつたみたいですから」

「？そうか。まあ、いい。全員の治療も終わった。奴らも警備に引き渡したからな。そろそろ行くか」

「そうですね。……？あの馬どうするんです？」

孝和の視線の先には脚の折れたシャドウホースがいる。

「ああ、あいつか。どうしようもないな。あの状態では生きていく術などないだろう。いっそこで死なせてやるのもひとつだろうな

……………」

「駄目ですよ！！？ちよ、ちよと待つてください！おい、キール！……」

あわてて孝和は大声でキールを呼ぶ。

『なに？ますたー？もしかしてまだどっかいたいの！？』

大急ぎでキールがぴよんぴよん飛び跳ねてこちらへダツシュしてきた。

「いや、あのな。俺じゃなくて、あの馬を治して欲しいんだ。頼めるかい？」

『うん！いいよ！いつてくるね！』

孝和の指差した先のシャドウホースに向かって、キールがぴよこぴよこ移動する。シャドウホースの目の前まで移動したキールは、その脚に向かって神の祝福ユツト・プレスをかける。見る見るうちに脚が元に戻り、シャドウホースは勢いよく立ち上がった。

大きくいなくなくと、その鼻面をキールにくしくし擦りつけ、その後孝和たちのほうに頭を下げてから走り出した。

『ねえ。ますたー、アリアさん』

「なんだ？キール」「なに？キール」

そういうと孝和は膝の上にいるキールを撫でてやった。アリアは閉じていた目を開けた。返り血はマントを羽織ることで隠している。今はポート・デイの警備と一緒に門に向かっている。そのため、もう護衛は必要ない。護衛の全員が疲れ果て、馬車に揺られることとなっている。おそらくあと30分でポート・デイに着くだろう。

『あのね。さっきのなおしたこ、なんだけど』

「ああ、シャドウホースのことか。どうしたんだ？」

『ほんとうにありがとう。またあいましようって。このおんはかえしますっていつてたんだ』

「え？キール、もしかしてモンスターのことわかるの！？」

アリアはそう驚く。まあ、広義でいけばモンスター同士、会話も出来るのだろうか。

『うんとね。できるときと、できないときがあるの。どーくつのむしさんとか、ゆーれいさんはできなかったんだ』

「そうか……。まあ、できるときは教えてくれ。参考にしたいからな」

『うん！わかった！！』

アリアと顔を見合わせ、2人でキールを撫でてやった。キールからキヤツキヤというような感覚が念話で流れ込んでくる。

のほほんとしたその雰囲気、御者台にいた商人は「いいなー。かわいいなー」と、ちらちらキールのほうを見ていたのだった。

キールはここにいたってかなりの人気が出ていた。野営のときはすぐに寝てしまうし、昼間はちょこんと、置物のようになっていたのであまりみんなの目に留まっていなかった。

しかし、最後の最後にこの情報伝達力・上級回復術が知れ渡りアリアを超えるスカウトが来ていた。ただ、本人が『ますたー』といっしょじゃないと、やだ！』と言われるので孝和にも、スカウトやキー

ルを譲るように、金銭が飛び交いそうになったのだ。

だが、孝和は「興味ないんで……」と断るので取り付く島もない。結果、キールとアリアとチームを組む孝和は羨望のまなざしで見つめられることとなった。

第19話 最後の襲撃者（後書き）

年内はこちらの投稿で終了となります。2ヶ月でしたが読んで頂いた皆様、ありがとうございました。

新年は年始から仕事がありますので、少し遅れるかもしれませんが、今後ともよろしく願います。

第20話 とりあえず、飯！飯！（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第20話 とりあえず、飯！飯！

「さて……と。それなりに落ち着いた？アリア？」

おどおどと、アリアにそう語りかける。テーブルの上には、食べ散らかされた昼食の皿が雑然と並んでいた。孝和個人は元々食べるのが好きな事と、体自身が多くのカロリーを必要とするため、かなりの量を頼んだ。気功術の使用には普通に動く以上のエネルギーを消費する。そのため孝和にはそれだけに見合う量が必要だったのだが、テーブルの反対側に座るアリアも、孝和と同じくらいの量を頼んでいた。

注文した料理がテーブルに載って、実際に実物を見ると、ものすごい量となった。全部食べきれるとか内心冷や汗を掻いたのだが、結果はこのとおり。

女子のヤケ食いの限度を超えていると思うのだが、きれいに皿は空になっている。

「ええ、食事は大変おいしくいただきました！少しだけ気分も晴れたわ！」

グラスに入っているワインをグツとあおり、テーブルに叩きつける。孝和はうわあ、とそのグラスを手に取り、どこかにひびが入っていないか確認した。

「だ、駄目だつて！！もう、危ないじゃんか。酒じゃなくて、水！水！！」

大き目の、確かスープレの入っていた器を掴んで横にある水差しから、なみなみと水を注ぐ。それをアリアの目の前に差し出す。

どこかむすつとした顔でその器を受け取り、アリアは一気にのどを鳴らして水を飲み干した。

「だって……。タカカズだって最初怒ってたじゃない！？あの態度はヒドイわよ！！こっちの立場が弱いからって、悔しいじゃないの

「!!」

顔を孝和にぐっと近づけてそう言い放つ。周りの視線がいたい。とりあえず落ち着いてもらおう。

「全然落ち着いて無いじゃんか!でもさ、あっちの言い分が正論なのは冷静になつたら、間違いないだろ?仕方ないよ。キールもそう思うだろ?」

「うーん?ちよつとよくわかんないかなあ?あ!でも、ぼくあのひと、だいつきらい!!」

書き文字で上に「ぶんすか」とでも浮かんでいるようなキールはそういつてアリアの膝の上に飛び乗った。

「そうでしょう!?ほら、キールもそう言ってるわよ!?!」

二人して「そうだよねー」と共闘関係を結んでしまった。この時点で孝和の勝ちどころか引き分けも無くなってしまった。

見事に鎮火に失敗した。ここで、清涼剤としてのキールの一言を期待したのだが、火に油を注いってしまったようだ。

孝和はこの状況をどう回避しようか頭を抱えるのだった。

きつかけは、護衛の終了を報告しに行った、ポート・デイのギルドでの支払いが原因だった。護衛の報酬をもらいに護衛全員でギルドに向かったのだが、その際に言われたのが、

「支払われるのは護衛の正規報奨金のみです。賞金首ケンネルの討伐賞金は払われません」

だったのだ。

全員が、その言葉を聞いて一瞬対応ができなかった。支払いの力ウンターに目を血ばらせた護衛が詰め寄った。12名のうちチーム参加は2チーム10名、個人は2名。つまり金貨20枚を護衛の申請数で割った各5枚が、護衛の代金以外にボーナスとして転がり込むはずだったのだ。

「ですから！今回のケースではケンネルをしとめたのは、傭兵団所属のイーイのチームだったのでしょうか？それであれば、これは傭兵団の通常任務に含まれます。『軍・傭兵団所属の者は、その任務過程で討伐した賞金首の賞金を受け取れない』この領内の確固たる法です。あなた方は領主の法に逆らうのですか？」

そういつてカウンターの向こうで、この街のギルドマスターが完全に上目線で言い放つ。腹の出た高級服を纏う男であった。自分の言いたいことを言い終わつたのか、当時の様子を確認することもせず、話は終わりと引き上げようとした。その場にいた当事者であるイーイがせめてもの妥協を引き出そうと、カウンターの中に入り込み、掴みかからんばかりの勢いで、一生懸命説得をする。他の者は誰もそのギルドマスターの正論にぐうの音も出なかった。

『だって、ぼくらががんばつたんだよ？だめなの？』

沈黙を破つてキールは、ギルドマスターにお願した。

「モンスターごときがどう言おうとも、変わらん。大体、従魔だろう、お前は。主人は誰だ？つなぎもせず、このギルドに入れるなど常識もないのか？それに先程からあなた方は無礼に過ぎるぞ。いい加減にしてください！」

首だけをこちらに向け、完全にキールを見下して吐き捨てる。その後の全員に向けての怒声にも蔑視が感じられた。とても冒険者ギルドの長の態度とは思えないその様子に、孝和は頭にきた。足元に居たキールを抱き上げ、隣に居たアリアに渡す。さっきからのこの男の言い方がいい加減、我慢も限界だった。握り締めた拳をさらに強く握る。

カウンターまでの護衛の波を掻き分け、前に出ようとした。

「駄目だ。タカカズ、我慢しろ。頼む」

すつと目の前にククチが現れる。あまりに真剣なその様子に一瞬戸惑うが、この妨害を咎める。

「何ですか？これはさすがに駄目ですよ。俺、これは我慢できないです……」

キールを怪訝な目で見るものは今までも居たが、ここまで直接的に侮辱を感じたのは初めてだった。周りの護衛たちも先ほどのギルドマスターの応対に憤慨している。孝和が行かなければ、他の誰かが行っただろう。短期間とはいえ、命のやり取りを共にした仲間がコケにされたのだ。これに黙っていることが出来るほど、腹芸が出来るなら冒険者などやっていない。

「いいから！頼む。他の皆もだ。とりあえず外にしよう。ここはエーイの奴に任せてくれ」

いつものヘラヘラした様子ではなく、まっすぐに孝和の目を見つめてくる。その後全員を見渡し、外に出るよう頼んできた。孝和は握り締めた右拳をぎゅっと左手で包み込んだ。自分の齒軋りしている音が聞こえる。

しかし、ククチの真剣な眼差しはまるで揺るがない。数瞬、見詰めに合い、結果孝和が折れた。きびすを返し、ギルドの出入り口に向かい歩き出す。途中、アリアからキールを受け取り、ぎゅっと抱きしめてやる。

『ますたー？』

「おう。大丈夫だ。ごめんな。少しカチンと来たんで、取り乱した」

『ありがとう……』

「……おう。言い返せなかった。悪い」

『でも、ありがとう……』

「おう」

全員がその様子を見て、頭に昇りきった血が急激に下がってしまった。この憤りをぶつける先は、ギルドマスターであつてもククチではない。けなされた孝和とキールが、すでに「わっはっは」「んふっふふう」とじゃれ合っているというのも、それを後押しした。

結局、その場の全員が護衛の正規報酬のみを受け取って、ギルドを後にした。後日、何らかの形でエーイ達から、今回の賞金の全額は無理でも、ある程度補填はするとの誓約書をもらい、解散となった。なんと後味の悪い結末であったが、エーイの生真面目さはキ

「ヤラバン内でも分かっていたし「律儀な人だな」ということで彼への不満はそんなにはなかったのだった。」

それで、不機嫌なアリアたちの冒頭に繋がる。解散の後に、とりあえず食事にしようということになり、ククチにどこか良い所がないか聞いた。キールと一緒に入れるところで絞り込むと、この大衆食堂に辿り着いたのだ。味はなかなか良く、ポリウムも十分、価格面でも及第点だ。まさにベストチョイス。ありがとうございませ、ククチさん。

昼時の空腹が原因のひとつだったのだろう。ヤケ食いで、気分でも落ち着かせようとアリアと孝和は、メニューの中で興味を引いた物を次々頼んだ。懐も不満ではあるが程度温まった。出発前に護衛が終わったら、ささやかに食事会でもしようと思っていたのだ。それがヤケ食いに変わるとは思っていなかったが……。

「じゃあ、とりあえずこれからどうする？食事も終わったんだし、アリアは会いたい人が居るんだろ？俺とキールの用事は明日にするつもりなんだけど」

「そうね、私は神官用の宿があるし、今日はこのまま荷物を預けて会いに行こうかしら？従魔師の方に会うのも興味あるから、今日中にささつと挨拶しに行こうかな。明日また待ち合わせ、ということはどう？」

さすがに、アリアが口にはしているのはアルコールではなく、水であった。皿の上に残る野菜をつまんでそう提案した。

「いいんじゃないか？そしたら明日、このボードセンター前で待ち合わせにしよう。帰りのキャラバンの依頼も受けられないじゃない。時間は……」

「12時でどう？ここ、マドックみたい定期的に鐘は鳴らないの

よ。日の出と日の入り、後は正午の合計3回だけだから、待ち合わせの時間はわかりやすい方がいいでしょう?」

ほへーと、孝和とキールは感心した。その様子が照れくさかったのだろう。アリアは顔を背けた。ちなみに顔は真つ赤だった。

「だから!又聞きなの!そういう目でこつちを見ないの!」

ふいつと外を眺めて、全くこつちを見てくれない。銀髪の毛先をクシクシこすり合わせて何とか落ち着きを取り戻そうと必死なのが分かる。

「あははは。ごめん、ごめん。いや、又聞きでもいいんじゃない?とりあえず俺はそんなこと全然知らなかったし」

『ぼくもー!からんからんって、おと、ならないんだー』

フォローのつもりだったのだが、少し楽しい様子が伝わったのか、こちらを向いたアリアの様子は複雑に見えた。あからさまなフォローだったので、多少機嫌はよくなったが、少しだけ呆れも含まれているようだ。

「まあ、いいわ。じゃあ、ここで解散ということ。また明日会いましょう」

アリアは自分の荷物を持って立ち上がる。会計もあるので、孝和も立ち上がった。

「じゃあ、また明日ということ」

『じゃ〜ね〜。また、あした〜』

孝和とキールの2人は食堂の外でアリアにさよならを言った。これから孝和たちは市場方面がある西側の平民居住区画に、アリアは役所関係のある北側の高級住宅区画に向かうことにしている。ちなみに大まかに言うと南側はスラム街、北は軍の管理区画だ。

「ええ、また明日。……………あ、忘れてた」

さよならをして、少し歩き出して思い出したようにそう言うと、キールに駆け寄りぎゅっと力いっぱい抱きしめた。

『むぐう。くるしいよお。アリアさん』

そうは言うが、キールもまんざらではないようだ。

アリアはぱつとキールを腕から離し、孝和に渡す。最後に名残惜しそうに、軽く指先でこするようにその感触を堪能した。

「んふふふ。ごめんね、キール。じゃあ2人もまた明日ね!!」

そうして、大きく手を振りながら、アリアは雑踏の中に消えていった。

その後、孝和はキールと市場での買い物を楽しんだ。当初の目的であるダシ用の昆布の搜索や、鮮魚の調達、何か珍しい小物を探したりとなかなか充実した時間を過ごしたのだった。マドックでは見当たらなかつたはずの、干物や乾き物があつたのには驚くと同時に、歡喜が全身に広がった。長期間の航海専用の品のため、一部の商店でしか作らず、他の街にはあまり流通しないそうだが、「有る」と判つただけでも嬉しかった。

ただし、何故ここに醤油を持ってこなかつたのか、と悔しい思いをしたのも確かであった。宿で散々悩んだ拳句、干物をマドックまで持ち帰ることを決めた。絶対にチリチリ音がするくらいに焼いて、醤油を少しかけてチビチビつついて食べてやるのだ。ちなみに、箸はナイフでこの護衛の間に手ごろな木を削って作つた。いろいろと小物関係を作るので、手先の器用さが上がつていたのである。

そんな孝和は戻つたら、干物をあぶる網を探そうと、金物屋を頭の中でピックアップするのだった。マドック内ならば、ほぼ地図がなくてもどこでも行けるくらいに散策を済ませていたりもする。この事も、アリアの癪に障る原因だったりもするのだが、いまだ孝和

はそのことに気づいていなかったりする。

孝和とキールは、その晩の宿での食事を楽しんだ。港町ということもあり、新鮮な魚介類のサラダや、漁師鍋のようなものが絶品だった。食事後は十分体を休めるために早目に床につき、夜は更けていった。

孝和たちが床に付いた頃、神か悪魔のどちらかが運命のサイコロを振った。この時に出た目は、誰にもわからない。しかし翌日、孝和はこの振られた目を、ひどく苦々しく思うことになるのだった。

第20話 とりあえず、飯！飯！（後書き）

本年もよろしく願います。年末の投稿から、なぜか今までに無いくらい急に、登録者の方が増えていますので、ちよつとびびっています。本当にありがとうございます。今後とも暖かく見守ってください。

第21話 集結する者達（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第21話 集結する者達

約束したポート・デイのボードセンター前のベンチに腰掛け、孝和とキールはじっと待っていた。現在の時刻は正午を過ぎ、孝和の体感時間では大体1時間ほどが経過しているだろうか。

『おそいねー。どうしたのかなー？』

「そうだよなー。アリアって結構こういう待ち合わせとかは、キツチリ守るタイプだと思ってたんだけど……」

ボリボリと頭を掻く。2人してぼーっとしながら遠くに見える帆船を見ていた。2人とも鐘がいつ鳴るのか、今ひとつわからなかった。たので宿で午前中は観光も何もせず、そのままベッドの中で惰眠を貪ることにした。そろそろ昼になるか、という時刻に宿を出てボードセンターに向かった。鐘がなったのは、到着の少し前だった。きつと、遅れたことを怒られるな、と2人で話していたのだ。だが、アリアはそこには居なかった。センターの職員にも聞いてみたが、銀髪の神官の女性が来た様子は無いとのこと。

そのため、2人は昼食も無く、空腹をこらえながら、ベンチで待ちぼうけを食らったのであった。

予想通り、昨日酷使した体はガタガタだった。特にエーイのもとに駆けつけたときに全力を出した両足は、触れるだけで筋肉痛が間断なく襲う。デュークとの戦闘後、翌日にダメージが残らないように加減して気功術の鍛錬をしてきたので、少しは使いこなせるようになっていると過信していた。

結果、見事に失敗した。やっぱり、この気功術は「奥の手」だ。使

った当日はともかく、翌日の朝の肉体的疲労感、筋肉痛は極め付きだ。ここが人間の体の限界ということだろう。まあ、前のときよりは少し軽減されている。今後の鍛錬しだいでは何とか使えるように出来るかもしれない。

ただし、今ではない。そのときの孝和の肉体は完全に疲れ果て、そのダメージを癒すために深い眠りに付いていた。その一方、比較的早起きのキールはかまって欲しくて堪らなかったのだろう。目覚めと共に、孝和のベッドを見た。語りかけたのだが、爆睡しているため、反応は鈍い。「うぐう……」という寝ぼけ以外の反応が無かった結果、先日のあの時と同じように、隣のベッドからのキールの恐怖のダイビングは、油断していた孝和の上に完璧なタイミングで実行されたのだった。

そういつたわけで、孝和は出来るなら早目にアリアと、マドックまでの護衛依頼を受けて宿に戻りたかった。起床の時点よりもだいがマシになっているが、足はまだ少し痛む。左腕のひじも足ほどではないが、投石で酷使したツケが来ている。

「しかし、どうしようか？どう考えてももう、ギャバンさんのところに行くには遅いんだよなあ……。キャラバンの護衛も、俺やお前じや受けれるランクじゃないし……。弱ったぜ、本当に」

腕を組んでうなる。もしかして何かあったのか？でも、ただ単に遅れているだけかもしれないし……。確かめに神殿の出張所に行くにも、場所が分からない。仮に人に聞いて出張所に向かう途中で行き違いになるのは最悪だし。

『やっぱりまつ？でも、ひまだよね。なんか、ねむくなっちゃった

……』

キールもいい加減待つのに飽きてしまったようだ。さっきまではベンチの側の花壇で、花によってくる蝶を追いかけて遊んでいたの

だが、それも1時間も続けていれば飽きるのも当たり前だ。

「悪いな。やつぱりここで待たなきゃ駄目なんだ。アリアが来るまで寝てるか？来たら起こすけど？」

ベンチの隣にいるキールを撫でてやりながらそう言った。ポカポカしたいい天気だったのだが、正午を過ぎてから少し雲が出てきた。まだ大丈夫だが、夕方には降ってきそうだ。

「ん、と……。もうすこしだけ、おきてようかな……。おそいよね……。どうしたのかな、アリアさん」

先ほどから何度も繰り返された質問。ここに到着してからもう2時間にはなるだろう。最初はケラケラ冗談のように笑いながら話していたのだが、今のキールの声色には心配が色濃く感じられた。

「大丈夫だよ。きつと、久しぶりに会った人の家で歓迎されてるんだよ。それでなかなかここまで来れないだけさ。多分そんなところだよ、アリアの行った人の家って」

とりあえずこれ以外の、キールに話せそうな理由が思いつかない。短い付き合いだが、その佇まいから彼女の育った環境が、かなりの上流階級であろうことは間違いなさそうだ。ということは会いに行つた人もそれなりの家柄だろう。「ささつと」会つてくるとは言つたが、そんな家柄の人物が家先で簡単な挨拶だけで済ませられるわけが無い。それで遅れているのだらう、と無理に自分を納得させた。ただし、孝和の中ではあまり良くない理由も浮かんでいた。治安が悪いことは事前に言われたが、ちらほら街中に真つ当な職に就いてないような者も見える。アリアの実力は知っている。それでも、彼女の身に何かあつたのではないか、と不安に駆られるには十分であつた。これ以上キールに心配させないよう、絶対に言えない。なんとかポーカーフェイスを装い、キールに笑いかけた。うまく自分が笑えたかは自信が無かつたが……。

「やあ、タカカズ君」

ベンチで座り込む孝和に声が掛けられた。

「あれ？ククチさん？こんにちは。ボードセンターに何か用ですか？」

声の方向に顔を向けると、知った顔があつた。ククチが目の前に立っている。ベンチの横にいるキールを軽く小突いて起こす。結局待つといったキールのあの一言からさらに1時間ほどが経っていた。大体ではあるが、3時を少し過ぎたくらいだろう。キールは寝てしまい、孝和は暇で、鞆で地面に線を引いて意味の無い絵を黙々と描いていた。

「いや、実はね……。ああ……。えーと……。ねえ？」

ククチが言いよどむ。声が喉を行ったり来たりしているのが分かる。どうやら孝和には言いにくいことのようなのだ。その間にキールが起きる。目の前のククチに気付き、頭の上に疑問符が飛んでいるのが分かる。

「……まあ、込み入った話があるのさ……。少し来てくれないかい？」

クイと、あごをやった先に馬車が見える。確か御者の男性は、昨日襲撃してきた野盗を引き渡した傭兵団だったはず。

彼も孝和がこちらを見たのを確認し、頭を下げた。つられて孝和も頭を下げる。

「はあ、でも俺たち待ち合わせしてるんです。なあ、キール？」

『うん！アリアさんをまつてるんだ！！さっきからなんだけど……』

キールはそう言うと、しょぼんとしてしまった。

「……………その、な？実はそのこ……………」

「分かりました！行きましよう。馬車に乗ればいいんですね？」

ククチの話を打ち切るように、鋭く真剣な表情で孝和は了承した。

『ますたー？アリアさんはどうするの？』

「ああ、キール。とりあえず先に馬車に乗っててくれ。アリアには俺から謝るからさ。大丈夫。お前が怒られることは無いよ。俺はク

クチさんに話がある。少ししたら、行くからさ」

ニツ、と無理に笑顔になる。どうも納得いかないが、孝和の意見に従うことにしたようで、キールはぴょんぴょん馬車のほうに駆け出していった。

「……………で？アリア、ヤバイ状況だったりするんですか？」

キールが馬車に入ると同時に、声を潜めククチに尋ねる。

「ああ。察しがいいな。どうしてそう思った？」

「ええ、アリアが時間になっても来ない。そしてククチさんと俺たち到现在会わなきゃならない理由は無い。最後に、あなたがここに来る少し前から、誰かが俺たちを監視している。あそこと、あそこ」

ピツ、ピツッと迷い無く指さした先に誰かが居たのは気づいている。悪意は無いがこちらへの視線を感じた。おそらく普通にしていれば気づかなかつただろう。しかし、アリアがいつ来てもいいように気配の察知だけは、暇を持て余しながらも続けていた。そのアンテナに引っかかったため、鞘でのいたずら書きをしながら、何かあればいつでも剣を抜き払えるよう、準備はしていたのだった。

「多分監視はあなたの部下でしょう？そんな監視される理由が俺達にはない。そうしたら俺達の関係者、つまりアリア関係の問題の可能性が一番高い。そう考えたらなんとなく……………。ですね」

「いい読みだ。だが、話は馬車に乗ってから目的地で話そう。そのほうが面倒が無いからね」

「……………かなりヤバそうですね。急ぎましょう」

「悪いね。目的地にはエーイさんもいる。彼が現状最も状況を理解しているはずだから」

馬車に2人とも早足で無言のまま向かう。御者の男性は2人が乗り込むのを確認し、馬車は勢いよく走り出した。急な発進で、周りの人を危うく撥ねそうになった。それに向かって跳ねられかけた男が石を投げつける。それを見て孝和は、緊急事態で有ることを強く認識し、冷たい汗が背中を伝うのを気持ち悪く思うのだった。

馬車はかなりの勢いで道を駆け抜ける。かなりの揺れに、筋肉痛の足が痛むのを必死にこらえ、約10分の移動の後に目的地に到着した。

「着いたぞ。降りてくれ」

ボタンと勢いよく扉を開ける。ククチがまず一番先に、次にキール、孝和の順で馬車を降りた。すると、目の前にはかなりの大きさの屋敷があった。その周りには高い壁、そして来るものを拒絶するような威圧的な鉄扉。さらには蔦が、その全てを覆い隠すように巻きついていていた。

「はああー……。すごいとこですね……。ここですか？」

今の状況が大変なのは分かっているが、その緊張感ですら吹き飛ばすほどの豪邸である。一体ここにどんな用事があるというのだろうか？

「彼の終の住処だそうだからね。かなり、奮発したそうだ」

多少あきれたように、ククチがそういうのを聞いた。その様子に若干、かすかな苦笑が見て取れた。

「こちらの方とはお知り合いなんですね。話はこちらで、ですか？」

「ああ。中に入ろうか？君も早く現状の確認をしたいだろう。私も、何か進展が無いか知りたいからね」

トンと鉄扉に手を突き力を込めて押していく。どうやらかなり錆付いているらしく、鉄のすれる不快な音が周囲に響き渡る。少し前に誰かが中に入ったのだろう。地面に新しい錆の筋が、鉄扉の開くほうに薄く石畳に残っていた。

鉄扉が人一人入れるくらいスペースを空けることが出来た。それを見て、孝和たちは前庭に当たる鉄扉の向こうに入り込んだ。おそらく先の訪問者がエーイのことであろう。しかし、その前の来訪者が来たのが、いつたい何時のことなのか解らないほどである。

石畳の間からは雑草がそこかしこに生え、先の訪問者が踏みしめた石畳の足跡以外まるで廃墟の庭先以外には見えなかった。例えば、噴水であったはずの痕跡には、緑と青の混合物が水気を失ってたまっている。名品である彫刻家の作品は蔦が絡まり、磨かれることのないその表面に泥のコーティングが満遍なくグラデーションを描き出す。

「あの。本当にここなんですか？それに、あんまり手入れもしてないみたいですけど……」

さすがに、ストレートに「荒れ果ててますね」とは言えなかった。立派な豪邸と思っただが、鉄扉の向こうは廃墟以外にはまるで見えな

い。
「まあ、庭の美しさを愛でる人なんかじゃないんだわ。あの人。そこらはどうでも良いと思ってるのでないかな？」

雑草に足を取られないよう、石畳の上のエイイのものと思われる足跡の上をなぞるように先に進む。孝和もそれに習ったが、キールはその草生えたところをわざわざ進んでいた。雑草をなぎ倒しながら進むことで、気を紛らわせていたようだ。

『ねえ。ますたー、アリアさんはここに居るの？』

「いやあ……。多分、居ないだろう……。お前もなんとなく分かってるだろう？」

『うん……。ねえ……。？』

「なんだ？」

ひよいとキールを抱き上げ、ククチの後を追う。少し足を止めたため、距離を開けられてしまった。

『ぜんぶ、アリアさんたちのじょーくだったらいいのにね。アリアさんがいて、ますたーがいて、てーぶるのうえにごはんがいっぱいあつて。そんなのじゃだめなのかな……。』

「そうだな。そんなジョークがいいよな。でも、これはマジなんだ。しっかりしろ」

最後の言葉は、キールにだったのだろうか。自分にも言い聞かせ

るよつに聞こえたのは気のせいではないだろう。キールは少し厳しいその言葉に自分をすっかり取り戻した。

『そうだね。うん！いいこう！』

「よし！行こうー！」

キールの体は少し震えていたように思う。それでも、前に進むその心に孝和は強く愛おしさを感じざるを得なかった。

だが、自分はどうかだろう。もし、真龍の後継と成らねばここまでしっかりと前を向けただろうか？馬車で何度も自分に問いかけた。自分の心を形作るピースの薄っぺらさがどうしようもなく、みすばらしくちっぽけに思えてならなかった。

自分は、真正面から怒り、笑い、人を愛していただろうか。自分の失ったキールのその純粹さが我慢できないくらいにうらやましかった。その様々な思いを込めて、孝和はキールを抱きしめるのだった。

「エーイさん、タカカズ連れてきましたよー！どこですかー？」

玄関を開けてククチが館の中に入る。次いで小走りの孝和と、抱えられたキールが入館した。

（はー。すごいな。これは）

そう孝和は思った。ただし、これは「良くも」「悪くも」である。「良くも」側のすごい点はまだエントランスであるというのに、それだけで日本の孝和の住んでいた部屋の数倍はある。軽くブーツのつま先を床にぶつけてみる。するとエントランスホールにコーンと音が反響し、響き渡る。それほどのスペースが家に入っただけで存在するという事実は、骨の髄まで庶民である孝和では意味が分からなかった。まあ、多少の嫉妬に近いものは感じているのだが……。

一方、「悪くも」側のすごい点は、とにかくおかしいのだ。この屋敷は。どう考えてもこの大きさならば、少なくともある程度の人

数が住んでいなくては生活が出来ないだろう。要するに「家政婦」「執事」の存在である。屋敷を維持するための最低限必要な人員さえも、ここに入って来ても見当たらない。もしかすると……、いや多分間違いないそんな人員はいないのだろう。玄関先の空間は薄暗く、窓もひどく汚れている。カーテンのすそも痛みが遠目からわかるうえ、床が日焼けして木目の一部がかさかさ乾いているように見えるのは気のせいでも無いだろう。雑然と放置されたいろいろなモノ、孝和にとってはゴミにしか見えないのだが、大切なのだろうか何故かホコリが積もってはいない。

「おお、着いたのか？ 待つていたぞ。こつちだ。二階に来てくれ」周囲のその異様なすごさに内心、（何してんだろ俺、こんなところで……）と思つていたところに声が掛けられた。頭上の2階をエントランスホールから見上げると、昨日と違いどこかしら疲労を十二分に感じさせる容貌のエイイがいた。

「ああ、そこに居たんですか。エイイさん。他の者は？」孝和と同時にエイイに気づいたククチが1階から尋ねた。

「いや。彼女達がまだ到着していない。集まつたところで説明する。2階の客間だ。やっと整理が終わつたところで汚いがね」

よく見ると、その両手にはティーセットらしきものが見える。どうやら孝和たち以外にも今回の件の関係者がここに集まるようだ。「タカカズ達も呼びつけてすまない。詳しい話はもうすこし待つてくれ。2階が上がつていればそのうち残りも来るだろう」

申し訳ない気持ちを入れてエイイは孝和たちに話しかける。その言葉を聞いて孝和は2階に続く階段を踏みしめ、一步一步昇り始めたのだった。

「えーと……。どこに座ればいいんでしょうか？」案内された客間に入ったとたん、そう尋ねずにはいられなかった。

「まあ、なんだ。そうだな……。その本の上でもいいんじゃないか？」

「イーイはそういうと、おそらく本来は大人数の掛けられるテープルであった、書物や様々なメモが全体を覆い隠したモノの前に、ちよつど腰掛けられる本の山を発見した。」

「……あの。イーイさん？」

「なんだ？タカカズ？」

「どこか非難した様子の視線に思わずイーイはたじろぐ。」

「俺が言うのもなんですけど、もう少し片付けられなかつたんですか？自分の家だからってここまでってというのは見たことも無いですよ？」

孝和の指摘は当然だった。孝和自身もそんなに整理整頓が得意なほうではないが、ここまで行くとさすがに度を越えている。この部屋に来るまでの廊下も鎧やら何かの巻物やらがいたるところに転がっていた。

「いやいや、勘違いしているぞ。ここは俺の家じゃない。君も聞いたことくらいはあるだろう。ギャバンという名前の従魔師の家だよ、ここは」

「え？ああ、すみません。でもここギャバンさんの家なんですか？」

自分の勘違いに顔を真っ赤にして謝罪する。しかも話によればここは今日来訪する予定の従魔師ギャバン宅だという。

「そうだ。彼の稼いだ財産の全てで購入した家だよ。残念なことに成功者の家にはまるで見えないがね。君も最初は廃墟じゃないかと疑つたんじゃないか？」

「いや、あははは」

『ますたー。はいきよつてなあに？』

キールの問いかけに孝和はどう説明したものか悩んだ。まさか人の家にいるのにそんな説明して良いものだろうか。

「そんな言い方は無いでしょう……。相変わらずデリカシーの無

い人だ……」

ガチャンと音がして客間の扉が開けられる。そこには50を超え、頭頂部の薄くなった男がいた。中肉中背で、金髪。なぜか頭からは湯気が上がり、湯上りのようだった。その脇には黒い毛並みの犬がいた。主人に付き従うように部屋に入る男の少し後をピンと胸をはりしつかりとした足取りで付いていった。

「すまんね。だが、デリカシーを問うのなら、身だしなみという言葉を忘れるべきではないと思うが？いくら人に会わないからといって、あの格好で出てきたときにはこちらが驚いたぞ」

「それについては、申し訳ない。で？そちらがタカカズ君だったか。従魔師ということですが、本当のようですね。はじめまして。ギャバンと申します。こいつはバグズ。よろしくね」

そういうと、孝和に軽く頭を下げる。隣のバグズと呼ばれた黒犬は同じように頭を下げた。穏やかでどこか人懐こい笑顔を見せるその人物からは事前に聞いていた「人嫌いで神経質」という人物像がまるで当てはまらなかった。

「あ、どうも。はじめまして八木孝和です。それでこっちが……」

『ぼく、キールです！よろしくおねがいます！』

自己紹介が終わり、ギャバンは孝和たちのほうに近づいてきた。キールの前で跪くと、しげしげと観察した後こう尋ねた。

「キール。触っても良いかな？」

『へ？べつにいいよー。えいっ』

ぴよんとギャバンにジャンプする。ギャバンはそれを受け止め、ぺたぺたその体を触る。軽く引つ張ってみたり、なでてみたりしてその弾力を確かめているようだった。

「ふむ……。なかなか面白い……。おや、ここが核か？」

ちようど核の上をつついてみると、キールが『んにゃああ』と大きく身じろぎした。

「ああ、すまない。これだからエイにもデリカシーが無いと言われるんだな。悪かったね」

『うつん。ちよつとくすぐったかったただだから。だいじょうぶです！』

「そつか……。ありがとう」

ポンポンと軽くキールを撫でる様に軽く叩く。その後、テーブルに向かい奥にあった椅子を取ってくる。どさどさと椅子の上の本を無造作に放り投げるとテーブルの前に置く。勢い良く座り込むと、その隣にバグズが擦り寄り、脚をたたんで横になった。

「さて、では諸君……。どうやら最後の客が来たようだ。エーイ、茶を入れてくれるかい？」

その言葉に驚いて孝和は周囲の気配を探る。すると、階下から誰かが上がってくる気配がした。ここで、この目の前にいる人物が只者ではないことに気づいた。孝和だけでなく、キールも遮蔽物がある状況では、気配の察知に影響がでる。敵意があれば別だが、普段の状態では注意していなければわからない。やはりこの人たちの知り合いは、気が抜けない。

「どうかしたかい？タカカズ？」

ククチは孝和に尋ねる。まるでそれが普通のように振舞っている。平静を取り戻すためであるうが、エーイの淹れた茶をうまさうに啜るその様子に、やっぱり自分はまだまだなあ、と自分の未熟を痛感するのだった。

ドンツドンツ、とドアがノックされる、というよりは叩き壊すかのような大きな音が響く。すかさずエーイがドアを開ける。

「エーイ！！そちら側の現状の報告を！！こちらには何も情報が降りてこないわ！全く軍の連中って能無しばかり！！」

その人物は客間に入るなり、エーイを怒鳴りつけるかのように大声を張り上げた。その声に孝和とキールはビクツと身じろぎをする。恐る恐るドアのほうを見ると、相手も孝和に気付いたのかこちらのほうをジロリと値踏みするかのようには観察してきた。

それが孝和・キールの、彼女とのファーストコンタクトであった。

第21話 集結する者達（後書き）

いつもこちらを覗いてくれる方に、心からの感謝を。

第22話 あらまし(前書き)

誤字・脱字ご容赦ください。

第22話 あらまし

「エーイ！そちら側の現状の報告を！こちらには何も情報が降りてこないわ！全く軍の連中って能無しばかり！！」

苛立ちを叩きつけるかのように扉から客間に入る。目の前にいたのはエーイ。ポート・デイの周辺での治安維持を担当する傭兵団の隊長の一人だ。かなりの実力者であり、団員の中からもかなりの人望がある人物である。

その彼から今回の事態の詳細が、自分の元に届いたのは今日の朝であった。朝食の最中に呼び出され、顛末を聞いてからは彼女自身も事態の把握に奔走している。その結果を報告するため、ギャバン邸に集合することになっていた。

「あ、あら？お客人？でも……？」

疑問符が浮かんだのは、客間の中に見慣れない人物と、不思議なモノがいるからだ。一人は黒髪のどこか抜けた感じのする男性、不思議なモノは小刻みにフルフル振るえる真っ白なスライムのように見えた。

彼女の上げた大声で、双方がビクツと驚いた様子でこちらを見ている。知らず知らずのうちに、彼らを睨みつけるような視線で射抜いていたことに気づく。

「彼らは？」

横目で様子を眺めながら、彼女は側のエーイに小声で尋ねる。

「アマリア様のチームメンバーです。男性がタカカズ、側のモンスターは彼の獣魔でキールといいます。両方とも今回の件についてはまだ知りません……。うすうす気付いてはいるでしょうが……。實力は申し分ないと思われます。事態の解決に協力を求めようかと思ひますので、よろしく願ひします」

彼の簡単な紹介によってどういった立場の者なのかは理解した。

しかしながら、

「本当に大丈夫なの？彼らは現状、まるで理解してないのでしょうか？パニックになって事件の解決に影響を与えては元も子もない、ということとは解ってます？」

「確かにそうですが、荒事になれば今の戦力では足りない可能性があります。度胸も人となりも一緒に行動したときに確認済みです。協力してもらえるのであれば、そのほうが好都合ですし、黙っていて後で勝手に動かれれば混乱する。こちらに引き込むほうが良いかと思われれます」

ふう、とため息をつく。もちろん孝和たちには背を向けて解らない様に、である。

「わかりました。その形で話を進めましょう。その方が解決の可能性が上がるのならば、ね？」

「ご配慮、感謝します。では、説明の前に名乗りだけでもお願いします。後、他のものは？」

軽く頭を下げ、謝意を伝える。そして、彼女に付けた部下の所在を尋ねた。

「私にも襲撃が来るとしても、ここにはあなたたちが居るでしょう。それに私があなたの部下を守るのでは、立場が逆です。彼らは現地の捜索に向かわせました。少しでも情報を持って来れば御の字です」

「それもそうですね……。配慮が足りませんでした」
「構いません。……では、まず私の自己紹介からでしょうね」

先ほど、ドアが叩き壊される勢いでノックされた。その後、勢いよく入室してきたのは女性だった。先ほどのノックの位置からして、つきり男性だと思ったのだが孝和の予想は見事に外れたのである。その人物は女性にしては非常に背が高く、大体孝和と同じくらい

の185センチ前後の長身である。孝和の経験上、自分とほぼ同サイズの女性は今までに大学の女性バレー選手以外に出会ったことは無く、すこし驚いた。どうやら戦士やそれに準ずる職に就いているのであるう、全身を美しい青と銀のプレートメイルで身を包み、その意匠や籠められた魔力の流れからどうやらかなりの名品であることが解った。さらに部屋に入ってから身のこなしや、その重量にまるで堪えるような素振りすら見せない佇まいは、戦士としての実力の程もかなりのものと、理解するには十分すぎるものだった。

一方、その容姿はかなりの美しさである。長身でありながら、バランスを崩すことなく見事に均整が取れた体躯、鎧の上からもわかるような女性として魅力的な曲線を描き出していた。うっすらと化粧を施し、こちらを見るその顔は真剣で少しきつい印象の表情を、崩すことは無かったが、美形であることが断言できた。窓の外が曇りだして薄明かりとなっているせいで、髪の色までは詳細に判断できないがごくごく薄い金と銀の中間のような色である。あまりこの世界では見ない色合いであるが、細く長い髪は頭の上でひとつにまとめられ、アクセサリーではなく無骨な黒い棒で括られていた。しかし、それが逆に彼女の凛々しさを際立たせ、澄み切った印象を孝和に与えた。

（あれ？この人……。なんか、どこかで会った？いや、違うか。何だろ、こういうのイライラするんだけどなあ……）

孝和は彼女を見てから、ずっとそう感じていた。なんとも言えないむず痒さを感じている。どこかで会った気がしているのだが、そんな記憶がまるで無い。

『ますたー、ますたー。このひと、どこかであった？』

『！？お前もそう思うか？でも会ったこと無いはずだぜ？なんだろ、この感じ……』

こっそり2人だけがわかる念話での確認。周りにはまるで聞こえていないけれどその方がいい。

『あ、でも、このひとアリアさんと、おんなじかんじがする！そう

おもわない？ね！ね！』

『え、そうか？……ああ、そういえばなんか顔立ち少し似てるかも』
などと、キールとつらつら2人で話している間に彼女とエーイの話が終わったようだ。エーイが常に彼女に下手に出ていたことはわかる。実はこちらに聞かえないよう彼らなりに配慮してくれたのだろうが、コソコソ話していた内容は、孝和には丸聞こえだった。

（あの人、かなりの地位の人なのか？まあ、アリアの知り合いなら貴族とかかなあ？……それにしても、エーイさん。俺のことガッツリ戦力に数えてるのかよ……。しかし、一体どうなってるんだ？）

エーイには期待されていはいるが、現在の状況はかなり緊迫しているようだ。全く現状の認識の無い自分が、どこまで役立つのかわからないが、出来ることならなんでもするつもりであった。

孝和とキールは、とっくの昔にアリアの身に起こっているだろう、最悪の事態を想像していた。それを覆すための覚悟を決めて、彼らはこの場にいる。長身の美女の心配は杞憂であったのだが、それを知る術はどこにも無かったのだった。

「急ぎですので、簡単ですが自己紹介を。私はポート・デイを含むこの一体の領主、エリステリア・クラーデイカの娘でイゼルナ・クラーデイカです。現在は末席ですが、この街の海軍に任官しています。義父はポート・デイの行政官アデナウ・コーンになります。よろしく願いますね」

にこやかに孝和とキールに笑いかけ、手を差し出す。それを握り返しながら

「八木孝和です。それで、こっちが……」
『ぼく、キールです。はじめまして』

お互いの自己紹介が終わると、時間が惜しいことは双方解つていたので、何も言わず手を離し各自の席に着いた。孝和とキール以外は全員が知り合いのようで、自己紹介等もなく3名の着席を確認するとエーイがこう切り出した。

「では、事の顛末を簡単ではあるが説明する。タカカズたち以外は確認と思って聞いてくれ」

事件が発生したのは、昨晚のことである。ポート・デイの行政官であるアデナウ・コーン、彼を訪問してきたアマリア・クラウ・ウエルローの両名が行方不明となった。時刻は夜の10時頃。状況から判断するには行政庁舎より、コーン邸へと向かう道程で襲撃が発生したと推測。夜間のため、護衛2名、御者1名が随行していたことを確認。護衛は傭兵団の所属で、御者はコーン家のお抱えであり3名の身元は確かである。コーン氏の護衛は2名とも、信任が厚くコーン氏自身が選んだ。御者はかれこれ10年はコーン氏に任せ、穏やかで気の良い人物であることを家族だけで無く、エイも証明した。

自体が発覚したのは、御者の家族がコーン家に御者が帰ってこないことを尋ねたことからであった。コーン氏は仕事で行政庁舎に泊り込むこともあり不自然には思わなかったのだが、その場合は御者を帰宅させるのが普通だった。コーン邸からの連絡を受け、行政庁舎からの道を確認していたところで血痕を発見。場所は居住区画に向かう人通りの少ない林道であった。そのため、誰一人として目撃者も居らず、襲撃された全員の生死は不明だった。パツと見は判らない様に偽装されてはいたが、戦闘があったことは容易に推察された。

だが、どうやら事態の発覚は早いと襲撃者が判断したのか、偽装も隠し切ることを目的とはせずに、搜索時の混乱を誘発させるよう四方に物証をばら撒いていた。それによる搜索部隊の分散や混乱は、有用な情報の鮮度を著しく落とし、時間だけが無意味に過ぎていく結果を招いてしまっていた。現時点で判っているのはそのときの馬車の所在くらいだった。

「……と、というのが事件の全容だ。戦闘が起きた際に襲撃のため、かなりの人数が林道にいたはずだが、その目撃情報も無い。血痕からして怪我人も双方に出ているだろう。後は、これだ」

ゴトン、と音がしてテーブルの上に、茶色い布に包まれた塊がエーイの懐から出てきた。

「これは？」

イゼルナはそうエーイに聞く。目線で広げても良いか確認した。エーイがうなづくのを見て、イゼルナは包みを広げ、その場の全員がわかるようにテーブルの中心にそれを置いた。

「ま、ますたー！これ、あれじゃない！？」

「ああ、間違いないな……。クソツ！最悪だ！」

テーブルに載せられたのはアリアが持っていたはずの杖、その先端にあったはずの彫刻部分だった。先端の彫刻部はミスリルであるが、それ以外は櫛の棒に薄く金属でコーティングされているものだと聞いていた。その杖の先端と棒の部分をつないでいるところで、折れていた。思うにかなりの力で一気に砕けたのだろう。しかも、少しではあるが血がこびりついていた。

「知っているんだな？この持ち主を」

エーイはそういつて孝和に確認した。孝和とキールは事態の説明時に、まるで硬い表情を崩すことなく大人しくエーイの説明に聞き入っていた。それがミスリルの塊を出したとたん、このリアクションだ。疑問ではなく、すでにこれは確認作業だ。

「アリア、いえ、アマリリア・クラウ・ウエルローの所有物に間違いないでしょう。間近で見たことがありますから……」

孝和がそうエーイに答えた。アリアでは無くアマリリア・クラウ・ウエルローと、彼女の本名を告げるときに胸にチクリと痛みが走った気がしたのを、無理矢理に心の奥底に沈める。

「そうか……。どうしますか？イゼルナ様。アマリア様が巻き込まれたのはこれで確定です。神殿側の協力を仰ぎますか？いくら腰が重いとはいえ、あちらも動かざるをえないはずですが？」

「いえ。船頭多くして、とも言いますから止めておきましょう。この時点で動きはじめても、その説明に人員を割くのは愚策です。：

…ああっ！！もっつ！！」

テーブルに叩きつけた拳は、その上の各自のティーカップをほんの少し揺らした。全く手を付けていない孝和のカップから茶がこぼれる。それにより下の本に茶がしみこむ。

「まあ、落ち着きましょう。そのためにここに皆さん来られたのですし」

ズゾゾツと勢いよく茶をすすりギャバンがイゼルナを嗜める。

「でも！あなたはどうしてそんなに落ち着いてるの！？今がどんな状況なのか判ってる！？」

イゼルナの口調は、すでに先ほどまでの落ち着いたものとは別のものになっていた。恐らくこちらが地なのだろう。先ほどまでの立ち振る舞いは、義父が行方不明なのに立派ではあった。ここが一般の者とは違う、貴族の風格なのである。

激昂したイゼルナを抑える役目はギャバンに譲り、この隙に孝和達は横にいたククチにこっそりと尋ねることにした。

「あの、すみません。ちょっといいですか？」

「ん？どうしたんだい？」

ククチの手にはティーポットが有り、こぼこぼ音を立てて孝和とククチのカップに茶が注がれる。

「あ、ども。すみません」

「いやいや。別に良いよ。それで？」

先ほどの説明時に話の腰を折れないため、今やっとの確認となつたわけである。

「アリアのことです。彼女ってイゼルナ、様とはどういった関係なんですか？要するにイゼルナ様の義父上に会いにいったみたいなん

で

「ああ、ちよつと複雑なんだけどね……」

ククチの説明によると、アリアは北部の名門貴族ウエルローの長女である。そしてイゼルナの母エリステリア・クラーディカは現ウエルロー伯の妹であるらしい。つまり、イゼルナとアリアの2人はいとこ同士になる。

だが、ポート・デイ行政官アデナウ・コーンはイゼルナの実の父親ではない。ここにククチの言った複雑で込み入った理由がある。まず、エリステリアは、新興の子爵クラーディカ家に嫁に入った。クラーディカ家は領地を持たない貴族で、ウエルロー家の後ろ盾を婚姻で手に入れ、中央で力を十分に伸ばすことが出来た。その当時のポート・デイ領主は別であつたが、今から10年前に領主を解任され、中央で力を伸ばしたクラーディカ家がその後を受け持つことになった。その後、治安維持に奔走したクラーディカ子爵はあまりの忙しさに体調を崩し、鬼籍に入ることになる。それが7年前のことであつた。

その時、クラーディカ家には後継がイゼルナと生まれたばかりの幼い弟しかいなかったのだ。そこで妻であつたエリステリアは夫の後を継ぐこととなる。爵位は幼い弟が成人（18歳）したときに受け継ぐことになったので、その間の繋ぎとして。

ここで、自らが政治には疎いことを自覚していたエリステリアは、実家のウエルロー家より優れた人材を派遣してもらえよう援助を頼んだ。クラーディカ家が新興であつたため、優秀な人材を育てきれ無かつたためエリステリアの要望に答えられないこともあつて、ここでは問題は特に起きなかつた。

その人物が、イゼルナの義父であるアデナウ・コーンであつた。彼は長年ウエルローの騎士団に奉職して副団長まで務めた人物であつたが、有るとき大怪我を負い第一線を引くことになった。そこで

騎士団を辞め、ウエルロー領の行政・治安部門の調整役として働きはじめる。

彼のその調整役としての仕事には大変定評があり、ウエルロー伯の覚えも良かった。エリステリアとも顔見知りであることから、援助の話が来たときに彼を推薦したのだが、ここにウエルロー伯の悪戯心が騒いだのだろう。

伯爵はアデナウが、エリステリアと恋愛関係であったことを知っていた。彼女がクラーディカ家へ政略結婚をするとき、先代に最後まで反対したのが現ウエルロー伯だった。結果は力が足りず、エリステリアは嫁いだがそのことはウエルロー伯の心に小さなとげとなつて突き刺さっていた。

最初はそうだったこともあり、アデナウも断ったが、最後には受諾し、ポート・デイに赴任した。赴任してきたアデナウにエリステリアも戸惑ったが時間と共に、過去の恋愛の続きが再開された。

娘、息子の反応はおおむね良好だった。エリステリアの幸せそうな顔を見て、2人の仲を認めるのは容易かった。幸せな結婚でなかったことは子供もうすうす気づいていたし、亡くなった実父に愛人が何人もいたのは暗黙の了解とされている。母の結婚に反対したのはクラーディカ家の重鎮たち。平民の成り上がりとの婚姻は許さないとこの言い分は貴族として仕方ない。そのため、2人は内縁関係の夫婦となった。将来的にクラーディカ家の長男が後を継ぐので、重鎮たちもそのことには目をつぶることをししぶし承し、正式な婚姻関係の無い現在の状況に至るのであった。

「でも、イゼルナ様は義父といつてましたけど？」

「周囲は認めなくても自分たちくらいは、との配慮なのさ。だから、私たちは貴族の持つ騎士団ではなくて、行政官の雇用する傭兵団なのさ。まあ、領主の部下であるのには違いないけどね」

なるほど、それでなのか。イゼルナが傭兵団ではなく、軍の士官

なのは騎士団がこの領地内に無いからなのだ。さすがに貴族が傭兵ではまずいとのお考えであろう。孝和はそう考えて疑問点を解消した。「じゃあ、他の質問を。ギャバンさんも昔は傭兵団だったんですか？皆さんとも顔見知りですし」

「違うよ。彼は冒険者を辞めてそのままここに腰を落ち着けたからね。彼とエーイさんが顔見知りで、それ以外の私やイゼルナ様はエーイさんの紹介で知人になったんだ。あんな性格だからすぐに良い感じの関係が築けたしね」

「そうですね、ギャバンさんってすごいフレンドリーですよ。俺、かなりの人嫌いだと聞いていたんですが？」

そう聞くと、くすくす笑われた。

「いや、実はな。人嫌いじゃなくて、人嫌われ、なんだよ」「はい？」

「あの人、性格は良いんだけど、ホントにズボラなんだ。何日どころか、何週間単位でそのままの格好だからね。自分から近寄ろうとする人がいないんだよ」

あははは、孝和はと苦笑いする。こんな話や軽いジョークで場を和ませる間にイゼルナも落ち着いていたようだ。場にいる全員が、平常心でいるための最善の努力をしているのがわかる。イゼルナは怒り、孝和は疑問の解消、ククチは先生役、キールは孝和の膝の上でゆらゆら揺れて気持ち落ち着けていた。

「じゃあ、私はバグズと襲撃者を追う、ということかい？」

ギャバンはバグズを撫でながらそう切り出した。イゼルナはやっと落ち着いたようで、肩でまだ息をしている。落ち着き払ったギャバンとの対比が、一種異様に見えた。

「ああ、馬車の発見場所まで案内する。ただ、車内と周囲にかなりの量の糞と、臓物、訳のわからん薬がばら撒かれて、すさまじい匂いだ。移動中にも一部ばら撒いていたらしくてな。毒物もあるかもしれない。気をつけてくれ。発見者が昏倒する騒ぎになって犬を使

うにも難しい状況だ」

「まあ、バグズは魔力を嗅ぐのだから関係はなさそうだが……、気をつけましょう。ククチ、一緒に来てくれないかい？案内も頼むよ」
ククチは片手を挙げて了解を伝える。ゆっくりと立ち上がり、ドアに向かいギャバンは歩いていった。ノブに手を掛け、ククチと客間を出て行こうとしていたときだった。

「では、私はこれで失れ……ッ！！？」

別れの挨拶を途中で切り、ガバツと首を外に面した窓に向ける。

バグズはその窓に向かって駆け出していた。

一方、孝和は手元の本を掴み窓に向け、振りかぶる。キールは孝和の膝からテーブルに飛び上がった。

この時点で4名が反応した。そして、

ガシヤアアアンツ！！！！！！

窓が勢いよくぶち破られ、真っ黒な塊が室内に侵入してきたのだ。
った。

第22話 あらまし（後書き）

次回の投稿ですが、仕事が少し立て込んできましたので2月中旬までは、週1のペースは難しそうです。
申し訳ありませんが、よろしく願います。

第23話 仇（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第23話 仇

ガシャアアアンツ！！！！！！

ギャバン邸に窓から入館という、無作法極まりない方法で入ってきた侵入者達は、全身を黒装束で覆い隠していた。顔も髪から口元までを完全に覆った状態だった。気配を隠し、進入してくるまで全く誰にも気づかないという完璧な襲撃を敢行したのである。だが、それは進入の直前までであった。

ブツオオオウンツ！！

最初の侵入者がまず、窓ガラスを蹴り碎いて侵入してきた。その着地にタイミングを合わせて、風切り音がする位の勢いで、分厚い本を孝和が投げつけた。片手では持つことも困難な重さの書籍であった。普通に投げても、受け止めなければ間違ひなく痛い思いをするだろう、重量感の凶器と呼べる「それ」は、見事に襲撃者の顔面に命中した、かに見えた。

襲撃者は確かに「それ」を顔面で受けた。しかし飛び込んでくると同時に「それ」が本であることに気付いたので。そうすると逆に額で迎え撃った。どうやら鉢金やサークレットに似たものをしていのだろう。ガチンと金属的な音が黒布に包まれた額と、背表紙の金具との間で鳴った。さすがにぐらりと上半身が揺れるが、足元はさほど揺らぐことなくしつかりと床を踏みしめていた。

孝和としては、手元の本を投げつける以外に選択肢が無かったのだが、いかんせん本というものの形状が、投げつけた際の威力を殺しきってしまった。

仮に投げつけたものが石やナイフであれば、結果は違ったのだら

うが、石は手元に無く、腰にあるナイフを投げるには外の気配が気になった。最初の襲撃者よりは隠行が未熟といえるが、かなりの技量といえるクラスの気配がする。

それを考えれば、ナイフを投げつけて素手で2人目を、というのは抵抗があつた。この部屋に入る際、礼儀として剣は手元ではなく、ドアの横に置いておいたのだ。今の孝和にはナイフ以外、刃物といえるものは何も無かつたのである。

「GYAWOOO!!!!!!」

結局、1人目の襲撃者はバグズが対応した。

駆け出してからのスタートダッシュの分、本をブン投げた孝和が窓に向かうよりも早かつた。襲撃者が体勢を立て直したときには、眼前に顎を大きく開けたバグズが迫っていた。

「くつ……!! 犬ごときがあつ!!!!!!」

バグズの牙を逆手に持ったショートソードで迎え撃つ。苛立ちの声は口元を覆う布でくぐもって聞こえたが、比較的年若い人物の印象を与えた。そのことから、襲撃者はひよっとしたら、まだ子供ではないかと思われた。

よくよく見ると体格も、成人とは思えない小柄であつたからである。

襲撃者の剣閃はギリギリまで剣の位置が腕の陰に隠れ、正面から突撃してきたバグズには、位置的に見えるはずが無かつた。しかし、そこにギャバンの声が響き渡る。

「ロックスマス錠前師!!!」

ギャバンの大声が響き渡ると、バグズの黒い毛皮が肩口で盛り上がる。その途端、バグズの全身が黒い霞で覆われる。

ガキイイーン!!

ドタンッ!!

最初の音は、襲撃者の刃がバグズの牙により食い止められていた

音だった。甲高く響きわたり、金属同士を叩き合せた様な耳障りな音を立てる。バグズの牙は見事に刃を受け止める。その牙は、いつの間にかもうひとつ増えていた。ついさっきまでの黒犬が、異形の二つ首の魔獣にと変わっていた。一回り巨大化し、毛の艶も黒一色ではなく、微妙に赤が混じるものへと変化していた。所謂、ヘルハウンドであった。

もう一方の音は、窓から最初と同じように飛び込んできた2人目の襲撃者が着地する音だった。今度は窓を叩き割る必要も無い。着地と同時に、前方に転がり、勢いそのままに両足が動き出せるような独特の着地法だろ。そちらに向かっていた孝和がこちらの相手をする事になった。ナイフを襲撃者に向け、振る。それに2人目の襲撃者も最初の者と同様、逆手のショートソードで迎え撃つ。孝和は敢えて刃を引き、相手の体勢を崩すことにした。それに対応して襲撃者は踏みとどまり、2人は孝和が窓を、襲撃者がテーブルを背にする位置で入れ替わった。この流れで、孝和は相手かなりの近接戦闘術を持っていると判断したのだった。

窓が破られてからの一連の騒ぎは、まさに一瞬であった。ほんの数秒の間で、孝和とバグズは襲撃者2人に相対している。しかし、その他の者はやっとテーブルから立ち上がることが出来たばかりだった。気配察知に優れた者以外は油断もあったのだらう、立ち上がったはいが今動けば逆に1人と1匹の邪魔になってしまう。

「な、なんだっ！貴様ら！！」

イゼルナはやっとの思いでその声を張り上げた。バグズに対しているほうはチラリと彼女を見たが、孝和の相手はこちらを見ることもしない。

「くっ！」

イゼルナに出来るのは、ドアの側の剣に向かって動くことだけだった。しかし、孝和の剣を掴んだところで気づく。この位置では孝

和に剣を渡すのは不可能だ。襲撃者の背が邪魔になり渡そうにも渡せない。

「邪魔だ!!そこからだいてろ!!」

孝和から怒声が響く。真剣そのもの様子で、彼女の行動に、微妙にナイフの位置を変えながら目線で、拒絶の意思を示す。

「なっ!?じゃ、邪魔!!?」

孝和がいきなり怒鳴りつけたのも気に入らなかったが、自他共に認める実力者であるイゼルナは、邪魔扱いされたことに不機嫌さを隠せなかった。

怒りのまま前に出ようとした彼女を、エーイが引き止める。

「エーイ!?!」

「私たちがこの位置では確かに邪魔です!こっちへ!」

グイツと引き寄せられたたらを踏む。仕方なしに後退し、孝和の目線の先からどくことにする。その際、剣はエーイが受け取った。

そうまで言うなら、かまわない。やってもらおうではないか。まあ、問題ない。彼が敗れば自分が挑むまでだ。実力のほどを、確かめる機会が出来た。それはそれでいいことだ。すでに観戦の体勢のエーイやククチの言うとおりかどうか、証明して見せてほしい。イゼルナはそう思っていた。

(……て、おい!おたくら、手助けしないのかよ!?)

イゼルナに自分の直線上からどいてくれるように、頼んだだけなのになんで、全員観戦モードなのだろうか。確かに勢いのまま怒鳴りつけたのは悪かったと思うけれども……。ククチにいたってはティーカップに湯気の立つ茶を注いでいる。キールもイゼルナに抱きかかえられている。エーイはドアの前に孝和のジ・エポニーを掴んでたたずんでいた。

おい、こら。待て、そこ。

孝和もバグズもお互いの相手で精一杯だった。間違はなく相手は相当の戦士である。この状況下でそんな余裕なのはどうなのだろう。(ええい!! やってやろうじゃないか!!)

まるで助ける気は無いようだし、もう覚悟を決めた。とりあえず目の前の襲撃者に対応しようではないか。隣のバグズは、噛み付いたショートソードを離さないようにギリギリ音を立ててかみ締めている。もう一方の頭は剣の逆の腕を狙おうとしていたが、相手はそれをさせない様にうまく立ち回っていた。なぜかその襲撃者もチラチラとバグズではなく、孝和のほうを憎しみのこもった目で睨んでいた。正面の襲撃者も孝和を強い力で睨みつけている。

(何で? 俺、そんな睨まれるような事、君等にしかかよ!?)

内心、意味がわからず軽く動揺していた。さすがにここまでの嫌悪を、あからさまにぶつけられるのは初めてだった。

「つつ!! ヤアアア!!」

目の前の襲撃者が孝和に、怒りと憎悪の雄たけびをぶつける。その声は最初の襲撃者と同じく、若々しい。先ほどの迎撃以上の速度でショートソードが孝和に迫る。

「お、女ア!!?」

ギイインと刃同士がぶつかる音がする。咄嗟に翳したナイフとショートソードが火花を散らした。先ほどの声からして襲撃者が若いことと、女性であることがわかった。

「……死んで……死んで。死んでよお!!」

グイグイと孝和に向かい押し込む。それは女性としては、かなりの力であった。ただ、孝和が驚いたのはそこではない。

(泣いてる? 泣いてるぞ!?! この娘!?!)

顔を覆う布から見えるのは、瞳の辺りだけであった。その唯一見える瞳は、藍色で涙で潤んでいた。その所為なのか、ウサギのように目の周りは真っ赤になり、かすかにではあるがグスツと鼻をすする音が聞こえた。

（えええ！？何さ！？ええ？）

命の危険の真つ最中のこの場で、泣かれるとは思わなかった。叫びに近いその声には深い悲しみと、真つ黒な憎悪に満ち満ちている。

「ちよつと！待てよ！？何だつてんだ！？一体！？」

あまりの居心地の悪さに、自分が悪人に思える。しかし、孝和としては自分がそこまで憎まれるようなことを彼女にした覚えどころか、初対面でこの状況になる理由がわからない。怖くなり、思い切り技を使った。襲撃者が握る剣に合わせているナイフの重みも感触も無くなり、ショートソードごと体が跳ね飛んだ。

「きやつ……！」

「大丈夫！？ユノ！？」

バグズとの押し合いをしていたもう一人が、自分に向かってくる力を利用してユノと呼ばれた少女の元に身を寄せる。くぐもつた声でわからなかったが、口調からどうやらこちらも女性のようだった。

「くつ……。大丈夫！！大丈夫だから！！」

「そう、そうよ。負けられないの！あんななんか、負けるわけにいかないんだ！！」

ユノは腹部を押さえながら立ち上がった。その瞳には力強い決意が見られ、話し合いではここを切り抜けられないことは明らかだった。

ユノを弾き飛ばしたのだが、彼女に痛手を与えてはいない。本来は、法寿の考えた罠迫り合いの際に使う追撃技であった。相手の体勢を崩し、鞘を利用した打撃か、刃の斬撃の2択を相手に選ばせるという、決まれば重症確実の技である。

装備品がナイフであったこと、ユノが非常に力んで冷静さを失っていたことから、とりあえず一撃を与え、間合いを取ることにした。

体勢を崩してからの2択は蹴りと、ナイフでの一撃に変わっているが結果として、彼女はよりダメージの少ないほうを選択した。殺意自体は孝和には無いのでどちらにしても死にはしないが、本能的

に蹴りの方に逃げた体捌きはかなりのものだった。蹴り足の感触からしても、せいぜい打撲程度だろう。

「エーイさん!! 剣を!!」

ドアには全く目線をよこさず、そう大声でわめく。蹴り飛ばした際に襲撃者たちと、立ち位置が逆転している。ふわっと緩い勢いでエーイがジ・エボニーを孝和へ向け、投げる。

「すみません!! ありがとう!!」

受け取ると同時に、漆黒の刃を抜き放ち、ナイフは腰に戻す。バグズはその隙をカバーするかのようになり、孝和に擦り寄る。襲撃者はその孝和の準備中に体勢を立て直していた。後ろはぶち破った窓。逃げることも可能な位置ではあったが、その場から後退する素振りには全くなかった。

「君ら、引かないのか? 俺には君らと闘う理由がない。前には他にも戦士がいる。闘れば、俺を倒せても、間違いなく死ぬよ?」

それは孝和の最大の譲歩だった。逃げ出すなら自分はもう戦わない。そう言ったのだ。言葉の意味を履き違える者はさすがにこの部屋の中にはいない。キールは誇らしげに、エーイとククチ、ギャバンは苦笑し、イゼルナは苦々しい表情を隠そうとはしなかった。

孝和を寛容と見るか、甘いと見るかの違いだった。

「バカにするな!! あんたをここで殺す。それ以外何もあたしたちはいらぬ。ここで必ず仇を取ってみせる!!」

「そう……。あなたの死こそ、私たちの癒し。この悲しみを! この痛みを!! あなたの身で受けなさい!!」

最初の襲撃者は怒鳴りつけるように、ユノという少女はどこか自分に言い聞かせるように、孝和にその意思を伝えた。

(畜生ッ……。やっぱ、無理か。仇っていうのがなにか理由を聞かなきゃ、どうにもできないぞ!? 何とか黙らせないと……)

「行くよっ! ユノ!!」

「はいっ! カナエさん!!」

考えが纏まり切らない内に二人が孝和に突っ込んできた。バグズ

のほうには一瞥もくれず、全力で。

「くそっ！バグズ、頼む！！」

隣のバグズは邪魔にならないよう飛び退き、突っ込んできた2人の後方に回る。隙を見て援護してくれるだろう。隙を作り出し、一撃を加える。時間を稼ぎ、スタミナを奪う。バグズも孝和の意図に気付いてくれた様だった。ならばそれまでの間、2人を十分に引きつけておくことが、今の孝和の役目であろう。

ガキーンと音が響き渡る。孝和が襲ってきたカナエを左の鞘で、ユノには右の剣で受ける音であった。

孝和はその場で軽くステップを踏むように、軽やかに両手の得物を振るう。遠心力と、脚の運びで2人を相手取るのであった。重みを遠心力でカバーし、攻撃の際の隙を、可能な限り2人を自分の近くで留めることで削り取る。

「何なんだ……。あの男……」

軽やかな剣舞を演じるかのような孝和に、イゼルナは驚愕と畏怖を覚えた。自分の周囲にあえて2人を呼び込むことで、同士討ちを恐れさせ、敵の攻撃を鈍らせる。相手が斬りかかるポイントを予測し、孝和が放つ攻撃を避けるポイントを予測。そのポイントを孝和の意思でぶつかり合う様に合わせる。それも剣先が、肌に触れるか触れないかのギリギリのタイミングで行うのである。

「なんで、あんなことが出来る？あの子の動きに意味があるの？無意味な隙すら罠だというの？そんな……」

「……。そうでしょうな。始めて見る剣術、いえ、体術でしょうね……。真正面からの戦法では良いカモでしょう。あの者達の技量は中々の物ですが、タカカズには届かない。見ているだけで混乱しそうですよ。どこで斬りつけようとしても返り討ちにあいそうです」

イゼルナのつぶやきにエーイが答える。思わず声に出していたようだ。ふと見たエーイの顔には明らかかな嫉妬が見て取れる。

イゼルナ達が使う剣術とは、まるで違う思想で形作られた「異質な」武術。暗殺者や盗賊の使う虚を付くことに主眼を置いたものとも違う。イゼルナが先ほどから見ている限り、複数回は襲撃者のユノとカナエを、屠ることの出来るタイミングが有った。それをせず、自分の周りで飛び回らせスタミナを奪う。それに伴い徐々に2人の動きが鈍る。一方の孝和は鈍った2人に合わせ、さらに全力で打ちかけられるように少しテンポを落とし、もしかしたら手に入るかもしれない勝機を、彼女たちの前に幻として見せる。

外から見ると孝和は人形遣いのように見えた。そして、その操られる人形の糸はすでに切れかけ、倒れ伏す寸前だったのである。

息が続かず、剣先がほんの少しだけ下がった瞬間、真っ黒な鞘がカナエの肩を打つ。ミシリと粘着いた音と共に右の肩先から先が、自分の意思とは無関係に跳ね上がり、ダランとぶら下がった。激痛が走ると同時に、肺の奥に溜め込んでいた息が全て吐き出された。

「えほっ！かはあ……ウエエエエッ」

咳き込み、立ち尽くした彼女に更なる追撃が来る。ユノに対処していたはずの半身が、ほんの数瞬でカナエに向きなおる。

「ハッ！！！！」

孝和の呼気が吐き出された。肩を叩きつけた鞘をそのまま手放し、改めて握り締めた拳を捻った体の力を乗せ、肋骨付近にミキリと突き立てる。

ダンッ！！

響き渡った打撃は、孝和が太極拳の震脚からの一撃を、見よう見まねの独自解釈で使いやすくした改良版である。2階の床全体が揺れる感触を全員が味わった。ただ、この技の難点として、正面にし

か対応できない上、背中が無防備になる欠点があった。ここは独学の限界とிட்டたところだろう。利点としては、鎧を着けていてもそれなりのダメージを与えられる点だった。接触時の感触でカナエは何かしらの防具をつけていたのが判った。しかし、それを無意味にするタイプの打撃で、思い切り吹き飛ばされることになった。その手に握られたショートソードは放物線を描き、床に突き刺さった。「ぐっ……！げほっ、ごふっ」

気合で意思を繋ぎとめようとしたのだろうが、呼吸を止められたうえ、肋骨付近のダメージは深刻だった。孝和のほうを向き直り、一步を踏み出そうとしたところで大きく口を開き、吐血する。尋常でない量の血溜まりを足元にこしらえ、左足を前に出そうとしたところで彼女は崩れ落ちた。いまだに前に進もうとするようにその手は何もない場所で空を切る。

目の前にいたはずのカナエが、吹き飛ばされ、吐血する。ユノは孝和がカナエに放つ一撃を見やる。その背中はまだで自分を無視した体勢であり、隙が出来ていた。一瞬ではあるが、それに戸惑いを覚えた。本当にこの男を殺すのか、という躊躇いだった。ほんの少し、その少しだけの躊躇いが彼女の運命を分けた。

「セイツー!!」

タイミング・速度は共にユノの現在の最高といえるものであった。間違いなく、それは孝和を切り裂く一撃になるはずだったのだ。

ユノはゆっくりと孝和が振り返るのを感じた。その目にはなぜか焦りの様子がまるで見えなかった。一瞬の出来事であるそれすらもはつきり解るほどに、世界がスローのように動いていた。ユノは暗い歓喜と、理由のわからない冷たい無機質なものに包まれる。「彼の仇を討つことが出来た」、それが彼女の心中の全てであった。それまでの厳しい戦いが終わると考えたことで、注意力が散漫になったのもあるだろうが、彼女は忘れていた。

戦いは2対1ではなく、2対複数であったことに。

剣先が孝和の背中まで後ほんの数センチまで迫る。背中をこちらに見せた彼に向かう剣にはユノの思いの全てが乗せられていた。

しかし、その思いはほんの少しだけ届かなかった。

「GWOOOAA!!」

剣を握り締めた右腕全体を激しい振動が襲う。ユノの布で覆い隠した腕には、皮の籠手がしっかりと固定されていた。そのおかげで威力が減少したのであるが、ショートソードを片手で保持するには不十分だった。

「ああああっ!!!?」

思わず、ショートソードを手放してしまう。ユノの右腕を襲ったのは、隙を見ていたバグズの咆哮であった。自分の前方の空気を雄たけびで振動させる技であるが、範囲調整が大変難しい。前方一体を薙ぐように放たれるため、敵味方関係なくダメージを与える特性があり、こういった接近戦ではあまり使われないものだ。周囲、特にバグズの位置からの攻撃は無いと、安易に判断した結果だった。兎にも角にもユノは自分のダメージを瞬時に察知すると同時に、大きく後ろに向かって跳んだ。

ゴッ!!

ユノの鼻先を孝和のブーツの先が掠める。あと少し跳ぶのが遅ければ、顔面にベツタリ靴跡が張り付いていただろう。

その足技にユノは気付く。先ほどの隙がワザだったことに。バグズの援護を組み込んだ連携である。まあ、孝和としてもここまで援護がもらえるとは思ってはいなかったのだけれども。悔やんでも悔やみきれないほどのミス。何故、さっき自分は躊躇ったのだろ

うか。躊躇わず、突き抜ければ現状は今と大きく違っていただろうに……。

「ツツ……。まだ!!」

跳び退いた先は、カナエのショートソードの飛ばされた位置であった。とつさであつたが、未だユノは戦意を失つてはいなかった。

「止めないか？これ以上傷つく必要は無いよ。怪我だってこつちで治すこともできる。剣を置いて話しあ……」

孝和がまた、妥協点を何とか探ろうとユノに話しかけ、それが言い終わらないうちにユノは動き出した。剣を掴み、孝和に突進する。右腕は籠手のおかげでいまだ、激痛が走るものの動いていた。そして、彼女は最後の一撃にかける。彼女の慕う、彼が得意とした技で。

彼の仇を討つために……。

ユノは「地を這うようにして、腰溜めにショートソードを構えて接近してきた」のだった。孝和は会話の途中だった為に虚を付かれ、後方に跳ぶ。その孝和の首筋に「横薙ぎ」に剣先が走る。

「くそっ!!待ってっ!!」

孝和はこの技の流れを知っている。その瞬間に理解した。彼女たちの言う「仇」の意味を。

(つてことは……。ヤバイ、ヤバイ!この次にくるのは!!)

体勢が崩れ、ジ・エボニーを振るうのに使えるのは、腕力だけだった。実に良く出来た殺し専門の技といえるだろう。2撃目を剣で受け、「あの時」と同じように剣が跳ね飛ばされた。

「終わりよ!!」

ユノの勝利の確信を持った声が響く。跳ね飛ばした際の衝撃を利用し、孝和より先に剣を自身のコントロール下に戻し、力を十分に込める。そして左側が完全になら空きになった孝和へとどめの一撃を叩き込んだ。

「終わりよ！」

ユノが叫ぶ声が聞こえた。確かに剣は2撃目で跳ね上げられた。そして、彼女の一撃はこのまま孝和の「胸部」を貫くはずである。

この技の流れは判っている。つい昨日自分の左腕で痛い思いをして教え込まれたばかりだ。対応策のほうはバツチリ出来ていた。

がら空きになった左側をさらに前に出すように、一步踏み出す。

「な!？」

短くユノの驚く声が聞こえたが、無視して踏み出した左足を支点にして掌底を放つ。狙いは体ではなく、ショートソードである。

「ほら、よつと！」

声をタイミングを合わせるのに発した。孝和の掌底は、ショートソードを打つ。この技の最大の欠点は、最後の1撃は左側を狙う以外に選択肢が無いのだ。そこまでの流れにはある程度の自由度があるのに、最後だけは致命を狙う形に限定されていた。そこを狙い撃ちしたのだった。

最後の攻撃が外され、剣があさつての方向に飛んでいく。ユノは顔を上げた。蛇のように這い回る格好のため、自然と孝和を見上げる形になった。

ふっ、と孝和との間に目の前を覆い隠すものが見える。次第に大きくなる「それ」が何か気付いたのは、目の前を完全に覆いつくす寸前だった。

静かに、且つ確実に。彼女の意識を断ち切る肘が容赦なく顔面に打ち下ろされた。

第23話 仇（後書き）

2/1に間違いを修正しました。ごめんなさい。

ギャバンはドアの前に孝和のジ・エボニーを掴んで

エーイはドアの前に孝和のジ・エボニーを掴んで

です。

第24話 事態は想像を超えて（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第24話 事態は想像を超えて

襲撃者の最後の一手はその場の全員が息を飲むほどの鋭さと、殺気をはらんでいた。しかし、孝和はその攻撃を完全に見切り襲撃者2名を倒したのであった。部屋中に響き渡ったメキツ、という音は襲撃者の顔に肘がめり込み、骨が砕けた音だろう。粘りつくような又チャリという音がその後続く。孝和の肘が顔から離れると、肘と顔の間に数本、赤く糸が引いた。右肘を打ち込むまで、あまり感情の色を出さないように気をつけていた孝和の表情が、一気に崩れる。それはまさに「やっちまった！まずい！！」という苦みばしつたものだった。

「キール！！急いでこの娘を治してくれ！くそ！手加減できなかつた！！」

ジ・エボニーをを即座に放り出し、崩れ落ちたユノの体を慎重に、しかし急いで仰向けに横たえる。頭と顔を覆っていた黒い頭巾と布を取り払う。何とか口元の布を取り払うことには成功したが、頭巾はどうやらこちらもサークレットで留めてあるのだろう、まるで外せそうに思えなかった。その一部見えた肌の色はココアのような優しい茶色であった。

「キール！まだなのか！？頼む、がんばってくれ！！」

『やってるけど！だめ！なおるのが、おそくなつてくよお……………』

キールに怒鳴るのは筋違いなのは判っているが、そうせずには要れなかった。孝和が頼んでから、キールはすぐにユノの横に飛び込んできた。キールの神の祝福ゴッド・ブレスがユノの体を包み込み、徐々に傷を治していく。だが、何時もの様に、一気に傷が治り、目が覚めるような様子がない。少しずつだが治りだしているのだろうが、それ以上にユノの体から命の灯火が消えていくのが判る。神の祝福ゴッド・ブレスの効力が落ち始めている。口元に耳を当て、呼吸を確かめる。手首で計る脈

も徐々に弱くなっている気がする。

「くっ！……キール、神の祝福ユゼルナ・ブレスを掛け続けてくれ！」

そう頼むと、孝和は腰元のナイフを抜き放ち、ユノの上半身を包む黒装束を切り裂く。

「ちよ、ちよっと！何をやる気なの？敵とはいえ、女の子なのよ！バカなことは止めなさい！」

孝和の行いを見ていたイゼルナが飛んできて、彼の肩をつかんで自分に向きなおさせる。イゼルナの考えていることは全くの勘違いなのだが、その勢いで自分の行動を邪魔された孝和は、鋭く怒気を含んだ視線でイゼルナを睨みつける。そのあまりの真剣さにイゼルナはひるんだ。

「人工呼吸と、心マの準備だよ！！邪魔しないでくれ！！」

「じ、じんこうこきゆう？しんま？何だそれは？」

睨み付けられ、それ以上何も言えなくなったイゼルナに変わり、ククチが尋ねる。エーイとギャバン、バグズは今の状況を静観することにしたようだ。もう1名、気絶した力ナエをそこらの紐で縛り上げ、隅に移動させている。かなりの吐血量だったが、どうやら気絶しただけで命自体にまだ影響は出ていないのだろう。

「今は説明する時間がないんです。後で説明します！しばらく好きにやらせてください！！」

孝和は心の中で舌打ちする。書籍からの情報によると、この世界の医療技術の最高水準は、魔力というものを利用できる点で、かなり高いと考えられる。完全に失った部位に関しても再生が可能で、孝和が考えるには、金さえあれば限定的ではあるが、元の世界よりも優れた治療を受けることも出来るだろう。

しかしその一方、医療水準を魔力で無理矢理に引き上げている所為で、魔力での治療法以外が発展する機会を大きく奪い取っている。医者は神官職や、回復術の使用者に限られ、それ以外はどれだけの腕を持つともモグリヤブ医者扱いであるし、薬品の効能も書物によって様々といった具合である。

孝和の人工呼吸と、心臓マッサージもこの発展していない医療に分類されるのだろう。イゼルナだけでなく、他の者も孝和の言った意味がわかってはいないようである。その為、孝和は説明することを後回しに、自分のできることに全力を注ぐことにした。

引き裂きながら乱雑に孝和はユノの上半身を覆う黒装束を剥ぎ取った。複雑で容易には解けない巻き方をしてあったので、脱がし方が判らなかつたのだった。

「待つてくれ。待つてくれ。もうすこしがんばつてくれよ。頼むぞ」
独り言をぶつぶつといいながら、剥ぎ取った服の下にある胸部を保護しているプロテクターを急いで観察する。その間にも顔色が徐々に青ざめていく。

「タカカズ、何かできることは？」

ククチがそう言うてくる。それに孝和は甘えることにした。

「そっち側の止め具を切ってください。俺はこっちを」

その間にも、孝和はナイフをプロテクターの止め具に当て、力任せに切り離す。止め具の中に硬系が使われているらしく、なかなか切れない。ククチも自分のナイフで肩口・わきの下の2箇所を切り出す。

切り離れたプロテクターを放り投げ、胸に手を当てる。鼓動がほぼ感じられないことと、そしてどうやらプロテクターの下にも固めの布地で補強していることが分かった。切り裂いた黒装束の布地からある程度の大きさのあるものを掴んで手元に引き寄せる。

「ごめん！皆、向こうを向いてくれ！」

叫ぶと同時にナイフを胸元に当て、一気に上着を力任せに切り落とす。その際にユノの胸元から腹部までがあらわになる。グツと両手で観音開きに上着を広げ、ユノの滑らかな肌と、プロテクターと固めの布地で押さえつけられていた想像以上に豊かな乳房が、孝和

の目に入る。周りの男性陣はさすがにそつぱを向いてそちらを見ないように配慮していた。

孝和もあまりそちらを見ないようにして、すぐに布地を胸元にかけて覆い隠した。その後呼吸を確認する。数秒ではあるが寄せた耳元に呼吸が感じられず、孝和はユノの気道を確保して人工呼吸の用意に入った。首の骨折はすでにキールの神の祝福ゴッド・ブレスで元に戻っている。

後は呼吸を回復させるだけの生命力を無理矢理でも注ぎ込めばいい。

呆然と孝和のやっていることを見ていた。キールがユノの怪我を回復させることが出来たのも驚いたが、それ以上に孝和の不可思議な動きがイゼルナには驚愕だった。

彼女が見ていたユノの状態はすでに手遅れであった。今までにもこういった症状の人間を見てきている。軍に所属する彼女には日常のひとつといえた。怪我を回復術で完全に無傷に戻しているのに、そのまま亡くなった同僚は10や20ではない。ユノの状態も同僚たちとさほど変わりないように見えた。

だが、孝和はユノの頭を少しだけ持ち上げ、鼻をつまんで大きく息を吹き込んだ。その行為を行うと、ユノは覆い隠した胸元から白銀の光を放った。ユノのその様子にギョツとしたのはイゼルナだけではなかった。周囲の誰もが、孝和の行為の説明が出来なかったのである。

それが終わると、孝和は自身の両手をユノの胸元に重ね合わせた。そして、おそらく気功術であろう白銀の光で両手を輝かせ、テンポよく彼女の胸を押し込んだ。押し込んだ箇所から波紋のように光が彼女の全身に広がる。

息の吹き込みと、胸元の押し込みを繰り返すこと、数度。結果としてユノの息は吹き返した。

そして今、イゼルナは縛り上げたユノと、カナエを傭兵団の本部兼収容所に運んでいる最中だった。馬車の中に一緒にいるのは孝和

とキール、エーイであった。

(し、視線が、怖い……)

孝和はイゼルナのじつとりとした視線から身を隠すように、キールを膝元に抱え込み、彼女の対角線上の一番離れた場所を外を見ているふりをしていた。

ユノが蘇生したのはあくまで、現代医学の最高峰も真つ青なキール先生のおかげだろう。術が効かないとキールが泣きついてきたので、とつさに生命エネルギーの利用法である気功術でユノに注ぎ込んでみたら思った以上に上手くいった。

そういう風にあの後で簡単に、人工呼吸や心臓マッサージと一緒に説明したのだが、納得がいていないのだろう。イゼルナの追求は馬車で移動し始めるまで続き、さらに収容所へ向かう班に志願した孝和にくつついてきたのだった。

(そうは、いってもなあ……。全部説明できるだけの知識までは無いんだし。どうしようか?)

あくまで孝和がやったのは、新人研修で習った救急救命法である。しかも、完璧にうる覚え。あの時、真剣に学んでおけば良かった、とユノが蘇生するまで、内心泣きそうになりながらも思い出せたのは奇跡的だったと思う。おそらくいろいろ間違っていることもあるのではなからうか?

「さて、大丈夫だったかな?」

気が緩んでいたのだろうか、自然と言葉が出てしまった。どうやら誰もその声には気づかなかった様子だが、気が抜けた自分に喝を入れる。軽くパンツと、頬を張り気合を入れなおす。目的地はもうすぐのようで、高い塀に囲まれた建物が見える。おそらくそれが傭兵団の本部なのだろう。

「着いたようだ。さて、タカカズ。君の考えを聞かせてくれないか？」

馬車が止まり、ドアを開けながらエーイが下りる。外でイゼルナを介助しながら孝和にそう尋ねた。

「ああ、実はですね……」

孝和もキールと一緒に馬車から降りる。孝和の小脇に抱えられたキールは、どうやらおねむなのか「ふわああ……」と寝ぼけた様子の反応が返ってくる以外は大人しくなっていた。

「彼女たちと話がありました……。もう一人当事者も加えたほうが話が早いですからね。多分少しは今回の件のことに関係あるんじゃないかと」

ちらりと馬車後部の荷台に転がされているユノとカナエの2名を横目で見た。自信無さそうに言っただけは見たが、実は孝和としては確信に近いものがある。この短期間で、こんなに行政官の関係者に襲撃が続くのはあまりに不自然だ。そして、孝和の感じている疑問点を解消するにはこの方法が一番ではないかと思ったのである。

「それで？そのもう1名というのは誰なの？」

イゼルナは孝和に聞いた。ギャバン邸から一言も話さなくなった彼女が、久しぶりに孝和の方を見て話しかける。

ニツと彼女に笑い、その後エーイに向かって切り出す。

「昨日、俺たちを襲撃した彼らと話が出来るようにお願いします。特にあの赤毛の人。何が何でも連れてきてください。多分、話が出来ないダメーじじゃないでしょうし」

そういった孝和の顔には、少しだけ意地の悪そうな表情が浮かんでいた。

「あとはですね……」

ガチャリ

目の前のドアが開く。そして後ろの男が乱暴に背中を押す。どうやらこの部屋に入れ、ということらしい。

「ふう……。何だっけ言うんだ？急がせんよ」

赤毛の男、ヒアデスはそう言っただけで自分を小突いた後ろの男に文句を言う。そしてここにいたるまでの流れを思い返した。それは昨日のことだった。

牢の中で目が覚めて、ヒアデスは直後に息苦しさを感じた。ゲホゲホ息を吐き出しながら、寝かされていた粗末な寝台から転げ落ちると、現状を認識した。ひどく痛めているようだ。だが声は出せた。正面には自分と同じく襲撃の参加者がいたので、情報を聞き出すとどうやらここは傭兵団の本部横、収容所のようなところである。

「俺のほかにも、連れて来られた者は？」

「あんたの横に一人いるよ。まだ気が付いてねえらしい。もう一人は、どうかわかんねえ。ひどい怪我だったからなあ……」

「そうか……」

会話が終わると、もう言葉が続かなかった。目の前の瘦せぎすで砕けた口調の男はトレアというらしい。落ち着きなく牢内をうろついているのはこの後どうなるのかが解っているからだろう。

「なあ、あんた。ひとつ、聞くんだけだよ」

「なんだ？」

しばらくの間、話が途切れる。コツコツとトレアの靴と床の石畳が触れ合う音が響き渡る。静寂に耐えられなくなり、トレアがヒアデスに続きを聞く。

「……やっぱ、死ぬのかねえ……。俺たち」

「……ああ、多分な。解ってるだろ？」

トレアは、ふー、と大きく息を吐き出した。

「だよなえ。参ったなあ」

ぼりぼり頭をかいて、どさりと寝台に腰かける。

「そうだな。参ったな……」

基本的に、集団の暴力を用いて金品の強奪を行う者は、死罪であった。裁きは即日執行のはず。弁護士などこの世界にはいない。しかも、ヒアデスたちは現行犯。治安維持の責任者のサインがさらさらと書かれれば減刑の機会などなく、「サヨウナラ」なのである。つまり、今日か明日、というわけだ。

おそらく明日であろう。襲撃は昼前。いろいろな手続きを考えれば、それが自然だろう。

「悪いな、カナエ……。ユノを頼む……」

そう誰にも聞こえないようにヒアデスは呟いて目を閉じたのだ。た。

夕食前に隣の房の男が目を覚ました。孝和のサツカーボールキックで顎が砕け、首を痛めたらしく、こちらの問いかけにくぐもった声が聞こえるだけだった。しかし、自分の状況が解つてからは悲しみにくれるグスグスと鼻をすすする音と、低い嗚咽が聞こえてくる。トレアは彼と知り合いのようで、何とか宥めようと懸命になっていた。外見は神経質そうであったが、なかなかに気配りが出来る人物だな、とヒアデスは好感を持ったのである。

そして一晩明け、翌日の朝となった。しかし、死刑台の案内人はいつまで待つても来ない。格子のはまった窓から聞こえる鐘と、光の加減から時刻を推察すると、すでに昼はとつくに過ぎ、夕方に差し掛かっていた。

「おい。だれもいねエーのかよオー！飯くらい食わせてくんねエーかなー！！」

トレアは看守がいるだろうところに叫ぶ。朝の薄いスープ以降、何も出てきていない。昨晚も黒パンにクズ肉のスープ、一杯の水だけだった。死を目前にした者の態度ではないかもしれないが、死ん

でない以上腹は減る。

ガンガンと、鉄格子を叩き存在をアピールする。しばらく頑張ったが、誰も出てこなかった。

「どうなつてんだよ……。生殺しじゃねエか！」

確かにおかしい。看守も、昨日と比べて巡回に来る回数が少なくなっている。

「まあ、落ち着けよ。しばらく待ってみよう。そのうち誰か来るだろうさ」

そう、粗末な食事の配膳者か、死刑台への招待人かはわからないが。

そんな覚悟をしていたのだが、どうやら来たのは死刑台の案内人だった。牢獄の3人は順番に両手を縄で縛られ、引き立てられていく。まず最初に顎を砕かれたアルフ、次にトレアが連れて行かれた。1日で覚悟が出来たのだろう、2人とも何も言わず大人しく牢獄の鉄扉を出て行った。

最後に引き立てられたのはヒアデスだった。彼もようやく来た最後の瞬間をかみ締める。ゆっくりと牢を出て、鉄扉をくぐった。しかし、行き先は2階の一室だった。階段を登る途中で、外に処刑台が鎮座しているのを見た。そこには先に連れられた2名がいる様子はなく、疑問は深まるばかりだった。いったいどういうことなのかまるで解らなかった。

と、いうことがあったのである。空腹で多少不機嫌になった事は間違いない。それ以上に自分たちの現状がどうなっているのかが判らない。釈然としないが、とりあえず室内に入室する。

「ああ、君が最後だな……。そこに座れ」

ドア側のテーブルに、3名が座っていた。窓側には1名。昨日ヒアデスが仕留め損なつたエーイが座っている。

顎で座る場所を示され、そこに座る。部屋の中を見渡すと、衝立で2つに区切られているのが解った。そして向こうに気配を感じることからエーイのほかに誰かがいる。おそらく、自分たちが暴れたときに、取り押さえる人員を配置しているのだろうとヒアデスは判断した。

「？アルフ。お前、顎砕けてたんじゃなかったか？」

ふと座るときに横を見た。すると、引っ立てられるときには簡単に治療されていた後のあるアルフの顔は、無精髭で覆われてはいるが、どこもそんな状態にはなっていない。

「いや、それがだ……」

オホンとエーイの咳払いがアルフが言い出そうとしたのを遮った。「まずはこつちの話を聞いてもらう。いいな？」

ジロリと睨まれ、アルフは口を閉ざす。

「……では、まず言うておく。君たちは死刑囚だ。理由は言わなくてもいいだろう。現行犯だからな」

「ああ、知っている。だが、通常は捕縛の当日か、翌日には死刑の執行があるはずだ。何故、俺たちを呼び出した？」

当然の疑問をヒアデスはエーイに尋ねる。

「理由は、簡単だ。死刑執行のサインをするものが居ない。昨日だが、アデナウ・コーンは襲撃を受けて行方不明だ。現在、この本部の余剰人員の全部が捜索に当たっている」

「おいおい、マジかよ。洒落にならねエぞ！？それ」

驚いてトレアが叫ぶ。確かにそうだ。現在のこのポート・デイの行政のトップが襲撃を受けて行方不明。行政の滞りだけでなく、治安にも多大な影響がでるはずだ。彼の手腕で何とかこの街は体をなしているのだから。

「残念ながら、事実だ。それを理解した上でこれを見てくれ」

すつと彼ら4名の前に2枚の紙が配られる。それはかなり上質で、しっかりとした作りの物であった。

「悪いんだが、俺は文字が読めない。何と書いてあるんだ？」

アルフがそう言つて紙をエーイに付き返す。その横のさつきまでは牢に居なかつた男も同様であつたようだ。同じようにエーイへ紙を少しだけ押し返した。

一方、ヒアデスとトレアは文字を読むことが出来たので、そこに書いてある内容に驚愕した。

「げ、減刑嘆願書？減刑許可書だと？何だ！？これは！？」

思わず大声で叫んでしまった。そこに書かれているのは自分たちの死刑を減刑してくれるように頼む書面と、それを許可する物だつた。

それを聞いて、アルフと男は目の前の書面を掴み、それとエーイの間で交互に目を泳がせる。

「それがどういふものか、解つたようだな。説明を続けるが、いいか？」

半ば呆然としながら、全員がおずおず首を縦に振る。

「よし、では続けるぞ。減刑嘆願書は、領主エリステリア・クラードイカの娘、イゼルナ・クラードイカと、傭兵団第3部隊長の私の名において発行された、公的な効力のある正式なものだ。前例はないが、法的効力は公式文書としての形を取っているため、承認されるはずだ」

まじまじとヒアデスは、その書面を流し読みで確認する。職業柄、公式文書の偽造も手がける知人がいてそういった方面には詳しい自信があつた。その結果、

「……本物だな。確かに法的効力の発生する正式な書面だ」

驚きを何とか押さえ込み、横に並ぶ全員に自分の意見を述べた。

「本当なのか……？」

アルフは目に涙を浮かべ、その書面にしわが寄るのも解っていないのか、ぎゅつと握り締めた。

「続けるぞ。次に減刑許可書だ」

冷静に、淡々とエーイが続ける。反対側の熱狂とは非常に対照的だ。

全員がその言葉に、次の書面を手取る。

「おい、何だよ。これ、サインがねエじゃねエか!？」

文字を読むことの出来るトレアが怒鳴る。その書面には効力を発生させるための最後のサインが抜けていた。これでは何の意味もない。ただの紙くずと変わらない。

それを聞いて、ヒアデスを除く全員がいきり立つ。一方、ヒアデスは落ち着き払った様子で、

「皆、座れ。そういうことか……」

苦々しく、文面を目で追っていたヒアデスが全員の着席を求める。全員の着席を確認し、エーイに確認を求める。

「この、最後のサインができるのはアテナウ・コーンだけ、ということだろうか? 違うか?」

「その通りだ。理解いただけただようで何よりだ」

二ツと、男臭くエーイが微笑む。それを見て全員が意気消沈した。行方不明の人物のサインが減刑に必要なとは、最悪ではないか。

「そこで、君たちに聞きたい。アテナウ・コーン氏の行方を知らないか?」

「ふざけんな! 俺らは昨日の昼前には此処に居たんだ! 知るわきゃねエだろうが!？」

テーブルを叩きつけ、トレアが怒鳴る。

「落ち着け。話はまだあるんだ。先程だが、私は襲撃を受けた。2日連続でだ。それが君の関係者ではないか、という見方があったのだな」

エーイの視線の先にはヒアデスがいる。

「俺の関係者? 何の話だ?」

意味が解らない。今回は単独で無理矢理、仕事を押し付けられた。それにヒアデスは単独での仕事を好み、誰かと組むことは少ないのだ。

「ふむ……。話が進まないな。まあ、本人たちに来てもらおう。おい、頼む!」

横の衝立の向こうに声をかける。そうすると、数名の足音が聞こえた。そうすると「関係者」が姿を現した。その「関係者」を見たとなん、ヒアデスは立ち上がる。椅子が後ろにたおれ、大きな音を立てた。

「カナエ！ユノ！？お前たちが何でここに！？」

さらに驚くことがヒアデスに起きる。2人は後手に縛られ、猿轡がされていた。そして、その2人の後ろからゆっくりと長身の女性と、同じく長身の男性が現れる。

「な、何故だ！？何故、生きている！？」

長身の男性、つまり孝和の姿を見た瞬間、ヒアデスは驚愕に驚きの声、いや絶叫を上げた。

「な、何ですか？」

視線の先の孝和はポカンとするしかなかったのである。

第24話 事態は想像を超えて（後書き）

初回掲載時に製作者の不勉強により、人工呼吸の回数を3度としていました。現在のガイドライン（2011/2）時点では心臓マッサージ30、人工呼吸2の比率であり、今後ガイドラインの改正等がある場合も考えまして、回数部分を削除いたしました。作中の主人公の行為は2011/2時点での認識と考えるください。

訂正まではこちらをご覧になられた方には深くお詫び申し上げます。

第25話 悪役の似合わぬ男(前書き)

誤字・脱字ご容赦ください。

第25話 悪役の似合わぬ男

ヒアデスの目の前には、確かに自分が刺した男がいた。こちらの慌てた声にひどく驚いていて、確かに幻ではなく確実に生きている。(ど、どうしてだ!? 確かに貫いたはずだぞ!?)

今回の仕事を請ける時、念には念を入れ、刃先には毒を塗りこめてあった。血中に入り込めば、即効性はないが確実に命を奪う。解毒剤にしても、毒自体がヒアデスの独自調合であり、彼以外には作れるはずもなかった。

「あ、あの。話戻しますよ? とりあえず」

孝和としては本来、ユノとカナエの2人に反応してもらえば良かったのに、なぜかそれ以上に自分に大きく反応しているヒアデスを見て、何とか話を本筋に戻すようにエーイに頼んだ。

「本題は彼女たちだ。座れ」

エーイがヒアデスに命じ、着席するよう促す。倒れこんだ椅子を直し、しぶしぶながらヒアデスは腰を下ろす。確かに彼女たちが今、この場にいることが最大の問題である。

「……あんたの娘かい? 二人してあんまし似てねエなア」

ぼそりとトレアがヒアデスに小声で話してきた。

「まあな。いろいろあるんだ。だが、ここじゃ珍しくもないだろ?」

「……そりゃ、な。……わりイ」

そんな簡単な掛け合いがあったあと、タイミングを見てエーイが続きを話す。

彼女たちがここにいる訳、その一部始終を……。

「なにを考えている！？馬鹿者がっ！俺を捕まえた彼に、仇討ちだと？俺は此処にこうして生きている。確かに捕まったかもしれないが、それに対する罰はこの稼業では当たり前前だろうが！？その罰に対する復讐など下種の極みだぞ！！」

ヒアデスは最初は黙ってエーイの説明を聞くつもりだった。それが、ギャバン邸での流れを聞きおわった頃には、すでに我慢することが出来なくなってしまったのである。

カナエ、ユノには自分の仕事については説明してある。この街のスラム街で育つ彼女たちには、酷であることは判っていても話しておかねばならないことだった。自分の仕事で彼女たちに災難が降りかかる可能性を知ってもらい、それに対処する術として自身の暗殺術を仕込んだ。トレアの言うとおり、彼女たちはヒアデスの娘ではあるが、血の繋がりはない。ユノの肌は茶色、髪は黒、カナエは肌は白く、髪の色がアッシュブロンドで、姉妹で白と黒のコントラストが美しい。第一、ユノがカナエの妹になったのも10年前からと、そこまで長いわけでもない。

「で、でも父さん。あたしたちは、こいつが降伏した父さんをその場で斬り殺したって聞いたんだ！」

「はい……。私もそう聞きました。その間違いは、タカカズさんには本当に申し訳ないと思っています……」

猿轡を解かれたカナエとユノがヒアデスに言い訳を始めた。それを聞いて、ヒアデスは孝和に向き直り、深く陳謝する。

「タカカズ、キール。お二方には深くお詫びする。そして申し訳ない。2日続けて私と、娘たちに命を狙われているというのに、この対応。しかも、娘2人にいたっては死にかけてたところを助けてまでいただいたて、感謝の仕様もない……」

深々とヒアデスが頭を下げた。ユノとカナエはまだ言い足りないことがあるのか、口元をもごもごさせていた。それを見て孝和は焦る。キールは

『はえ？べつにいいよ？ますたーに、たのまれたただけだし？』

と、まるで人事である。

「いや、全部誤解なんですからいいですよ。それより、わざわざ此処に来て皆さんを集めたのは訳があります」

ちら、とエーイを見ると、軽くうなずいてくれた。それを見て、エーイから説明のバトンを受け取ったと判断し、続きを話し始める。「何だい。兄さん。俺らにもわかるような話なのかい？」

アルフの横の若い男、名をイストというのだが、彼が尋ねる。昨日の大怪我で死に掛けていたが、キールが治療し今はこうして会話も出来た。アルフも同様で、砕けた顎は会話が十分できる状態に回復していた。

イストの説明に孝和はコクリとうなずいた。

「昨日のことを聞きたいんだ。あのキャラバン襲撃の時のことだあれ、誰からの命令だったんだい？」

その場の全員がぎよつとする。内心冷や汗を掻きながらヒアデスが代表して言葉を返す。

「何のことだ？あれは俺たちにとって、いつものことだ。誰からも命令されたものじゃないぞ？」

「嘘ですね」

孝和はヒアデス言葉を嘘と断言した。孝和自身少年期の経験から、嘘をつく大人をそれこそ数え切れない程見てきた。勘といえばそれまでだが、孝和はこれには確信に近いものを感じている。しかも、先ほどまでと違いヒアデスの言葉遣いが、非常に事務的に変わった。それに断言したときのヒアデス以外の、特にアルフやイストは面白いくらいに孝和の勘が正しいと、証言してくれる反応を示してくれた。

「この状況で嘘をつく意味があるんですか？アデナウ・コーン氏が戻ってこなければ、死罪なんですよ？」

現状は優しくない。協力が得られず、コーン氏が帰ってこなければ、後任の行政官のサインで、彼らは死ぬ。

「ぐっ……」

唇をヒアデスがかみ締める。

「あの襲撃時に襲ってきた者たち以外に、遠くから観察していた部隊は何ですか？ただの野盗なら全員で襲うはずでしょう。しかも、ヒアデスさん。あなただけ、他の人とやってることが明らかに違うんですよ。全員逃げを打っているのに、エーイさんを殺そうとしてたでしょう？何人か他にそんな人もいたみたいですね。明らかに他と連携の取れてない人がいましたし。まあ、攻めあぐねて逃げ出したみたいですけど、ケンネルの盗賊団はここじゃ鉄の掟と残虐・傲慢で有名なんでしょう？スタンドプレーをするような周りと上手くやれない奴が、そんな何人も生き残ってる訳ないですよ？」

一気に自分の感じた疑問点をぶつけた。相変わらず、ヒアデスはポーカーフェイスに努めていたが、他はそももいかない。滂沱の汗を流すアルフ、目が泳ぐイスト、トレアは孝和に興味を持ったのか、ヒアデスとの駆け引きを見る観客のようになっていた。

「……知らんよ。俺はただ突出しすぎてタイミングを失っただけだ。最後の悪あがきにその隊長さんに一矢報いるつもりだった、それが事実だ」

目をつぶり、孝和を見ないようにして回答を返す。完全な拒絶の姿勢だ。他の者も何か理由があるのかこちらに協力したくとも、出来ないジレンマのようなものが見える。

（まいった。これで話してくれれば良かったのに。……嫌われるだろうな。……はあ）

孝和の心中はズンと重くなった。これから自分のすることに対し、とてつもない嫌悪感を禁じえない。

（まあ、別にいいか……。やるのは完璧に悪役だしな。憎まれるのは、俺だけのほうが後々問題も少ない、だろ？覚悟を決める、俺！アリアが帰ってきてから悔やめ！後日土下座でも何でもやらねばいい！でも、……許してくれるかなあ？）

「……あの、ですね」

覚悟を決めて孝和は話し始める。先ほどまでの澱みない物から比

べると、じつに歯切れ悪い。

「？」

その様子にヒアデスは目を開け、孝和を見る。彼は両手を合わせ、指先をこすり合わせていた。しばらくそれが続き、両手を離すと孝和はまっすぐにヒアデスを見つめる。

「現在、ユノさん、カナエさんにはエリステリア・クラードイカ子爵令嬢、イゼルナ・クラードイカ嬢に対する武器を持つての威嚇行為の疑いが懸かっています。疑いといっても、彼女の目前で暴れていますので、訴え出れば認められるでしょう。その上、ギャバン氏の邸宅への不法侵入及び器物損壊。私に対する明確な殺意を持った殺害・障害未遂。これらが追加されます。私とギャバン氏は違いますが、イゼルナ嬢は貴族です。それに対する刑罰がどうなるかわかりますか？」

あえて自分のことを「私」と名乗り、事務的に感情をおさえ、ヒアデスに告げる。先ほどまでの、言葉の端々に感じられた優しさは全てそぎ落とされていた。後ろでビクツと2人が身じろぎするのを感じた。罪状の文言の一部は現代的な言い回しなので、この世界で通用するのは賭けだが、どうやらそれには勝ったようだ。

「な、何だと！娘たちを助けておきながら、殺すというのか!？」

ヒアデスの怒号が孝和を打つ。それに真正面から孝和は対峙した。

「いえ、刑罰は死罪ではありません」

「な、に？」

ヒアデスは勢いをそがれる。一方事態を見守っていたトレアは、孝和の言わんことを理解した。

「マジかよ……。エゲツねエ……」

トレアはパンと音を立てて顔を覆う。その様子に残りの3名はどういうことかの説明をトレアと、孝和に求めた。

「トレアさんはお分かりな様ですが、ほかの皆さんにわかるように説明します。彼女たちは現在のままでは懲役刑となります。場所は此処から最も近いバクスタイン監獄となりますはずです」

「あ、ああ……」

ヒアデスは先ほどまでの勢いどころか、魂までも吸い尽くされたかのように席に座る。呆然と意味の無い言葉がただただ口元からあふれ出す。後ろの両名からはヒツと恐怖に彩られた声が聞こえる。

「なあ、タカカズさんよ。そりゃ、ちよいと女の子にやきつ過ぎねエかい？」

トレアが言うのも無理はない。バクスタイン監獄はこの地方では罪人を収監するものとしてよりも、むしろ残虐な苦行を与える地獄として有名だ。看守もいるにはいるが、この中ではリグリアの法の光が行き届かない。毎年、収監できる以上の人数が新しく入り、出て行くものはそうはいないはずなのに、一向に監獄があふれる気配がないという恐ろしいわさがある場所であった。そして、そのうわさを裏付けるように、そこからの帰還者は全員心を壊し、出獄後しばらくのうちに亡くなってしまっているのである。

その場所に、うら若い女性を放り込む、と孝和は説明、いや脅迫しているのだった。

「現状、打開策がひとつだけあります」

孝和はそう切り出した。

「そういうことか。エグイな、あんた」

トレアが話を引き継ぐ。ヒアデスも気付いていた。そういうことなのか、と。彼女たちを此処に連れてきたのはどうしてなのか。その理由が目の前に示される。

「では、これを……」

エーイが孝和の言葉を受け、どこかで見た書面を出す。

「……減刑嘆願書、減刑許可書だな」

「ユノ、カナエの分か……。用意周到だな」

そこには先ほどと同じ減刑嘆願書、減刑許可書がある。そして同様に、アデナウ・コーン氏の分のサインは抜けていた。

「説明は不要でしょう。ご決断を……」

孝和がヒアデスに迫る。しばしの沈黙がその場を支配する。その

後、ヒアデスは横の3人を見て、全員が頷くのを確認し、重い口を開くのだった。

「なるほど、依頼主はそれぞれ別なんだな」

エーイが全員に確認する。ヒアデス個人に依頼というか命令を下したのは、盗賊ギルドのトップの補佐に位置する人物だった。トレアたちも、それとは別口のルートで依頼を受けていたようだ。口が重かったのは盗賊ギルドの報復を恐れていたこと。しかし、彼らのポート・デイ脱出をサポートする約束も、減刑許可書に盛り込まれていることが判り、それから先は非常に協力的になった。この配慮も孝和の提案だったが、それを今この場の囚人たちには知る術はなかった。

先ほどの部屋から場所を移したこの場には、エーイのほかにはヒアデスたち4人以外は誰もいなかった。

「しかし、まさかな……。此処までひどい状況だったとは、予想外だ」

ヒアデス達から入手した情報はすさまじいの一言だった。役人連中の癒着やら、賄賂の横行、他にもござるところと。非常事態とはいえ、孝和の提示した作戦でここまでの情報が手に入るとは思わなかったのである。人道的な配慮は十分に必要であろうが、今後治安維持に役立つどころか、この街の転換点を迎えるような大きな大きな重要情報となるだろう。

この世界でもこういった取引は、軍の諜報部門で使われている。ただし、表に出ないようひそかに行われている為、エーイのような治安部門の責任者では使われていない方法だったのだ。

「それで、此処まで協力したんだ。約束は守ってもらうぞ。行政官が救出されれば、全員のサインを頼むぞ」

睨むようにエーイに向かってヒアデスが念押しした。その目には

いらつきが隠せない。

「ああ、言われるまでもない。まずはこの件の関係者たちの捕縛だな。そこから糸を手繰るしかあるまい」

手元の資料を眺め、自分の為すべきことを確認する。

その様子をヒアデスは苦々しく思う。自分は仕方ないといえるが、娘たちは誤解からこの件に関わる事になったのだ。あ後に詳しく事情を聞くと、ギルドの連絡員からヒアデスの最後を聞いたそうだが、それから考えれば、その連絡員は補佐の子飼いだらう。ヒアデスの失敗を、娘たちで補うつもりで、あえて捻じ曲げた情報を与えたのであろう。ヒアデスが娘を鍛えているのは補佐の耳には入っていない。ヒアデスが今の執行部とは距離を置いていたことで、反抗分子予備軍として監視されていたのは、間違いないだらう。

「ああ、そうだ。ヒアデス、ひとつ連絡がある」

尋問が終わり、部屋を出て行く前にエーイが後ろを振り返り、テーブル前の椅子に足を縛られた彼らに話し出した。

「ユノとカナエだが、傭兵団の本部で保護することになった。よろしくな」

「な、どういうことだ!？」

何気ない世間話のように語られた内容だが、それは聞き逃せない内容だった。

「タカカズには内密にしておくように言われたんだがね。私はどうやら、おしゃべりのようだ。口が軽くていけない」

オーバーアクションでお手上げのポーズをとり、頭を横に振る。

「2人の罪状は、イゼルナ様への威嚇行為・傷害未遂、タカカズへの殺害・傷害未遂、ギャバン邸への不法侵入及び器物損壊……だそうだが、タカカズがイゼルナ様に交渉して、アレをなかったことにしてもらったんでね。罪に問えるのはギャバン邸の一件のみになったんだよ。そうすると、2人のやったのはギャバン邸に侵入して、ガラスを叩き割ったことだけになる」

「そ、そんなバカな!?!だが、もうひとつは?タカカズへの殺害・

傷害未遂は!？」

「本人が誤解だし、別にいい、との事だ。そこら辺はつまり具合にやってくれ、ということでごまかして欲しい、だとさ。それよりも怪我させてごめんなさいと、お前たちに会わせる前に2人に変形の平伏までしていたしな。法に照らせば、バクスタイン監獄への収監は間違いのないんだが……。この情報の報酬としてはまさに妥当だが、甘いと言いやうがない」

ちなみに変形の平伏とは、要するに土下座であった。

「そ、そうなのか……」

「イゼルナ様にもかなり絞られていたからな、かなり精神的に参っているようだ。まさに一人だけ貧乏くじを引いているな」

はっはっは、と笑いドアからエーイが出て行くこうとする。

「ま、待ってくれないか？」

その背に向けて、ヒアデスはエーイを呼び止めた。

「ね、眠い。正直きついなあ。もうガツタガタ……」

軽く屈伸運動をして、傭兵団本部前に孝和はいた。ちなみにキールは本部受付の女性職員から毛布を借り、すやすやお休みだった。イゼルナはすでに馬車に乗り込み準備している。その彼女と2人きりになるのを避けるため、ここで体調確認しているというのも理由のひとつではあった。

「お前、ホントによく寝る子だね……」

ちらりと、キールを見てそつつぶやく。まあ、朝からいろいろあって今はもう夕日は沈み、夜の明かりがあちこちに見えるようになっていた。エーイが聞き出した情報を精査して、動くことになったので今はそのエーイ待ちの状態である。

パキパキと、体をほぐして現在の体調を確認する。どうやら両腕と、両足にだいぶだるさが残っている。まだ十分動くことの出来る

レベルだが、やはり昼の一戦と、その後のユノの蘇生が効いていた。
「弱音は言つてらんないし、やってやるかい！うっし！」

勢いを付けて背伸びをする。ぐっ、と背を伸ばして横に立てかけてあつたジ・エボニーを手取る。

「待たせたな。すまん、時間がかつたのでな」

エーイの声が聞こえて、そちらに孝和は振り返る。

「ああ、どこに行くのか決まっ……たあ！？」

視線の先にはエーイのほかユノとカナエがいた。しかも、カナエの手には昨日ヒアデスの使っていたカタールがある。

「ど、どういうことですか？なんで外に出したんですか！？」

平然と彼女たちを外に、しかも武装した状態で連れ出すなど正気の沙汰ではない。彼女たちへの口封じの可能性が否定できないので、本部での保護となつたはずなのである。エーイの腕を掴んで自分の側に引き寄せた。小声でエーイに質問する。

横目で見たカナエは、自身の持ったカタールの刃をそつと指でなぞり、その感触を確かめているようだった。もう一人のユノはなぜか地面を見つめ、こちらを見ようとはしない。

「いやあ、それがだな。ぜひとも私たちに協力したいそうだね。私の権限で特別に許可した。一発今回の首謀者にカマしてやりたいぞうだ」

（駄目だろ、それ。て、言うかあなた、ここまでの経緯知ってるでしょうが！？俺、彼女たちへの印象最悪じゃんか！？）

そう考えていたのが表情から判つたのだろう、エーイがポンと肩を叩く。

「まあなんだ、結論から言うと、これまでの演技も含め、全部バラした。彼女たちも納得済みだし、安心しろ。刺されはしないよ」

「刺され……！？ものつすごく気まずいですよ！」

後ろを振り向くと、笑顔でカナエがこちらに手を振っている。頭巾を取った素顔は、派手目ではあるが、間違いなく美人であり、こんな状態でなければ顔を真っ赤にしていた自身がある。じつと地面

を見つめているユノも、美しいというよりは可愛い部類ではあるが、若さにあふれる肌や、つややかな黒髪がアクセントとなって、魅力ではカナエに全く劣っていない。

あははは、と引きつった笑顔を返せたのは上出来だったと思う。バツ、とエーイの首もとを掴む。

「一般市民を巻き込んでいいんですか？何かあったらどうすんです！？責任問題ですよ！？」

彼女たちには未来がある。このまま成長すれば、どちらもすばらしい女性となって、多くの可能性を掴むことが出来るだろう。それだというのに、エーイはこの危険な仕事の協力を彼女たちに頼んだのだ。

「問題ない。父親を助けた娘2人の心意気に打たれたからだ、と万が一の場合はそのシナリオが用意されている。強制はしていないし、場合によってはスラム街への案内人も必要からな。それに君も一般人だろう？」

「……勘弁してくれよ。マジで……」

孝和は小さく目の前のエーイにも聞こえないような、小さな声でそつつぶやき、頭を抱えるのだった。

「ひとつ、いいです？」

「なんだ？」

確信といつてもいいものを感じているが、確認する。

「下衆いですよ……」

「……さてな」

そつぽを向くエーイを見て先ほどより深く、ため息をつくのだった。

（解りましたよ！守って見せます！！）

ユノは、はにかみながら、カナエはにっこりとこちらに笑顔を見せる。それを見て、孝和は強い決意を漲らせるのだった。

第25話 悪役の似合わぬ男（後書き）

感想とか見て元気出たので、投稿します。

あと、皆さんの登録数がとんでもない数になっていてありがたいことです。

なるべく失望させないようやっていきます。本当にありがとうございます。

でも、ちょっとプレッシャー……

第26話 GIFT/CURSE(前書き)

誤字・脱字ご容赦ください

第26話 GIFT/CURSE

「逃げ出した後、かよ……」
がつくりと孝和は肩を落とす。

ここは、ポート・デイ冒険者ギルド。その入り口脇に置かれた馬車の中である。昨日に続き、今日もこの場所に来る羽目になっていた。

「冒険者ギルドのギルドマスターが、盗賊ギルドの補佐役って……。腐ってんなあ、ここ」

詳細までは教えてくれなかったが、エーイの資料には昨日のあの男が盗賊ギルドに便宜を図るのに、様々なことに携わってきていることが解ったのである。

例えば、野盗の討伐依頼のみみ消し、禁輸品を食料品に偽装した運搬依頼、冒険者への報酬の横領、軍・傭兵団の行動の密告。他にもいろいろ出てきている。その上、ヒアデスへの命令に加え、どうやら昨日の襲撃の情報を盗賊ギルドに提供したのも、あのギルドマスターだった。そして現在行方不明。完璧に今回の誘拐劇の関係者だろう。

「何で、そんなのが冒険者ギルドのトップに立ってるんだ？おかしくないか？」

「理由は簡単！コネとカネ！それが理由だよっ！」

孝和の問いに答えたのはカナエだった。

「カネは解るけど、コネって何処のなのさ？」

エーイがギルドの中で調査をしているのを外で待つ孝和は、カナエと馬車で待機していた。

「このギルドマスターのハキムって、前の領主の弟なの。兄貴が追放されたけど、しぶとく生き残ったのよ。追放になるときに、弟も調査したけどそこまで問題になることもなかったから。だから、

10年以上ギルドマスターにしがみついている奴がいるのって、ここくらいだし」

「親族での権力の囲い込みって、完璧に駄目駄目な見本じゃなか…
…。何とかしろよ、その調査の時に」

「んんー？でも、貴族の連中ってそんなもんじゃない？自分たちのお仲間には手心加えざるを得ないって！」

「んんっ！」

カナエがカラカラ笑うのを聞いて、イゼルナが咳払いをする。

「ああ、そっぴや。イゼルナ様も貴族だったっけ。ごめんなさい！」

「言われても仕方ないが…。私たちの失態だ。それがこの結果を生んだんだろうから……」

多少むっとした表情をしたが、すぐに頭を下げたカナエに大人気ないと思ったのか、自分たち貴族の不明を恥じる。

イゼルナのその態度に、確固たる誇り高さを感じた。同じくアリアも気高く、その生き様はまっすぐ前を見ている。しかし、昨日のギルドマスターも貴族の端くれであったはずだが、そういったものはまるで感じられなかった。

ここから、やはりこういったのは家柄や血筋ではなく、個人個人の資質なんだろうと孝和は深く心に刻むのだった。

「ところで、さ？」

「うん？なんだい？」

カナエが、話が終わり静かになったところで孝和の袖を引いて尋ねた。

「アリアさん、ってタカカズのどんな人？」

「……はい？どんな人って？」

カナエの台詞がよく解らなかった。いったい何が「ところで」なのか？

「いや、あのね。親しい人が攫われたのに、落ち着いているなあっ
て思ったのよ？こういうときは喚き散らすか、うるたえるのが普通

「じゃないかなー？」

カナエのその言葉に最も敏感に反応したのはユノだった。ビクンと体が震えたと思うと、孝和をじっと見つめて、その答えを聞き逃すまいと背筋を伸ばして身構える。

「ああ、そのことか……。最初はかなりキてただけだな……。話し聞いてると、今回のやったの間違いなくプロだろ？しかもその前に「極上の」がつくような、ね。夕方に本部出たときに、金とかの要求もないみただけど、どう見たって場当たりのな犯行じゃないだろ。まあ、絶対大丈夫といえないのがキツイんだけどさ」

嘘だ。孝和はこの事実をでっち上げないといけない理由があった。（落ち着いてる、ねえ……。やっぱ、傍から見ると異様なんだよな……。俺の態度って）

ギャバン邸で話を聞いたときに、気が触れそうなほどの焦燥が孝和を襲ったのは事実だ。心が砕け散るのではないかと思うほどの、絶望と共に。

しかし、外から見ると、孝和は落ち着いて事態に対応しているように見える。実際その通りなのだが、「八木孝和」の自制心がこれを為したのではない。

これこそが真龍シグラスの「ギフト」である。心の糸が切れ落ちるその最後の瞬間に、すっと気持ち楽になった。

焦燥感、憤怒、絶望、襲い掛かる全ての感情が、シャットダウンしたかのように心の占有面積をゼロとした。あるラインを超えたときに発動する「ギフト」、いや「呪い」だろう。そして、発動後は機械的に事態を冷静に把握する。現在何をすべきか、相手の考え、こちらの動き、疑問として上がる様々な項目。これらガリミッターとなり、孝和を冷静に為さしめた。

（これが、長命な種族が持つ「心」ってことなのかね……）

真龍は700年という寿命を持つ。それは一体どのような精神構造なのだろうか？

700年。これは人間の寿命と比べればはるかに長い。その生を受

けた真龍の精神構造と、せいぜい80年程度がほとんどの人間のものは造りが根本から違うのではないか？

最初、キールを仲間にしたときの襲撃時からの強い違和感。恐慌、困惑、動揺、これらの感情に対し、強い抵抗力を得ているのはブレイス・カードで確認した。しかし、それ以外のリミッターが孝和の精神には仕込まれている。

孝和には受け継がれた生命力を使いこなすため、シグラスの心の強さが継承されている。この心の強さとは、単に生命力を使いこなすためだけではなく、異世界で生きる孝和を「生かす」ことも考えていたのだろう。全く違う世界で生きることが、個人の資質とは別にひどく心を疲弊させる。それに耐えられなくなることを見越し、シグラスの仕込んだ、当然起こりうる事態への対応策としてこの「呪い」とも言える「ギフト」があつたのではないか。

要するに、異世界での様々な精神的負荷である「ウイルス」から八木孝和という「ハード」を守る、「ウイルス駆除プログラム」として、真龍の精神を人にダウンロードしたのではないかと孝和は考えた。何せ、孝和が生まれるまで、300年という長い時間があつた。実際に起こりうる様々な問題への対処を考えるには、十分すぎる時間だつたのは間違いない。

（でも、人間としてこの落ち着きはおかしいんだよね……。そこまです気が回らないのは、種族的なものなんだろ。仕方ないか）

そんな孝和の内心での葛藤があることには気づかず、車内では力ナエの声が響く。

「そうじゃなくて！アリアさんって人は、孝和にとってどういう人なのってコト！友人？仲間？それとも……恋人？」

「こ、恋っ！？な、いや、違うけど？今のとこ、大事な友人・仲間かな？向こうもそう思ってくれると嬉しいけどさ」

いきなりのツッコミであつた。この状況下で話す内容なのか、と思つたが、自分とアリアとの関係性をイゼルナに説明していかないことに今更ながら気付き、その後の続きをイゼルナに向かい話す。

「え、と。最初に会ったときは、あんまり信頼されていなかったんですけど、今はキールも含めて仲良くやっってるんです。チームプレイとかはまだまだなんで、今後も色々頑張ろうか、と……。やっぱ、まずいですかね？平民と貴族がパーティーって」

知らなかったとはいえ、アリアは貴族だった。一方、孝和はどこからどう見ても平民である。以前、苗字の「八木」が高名な家系と誤解されることがあったが、実際自分が貴族でないのは確かなのである。この両者の関係は大きい。よく考えれば、イゼルナよりもアリアの方が貴族としての格は上であるし、敬語とかなんかそこら辺は今後どうすればいいものなのだろうか？

「まあ、好ましく思わないものは多いかもしれないが……。別に構わないと私は思うけれど？アリアの方から君らを誘ったんだらう？そこら辺を悩むのはアリアの側の問題で、君らの方じゃない」

「はあ、そうですね……。ていうか、それでいいんでしょうか？」
「平民でも実力のあるものは重用するのが、ウエルローの家系だぞ？それにウエルローの一族だった母が選んだ私の義父は、裕福だったとはいえ、元々は平民の出だしな」

イゼルナの話が終わったちょうどその時、馬車の扉が開く。覗き込んだエーイが中の全員に報告する。

「イゼルナ様、移動します。皆、今度は八キムの屋敷だ。ギルドには午前中は居たんだが、昼に客が来てその後、大慌てで帰宅したらしい」

ばたんと扉を閉めて、御者席にエーイが座る。馬車は鞭を入れたエーイの操縦で動き出す。室内の小窓を開けて孝和が話しかける。

「どういうことですか？八キムが今回の関係者なら、行政官襲撃の翌日に出勤なんて変ですよ？」

「それが、受付の娘が言うには客人は、フードをかぶって誰かはわからなかったらしいが八キムの奴、かなり慌ててたらしい。予定は今夜のはずだ、とかこちらの準備がまだ、とかな……。しかも誰かに聞かれる可能性のある受付でな？地位に実力の伴わないアホだな

ハキムは」

「首謀者はハキムじゃない？」

「そういうことだ。そこを確かめに行こうじゃないか？」

「申し訳ありません。ハキム様は現在屋敷には居りません。どうぞお引取りを」

深々と頭を下げた人物は執事服に身を包み、イゼルナを先頭にしたら一団に怯むことなくそう言い放った。初老に差し掛かりながらも全く衰えを見せずその場に背筋を伸ばし、イゼルナたちに相対した。真つ白になった髪と、深いしわを刻んだ顔には威厳と、自分の仕事に対する自身が見て取れる。孝和たちが到着するのを待っていた彼は、門扉の前に立ちふさがり一步も引く構えを見せない。

「仔細は先ほど言った通りだ。それでも協力は出来ぬ、とそう言うのか？」

イゼルナは目の前の執事にそう尋ねる。殺気を放つ彼女を前にして、執事はピンと背筋を伸ばし、真正面から彼女に対する。

「お話を聞きますと、ハキム様への疑いは濃厚でしょう。ですが、あくまで疑いでしかありません。それでは、私にはこの門を開けることは出来かねます」

「ふむ、それではあくまで主人をかばうのか……。実力行使、と言う手もないわけではないのだが？」

しかし、これにも効果はなかった。彼はイゼルナの目をまっすぐに見つめ、切り替えます。

「申し訳ありません。何度も言いますが、ハキム様は屋敷内には居りません。メイド達と共に旅行に行きたいと、仰られましてね。どうかお引取りください」

深くため息をついて、イゼルナはこの執事をどうするか考えた。

このまま屋敷内に侵入すれば、この男はその行為を問題にするだろう。ハキムがたとえ罪人となろうとも問題は問題だ。貴族の横暴と、多くの者がイゼルナや傭兵団の行為をなじるだろう。

「くっ……」

イゼルナの他のものも同様だった。この目の前の執事の毅然とした態度を、崩す術を何も持つてはいなかった。

「あのー。いいですか？」

全員の後ろで控えていた孝和の声が聞こえる。それに全員が振り向く。

「執事さん。屋敷内にハキム氏はいないんですね？」

「ええ。その通りです」

執事は躊躇うことなく即答する。

「メイド達と一緒に旅行に出かけた？」

「ええ」

「全員で何人ですか？」

「私が見る限り御者とハキム様を含め、7名でしたね」

「なるほど……」

そういつと孝和は膝をおり、地面をじっと見詰めだした。地面には轍が出来ている。人差し指を立て、その轍の深さを、先ほどまで自分たちの乗っていた馬車のものと確認する。

「持ち物は何でした？」

「貴金属、服は山のように。大型の馬車に詰め込めるだけです。一緒のメイド達には鎖が巻かれていました。……哀れな娘たちです」

「……馬車は何頭立てです？」

「3頭でした。重量はかなりのものでしょうな」

孝和と執事の会話は淡々と進む。孝和が膝を折ってから、執事は微笑を浮かべていた。聞きたいことを孝和が質問し、それによどみなく執事が答える。孝和は返答を聞きながら、地面に残る蹄を捜し、門扉から複数出ているものの中から、条件に合うものを選び出す。

誰一人それに口を出すものはいなかった。

「……では、これで最後です。……いいんですか？」

孝和の質問には色々なものが含まれていた。長年使えていただろう家に対する忠誠心、彼の仕事へのプライド、今後の身の振り方、他にも色々。

「……私は、この家で3名の主人に仕えました。先々代、先代のご領主、その弟君のハキム様です……」

噛み締めるように闇に彩られた夜空を見上げ、一言一言言葉を紡ぐ。その視線の先には、夜空ではなく、違うものが見えているだろうことは、その場の全員が解っていた。最終的に条件に合いそうな轍は2本に絞られる。南のスラム街へと続くもの。北の高級住宅代と、軍管轄区域へ向かうもの。

「先代領主様も、ハキム様も幼少の砌より知っております。ですので、私が為すことはここまでが限界とお考えいただきたい。……ですから、お願いいたします。どうか、あの方をお願いいたします……」

夜空を眺める彼の視線が、北を向く。

「どうなるかまでは、俺にはわかりません。でも、俺たちは助けなければならぬ人がいます。ご期待に沿えるかは解りませんよ？」

「はい、解っております。私にはこの家の最後を看取る必要があります。ですから、よろしくお願いいたします」

ここに来たときと同じように深々と頭を下げ、執事は顔を上げる。その表情は悲しみと決意に溢れながらも、今までに見たことの無いようなすばらしい微笑だった。

最後に全員が乗り込んだ馬車を見送る、いつまでも頭を下げた彼の姿はまさに「真のプロフェッショナル」という言葉が相応しいものだった。

「あの執事さん、大丈夫なのかしら」

馬車での移動中、ユノは隣に座ったカナエに話しかける。

「まー、ねえ？でも、あたしたちにはどうしようもないことだしさ……。それよりも、これからよ！本番は！絶対に八キムをブツ飛ばしてやるんだからね！」

ぐつと拳を握り締め、ユノの顔の前に翳す。それを見て、ユノも握った拳をカナエのものに軽く合わせる。

「ふふふ。そうよね……。やって見せないか、ね」

そつと微笑み、御者席のイーイの隣に座る孝和を見る。どうやら2人は話し込んでいて、こちらが見ていることには全く気付いていないようだ。

「北つてことは、住宅街か軍施設だけれど……。本当にそんな所に捕まってるのかしら？もしそうでも、中に入れないと意味がないのだけれど……」

孝和の判断に文句はない。結果的に執事から確認を取ることには出来なかったが、ほとんど確定といってもいいだろうと思う。あの執事が嘘をつく可能性もあるが、あそこまでの覚悟で話してくれた彼の思いは本物だと信じたい。

「発生からもうすぐ1日が立とうとしているのだ。そんな場合は私の方で何とかしよう。ここまで来て、遠慮する時間もないからな」腕を組んでじつと目を閉じていたイゼルナがそつ太鼓判を押してくれた。

「そうですね！イゼルナ様もやってやりましょうね！！」

そういうと、カナエの拳がイゼルナの前に差し出される。

「ああ、よろしくな。一発力マしてやろう。首謀者が誰であろうと構うものか。2人とも準備はいいか？」

「はい！」「ええ！」

2人の声がそろつ。そして、今度は3人で拳をあわせる。

「あ、でも、イゼルナ様にひとつお願いがあるんですけど？」

「なんだ？出来ることならいいのだが？」

カナエのお願いにイゼルナが答える。出来るかどうかは内容次第だ。

「その、かった苦しい言葉遣い。止めません？なーんかこう、息苦しくて……」

ぽりぽり頭を掻いて、あははは、とカナエが笑いかける。ちよつと、とユノがカナエをたしなめる。

「そうか……。だが、これは軍人としての矜持の様な物だからな……」

だが、聞かされた内容から判断して別に問題もないか、と考えたイゼルナは2人に向かって話しかける。

「でも、この3人のときはいいかもね。私も立場上そんなに友人といえる人もいないし……。だから、ほかの人がいないときはイゼルナでいいわ。まあ、年の差のことは気にしなくてもいいわ。よろしく、2人とも」

ウインクのように片目をつぶり、茶目つ気を見せて2人に頼む。

「うん！よろしくお願いします！イゼルナ！ほら、ユノも！！」

トンと軽く肩を叩かれたユノがカナエに続く。

「よろしくお願いします。イゼルナさん」

「いや、ユノ？呼び捨てでいいのよ？」

「いえ！はじめですので、これをお願いします」

「そう……。なら、いいけれど……」

と、いうことで女性陣はいつの間にかそれなりに仲良くなり始めていたのだった。

「なんか、中は楽しそうですね……。この状況でアレもどうなんでしょうか？」

孝和は後ろの馬車の様子を見て、横にいるエーイに話しかけた。

エーイの横顔は見る限り、真剣そのもの。後ろの様子がエーイのやる気に水を刺すのではないかと思つて不安になつた。

「まあ、構わないんじゃないか？無駄に緊張する必要もないだろうし、イゼルナ様の友人関係は希薄だつたからな……。これがきつかけになつてくれれば、その点でもいいことだろうな」

「そうですね……。貴族の友人関係つても大変みたいですわ？」

「ああ、利害関係なしでの友情など有りはしないだろうからな。ガキのころからの長い間の積み重ねが、将来の地位の安泰やより良い伴侶に繋がるのは、親の代から連綿と教育されているからな。女は政略結婚するものも多いし、それを嫌つて軍人になつたあの方には同性の友人もいないに等しい。私としてはあの2人には期待したいところだ」

「そういつしがらみの中で生きて行く人生。……正直遠慮したい。」

「籠の中の鳥」、貴族の当事者全てがそう思うかは別だろうが、孝和にはそう思えたのだ。

「やっぱり、どんな立場でも生きてくのは大変なんですね……」

「当たり前だろう。君もこれまでにいろいろとありそうだが？違つかい？」

孝和は、チラツと顔を見て探りを入れてきたエーイにドキツとした。

「いや、まあ……。そうですね……。あはははは……」

まさにヤブヘビ。自分でも白々しいと思うが、笑い声は乾いて周囲にむなしく響き渡つた。

「あ！そろそろ道が石畳になりますよ。ここからは聞き込みですよね！あの路地に止めましょう！ほら！早く早く！」

道に残る轍を追つて、ポート・デイ北に向かつて馬車は住宅街に入り、舗装された石畳が道を覆う。ここまでの比較的平民の住む区画と違い、ここから先は貴族の住む「超」高級住宅街だつた。なだらかに坂になり、丘の上に向かうこの辺りから、丘を越えた先の盆地に位置する海岸の軍港・基地区画までに住むことは、ある意味ス

テータスだ。

この区画は周辺貴族の別荘地、軍関係者・一部の成功者のみの住む事の許される地区である。言い方を変えれば、「官憲が手を出すのを躊躇う」者たちの住処であった。居住者は広さに反比例して、少ない。エーイの持つ調書をもとに絞込みを行えば、さらに該当者は数名までに減らすことが出来る。

「そうだな、では降りよう。あと、な？」

「何です？」

「頼むから、キールを起こせ」

「はい……。すみません……」

すやすよと寝ているキールは、姦しい3人の娘たちの横で毛布に包まれて放置されていたのである。

「最後のここも空振りですか……。上手くいかないもんですね……」

「そう言うな。こればかりは、運の問題もある。単純に考えても1/2だからな」

聞き込みは、孝和・キール・エーイ班と、ユノ・カナエ・イゼルナ班に分かれた。エーイとイゼルナの二人はこの町ではそれなりの身分や権力を持つ。一方、それ以外の面々は、由緒正しい一般人である。搜索先が仮に貴族邸だった場合、問答無用でたたき出される可能性を避けるため、この布陣となった。

『ここがさいごだからさ。じゃあ、あつちのほうでアリアさんがみつかったるはずだよ。そうだよね！ますたー！』

目覚めと共にキールにもたらされたのは、アリアの行方についての重要情報だった。しかし、数箇所の調査結果はこちらは空振り。しかしながら目覚めスツキリ、興奮度マックスのキールを孝和に丸投げして、エーイは一人馬車へ急ぐ。

「そうだといいんだけど……。キール、エーイさんを追いかけな

いと!!」

慌ててエーイの後を追いかける。

「とりあえず合流だ。馬車に戻るぞ?」

『うん!』

テクテクと3人は馬車に戻る。孝和側が今回の調査で得られたのは、結局ゼロに近いが、反対側の彼女たちに期待するしかないだろう。

結局、もう一方の彼女たちの情報が、事態の打開につながるのだが、更なる危険を伴うことになることを、まだ誰も知らなかった。

第26話 GIFT/CURSE（後書き）

前フリが長くなりましたが、次回は突入を含めて長めで投稿する予定です。少し時間はかかりますが、よろしくお願いします。

今日、明日と仕事のため休みの間の書き溜めもできませんから。申し訳ありません。

第27話 黒を纏いて、壁を這う(前書き)

誤字・脱字ご容赦ください。

第27話 黒を纏いて、壁を這う

きっかけはイゼルナ達が、調査対象の家を一軒一軒確認して回っていたときに、偶然ギャバンとククチ達に出会ったことからだった。イゼルナ班は、孝和達よりも比較的北部の軍基地付近の聞き込みを担当していた。

数軒の調査対象の確認が終わった段階で、ギャバン邸で別行動になっていた魔力追跡班のギャバンたちを見かけたのだ。軍基地の唯一の出入り口にある検問所で彼らが押し問答をして、その結果叩き出されるところに、丁度とある豪邸から出てきたイゼルナたちが気付いたのだった。

「基地内にアリアの魔力反応がある！？本当なの、それは！？」

驚いたイゼルナが反射的にギャバンの胸倉をつかむ。それをギャバンは気に留める様子も見せず、ゆっくりと胸倉をつかんでいたイゼルナの手を下ろさせる。

「落ち着きなさい。あなたが急いだ所で事態は変わりません。ここでは場所が悪いですから、少し歩きましょう」

目線でその先の出入り口にいる門番を示し、その場を離れることを提案する。さすがにイゼルナもその場で大声を出したことを反省し、その場から不自然でない程度の速度で歩き出す。

「それで、アリアだけなの？義父の反応は無かったということ？」

少し、トーンを落としイゼルナはギャバンに話しかける。

「そうとも言えませんが、バグズにはアマリア嬢の反応が一番大きく感じられたようです。魔力で追跡していますから、誘拐された者の中で一番強い魔力を持っているのが彼女で、それをほのかに感じ取ったということでしょう」

「そういうことである軍人さんに入れないか交渉してたんですが、さすがに夜間に基地への出入り手続きをお願いしたら無理だと

いわれまして……。理由も軽々しく言えませんが、しばらく粘ったら叩き出されましてね。融通が利かないと思ったらないですよ」

ギヤバンが説明し、それにククチが補足する。

「基地内にいるのは間違いないのね？」

念を押してイゼルナが確認する。

「さすがに全員がいるかはバグズがもう少し近づかないと解りません。しかし、少なくともアマリア嬢は生きた状態で基地内に入ったのは間違いないですな。時間とともに徐々に魔力残滓も減ってきますから、なるべく早急に調べたいのです。今の時点でも残りカスに近いです。多分朝になれば調べるようなものも残ってはいないでしょう」

イゼルナは口元に手をやり、少しの間考える。今自分の考えている案が今後実家や義父に与える影響や、自分の身の振り方についてその様子にさすがのカナエも軽々しい口調で話しかけることはできなかった。真剣な様子でブツブツと呟くようにして考えを纏め上げる。

「少なくとも、アリアは生きて基地に運び込まれたのよね？」

「はい。死んでいればもつと早くに拡散してしまって、感じられるほどの量は残りませんよ。ほぼ1日が経過して感じられるということは、運び込まれた時点では生存しているはずですよ」

「そう……」

ギヤバンと問答をして、また思考の迷宮にイゼルナは入り込む。

自分の置かれた立場、ポート・デイの治安状況、義父やアリアに対する親愛の情、おそらく問われるだろう罪と罰、巻き込むだろう仲間たち、それらを含むあれやこれや。

「……………イゼルナ様？」

「ふう……。仕方ありませんが、うじうじするのは性に合いません。それでは……覚悟はいい？」

イゼルナの声は低く、それでいて重みを感じられるだけの力強さを発していた。その場の皆を突き刺すような視線も、研ぎ澄まされ

た鋭さを纏う。

それは彼女の決意と覚悟の強さを表すかのようだった。

孝和たちの班が馬車に戻ったところ、すでにイゼルナの班が戻って来ていた。歩みの先の馬車の回りに人がいるのがうつすらとわかる。すでに月は夜空の頂点を過ぎ、徐々にゆっくりと沈み始めていた。街灯がない上に、少し雲が空を覆い始めているようだった。

「ああ、皆戻って来ていたみたいだな。何か収穫があればいいんだが……」

何気なく、そんな独り言がエーイの口から漏れる。それにキールが反応した。

『だいじょぶだよ！きつとイゼルナさんが、なにかみつ付けてくれるはずだよ！きつと、そうだ……よ？』

徐々に自信をなくしていったキールの声が妙に痛々しく孝和には聞こえた。

「まあ、向こうで何かは解ったみたいだぜ？ほら、見てみる。ちょっとだけ皆、いい顔してるように見えないか？な？それに、他の情報もありそうだしな」

軽く微笑んで、孝和はキールを慰める。キールのテンションが下がるのは好ましくない。襲撃を受けたアリアたちの怪我の具合も心配しなくてはいけないだろう。今は孝和のポケットにある杖の先は、血でぬれていた。

アリアも神官職のため、回復術ができるにはできるが、キールほどの技量は無い。アリア本人の重傷の可能性も考えると、キールのやる気は重要なファクターの一つと言えた。

孝和が指差した先のユノとカナエは、馬車の外で話しながら、その側にいるバグズを撫でていた。カナエはそこそこ大きな怪我をバグズのせいで負っていたのに、見た目は穏やかそのものだった。バ

グズも舌を出して、彼女たちにじゃれていた。

「バグズか……。ククチやギャバンはどうした？イゼルナ様と馬車の中なのか？」

遠目から、バグズ立ちの様子を見つけた孝和の指先を見つめ、エーイはその場にいるはずの残り3名を探す。確かに、3名がその場にはいない。と、いうことは残りは必然的に馬車の中であることは分かった。

「あ！ユノ！皆戻ってきたよ！」

歩いてくる孝和たちに気づき、カナエがそれを隣のユノに話す声が、離れた孝和たちに聞こえる。

手を振ってきた彼女たちにエーイが軽く手を上げ答える。それに倣い、孝和も手を振った。

相手が自分に気づいたことを確認すると、カナエは大声で孝和たちに呼びかける。

「早く！こつちに来て！話があるの！」

その声を聞き、何らかの進展があったのだろうとエーイと孝和は顔を見合わせ、エーイは駆け出した。孝和もキールを抱き上げ、その後を急いで追いかけたのだった。

「それ、マジなの？皆して度胸あるなあ……」

今後について感心した表情を浮かべながら、孝和は目の前の女性陣に確認する。というか、すでに孝和たちが知らない間に準備は始まっており、もう引き返せる状態ではなかったのであるが。

「イゼルナ様は、もう戻られたのだろうか？こちらも準備を進めざるをえん。先走りの感は否めないがね。正攻法が通用しないのだからな。仕方ないか……」

「私も止めはしたが、あの勢いに勝てなくてね。現状それ以外の選択肢がなかったのも事実では、ある。まあ、私やバグズを疑うならば、話は別だけれどね」

エーイはギャバンとすでにここにいたるまでの出来事を双方確認

し、作戦を練ることにしたようだった。

孝和が、ギャバンやユノ・カナエ班と合流したとき、すでに事態は引き返せないほど、大きく動き始めていたのである。

「何ていうか……。俺、順調に道を踏み外してる気がする……」

孝和は、目の前に垂らされた見た目にも頑丈そのものな真っ黒なロープを見つめ、誰とも無くそうつぶやいた。

ちよつとだけ目線を上にやると、真っ黒な塊がすいすいとロープを上って行くのが見えた。孝和がその場にいるのは、もしその塊が落下してきた場合に備えてであった。

コッソ

「つたあ……」

色々と考えて込んでいたこともあり、油断した孝和の頭に赤い石が直撃した。事前に合図として、壁の上に上がったらその場に落ちることす手はずになっていた。

油断した自分が悪いのだが、ちよつと痛かったこともあり壁の上に無言の抗議を送る。

「ビシッと「ごめんね！」と言わんばかりに相手側も無言で片手を挙げ、謝罪をしているようだ。ただ、それが誰なのかについては全く解らない。体格からして多分ユノかカナエのどちらかだろう。ポーズの茶目っ気からすると、カナエではないだろうか。」

なぜ、先ほどから仮定で話が進んでいるのかというと、その場の全員が黒一色の侵入者用ファッションなのである。

「はあ……。気持ちは強く！折れたら御終いだからな！俺……」
声を低めながらも、グツと右手を握り締め、その手を見ると黒の

布地で一部の隙間無く、キツチリと覆われていた。そんな孝和を含め壁の上にいる者たちの格好は、普段街中を出歩くには不適格極まりないものである。

頭から足元まで、光を反射しないように、わざわざくすませた黒の布地で作られた服に、数少ない金具にも加工が施してある。さらに持っていた剣もキツチリと布で縛られている。

はつきりいつて、昼に孝和を襲撃した2人よりもさらに上等な侵入着といえた。それがなぜ、傭兵団であるククチがすぐに孝和・エイ・ユノ・カナエと様々なサイズ違いの全員分の服を準備してこれたのか。いやな予感がしたが、不思議だったので、その点をエイとククチに尋ねたが、薄い笑顔を浮かべ「本当に知りたいか？」と言われ、それ以上首を突っ込むのを止めてしまった。

知らないほうがいいこともある。知るべきではないこともある。きつと、多分。

「よし、登ろう。時間も無いしな！」

気を取り直し、孝和は目の前のロープを掴むと、そのまま足を壁に付け不恰好に登って行く。お世辞にも優雅とは言えず、力技全開でぐいぐいと腕力を駆使して壁を登っていった。

孝和たちは、現在海軍基地内への不法侵入の真っ最中だった。バグズが基地周辺で感知した魔力残滓を嗅ぎ取り、その報告を受けたイゼルナが動き出した。これが原因となり、孝和に残された道はイゼルナの策に乗っかるしか無くなったのである。イゼルナは正規の方法で入門。孝和・エイ・キール・ユノ・カナエは壁伝いに進入ギヤバンとククチは連絡役として、周囲の高台で待機となった。

（イゼルナ様も少しくらい俺たちを待っていてくれるもいいのに……。相談とかして欲しかったぜ。猪突猛進ってこーいうのを言うんだろうな……）

腕に感じる自身の体重、そしてキールの入ったりユックの重量を十二分に感じながら、こっそりと音を立てないように必死に壁を昇

る。進入者を拒むその城壁は、造り自体は石を積み重ねた石垣だったこともあり、足を乗せるだけの窪みは十分あった。だが、孝和にはある問題があった。

（俺はっ！こんなことっ！！やったこと無いんだよっ、と！）

声を出すわけにはいかないのです、心の中で悪態を吐きながら足場を確保して上に向かい登り出す。経験上、こんなことは高校の武道場のロープ登りを何度かした位だった。さらにいえば、頼みの綱である身体強化の気功も試しに軽く右手に出すと、光を通さないとの黒い布地を通して煌々と光り輝くのである。隠密行動には使えないことこの上ない。

その状況で、今は10mを越す垂直の石垣を、不安定な足場と、ロープ1本で登ることになっている。人生には何が起こるか解らないのだと言う事の見本のようだった。

（ロッククライミングとかつ！やり方勉強しとけばっ！！よかつたかなっ！！）

正直あまりそういった方面には興味が無く、行きつけの書店ではそこから少し離れた場所に置いてあるハーブ栽培や家庭菜園のコーナー、マンガ新刊の平積みに行っていた。入り口からの移動ルート上には、アウトドア関連のコーナーが在ったのだが、こんなことなら少しでもページをめくるくらいはしておけば良かったと、後悔先に立たずを地で行くことになったのは皮肉である。

だが、それでも無理やりではあったが、大体7〜8mくらいの位置まで登りつくことが出来た。その時であった。

『いま、どーなってるのー？おしえて！おしえて！』

キールは、孝和の背中に背負われたリュックの中でユサユサと身じろぎしながら語りかける。

念話のため、外部には声が漏れることは無いのだが、このタイミングは非常に都合が悪い。

『ちょ、待て！キール！！今はマズイって！落ちるから！！って、え？』

ズルッ

孝和がキールに対応するのに少しだけ集中を切らしたため、見事に足を滑らせた。

「おおおおっ！！？」

咄嗟にロープを掴む両腕に全体重がかかる。大声を上げ、必死にそのロープにしがみつく。ミシミシと総重量100kgを越す重みにロープが悲鳴を上げる。

「セ、セーフ……」

ダッコチャンスタイルとでもいえる体勢で、必死にロープにしがみつくと孝和は後ろに背負われたキールに注意した。

「キール！あんまり動くなっついていったじゃないか！お前は真っ白で目立つから、外から見えないようにしないといけないんだよ。悪いけどもうちょっと我慢してくれ！」

「ご、ごめんなさい……。だいじょうぶだった？ますたー？」

「ちょっと声が出たけど……」

そつと上を見ると、両手を にしているカナエ（仮）が見えた。どうやら、周りの警備には気付かれていないようだ。それにホッとしてしっかりと足場を確保し、また上を目指してミシミシ音を立てながら登って行く。

きつちり真っ黒なりユツクに封入されているキールを思うと、さすがに不安になるのはわかるのであまりキツイ口調で注意できなかった。だが、自分のしたことに申し訳なさを感じたのか上に着くまでキールは黙ったままだった。

「なあ、キール？」

「……なあに？」

「俺は、決めた、ぞ」

「なにを？」

「これが片付いて、マドックに帰ったら、ギルドのつ、初心者用サバイバルこつ、講習を、受けに行く……」

「……そうだね。がんばって！ますたー！！」
息も絶え絶えに、孝和は壁の上で突っ伏していた。他のメンバーと比べても、その疲労は色濃く見えた。

「大丈夫か、タカカズ？ここだと見つかる可能性もある。少しでいいから歩けるか？」

エーイの言葉に何とか腹ばいになった状態から四つんばいになり、よろよろと立ち上がる。ゼエゼエと慣れない行為をしたこともあり、いまだに呼吸が整わない。

「まさか、あそこで、落ちるとは、思わなくて、ですね……」

キールのユサユサで落ちかけたところから先が地獄だった。何故か急激にそこから石の種類が変わったのだ。質感がツルツルのスベスベで、足をかけた途端、暗かったのと予期せぬ足元の感触の激変に慌てて、足を滑らせロープを手から放してしまった。

両手両足で壁面にへばりつき、そこからは命綱なしのロッククライマーなぞをする羽目になった。足場を確保できなくなって2度ほど勢いよく顔をぶつけ、すねもしたたかに打ちつけることになったが、何とか生きてたどり着くことが出来た。

「他のものはすでに移動した。急ぐぞ」

手を貸してもらい、体力よりは精神的にへろへろの状態ではあったが休む暇などない。

「は、はい……。行きましょう……」

それにしても、と孝和は思うのだ。

（エーイさん、バグズを背負って登ってたのに……。どうしてこんなに元気なの？）

城壁に繋がる回廊をこそこそ警戒しながら進んだ先に、その扉はあった。ただ、警備は全くそこまで見当たらず、イゼルナが「何かしておく」と言ったとおり、警備は完全に無力化されていた。ただし、

（この壁面の欠けた所……。多分ついさっきだよな、出来たの……）指先で軽く壁の穴をなぞる。細かな破片がパラパラと床に落ちる。床にはまだ新しい破片が見える。一体「何かしておく」というのはどのような方法だったのだろうか？

（えーと……警備の人って同僚じゃないのか？ちょっと可哀想過ぎない、それ？）

そんなことを考えていると、目の前の扉が開く。ゆっくりと開く扉からイゼルナが顔を出した。孝和とエーイを視線に捕らえると、声を出さずに顎で室内に入るように促す。それに2人が頷き返し、すばやく体を室内に滑り込ませる。

その部屋の扉のプレートは「保管倉庫」となっていた。

「じゃあ、これと、これ。後は……ああ、これね。時間も無いし、さっさと着替えてきなさい。急ぐのよ？」

そう言うイゼルナに手渡されたのは、エーイは士官の軍服、孝和は一般兵用の量産された鎧一式だった。

「いや、何で俺の分は軍服じゃないんです？動きにくいし、ガチャガチャうるさいから隠密行動なんて出来ないじゃないですか！？」

手渡された着替え一式はどう考えても、これから先の行動に制限が出るであろうことは間違いないものである。陣地の警備をメインとするのであればいいが、今回はそれが目的ではない。

「まあ、そうなんだけどね……。あなたのサイズの男性用装備が私の手元に無いのよ。私の服を着れるなら別だけど、さすがに身長は同じでも横は入らなさそうだし、女物は嫌でしょ？」

それを聞いて多少不本意ではあるが、彼女の言葉に従うことにし

た。確かにイゼルナの軍服は孝和と同じ身長の彼女を凜々しく包み込んでいるが、縦はともかく、横が見た感じ不可であった。無理に着込めば、一気に破れてしまうだろう。

「はあ……。それは解かりましたけど、何でカナエやユノの服はあるんです？イゼルナ様のサイズとは違うし、デザインからして別の部署の物じゃないんですか？」

ピツと指差した先のカナエ・ユノはイゼルナの着用している軍服・鎧と違い、同じパンツスタイルの様式ではあったが、素材から違うように見えた。

青をベースにして、細かな意匠は同じ様だが動きやすい軍服に比べ、ゆつたりとした上着は、決して荒事には向いているようには見えない。付属でシヨールのような布地まで付いている。

しかも下半身には柔らかかそうな素材のパンツスタイルの上に、パレオ状の布地が巻かれ、止め具にも洒落つ気のある赤色の石がはめ込まれたアクセサリーが眼に止まる。非常に見た目を重視した女性用の、いわゆる儀典用のものではないのかと思われた。

ちなみに、カナエは軽く姿見があったのでポーキングしており、ユノはその後ろで動きにくいのか、しきりに布地を引っ張り上げたり、どこかで一括りに纏めれないものかと、四苦八苦していた。バグズにいたっては床で丸くなっている。

「ああ、私個人のコレクションだから。男性物を集めてもね……」

「横領？」と孝和の脳裏にそんな言葉がよぎる。勝手にそんなものを集めるのはマズイだろう。軍の官給品を個人で所有するのは大丈夫なのだろうか？

「いっておくけど、納品の業者には割り増しで頼んであるからね。私のサイズは特注になるから手に入らなかつただけで、何かそれって悔しいじゃない？」

一瞬ではあるが、イゼルナは孝和が浮かべた表情から瞬時に自分への悪印象を感じ取り、釘を刺した。

一方の孝和は、表情を読み取られたのを感じ、乾いた笑みを浮か

べる。

やはり、自分はまだまだだな、と。

「すみません……。話は変わりますが、欲しかったんですか？あの服？」

「駄目かしら？結構あいつたデザインは好きなんだけど、似合わないかしら？」

くるりと首を回して、後ろで着心地を確かめる女性陣を見る。確かにユノやカナエには似合うだろう。しかし仕事着としての二者択一ならば、凛々しさが前面に押し出されるイゼルナには、むしろ今の軍服のほうがただの美しさだけでない輝きを感じることが出来る気がした。「魅せる」という点ではイゼルナの判断は間違っているかもしれない。ただし、孝和はそこまで女性物の洋服には詳しくない。ならば、違う観点からの意見をもらうべきだろう。

「うーん……。キールはどう思う？」

押し込められていた背負い袋から、次は編み上げのケースへと移動させられたキールに意見を求めた。ちなみにエーイは奥で着替え中である。

「んーと、ねえ……。イゼルナさんはそのかつここのほうが、かつこいいよ！あつちもふわふわしてるけど、なんかちがつかも！」

だ、そうである。

「ふーん、そうか……。こっこのほうが格好いい、ね。キールは格好いいのが好きなの？」

イゼルナはしゃがみこんで、ぺしぺしキールを撫で回すというより、弾力を確認して楽しむ。

『うん！せいぎのみかたは、かつこよくないとだめなんだよ！！』

そう断言したキールは、当然じゃないかといわんばかりの勢いでケース内でジャンプする。その言葉に反応したのは目の前のイゼルナではなく、そのやり取りを見ていた孝和でもなく、ユノとカナエの2人でもなかった。

「そうか。では、どうだ？キール、私はどう見える」

奥から襟元を正しながら、エーイが出てくる。先ほどまでの胡散臭さ全開の黒装束から、糊の利いた軍の士官服に着替え、コツコツと軍靴を響かせながら現れた。

『うわああ……。すごい！すごいよ！エーイさん、かつこいいい』

髪を油で撫でつけオールバックにしたため、今のエーイは、同性である孝和にとっても見惚れるほどの男っぷりであった。キールの声色もどこかうっとりとしていて、ヒーローショーにきた子供たちを孝和に思い出させた。

「ふむ……。おかしくは無いようだ……。しかし、孝和。君もいい加減に着替えなないか。時間も無いだろうに」

纏わり付くキールをあやししながら、そう話しかける。

「えーと……。これ、そこまで時間掛かりませんよ？多分」

そう言つて、ガシヤンと鎧を持ち上げる。まず、服はそのままに下に着る貫頭衣をスッポリとかぶる。それで足元までが、ほぼ覆い隠される。次に鎧を手を取った。指で強めに触ると、ペコンと音をさせて板が凹む。作りも大雑把な、まさに量産品である。これもさつきと同様、かぶるようになして着込む。肩の部分も無い品の為、これで本当に鎧として問題ないのか少し悩んだ。まあ、自分の考えるべき事柄ではないので無視することにする。籠手を嵌め、紐を締めて手を握って開いて感触を確認した。その後はフルフェイスの兜を被る。さすがにこちらは頑丈にできているので少しだけ安心した。そして、槍・大盾を持ち準備が終わる。これらの装備にかかったのは僅かに5分ほど。完璧に着込んだ姿はどこからどう見ても、衛兵であった。

「よし！ではいきましょうか！」

意気込みを出して、バグズの首元から伸びたリードを掴む。巡回の衛兵Aの出来上がりである。その場での違和感の無さは、言うまでも無い。

「似合いすぎてて、何もいえないわね……」

「そうね……。ぴったりだものね……」

「2人とも、タカカズさんに悪いわよ！声を落としてよ！」

順にカナエ・イゼルナ・ユノである。

これには彼女たち以外のメンバーどころか、孝和本人も姿見で確認して、その通りであるなあ、と言いつつ返す気が全くおきない程であった。

第27話 黒を纏いて、壁を這う（後書き）

約1ヶ月ぶりの投稿となりました。ここまでは書けるのですが、この先がどうも計画の通りにいかないもので、完璧にストップしてしまいました。

時間をかけたのと、冷却期間をおいたので少しだけ先が見えたのでゆっくりと書いていきたいと思えます。

年度末になり、部署異動がある様でどうも予想以上に時間が削れています。今以上に遅筆となりそうですが、楽しんでいただける方が居られれば幸いです。

第28話 夜の攻防（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第28話 夜の攻防

こつそりと、月明かりの当たらない影に孝和たちは身を潜めた。全員の視線の先には、軍施設の最も西に位置する古びた平屋の建造物がある。大きさはそれなりにあって過去に何らかの形で使用されていたのだろう。そして入り口の前には孝和と同じ装備の衛兵がしっかりと警備にしていた。

さらに言えば、地面の様子は今までとは変わったのが眼に見えてわかる。それまでは多少の違いがあるとはいえ、きちんと整地され物資・人の流れにより踏み固められた地面だった。そのせいか、雑草が生えるような場所はあまり見えなかった。

しかし、その建造物の周囲はいままでと違い、壁面にまで蔦が這い回り、入り口に向かうまでも背丈の高い雑草が生えていた。ただし若干の人の行き来はあるのか、雑草が周囲と比べ低く、馬車が通れるだけの道が僅かに見える。それ以外の範囲には、一面に雑草が生い茂ることから見ても、頻繁には出入りがされているように見えなかった。

これは軍の施設としては異様ではないかと孝和は考えた。

「この建物ってどんなものなんですか？まるで整備されてるようには見えませんか？」

隣で考え込んでいるイゼルナにそう尋ねる。顎に人差し指を当て両目を閉じ、瞑想しているようにも見える彼女は、孝和の質問に片目を開いて答えた。

「確か、放棄されたはずの戦時中の施設だと記憶しているけれど…。管理が、ね。放棄したはずなのに整備用の資金が出ていておかしいと、昨年の監査役の報告であったはずだわ。何故か報告が王都の上層部まで上がらなかったのよ。他にもいくつかそういった施設

があつたから、先にそちらの調査をするように命令が来ていたし……。そちらがカモフラージュだったのね」

唇を強く噛み締め、グツと手袋に包まれた両手を組み合わせる。「せいぜいひどくても横領の類と思っていたのが悪かったわ。念入りに調査すればわかったかも知れないのに……」

「仕方ありませんよ。あなたのせいではありませんし、傭兵団の調査でも盗賊ギルドの力がここまで根深く軍に食い込んでいるとまでは思いませんでした。不可抗力の域ですよ」

イゼルナの握られた両手を優しく解きながらエーイがフォローに走る。孝和はといえば、そのフォローに回リたかつたのだが、動くたびにカチカチと安物の鎧の止め具がこすれあい甲高い音を立てる。もどかしくとも隠密行動中である。ばれない様に待機しかできなかった。

「戦時中つて言うと、70年位前つてことですか？ 当時は何に使われていたんです？」

「確認できる書類は戦後の混乱時に焼失したそうではわからないのよ。当時管理していたのは領主一族で、今は……。確か、沿岸警備のストレイ殿でしょうね」

イゼルナの答えにエーイが反応した。

「例の都落ちの、ですか」

「ええ」

その短い会話で2人は全体像をどうやら理解したようだった。その理解を自分たちにも分けて欲しい孝和はリードで繋がれたバグズと一緒に目線で説明を求める。

「あの……」

「説明は、後だ。お嬢様達が動くぞ」

孝和の質問に鋭く切り返し、エーイが前方の建物の入り口に意識を集中する。それに、孝和も意識を前方に切り替える。

「ワウウ……」

「我慢だ、バグズ。ここから本番だしな」

軽くバグズの背を撫で、落ち着かせる。目の前でレディによる演舞会が始まるうとしていた。

カサツ……

ほんの小さな草がすれる音がした。衛兵の装備を着込んだ「彼」はその音に鋭く反応し、視線を向ける。槍先はすでにその方向に向けられている。

「……気のせいか」

スツと槍を手元に引き、また前方を見据える。彼の役割は只ひとつ。夜明けまでこの場に誰も近づけないこと。ここまでの注意を払うのは彼が衛兵だからではない。現に、入り口の検問所の衛兵は、昼だというのにあくびをかみ殺しているような平和ボケの連中だった。

軍に所属していながら衛兵の仕事の重要性がまるでわかっていない。このことに彼は強い蔑みの眼を見せないように顔を伏せながら入ってきたのだった。

そう「ここ」の連中は全く危機感が足りない。「俺たち」がどれほどの思いでこの場にいるのかも知らず、ただただ日々を無意味に過ごしている。きっと今回起こるこの件も多くの人間が知らないうちに、何らかの形で時間を掛けながらも決着をつけるのだろう。その予想ではなく事実が、さらに彼を暗く深い思いに包み込む。

「あと、2時間といったところか……。この腐った場所からようやく帰……」

ザツ！

ギーンツツ！！

言葉の途中で何の前触れも無く槍が真横になぎ払われた。空気が切り裂かれる音が周囲を剣呑な雰囲気につきずり込む。

その一振りは背丈のある草の上を通り過ぎていく。あまりの勢いに穂先以外でも、触れた草が触れ干切れ飛び、風に乗って飛んでいく。

その後の金属同士の衝突音は、その槍が剣により受け止められた音だった。受け止めたのは、儀典用の軍服姿のユノであった。愛用のショートソードがしっかりと槍の勢いを殺し、ギリギリと力比べが始まっている。

ただ、彼を驚愕させたのは、彼の一撃を支えきったのがショートソードを構えた右腕一本であったことだった。しかも見た目は女の細腕ではないのである。

「小娘、何者だ？このような時刻に一人歩きとは、無用心が過ぎるぞ？」

彼は静かに声を抑え、そう切り出す。大声を出せば他に誰かが気付く可能性もある。それだけは避けねばならない。

「あなたこそ、どなたです？衛兵がいきなりそんな小娘に放つ技ではないですし、そこまでの殺気を放つ必要はありませんでしょう？」
薄く笑いを浮かべユノは答える。その視線には値踏みするかのようなどこかさめた雰囲気漂う。さらには彼女の腕からほのかに紅色の燐光が漂う。

「気功術か！？ぬううんっ！！」

さらに高まった圧力により一層の力を込め、ユノを押し戻す。

ただ、その一方のユノの側にも何故か若干の動揺が見て取れる。しかしそんなことは関係なく、純粹に力は強い。

先ほどから周囲に助けや、そんな類の声を一切発していないことから、後ろめたいことがあるもの同士であることを双方が瞬時に理解した。

彼は勝負を急ぐため、槍を引く。目線はそのままユノに固定し、大盾を後方に投げ捨てる。盾を投げ捨てた左手で腰元の大振りofナイフを抜き放ち、ユノに肉薄する。

「残念！こつちよ！」

彼の全意識が前方のユノに向いた瞬間、後方で思いがけない声が掛かる。そして意識が2方向に分断される。

「な！？」

後方に視線が行くと、前方のユノと対角線上にカナエがいた。ただし彼女は黒のマントをスッポリとかぶり、彼に見えないように後方に回り込んだのである。声を掛け、注意が分散したのを十分確認してからカナエは彼の元に向かって直進する。

一方の彼は、気付いた瞬間にナイフをカナエの進行方向に振る。ただ、目線がユノに集中していたので正確な位置を確認しきれないままの上、前方のユノはさらに圧力をかけてきた。先ほどの燐光はすでに眩く輝くほどのルビー色となっていた。

唯一と言ってもいいが彼にとっては幸運なことにナイフの軌道はカナエの突進を食い止めることに成功した。そしてそれ以上に不運なことに、食い止めたナイフはガツチリとカナエのカタールと、絶妙な力加減で罅迫り合いを始める。

そこに空いていた右手側前方から、今度は両手で握り締めたユノのショートソードが勢い良く、彼に迫る。

前後両方向からの罅迫り合いが始まる。前方のユノは力でぐいと押し込むようにして、後方に位置したカナエは力加減を変化させて彼に瞬時の判断を迫る。

「く、そおっ！！」

跳ね除けようにも、現状打開策が無い。どちらかに集中しようにも、全くタイプが違い下手をすれば一瞬でやられてしまうのは目に見えていた。援護を呼びに行こうにも、それには後方のドアを開けなければならず、その前に陣取るカナエを一撃で仕留める手段を持ち得ない彼には不可能である。

「っそらっ！これでどうさ！？」

カナエが一気にカタールを押し込む。足元が前後に小刻みに重心を移動させざるを得ない為、捌くのではなく力で対応している彼にプレッシャーを掛けて行く。

「舐めるな！小娘ども！この程度でええええっ！！」

どっしりと両足を踏ん張り、ユノ・カナエを力任せで押さえ込むヘルメットでその表情の確認は出来はしないが、必死の形相になっているだろう。

「あかさ……。あんた、うるさいのよ。もうちょっと静かにしてよね。キール！」

目の前の敵にそう非難する。そして最後にカナエは奥の手を呼ぶ。比較的寂れているため、誰かが気付いても時間は掛かる。しかし、避けるべきであることは変わらない。

「何！？」

雑草に覆われた地面で何かが動く様子がわかる。しかし、人ではない。何か別の何かが動いている。それに対応できる余裕など彼にはすでに無い。

「やっちやえっ！キール！」

カナエの言葉に応えるように、目の前に白の球体が飛び出す。両手をふさがれ、足元もしっかりと固定された状況下では逃げることも、かわす事も出来ない。

完璧なタイミングで飛び出してきたキールは瞬時に術の詠唱に入る。いつも使う光輪ブレイズ・リングはまばゆく輝き、炸裂音がする。その為、音を極限まで押さえ込み、輝きを減らす。さらには威力を下げないように調整を行う。

「ええええいつー！！」

狙いはヘルメットで守られた頭部。キールの前から放たれる光輪ブレイズ・リングは、目標が静止しているため見事に命中する。極限まで光量と、炸裂音が減衰された光輪ブレイズ・リングはもはやオリジナルの術からはずれ、キールの編み出した新術といっても過言ではなかった。

ただ、威力はそのままに静粛性と隠密性に特化させた光輪であつ

フレイズ・リング

たが、初級術には変わりない。直撃といつても、単発の上に保護された頭部を狙つたものであり、せいぜいで軽い脳震盪を起こせるかどうかである。

だが、今はその程度で問題ない。

「それでは、お休みください。次はどなたが目の前に居られるのでしょうかね」

彼の耳にそのユノの言葉が聞こえたのかは解らない。ぐらついた彼の槍をユノが、剣をカナエが捌き、その距離がゼロとなる。耳元で囁きながらユノは右腕を取り、首を押さえる。逆サイドのカナエも左腕を取り、彼女の方は頭部を抱え込み、その勢いのままに地面に向かって倒れこむ。

ドンッ！

さすがに石畳ではなく、土であったため多少のダメージの軽減があった。しかし、限界値近くまで削り取られた意識下では、これ以上耐えれなかつたのだらう。彼は、そのままピクリとも動かず、失神したのだつた。

「あれは、痛いなあ……」

あまりに容赦がなかつたので、奇襲された相手におそらく敵なのは間違いないとは言え多少の哀れみを感じてしまった。

今、その衛兵は後ろ手に拘束され、猿轡を噛まされたうえにカナエの黒マントで覆い隠されて、見つからないように物陰に放置されている。一方最初の目的地である目の前の建物には鍵が掛けられて

いる。腐っても軍施設、強行突破でぶち破るには扉の重厚さは目を見張るものがある。

「ふむ……。やはり見覚えは無いか。どうやら、軍属では無さそうだし。後で確認する事としましょう」

「了解しました。こちらで引き取る形でいきたいのですが……?」

「まあ、軍内部の内通者の可能性も否定できないでしょうね。その方が良いかもしれません」

後方では、衛兵の懐を探りながら彼のこの後の確保先をエーイとイゼルナが確認しあっていた。

しばらく身体検査を行ったところ、ようやく目的のものを見つけることが出来た。

「ああ、有りました、有りました。このどれかで開くでしょう。この鍵束、軍の印章入りですよ。管理している人物が関係者なのは確定ですね」

「関係者でないとしても、今回の件の責任はキッチリ追及させてもらいましょう。膿は出せるときに出しておかないとね」

エーイがジャラジャラと鍵束の鍵を扉の鍵穴に挿し込み、回していく。他のものは、各自の武器を手に取り、屋内からの襲撃に備える。ただ、孝和やキール、バグズは内部に気配を感じなかったため、おそらくは誰もいないだろうとは他のものに伝えてあった。まあ、あくまで念のためである。

結果、鍵を回すこと3回目で鍵を開けることが出来た。カチンと音を立て扉を開くと同時に一斉に屋内に侵入する。

ダンッ！！

扉を蹴破る勢いで入室し、周囲に警戒を走らせる。よく映画とか

で、「エントリーは入り口を避けて別の侵入路を」というセオリーが脳裏によぎったが、そんな装備も技術も無いのだ。音が響き渡る可能性もあるが、それを気にしていても仕方ない。

「では、手はずどおり。この場の警備は任せます。バグズ、行きましよう」

イゼルナがバグズの案内の元、奥に向かい進む。キールとカナエはそれにつき従う。一方、その場に残されたエーイとユノは1階の入り口から近い部屋を搜索後にこの場を警備、孝和は先ほどの衛兵の代理として、呼ばれるまでの間入り口に立つことになった。まあ、前提としてアリア以外の顔を知らないため、もし誰かを発見しても孝和では誰なのか解からない。

至極、妥当な判断ではある。

「この大きさだと、そんなに攫ってきた人は集められなさそうですけど……」

「いや、戦時中の施設ということは、管理していた者しか知らないような抜け道を用意している可能性もあるだろうな」

扉を開け放った状態で、視線は外の様子を見つめた孝和と、内部を警戒するエーイが話し合う。

「それに、この場から逃げるのに屋内に逃げ込むことがそもそもおかしい。大型馬車で入ってきて、その荷物も何処に行った？入門時の記載簿を確認したが、ハキムが中に入っているのは間違いないだろう。と、なるとどこかに用意されていないとな。隠し通路か転送用の方陣が、な」

「そうですね……。やっぱり逃げるのは船とかですかね？」

「いや、陸路の可能性も有るかもしれないな。転送方陣なら行き先次第でどうにでもなる。まあ、海軍の関係者がいるんだ。その可能性は低いかもしれないがな」

「考えたところでどうにも出来ないですね……。ん？」

視線を屋外の遠い位置に向ける。その先には壁があり、特段変な様子は無い。

「どうかしたか？」

「いえ……」

(消えたな……。気のせいかな?)

一瞬こちらの方に意識を向けられた気がした。ただ、今はその感覚も消えているし、悪意は感じなかった。

「ああ、まあ気にしないでください」

「そうか……。ならいいんだ」

そんな感じでエーイと孝和の会話が一段落したところで、横からどこかおずおずと声が掛かる。

「あの……？よろしいですか、タカカズさん？」

「んん？別にいいけど？」

孝和の横にユノが並ぶ。それを見てエーイが少し2人から離れる。

「あの、ですね……。さっきなんですけど……」

「ああ。さっきってというと、あの衛兵モドキの奇襲の事？」

コクリとユノが頷く。

「私、これ、できたこと無かったんです……。使い方とか、簡単でいいから教えて欲しいんです」

そういうとスツと右腕を上げ、紅色の燐光がボワツと包み込む。気功術であろうことは間違いない。個人の資質によりその色は変わる。アリアは金、孝和は白銀、ユノは紅であったのである。

「気功術のことか……。ユノは今まで使ったことなかったんだ。実は、俺あんまり詳しくないんだよね。本とかで調べてはみたんだけど、使うときの個人の感覚的な部分が大きいらしくって、俺の感覚がユノと同じとは限らないし。俺も使えるようになって1ヶ月たっ

てないから、さ」

何気ない口調でそう話すと申し訳無い、と頭を下げる。顔を上げると唾然とした表情のユノと、少し離れた位置のエイがいた。

「な……！本気で言っているのか？」「嘘……」

言葉にならない程の驚きが彼女たちを包む。

（え、と……。もしかしくなくても、この反応はまずい事言ったな、俺）

背中に冷や汗が走る。ヘルメットの中からダラダラ汗が噴き出し、ているのを感じる。

「あれだけ使いこなせているのに、まだ使い始めて1ヶ月だと……」

エイとしてみれば、直に見た蘇生中の光景から孝和を熟練者と判断するのは当然であり、ユノは自身の体の変調が伝え聞いた孝和の気功術が原因の一因と考えていた。

熟練の気功術師は武術の達人であることが多い。自身を追い込み、その極限を垣間見ることにより純粋な気を練ることが出来る力を得るのだ。

その過程として、肉体の鍛錬や精神の修養が欠かせないのである。しかも、条件としてかなりの才能が必要となる。

多くの戦士が気功術の会得に挑戦するも、その自らを追い込む修練に耐えられず、あきらめるのである。ごく僅かな一部の才有者のみが使いこなすのが気功術といえた。

その意味では、孝和に劣るとはいえ、アリアもその難関を突破した選ばれた者と言える。

しかし一方で使用者が少ないのにもかかわらず、多くのものがその力に焦がれる為、その存在は広く知られていた。

若年の孝和ではあるが、傍目から見れば、ある程度の年月、その技を磨いてきたであろうという、エイとユノの予想は見事に打ち破られたのである。

「いや、でも、ほら、ね？」

自分でも何を言っているのかは分からないが、何とかこの場をしのがなくてはならない。上手く言葉が出てこない自分に湯を入れ、さらに回らない口を回す。

「子供のころから色々武術もしてたし、こう、力を“通す”とか“流す”のは昔から得意だったし」

必死に先ほどの言葉を覆い隠すように言葉を並べる。

「“通す”……“流す”……。それが極意なんですか？　どういう修煉が必要なんです！？」

……見事に墓穴の中で墓穴を掘った。

この世界、というよりはこの地域周辺なのかもしれないが、力の概念としてそのような東洋的な武術思想自体が存在しなかったようである。せいぜい“入れる”と“抜く”程度であり、流体を意識するタイプの武術を伝承するものも過去そんなに存在しなかったのだろう。

「いや、でもね……？」

確かに修煉という意味ではかなり濃密なものを課せられたと孝和は思う。

孝和のほかには若い門下生がいなかったので、道場内ではかなり絞られた。新しく入門するものも確かにいたのだが、あまりの厳しさに逃げ出すか、まれに来る他流派の実力者で更なる高みを目指す求道者のみ。

逃げ場のない被扶養者の弱みを持つ孝和しか残らないという事情の元、必然的に法寿や高弟たち、他流派の求道者の「おもちゃ」、もとい「素材」、もとい「次代継承者」は孝和1人に集中した。

さすがに学生であるため、放課後くらいしか修煉は出来なかったのだが、夏と冬が近づくと彼らが上機嫌になってくるのが分かる。

正直、門弟全員で孝和に極秘の訓練メニューを組んでいたのを知った時には、「逃げないと壊される」と恐怖を覚えた。

いつの間にか、長期休暇の初日に玄関に炊き出しの食材が運び込まれ、各々のコーチの隙間ない予定が決定され組み込まれ、夕方に

は床のひんやりした感覚を味わう状況が毎年の恒例となると、さすがにあきらめの境地に入る。

それを修練と呼んでもいいものだろうか。身に付いたものは多いが、下手を打てば心を病む。多分、いや、間違いなく。

「はい。なんですか？」

キラキラした目線でこちらを見ているユノ。彼女のことを考えれば、やはりこう言うしかないだろう。

「あんまり、お勧めできない方法だから……。止めといた方が……」「何ですか？」

「ああ」

ずいっと孝和に詰め寄る。視線を合わせまいと孝和は顔を背ける。

「まあ、詳しくは後にしますけれど。あの？後ですね？」

「えーと、まだあるの？」

「私と話すとき視線いつも外してますよね」

「いや、そんなことは……」

「いいえ。私の目じゃなくて、鼻の辺りを見てますよね？」

「あ、おおおう……」

（バレた？人見知り用の就活術だったんだけどな）

大学時代の恩師から教わった「なんとなく視線が合ってる感じになる」対応法であった。

「タカカズさん？」

「あははは……。はあ、ごめんなさい」

こうなると謝るくらいしか出来ない自分の押しの弱さが嫌になる。

ニヤニヤとエーイがこちらを見ている。周囲の警戒は彼が完璧に行っている。それに孝和自身も今のところ新しい気配を認識していない。それであるからこの馬鹿騒ぎもできるのであるが。

カ、タン……

コンッ……

「……ッ！……ヤー！……」

そんな中、「それ」に真っ先に気付いたのは孝和だった。詰め寄ってきたユノに慌てていたとき、耳にほんのかすかに音を捉えた。

「……！？」

急に慌てていた孝和が真剣な表情となり、顔を中空に向ける。それに正対していたユノも追及をとめる。

「あの？」

ユノの疑問を手で押さえ、さらに聴覚を研ぎ澄ます。

カンッ……

「ッッ！！」

身を翻し、屋内、先ほどイゼルナ達が進んでいったほうに向かい全力で駆け出す。その様子に啞然としたユノが一瞬取り残される。エーイは孝和が駆け出すと同時に自身もその後を追いかけている。

「ええ！？ちよ……！！」

言葉に詰まりながらも、ユノもその後を追いかける。全員が奥の異変に向かいその場を後にした。

少しだけ場所は移り変わる。

孝和たちの潜入地よりも離れた路地に彼らはいた。

「……たいちよー。アレ、なんスか？俺たち、聞いてないんスけど？」

「……同意します。事前にそういった情報は開示していただきたい……」

黒ずくめの2人組が、その隣に立つ男に不機嫌極まりない口調で詰め寄る。

「いやア……。予想以上だったわ。これくらいの距離ならまア、大丈夫だと思ってたんだがなア。あの距離で気付くかよ、兄ちゃん」
「そういうと顎に手をやり、薄く生えた無精ひげをなぞる。

「頼んますよ、マジで……。隊長の思いつきにつき合わせられるこつちも大変なんスよ？突破口に、軍施設の潜入工作つてもともと無かったプランじゃないですか!？」

「それにも同意します。逃げられたのにわざわざ捕まるなんて、どういうつもりだったんです？」

ジロリと睨まれて、それに耐えられなくなったのかそっぽを向く。
「いや、でもよ？結果的には、なーんか面白いネタは手に入りそうだしよ。もうちょっと突っ込んでみても、なア？」

「却下です!!」

「おいおい、決定権があるのは俺だぜ？」

「あの連中と出くわしてケンカになったら間違いなくマズイッス。とにかくあのやられたのを回収して帰りましょう。そいつからの情報だけにしときましよう、ね、ね」

黒ずくめのうち、地面に座り込んだ男がそう言い返す。同意するように横のおそらく女性であるうシルエットの人物も頭を垂れる。

「そんなに嫌かア？」

「当ったり前っス！遠目で見てても、戦ってた奴等と俺らじゃせいぜい五分。あの視線よこした衛兵もそれ以上のクラスでしょうが……。負ける方に張るほどバカな命の掛け方したくねえっス」

「完全に同意です。隊長ならどうにでも出来るかもしれませんが……」

バリバリ頭を掻き篦り、隊長と呼ばれた人物はため息をつく。

「まあ、しゃあねエか……。本来の任務は終了してるし。じゃあ撤収は終わってるな？」

「はい……。人員は撤収済みです。一部の資料は残りますが、問題は無いでしょう」

「よし、そうしたら、タナー。お前、あのやられたの回収して来い。俺は先に帰る」

「ちょ……。えええ！？」

ひらひら手を振りながら、その場を「隊長」は後にする。

「俺、眠みイんだ……。先に馬車に戻ってる」

「お供します……」

「隊長」と黒装束の女性はタナーと呼ばれた男を残し、闇に消えていった。

「俺ばっかり、貧乏くじっスか……」

タナーの哀れなつぶやきもその闇の中に消えていった……

「さて……。どうなるかねエ？頑張んな、お嬢様方……」

「隊長」と呼ばれた男、トリアはその言葉を最後にポート・デイから消え去った。

第28話 夜の攻防（後書き）

脱線気味ですが、こんな感じの1話もいいかな？
と、思ってる製作者です。

次回まで少し間が空くかもしれません。そこところはすみませ
ん。

第29話 扉に手をかけて（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第29話 扉に手をかけて

ガチャガチャ！ダダダツ！！

大きな音と共に室内に駆け込んできた人影に向かい、イゼルナは咄嗟に、腰にとめていた剣を鞘ごと振り抜く。

「って！？うおおっ！！？」

グワアアーアアンツツ！！

銅鑼を叩いたような甲高い音が、驚きを含んだ叫び声と共に聞こえる。

「あ、やっぱりタカカズね。大丈夫……みたいね？よかったわ」

鞘の補強用の金属部と、強襲に驚いた孝和の構えた盾がぶつかり合った為、かなりの音が響き渡った。

イゼルナの一撃は全く容赦の無いもので、それはちょうど孝和の喉の辺りに放たれていた。比較的長身な孝和の喉元ということは、170センチ程度の場合にはちょうど顔面である。しかも防がれたことが分かった瞬間に鞘を左手で支え、右手で2撃目のためにすでに剣が鞘から抜き放たれ、さらには勢いをつけるために少し若干捻りを加えながら引かれていた。

「や、やっぱりって、なんですか！下手に受ければ死にますよ？俺が入ってくるかもって分かってやりませんでした！？それにこの音はマズくないですか？」

周りのことも一瞬忘れて孝和はイゼルナに詰め寄る。

「一応確認はしたものだ。けたたましい音の種類からして私側ならタカカズ、それ以外なら敵だろうし、思い切りやったのだけねど……。あの程度なら十分対応できるでしょう？あと、一通り見たけど誰も

いないみたいよ、ここ」

「全部織り込み済みでやったんですね……。ありがとうございます。なんか違う気もしますけど……」

そう言っただけで構えた盾を降ろす。恐る恐る前面部を見ると、けつこ
う見事に凹んでいる。

冷たい汗が背中を流れるのを無視して、盾の表面を軽く撫ぜてい
ると、部屋の中に見知らぬ人物がいるのに気付いた。

「誰ですか？その人」

部屋の真ん中に寝ているのはいわゆる「人間種」とは違って見え
た。今はその後頭部にカナエの着ていた上着を畳み、簡易的な枕に
したものが敷かれている。

「ぱつと見はリザード系の亜人、みたいよ。あと、女性のようなか
らそのつもりで、よろしくねー？」

『よろしくなんだってー』

その女性の介抱を担当していたカナエとキールは、先ほどのイゼ
ルナの孝和に対する行いに一切触れず、そう説明した。バグズにい
たってはちよこんと座っているのがどことなく小憎たらしい。

そんなことを話しながら考えていると、後ろからエーイ、ユノが
追いついてきた。

「タカカズさん、ここにいたんですか。何かあったんですか？……」

「へ？リザードお？」

「……ほお、こちらでは珍しい」

「いや、確かにあんまり見たことは無いし、珍しいのかもしれない
ですけど、そこじゃないでしょうに……」

顔を覆うようにしてそう孝和はため息を付く。

確かにその見た目は赤い鱗に覆われたトカゲ頭の亜人間違いは
無い。

しかし、それ以上に気になるのは、彼女が横になっているのは間
違いないのだが、完璧に簀巻きにされているという状況だった。そ
して彼女を縛っているロープは壁を昇るときあの黒染めのもので

あつた。

つまり介抱をしている一方で、簀巻きにしたのもイゼルナ達であることが間違いないという、この現状。はっきりいうと訳が分からない。

各自に疑問点があるのをイゼルナも感じていたのだろう。全員が一箇所に集まったのを確認し、先ほど起こったことの説明を始めたのだった。

「えーと、この辺りが怪しいとバグズに案内されてきたけれど、何も無くて合流しに来ようとしたところをいきなり襲われた、と？」

長々とした説明を要約すると、そういうことだった。

バグズの追跡調査で最も怪しい区画がここなのだが、正確に言うと特に何も見つからなかったわけではない。地面のそこかしこに泥があつたり、何かを引きずった跡があつた。ただ、それ以上はわからない。なにぶん部屋はかなり広く造られていて、全部を調べきるには時間が足りない。それもあつて周囲の部屋に移動して何らかの痕跡の捜索に当たろうか、と考えて隣室に移動した。そこに今さっきまで調べていた無人のはずの部屋から奇襲を受けた。

咄嗟に殴りかかってきた腕を取り、地面に向かい受身を取れないように、ガツチリとホールドしてカナエが投げ飛ばし、昏倒させた。昏倒した相手を見ると、服装がどう見てもゆつたりした普段着の上昏倒させる前からひどく傷ついているようで、どうも今回の件の犯人側では無さそうな感じである。その為、治療することにした。ただし気が付いてから襲われない様に縛り上げること忘れずに。

「そういうこと」。キールも頑張ってくれてこの人の傷もきれいにすっきり元通りだし。ねー」

『えへへへー。もうおこしてあげてもだいじょうぶ。ばつちりだもん!』

誇らしげにカナエと戯れるキールの言葉に苦笑いしたのだが、それと同時にカナエがキールを抱き上げ徐々に後ろに下がりはじめた。

「え?あのー?」

嫌な予感がして周りを見ると、エーイヤイゼルナ、ユノだけでなく先ほどまで寝ていたはずのバグズまでがそろそろと後ろに下がっていた。

つまりは、そういうことなのか……。

「……俺が、起こすんですね……」

全員が一糸乱れずに頷く。キールはそれに合わせてカナエの腕の中でふにょんと震えたようだ。この時点で多数決という数の暴力により、孝和の拒否権は完全に失われたのだった。

「う……う……ッ!」

肩口を揺り動かしリザード種と見られる彼女を起こす。呻き声が聞こえたことで周囲にいる皆が腰元の刃物とか、そんなものをすぐに抜けるようにと反応した。

正直に言うが、そういう反応をされると、いざというときのこちらの集中が乱れるので、もっとどっしりと構えて欲しい。

「大丈夫ですかー。聞こえてますかー」

視界からそんな様子の皆を無理に外すことで、何とか平静を取り戻すことにする。とりあえずは集中である。

耳元で声掛けしようとしたが、いかんせんリザード系の亜人の耳は何処にあるのかわからなかった。多分、頭部のどこかにあるのだろうが、なんとなく側頭部付近に向かって呼びかけた。多分少しく

ぼんたく辺りがそうだろうと思い、再び呼びかける。肩を揺らし、呼びかけること数回。ようやく彼女が目覚ました。

「……貴様等ッ……！」

目覚めると同時に彼女が勢いよく飛び上がるうとした。その瞬間、ミシツとロープが軋む音がした。だが、登坂用の頑丈な仕様の黒染めロープはまったく緩む気配すら見せず、彼女は起き上がることはできないまま、床に体を強く打ちつけるに留まった。

「クッ！ここまで来ておきながら……！離せ！はな……せ？」

最初は忌々しげにこちらを鋭い視線で睨んできた。その勢いのまま怒鳴り散らし始めたのだが、急にテンションが落ち呆然とした目でこちらを見てきた。

正確には、「こちら」ではなく、「孝和」をである。

その反応に何かおかしなものを感じたのではあるが、不幸な行き違いをしているのは間違いないと思うので、状況説明を頼むことにした。どう見ても衛兵にしか見えない自分よりは、見た目は仕官のイゼルナやエーイの方が適任であろうと思い、アイコンタクトして孝和は場所を変える。

「では、よろしいですか？まず我々はあなたに危害を加える気はありません。先ほどは咄嗟に襲われたため、危険と判断した自衛行為と考えていただきたい。

おそらくそちらとしても初対面の我々を信じることはできないだろうが、こればかりはあなたに判断していただくしかないので。はっきり言うと我々は現在ある誘拐事件の調査を行っております。この場に居られたということは、あなたもその事件に関係している可能性があります、と、こちらは判断いたしました。ひどく疲労しております様子でしたので、勝手ではありますが治療させていただきました。その一因に関してはこちら側の不手際もありますのでどこか調子がおかしければ、後で仰って下さい。

とりあえず、ロープを解きます。その上でご協力をお願いしたいと思います。

……では、ロープを切ります。よろしいですね？」

エーイは一気にこちらの言いたいことを言い切る。その上で友好的に且つ紳士的に対応することに徹する。

エーイはナイフを抜いて彼女に同意を求め、それに対し了承の頷きが返ってくる。

致し方ない状況だったとはいえ、こちらが彼女に痛撃を加えたのは間違いがない。現在コーン氏やアリアに繋がる情報を持っている可能性があるのは彼女だけ。玄関先で伸びている衛兵モドキの間には決して友好的な関係は築けないだろうし、この糸は大事にしたい。

カキン

ブチッ

ロープを切る。孝和はそれにもつたいないな、と感じたがエーイとしては彼女の不信感を払拭するためにも一刻も早い解放のため、仕方ないと必要性を感じていた。

「では、まずお名前を伺いたい。私はエーイ。こちらはイゼルナ・クラーディカ様。現領主エリスティア・クラーディカ様のご息女であられる。後ろのものは今回の調査の協力者になります。まあ、身分証は今はありませんが……」
膝を立て、視線を彼女に合わせながら簡単に説明する。

「……私はレッドリザード族の冒険者でマオという。1週間前に南部でここへ向かう商隊の護衛中に襲撃を受けた。商隊は小規模のため抵抗もさほど出来ず、投降したが私のほかの護衛はそれまでに殲滅されたんでな。女性以外は切り捨てられ、私を含め3名が洞窟内で、監禁された。

私以外は人間種だったから、下衆な男どものそういつた目的のためかとも思ったが、そうではなかったようで食事も出たし、反抗しなければ特に問題はなかった。

私は隙を見て逃げ出し、転送用の魔方陣を見つけ、飛び込んだころであなたたちを見つけたわけだ」

「誘拐事件は昨日なのですが、監禁場所にそんな様子は？」

マオの話に割り込む形でイゼルナが聞く。その一方、話を聞いていたユノとカナエはバグズとキールを連れて隣のマオが指差した先に移動する。

「そういえば昨日誰かが運ばれてきたようだな。……もしかして女か？」

マオが返してきた答えにエーイが頷く。

「1名は女性です。ただ、男が最大で4名いるはずなんですけど……」
「私たちの監禁場所は1階で1名ずつ部屋で区切られたから、詳しくは判らん。かすかに聞こえた声で女性のものがあった気がする、といった程度で、もしかしたらそうなのではないかと……。」

私以外の生き残った者は戦ったことが無いようであったから、そのまま救援を求めに私がここに逃げてきたんだ。

建物は外から見ると3階建てだから、もしかすると2階より上に連れて行かれたかもしれないな」

「そうすると、その建物内には他にも捕まったものがいる、ということか……」

エーイは天井を仰ぐ。どうやらこれだけの戦力で対応できる以上の事態に発展してきている気がする。

「エーイ？」

「……単純に考えると非合法的な奴隷売買でしょうね。野盗を使い、商品や金品のほかに女性を攫う。捕まえた女性を監禁。軍の関係者が目こぼしして売り買いを行う。そんなところでしょうが、もしかすると軍の一部が主体となって行った可能性も有ります。」

というよりは、そちらが正解でしょう。どこまでかは判りませんが上層部の黙認が無ければ不可能でしょうし、ここ数年の禁制品の密輸や奴隷売買の摘発に軍がいまいち消極的な姿勢を見せたのもそのせいかもしれません。あとは……例の都落ち殿、ですか……」

「あの男……。そういえば難癖をつけて港湾査察の周辺調査を渋っていたわね。これが理由か……」

「……………」
無言になった2人に孝和は尋ねる。いい加減に教えて欲しいこともあるのだ。

「あの、さつきから話に出ている都落ちってなんですか？ 今回の関係者みたいですけど？」

「……………ハキムの家の子飼いかしら？ 10年前までは、と付くけどね」「没落後は家名を名乗れなくなった主家を見限って、距離をとっていたはずなんだが……。自分が落ちぶれる羽目になると藁にも縋るんだらうな。安いプライドよりは明日の飯ということなんだらう。話はずれたな……。まあ、件の人物だがストレイという沿岸警備の総責任者でね、王都で軍のエリート街道にのっていた男だ。そこそこの実力はあるんだが、いかんせん強すぎる野心にはつりあわない程度でしかなくて、それなのに口を出すから上に嫌われてしまったね。見事に王位継承権発の政争のゴタゴタにかこつけて左遷になったんだ。」

そこでこの以前の主家筋に助けを求めたんだらう。何故かハキムもそれを受け入れたんだが、この軍内部では評判は悪い。へんなプライドはあるし、左遷とはいえ役職は持っているから、取り巻き連中もくっついてきてな。そいつらを重用できるだけの力はあるからね。下手に扱うわけにもいかない、ときたまんだ」

腕組みをして解説を始めたエイを横目に、その向こうでマオが立ち上がり、壁に立てかけておいた孝和の槍を手に取っている。さらには足元でひらひらしていたズボンのすそ部分を勢いよく引きちぎる。上半身は腕を捲り上げ、適当なところで先ほど断ち切った口で固定している。

その様子を見て軽くエーイに手を上げ話を打ち切りマオの元に向かう。

「あの……。マオさん、でしたっけ？何してるんです？」

「これでもレッドリザードの戦士の端くれですのでやはりこのまま逃げの一手というわけにはいきません。ご協力させていただきたいと思うのですがよろしいでしょうか？ご迷惑はおかけいたしませんので」

マオは片手でブンブンと槍に唸りを上げさせながらその重心を確認していく。徐々にその感覚を掴んだのか、突然壁に向かいその鈍い穂先を煌かせる。

キンツ

石と金属が触れ合ったと思えないような、乾いた音がした。

（あ、スゴいわ。この人）

孝和の視線の先には、綺麗に槍を振りぬいた跡が見事にくっきり残っていた。さらに穂先は一切欠けることなく、安物であるが綺麗に砥がれた刃物独特の鋭さは健在をアピールする。

得物の質自体は安物であるのは孝和自身が、先ほど確認済みである。西洋槍ではあっても多少の良し悪し自体は分かる。つまり壁の跡はマオ自身の技量によるものと断言できる。

「いや、協力してもらえるのはありがたいですけど、なんで俺に敬語ですか？」

協力的なのは大変ありがたい。武に精通しているのも心強い。直情傾向で裏表無さそうな感じだから敵側からの間諜というわけでも無さそうだ。

ただ、先ほどまで話していたエーイと違い、口調に何故か敬意が感じられる。

孝和の前に歩み寄ると深々と頭を下げる。

「いいえ、私も上位龍族の方と直に対面するのは初めてですの…

…。こういつたのはお嫌いでしょうか？我らが一族を守護いただいております焔龍様も一族全員で出迎えました際に遠目より拝謁させていただいたことがあります。堅苦しいのを嫌われまして宴の途中で帰られました……。お嫌でなければ、普段どおりで話させていただきますが？」

「…………え？おおおうお！？」

ズザッと瞬時にマオに接近しその口を塞ぐ。ただ、リザードの裂けた口元を塞ぎきるには手の大きさは足りなかったが。

「な、何で判ったんですか？小声で！小声でね！」

マオに向けて小声ではあるが鋭く注意をする。

周囲にはギリギリ聞こえなかったのだろう。孝和がマオと話をしようとしている間に、エーイを除き、隣のマオの出てきたという部屋に移動していたためである。

急に大声を出した孝和に何が起こったのかと不思議そうに顔をのぞかせたエーイの視線が痛い。それに愛想笑いしながらマオを部屋の端に連れ出す。

「…………もしかして龍族というのは内密にしておられましたか？」

言われたとおりマオは小声で話す。その内容に対し、孝和はヘルメットが外れる勢いで頷く。

「なんとか皆は聞いてなかったみたいですからいいですけど……。一応俺は人間だと思っんですが、龍族つても完全に否定できないような複雑で色々面倒な事情があるんです。出来れば心の中に留めといてください。後……、リザード族の人つてももしかして判るんですか？俺みたいなのって」

隅っこでこそ話している2人は一種独特の雰囲気近づきがたいものがあるのか遠巻きに眺めるだけでエーイは近づいてこない。

「近くであれば判ります。一度でも上位龍族の方と会う機会があれば、そのオーラは従僕たるリザードの我らには非常に心地よく感じられるので……。あなた様はそれを薄くではありますが周囲に放た

れておられますから……。上位龍族で人型を取れる方が居られるとは存知ませんでした。それでも近くであれば十分判断することができます。」「

「マジか……。どう制御しろってんだ……。無意識ってんじゃないぞにも出来ないんじゃないか？冗談じゃないぞ……」

ガツクリと首を落とす。これは何とかしないと、非常にマズイ。この国でリザード種族に出会う確率は確かに高くないかも知れないが、低くも無い。実際こうして見事に出くわしている。人の目があるところでバレて大騒ぎなんて洒落にならない。

「……とりあえず、後回しだ。うん、明日、明日考えよう。……大丈夫、大丈夫。……多分」

何とか気持ちを切り替える。余計なことは考えない。考えない、考えない……。

（とにかく今日を乗り切って明日！うん、明日！！知るか！もうとりあえずこれにケリつける。だから明日考える！！）

非常に強烈な現実逃避。目の前のこれを何とかする。まずはそれからだ。

「うし！行こう！うん！」

気合を入れなおし、目線を握った拳に集中する孝和を見て悪いことをしたと思ったのかマオが苦々しく笑う。それを見て孝和も少し気恥ずかしくなった。

「……まあ、いいや。隣の部屋なんでしょう？マオさん」

「はい。しかし出てきただけで入り口もそこかはわかりませんが？」

「一般的に転送方陣は出入口は同一なものですからね……。もう一度念入りに調べてみましょうか。皆も先に行ってますし」

転送関係の術式はシグラスの使った転送陣を見たこともあって、時間のあるときに勉強やら、真龍の知識を探ってみたりもした。元の世界との扉をどうやってシグラスが開けたのか興味があったからである。

ただ、それ以前に魔力に関して能無しも甚だしい事もあり、あく

まで知識でしかない。そこが非常に悲しいが、基本的には双方向になっっていることが基本らしい。

だから、さつきイゼルナたちが探した以上に注意すれば何か見つかるだろう。今回はさつきよりも搜索者は増えているのだから。

「これ……もしかして鍵穴じゃないかな？ねえ、そうでしょ！キール」

「そうだね……。おくのほうのあなぼこが、そうみたいだね！やったね、カナちゃん！」

カナエがちょうど自分の顔の位置までキールを持ち上げ、亀裂の奥を見えるように押し付ける。

そんな声を聞きつけ皆がその壁面に集まる。バタバタとやってきた者たちでその穴を覗き込もうと団子状態になった。

孝和はそれには参加せず先ほどから唯一の出入り口を几帳面にも警備中であつた。エーイは団子状態の皆を掻き分けながら腰元に手を伸ばす。

ジャラジャラと音をさせながら鍵束を掴み、みんなの前に翳す。それを見て全員が道を空けた。

「すみませんね。さて、と……、コイツかな？」

鍵束を見て、その中で唯一さび付いていない鍵を見つけ出し、亀裂の奥にエーイがその先を差し込む。

通常、差し込んで回すことで鍵はその役目を果たす。

しかし、今回はどう見ても鍵の長さ、亀裂部分の長さが、差し込んだ後の回転を拒否しているように見える。せいぜい差し込むだけで精一杯なのだ。

カキン！

軽い音がした。ただし、その音は金属同士の音ではなく、部屋全体に響くような空気を震わせた音だった。

「……反応は、無い？ どういうこと？」

音がした後特に特に何も反応は起きなかった。焦れたイゼルナが周囲をせわしなく見渡す。

「いえ、おそらくですが、多分こいつにこうやって魔力を流してやると……」

エーイが目を閉じ、ゆっくりと息を吐き出す。

ボウツとちょうど部屋の中心が淡く光りだす。全員が少なからず驚き、少しだけ離れた場所にいた孝和はその光の流れを客観的に見ることが出来た。

その光は中空を彷徨いながらも段々と床に向かい円状の魔方陣を形成して行く。比較的単純な構成で出来たものと推測された。要するにこの魔方陣ではそんなに遠距離まで転移は出来ないだろうと孝和は踏んだ。

「……それで、止めてみると……」

エーイが鍵から手を離す。すると急に魔方陣の円は歪みを見せ、あっという間に先ほどまでと同じただの無機質な石畳の床になってしまった。

「おおおおおー……」

全員の感心しきった声と賞賛の視線がエーイに降り注ぐ。

特に孝和は平静を保つように必死になりながらも内心興奮していた。

（すげえ……。マジのRPGの王道じゃんか……。ファンタジーだなあ）

「まあ、一般的な遺跡ではあまり見ないがね。冒険者時代に南方の遺跡に似たような仕掛けの扉があった経験がある。これも多分その類の複製だろう。まあ、完璧な複製じゃない分だけ転移の術式は簡

素化されてるみたいだな」

エーイは引き抜いた鍵束を手元で遊びながら、そう説明する。

「それはいいが……。これでは誰かが残る必要があるな。ここまで目的地がはつきりしたんだ。魔力を流した後に、外のククチに頼んだ増援の案内もしてもらうことになりそうだ。さて、誰が残る？」

イゼルナの言葉が聞こえ、選択肢が示される。外への単身での離脱か、敵がいるであろう転移先への強行軍かの「二択」である。パツと見、残るものが最も楽そうだが、離脱後は軍の正門から傭兵団と共に強引にでも中に突っ込んでくることになるだろう。転移側の危険度はわからないがやはり未知の恐怖は否めない。

そして全員の顔に今までと違い、緊張と興奮が走る。

「では皆、覚悟は決まったか？」

第29話 扉に手をかけて（後書き）

と、いう今回の分と前回の分を合わせて1話の予定だったんですが……。

まあ、いい感じに仕上がらなかったんでこうなりました。

一向に話が進んでないのはわかってるんですが、省略もいやなものですし。

では、読んでいただいている奇特なあなたに深い感謝を。

第30話 戦鐘は高らかに鳴らされる(前書き)

誤字・脱字ご容赦ください。

第30話 戦鐘は高らかに鳴らされる

「それじゃあ、行ってらっしゃい!!」

呼びかけたカナエは、顔全体までキツチリと覆面で覆い隠したために、声はくぐもっている。

『うん！カナちゃんもね!』

部屋の中心部に全員が抜剣した状態で全方位をカバーできるように、円状に並んでいる。カナエが軍服の下に着込んでいた黒装束に着替え、覆面だけをして壁面に立つ。その手には起動用の鍵束、腰にはここまで侵入したときのロープがくくられている。

結局、誰が残るかということになり、カナエが残ることになった。捕まった者の確認などもあり、外への連絡係は孝和、ユノ、カナエの三択。結果、体術がほんの少しだけユノのほうが優れていたこともあり、カナエが残ることになった。

孝和という選択肢もあったのだが、問題が起きたのだ。

「……俺つてもう、どうなの……。はあ……」

孝和は見事に凹んでいる。それもけっこうヤバめに。

「仕方ないわよ。普通冒険者してる人間が魔力が無いだなんて、思いもしなかったんだから」

イゼルナの慰めにも復活の兆しは無い。ただ、反論はある。

「無いんじゃないかって、乏しいだけです!……あ、それもなんか惨めじゃないか……」

憤りを噴出させた前半、沸きあがったものが自分の言葉で消し飛ぶ後半部であった。

「天は二物を与えず……だな」

孝和にはエーイの言葉がひどく乾いて聞こえた。

孝和は転移先の様子をマオから確認している間、鍵束を差し込んでみた。そうしても全く変化は無く、どういふことなのか不思議に思ったのだ。

次にユノがやってみると反応があった。起動まではいかないが確かなものが視認できたのである。可能性を考えてみると、魔力を通していないのではないかと思えた。

そういえば初級術でも発動の気配どころかそれ以前の問題の孝和が、魔力反応式の鍵を持ったところで使えるはずは無かったのである。

「いいんです。これから頑張るんで」

「そうか。まあ、それはまた今度だ。シャキツとしろシャキツと」

「うす。すみません」

パンパンと軽く頬を叩いて気を入れる。

「じゃあ、皆。後でね！」

グツとカナエが鍵を亀裂に押し込む。鍵を差し込んだ亀裂が淡く光り始める。

足元の床に円状の魔方陣が形成される。歪んでいた陣がグンツと力を得、一気に形作られていくのは見ていて何処と無く気持ちいい。その陣が強く光を放ち始める。過去に体験したシグラスの簡易魔方陣と同様であれば、転移は一瞬のはずだ。

視線をちらとカナエに移すと、グツとガッツポーズをしていた。

それに軽くうなずくと同時に陣が眩く輝いた。そして孝和たち強行突入組は軍施設から

一気に姿を消したのであった。

目の前の景色が変わる。どうにもおかしな気分になるが、それが「魔術」といふことなのだろう。2度目の経験とはいえ、慣れることは無いだろう。

一斉に転移されたのは祭壇のような場所だった。天井はある。洞窟の中にある遺跡を利用した施設であったのだろうか。この床には何かを引きずったような跡も見える。

しかもそれは新しい様子で、ただし、何かを祭るといふようなことはしばらくされてはいないだろう。

周囲には木箱やシャベル、それにツルハシが簡単に見た限りでも無数に散在している。

どう見ても宗教的な儀式が行われている様子はここ最近は無いらう。

それよりも大事なことがある。

「セイツー！」

ブオンー！！

孝和はただ力任せに左手に掲げていた大盾を水平にブン廻す。

パツカアアアーン！！

そんなどこか気の抜けた音が周囲に響く。

音を立てたのは孝和の大盾と、正面にいた頭蓋骨のぶつかった音だった。

「スケルトンと、リビング・アーマーだったけ！言ってた通りだな。両方とも頭つぶせば倒せるんだっけ！？」

そう、転送されたその先には方陣をぐるりと囲んでいる30ほどのスケルトンと、リビング・アーマーの団体だった。

に響き渡るのは、金属がぶつかり合う音である。ちょうどマオの刺突が目の前のリビング・アーマーの胸甲をぶち抜くところだった。

「後は制御してる魔石を砕くぐらいです！リビング・アーマーの方だけの話ですけどー！！」

ユノが目の前のスケルトンの棍棒と力比べをしながらそう返す。

「隠密にって言つてたけど！結局こうなるんだよな！マオさん逃げてきたのがばれたんですかね！」

「わからん！行くぞ！とりあえずここから抜け出すぞ！！！」

広めの祭壇があるだけあり、空間的には暴れまわるだけのスペースは十分にある。そこと繋がる通路はいくつもあるようで、駆け出しても正解かどうかはわからない。

「先に行け、バグズ！」

怒声が響きそれに反応したものが一斉に駆け出す。その先頭に立つのはマオとバグズ。その後イーイとイゼルナ、ユノが続く。キールはバグズの背に乗って周囲に光輪を放ち威嚇しながら移動を開始している。

孝和もその場から駆け出す。

ただし、全員が魔方阵が描かれた祭壇から抜け出したのを確認し、徐々にその速度を緩める。

「え？ますたー！？」

気付いたのはキールだった。真っ先に抜け出たバグズは立ち止まり、残りのメンバーが合流するのを待ってる。

「殿をする！！ここが逃げ道だったら確保しとかないといけないからな！！」

孝和はジ・エボニーを鞘ごとベルトから引き抜く。30体の骨と鉄の塊を相手にするならば、どちらかという刃物よりは鈍器の方がいい。刃先が途中で止まってしまえばそれを引き抜くのに時間が掛かる。1対複数の場面でそれは命取りになりかねない。

師である法寿やその高弟たちは鼻歌交じりに「斬鉄」を為していたが、そんな人外の技を身に付けるほど歳は取っていないつもりだ。孝和も確かに「斬鉄」を為すことは出来る。

しかしあくまで順を追って、形を整えた上で、であった。確かに力を込め、全力で打ち込めば両断は出来るだろう。過去、スケルトンより戦闘に長けたボーンソルジャーとの戦ったときには、薄手であったとはいえ鎧も叩き切っている。それを前提としても硬い敵を

30も斬れるのかは不透明だ。

そこを考え、通路を背に正対する数を出来るだけ減らすように陣取る。

とりあえず鞘を選択したのも、鈍器ならば、「砕く」のみに集中すればいいからだ。とりあえず当てればダメージが与えられるし、棒術・杖術もみっちり教えられている。得物もボルドの特製だから申し分は無い。

さらには、

「スケルトン、リビング・アーマーも不死系だからな……」
アンデッド

不死系には特効の気功術が孝和には使える。ユノは目覚めたばかりらしいし、そうであれば殿を務めるのは孝和の役目である。

さらにはこの警戒の感じからすると、すでに侵入がばれている可能性も有る。ならば、せいぜい大騒ぎをして見せることも必要だと思われた。

「なるべく早目に戻ってきてください！！さっさと助け出して、とつとと逃げましょう！！」

意気込んで言う台詞ではないが、とりあえずこの後に来る、味方の傭兵の露払いをしておくくらいの自信はあった。

スケルトン、リビング・アーマーの混成部隊30体はその場を後にしたエーイ達を追うのを止めた。どうもこの敵集団は「走る」ことは出来ないようだ。つまり鈍足の上そんなに賢くはないようで、その場に残った孝和に標的を移したと言える。

「では、任せる！出来るだけ後ろを警戒しろ！挟み撃ちだけは避けるんだ！！」

後ろからエーイの声が聞こえる。徐々に遠ざかりながらの声だったので最後は小さかったが確かにこの場を孝和に任せる声が響いた。そして響き渡った声が消えると、あたりに聞こえるのは唸りながらこちらへ迫るリビング・アーマーと、カタカタと顎を揺らしながら歩くスケルトンの協奏曲だった。

「まあ、ちょっとばかりキツツいか、ねえ？」

軽く息を吐くと、そのままつすぐに孝和はその演奏会に、更なる音を加える演奏者として参加するため歩き出すのだった。

「……つつ！ああつ……！！！」

決して普段は出さない、息を搾り出すかのような声が彼女の喉を通り吐き出された。

ギシギシと軋みをあげるベッドの上で、アリアは自身の体がまるで自由にならないことに苛立つ。しかしひどい眩暈が起き上がろうと上半身に力を入れただけで、彼女の視界を霞ませる。

「う、うおええええ……。カハッ、ぐっ……。は、はあ、はあ……」

すでに胃の中には何も無い。ここに来てから無茶をしたため、その中のものは全て部屋の隅のへこんだバケツの中に流し込まれている。

「だ、大丈夫！？無理だといったでしょう！そんなことをすれば冗談ではなく死にますよ！？」

ベッドの側にいた金髪の女性が駆け寄ってアリアの背を撫ぜ、脇に無造作に置かれたひびが入った器を掴む。それにトクトクと水差しの水を注ぐ。器にしる水差しにしる、ひどく粗末ではあるがこれでも他の部屋の備品と比べれば雲泥の差だ。

器を差し出した手をアリアは見つめる。その指にある跡は指輪のもののようなだった。

「無理なのは……知ってる。けど、動かないと手遅れになるわ……。アデナウはもう船に行ってる、みたいだし……。けほっ。逃げないと、どこに連れて、行かれるかも、判らないわ……」

「でも、あなたは領主様の客人でしょう？私たちとは違って、そんなひどいことにはならないんじゃないの？」

受け取ろうとしない器をアリアの手に握らせ、ゆっくりと口元に添えるようにする。クイツと水を飲み込む。ふうと息をつき呼吸を整える。

「ミリアム……。そうじゃないのよ……。相手がアデナウの身柄をどう扱うか次第ではわからないでしょう……。それに、あなただつてこの先は、どうなるか……」

ミリアムとアリアに呼ばれたこの女性は、ここに捕まった女性のうちから、アリアの世話をするためにこの3階に上げられたのだ。「そうだけれど……。朝になれば出航の予定なんだそうよ。逃げようにも武器もないし、あつても私じゃ扱えないし。それに私は、家族も居りませんから……。生きていけるのならば、何でもするつもりでポート・デイに行くつもりでした。もしかしたら今よりはいい生活が行った先にあるかもしれないわ。まあ、そんな都合のいいことなんて無いでしょうけど」

薄く笑みを張り付かせた彼女の青い瞳が、少しだけ悲しげに揺れる様子が見える。本人は明るく振舞っているつもりだろうが、それが強がりなんだろうとアリアは思った。怖いのだろう、そうであるに違いないのに彼女はアリアの体を気遣ってくれていた。

ミリアムが非常に気丈な女性なのはわかる。アリアがここに連れてこられてから、甲斐甲斐しくその世話をしてくれている。それには非常に感謝していた。

なぜアリアにミリアムが付けられたのか。

理由は単純なことだった。アリアは倒れた。術の多用による「魔力切れ」を起こしたからである。

アデナウの乗る馬車を襲撃され、その時に倒れた護衛を治癒した際に、圧倒的に力が足りなかった。無理をして彼らに回復術を注ぎ込んだ。

アデナウを守るため、護衛は全力でその任を全うしたのだが、相手の数はそれ以上だった。十重二十重に次々と何も無い闇夜から現

れたスケルトンや、盗賊と思われる敵を相手取るには力不足であった。

一人が倒れ、その穴を埋める無理をした一人がまた倒れ伏す。これが繰り返され、最後にアデナウと御者、アリアが残った。

そこでアデナウが、自身を相手にゆだねることで、まだ息のあるものたちの助命と治療を求めた。

相手側の了承を受け、傷つき虫の息であった護衛に唯一治療ができたアリアが馬車内で回復術を行い、最後の止血に成功した段階で気を失ってしまった。

一般的な神官職の魔力量と比べてもアリアが劣るといっわけではない。アリアとて神官としての修練を積んでいる。それでもアリアが自分の力不足を痛感するのは、近くにいたキールの術者としての力量が、あまりに規格外であったからとも言える。

意識を取り戻したのは建物の目の前であった。多少暴れてやるうと動かした両腕はリビング・アーマーにしっかりと抱えられ、動くことは封じられていた。

「うええ……。駄目か……。立てないなんて……」

どさりとベッドに倒れこむ。粗末なベッドは体を優しくは受け止めてくれなかったが、それでも体を横にする役にはたった。

全身を覆いつくす熱、もう何も残ってはいないはずの胃を襲う吐き気、まともに焦点すら合わない視界。ここまでの脱力感・倦怠感。アリアの人生の中で一番だった。立ち上がり、数メートル先のドアにたどり着くことすら難しいだろう。

「ですから、無理しないでください！こんな体で意識があること自体不思議なんですよ！？それにあなたが言ったんでしょう！この階の階段前のあいつ。スケルトンじゃなくて竜牙兵【ドラゴントウス・ウォーリア】だって！！」

「そうなのよね……。これじゃあ、勝てないか……」

竜牙兵【ドラゴントウス・ウォーリア】。字面どおり竜の牙を、

魔術により作り出された魔道生命体である。見た目はスケルトンに非常に似ているが、あくまで見た目だけで中身は別物という代物だ。術者の力量や、素材の質にもよるが実力は平均的な冒険者を上回る。休息を必要としない上に、命令には従順ということもあり、番兵としては言うことは無い。ただ基本的にはマジックアイテムの一種として販売される竜牙兵は、たしか最低でも金貨100枚はするはずだ。

アリアは熱に浮かされる頭で、何故そんな高価なものを襲撃者が持っているのかと思ったが、今回は行政官であるアテナウの拉致のために、念のために用意したのだらう。まったくどんな金の使い方をしてくれるものか……。

「でも、もう少しで来てくれるんじゃないかな……」

「そうね、きつと来てくれるわよ……」

ミリアムは倒れこんでからのアリアが、熱に浮かされていると思っていた。彼女の助けが来るという幻想に付き合っただけのもの、この場にいる自分の責任だとも感じている。

だから、アリアの言葉はありもしない救助のことだと考えていた。真実ではなく、彼女の頭の中にしかない、都合のいい夢を見ているのだと。

そう、思ったのは仕方ないことだった。

「っらああああっっっ！！！！！！」

ブンツとうなりを上げ、腰から十分に力を込めた回し蹴りがスケルトンの側頭部にめり込む。

その勢いを残したまま、独楽のように跳ね回った孝和の右手に握られた棍棒が、逆サイドのリビング・アーマーを襲う。その一撃は

構えられた剣にあたり、弾かれる。

しかし、威力までは減衰させきれず、後ろにいたスケルトンを巻き込んで倒れこむ。

回し蹴りを受けたスケルトンは頭蓋骨を粉みじんにながら、その場に崩れ落ちる。核となる頭部を失い、ガランガランとうるさい音をさせながら、スケルトンはただの骨に変わった。

孝和は周囲にいる敵をとりあえず片付け、ゼエゼエと忙しない呼吸を整える時間を作り出した。

「へへへ……。さすがに、打ち止めか？頼むから、それでお願い……」

ゼエゼエと絶え間無く続く息切れを何とかしようと大きく息を吸い込む。倒した数は、20を過ぎたあたりで意味がないと思い、数えるのを止めた。イゼルナ達の向かった先とは逆方向から続々と敵が追加されてくるのだ。はつきり言えば、考えが甘かった。

最初のうちは出来るだけセーブして対処するつもりだったのに、そんなことを考える暇もなくなっているのだ。

とつくの昔に大盾は打ち付けられる手斧や棍棒、剣の攻撃で使い物にならない状態となった。今は苛立った孝和の手により、リビング・アーマーの腹部に力づくで突きたてられる形で、まるで墓標と化している。

何度も何度も頭骨を殴りつけた左の籠手にいたっては、一部のパーツが砕けちり、甲の部分はすでに布地越しに素肌が見えるくらいだった。

盾を構えていた左手は、倒した敵の持っていた戦斧に変わり、リビング・アーマーの胸部の奥にある魔石を砕くことに専念している。右手の棍棒はというと何体倒したか数えるのを止めた辺りで、疲れと一瞬の油断からジ・エポニーごと鞘がすっぽ抜け、仕方なくそれの代わりに敵の鉄剣を拾って戦っていた。しかしそれも砕け、棍棒を拾い、さらにそれが中ごろから折れ、今の棍棒は実は2本目だったりする。

ジ・エボニーも今は何処にあるのか判らないくらいに、床一面に骨と鎧とそれらが使った武器で覆われてしまっている。

兜にいたっては一回直撃を受けてしまった。大きな傷跡があるが、ギリギリのところまで刃が止まってくれた。ヒヤリとはしたがその一瞬すらも相手は待つてくれない。

下手をすると60〜70くらいは潰していたかもしれない。

「よっしやああ!!来いっ!!」

ガチャガチャと音を立てながらリビング・アーマーが1体、スケルトンが2体起き上がる。

それを正面で見ながら、足元に転がる鎧のパーツやら骨やらを足で前方に蹴り飛ばす。もちろんそれは、かなりの勢いで飛んで行く。生き物は反射的にそういった場合、避ける行動をとるのだが、目の前の3体にそんな様子はまるで見られない。

殆どは当たらないが、ひとつだけスケルトンの左腕のひじから先を砕くことに成功した。それでも痛覚が無い死者の前進を止めるには至らない。

「なんというかさ。怖えぞ、それ……」

独り言が多くなっているのは自分でもわかる。饒舌になってきたということは、かなりの疲れが体にきているのだろうと、判断した。「マジで大人しく寝ててくれ。あとで墓でも作ってもらえるように頼んでやるから!」

ここまで来るとさすがにもうそろそろ限界だったりする。

ダンツと足を大きく踏み鳴らし、前方のラスト3体に向かい走り出す。

孝和は走りながら、先頭のスケルトンの様子をじっくりと見つめる。そのスケルトンは孝和が走りこんでくるタイミングに合わせ、手に持った手斧を横に振りぬく。

「よっつと!!」

しかし、孝和はその目前で勢いそのままに、スライディングに動きを切り替える。

スケルトンの空振りを誘い、重心が乗っている右足を薙ぐように滑り込む。

メキイ！！

骨が折れる音が響く。倒れこんでくるその胸部に左足を当て、思い切り気功術の乗った一撃を放つ。白銀の光が一瞬だけ瞬く。

その一撃が、スケルトンに残る「力」を消し飛ばす。その瞬間にスケルトンという敵意ある死者は、ただの骨となった。

胸部を含む大部分は、そのまま後方にいる2体に衝突する。孝和は細かく砕けた骨片が、パラパラと降りかかるのを感じた。

ただし、ただの背骨に肋骨が張り付いた固まりと、前方にいた大地にしっかりと足を付けた鉄鎧とでは鉄鎧に軍配が上がったようだ。一瞬の静止は有ったが何の痛痒も見せず、リビング・アーマーはその手の戦斧をそのまま仰向けになっている孝和に振り下ろす。

ガンッ！！

岩の床にこれでもかという勢いで戦斧がめり込む。孝和はスライディングの後の蹴りを利用し、作用・反作用の法則よろしく、ほぼ真横に向かって「跳んだ」。気功術を乗せた一撃の衝撃はかなり大きい。その反作用は受け流すのではなく、そのまま体を通すことになり、ミシミシと体の各部がきしむ音を孝和は聞いた。

「当たれッ！」

そのリスクを覚悟した「跳躍」で上半身を視界に捉えることの出来た、後ろのスケルトンの顔面に向かって右手の棍棒を投げる。結果としては相手が軽くスウェーしたことでその攻撃は当たらなかった。

当たらなかったのは確かに悔やまれるが、問題は無い。右手の棍棒が邪魔だったのだ。孝和は「跳ぶ」時に多少のひねりを加えてい

た。ちょうど棍棒を投げ終わり、その手が体の正面に来たときに指先をガリガリとしつかりと床に這わせる。要はブレーキを掛けるための布石だ。

「やっぱ、横着は駄目だな。1匹ずつキツチリ片していくしかないか……。くそ……」

もしかしたら1体くらい巻き込めないものかと思っていたが、さすがに考えが甘かった。

多少の傷は付いたが、リビング・アーマーは健在。スケルトンは片腕となりながらも、フレイルを引きずりながらこちらに向かってきた。まあ、先ほどまでよりは片側に重心がよったせいなのか、動きは鈍くなっている。

「ああ、もう腹へったな……。絶対これが終わったらアリアに飯、たかろう。たっつつかいとこでガンガンにキールと食うんだ。……」

うん、なんかやる気出た、事にしよう、うん」
ぶつぶつと、くだらないなあと本人も思っではいるがそうつぶやき、残された左手の戦斧を両手でしつかりと握る。

視線を上げ、残った力を振り絞るように目の前に掲げる。斧なんて珍しい武器はこれまで使ったことなど無い。ただ単純に振り下ろすくらいの芸当で凌いできたが、事ここに至り術の無さは厳しいと感じている。

「ま、これで終わりだろ！！さすがにさあ！！！」

ここまでの中に誘拐犯がいないことに多少の疑問はある。倒したのは全部「人形」なのである。かなり騒いでいるが誰も声を出して寄っても来ない。

何かおかしい、そんなことを頭の隅に残しながら、孝和は両手で近寄ってきた敵に戦斧の一撃を見舞うのだった。

「時間か……。いくらなんでも気づかれたらうな。そろそろ騒がしくなるのではないか？」

ランプに照らされた人物、ハキムは手の中のグラスを弄びながら、その中の琥珀色の酒を呷る。

「問題は無いでしょう。祭壇には土産を用意しておきましたし、それを抜けて追いついてきても我らにはコレがあります。」

その前の席に座る人物はハキムと同じように肥満体であった。きちんと調髪された油の乗ったその顔は、光に照らされひどく不気味でそしていやらしい卑屈な笑みを浮かべていた。

名前をストレイという。ただ、この卑屈な笑みを浮かべながらも、彼のその視線はハキムには無い。

右手にはハキムと同じグラスを傾けながらも、左手はちょうど手のひらに収まる黒水晶を撫でる。その腕には禍々しい黒の腕輪がはまっている。ぼうつと淡く黒水晶が光ると同時に腕輪も鈍く光を發した。

その様子を見て、ストレイは笑う。

その笑いは先ほどまでの卑屈なものではなく、粘つくようなどこか狂気をはらむもので、それに気づかなかったハキムは、先ほどと変わらず酒を呷るのであった。

第30話 戦鐘は高らかに鳴らされる（後書き）

どうもうまく行かないんだよなー。

何とかしたいです。この更新スピード。

あ、あと久しぶりにアリア出したらどんな感じで書いてたか忘れてました……。

しっかりしないと、本当に。

第31話 我、隠者に捧ぐ(前書き)

誤字・脱字ご容赦ください

第31話 我、隠者に捧ぐ

「よつと……。あ、これ使えそうか？うわあ、すげえ角度。て、ことは無理か……」

とりあえず何とか残りの2体を倒した孝和は、へとへとになりながら、皆の後を追いかける為に床一面の残骸の中から使えそうな武器を探していた。

孝和が本気で振り下ろした戦斧は、リビング・アーマーにとどめを刺すことには刺せたのだが、頭から胸部に掛けてのところで衝撃に耐えられずに折れてしまった。

他の武器も転がっているには転がっているが、出来れば剣がありがたい。斧やらフレイルやらでは孝和の戦闘スタイルとは勝手が違うし、棍棒は1回折れたこともあって二の足を踏んでしまう。

ジ・エボニーが見つければいいのだが、鞘まで黒いのでは洞窟内の薄暗い中では発見は困難だった。

剣もある程度しっかりした作りでないと、本気で振ると曲がったり折れたりするようだ。足元にあった銅のブロードソードを手に取る。鍛造式の量産品なのだろう、コンコンと軽く叩くと場所によって密度が違うようだ。

おそらくここからメキツといきそうな気がする。

コレでは駄目だ。

「あああつ！もう！時間も無いつてのに！」

流石に腰のナイフ1本で追いかけるような無謀なことは出来ない。何とか我慢できるだけの武器が、ジ・エボニーをこの中から探さねばならない。しかも出来るだけ急いで。

ここの脱出口は落ち着いたのだ。応援もかねて合流しなければ。すでに亀裂の入った兜と、押すとへこむ鎧は交換済みだ。リビング

グ・アーマーも動かなければただの鎧・兜・具足一式に過ぎない。

比較的状态のいいものを選んで、装備した。ただ、鎧は全部着けると動きにくそうだったので、胸甲部のみをブン捕ったのだが。

「これも、駄目。こいつは……ヒビがいつてるか。クソ、何処だ何処だ何処だ？たしか、ここらに飛んでつたはずだから……。頼むから、出てきてくれよお……」

だんだんとイライラしてきたのもあるが、疲労もあつたのだろう。集中がその独り言の間、ほんの一瞬の間だが途切れてしまった。

ヒュオツ

「!?!」

一瞬だが視界の端の端に、鈍い光を見て取れた。それに対し体が自然と揺れた。

その揺れが、孝和の命運を分けた。

ダンツ!!

ほんのさつきまで孝和の頭があつた場所と、床の軌道上をその鈍い光が通過する。

その後に音が耳を、風が頬を振るわせる。

「やべっ!!」

(槍か!?!いや、違う!こいつは……矢!?嘘だろ!?)

たしかに床に突き立っているのは矢だった。たしかに視界に移つた光はほぼまっすぐにこちらに向かつてきた。放物線ではなく、まっすぐに。

つまり、投擲ではないのだ。視認できる範囲にいないということ、かなりの距離からの攻撃だろう。飛んできた先から手で投げ込むには距離がありすぎる。

ただ、突き立ったものを見てもそれが矢だというのは信じがたか

った。もしかすれば矢に似せた、槍なのではないかと思うくらいに、太い。

矢羽も何処にそんな羽の鳥が居るんだろうという巨大サイズだ。鉄パイプくらいの太さは優にある。これを弓で引くとなるとどれだけの力があるのか。何かで読んだが、ある程度の大きさになるとボーガンでも機械巻きが必要になるはずだ。

「これ、保つのか？ズタボロだぞ？ヤバイか……」

咄嗟に逃げ込んだのは、腹に盾を突きたてられたリビング・アーマーの骸の後ろだった。かなりダメージを受けている盾と、岩に突き立つ矢。かなり厳しい賭けの気がする。

「100……200は先だろうな。もうすこしこっち来い……。止めを刺しに来いよ……」

孝和は自身の体調から、走りこんでその先の射手までたどり着くのは難しいと判断した。先ほどの1射は寸分たがわず孝和の頭を穿つ筈だった。孝和が体を揺らさなければこの周りの骸の仲間入りをしていたはずだ。

「……来い、来い、来い。確認したいだろ？そっちからも、俺がどうなったか暗くてわかんなかっただろ？しっかり矢を番えて、止めを刺しに、ゆつくりと、周りを確認しながら、来やがれ……！」

呪詛に近い思いを込めて、盾の裏で足元に転がる骨を握る。おそらく大腿骨だろう。

それと盾の影にギリギリ隠れることの出来る範囲にあった先の折れた剣を拾う。

まあ、無いよりはましだ。

ただし、視線を移したその先にあるもと比べてしまうと駄目なのだが。

「マジかよ、最悪……見つけたけど。よりもよってそこなのか」

このタイミングで見つけたのはジ・エボニーだった。目の前の盾の穴越しに覗き込んだ先の右前方にコロんと転がっていらっしやる。と、いう事は取りに行くには、少なくとも前進しなくてはならな

い。

しかし、

「確実に狙われるな。……でも逃げて合流するのも、難しいか。……なら、戦うしかないかな」

先ほどの射手の技量がどの程度かはわからないが、仮に200m先からヘッドショットを狙えるとする間違いなく「超」の付く一流だ。

疲労の色濃いこの体で逃げ切ることが出来るかといわれれば、

「絶つっ対に、無理！」

はあ、とため息をつき今どの程度動けそうか、出来るだけ「低く見積もってみる。」

それを念頭に考えると、全力で動くならあと3呼吸程度、もし体調が万全なら5〜7といったところだ。その見積もりをさらに7割に減らして考える。

「2呼吸ちよつと、か……。厳しいな……」

特攻しようにも限界までが短すぎる。だが、切れるカードはこれしかない。

「まあ、そつちもどうよ？もーそろそろ我慢できないんじゃないか？イジイジしてくるだろう？」

独り言をぶつぶつ言いながらカチャカチャと左手の籠手を外す。額には汗の玉が吹き上げてきている。砕け散ったパーツ部をしっかりと補強した上でさらに布地を縛り、筒状に出口を閉じる。

そして、腰元に縛った包みから取り出した、携帯用の松明をバラして、中身を小袋にざらざらと取り出す。

筒の中にその袋と足元にある細かな骨や石、砕けた鎧のかげらを詰め込む。

「うし、出来た。ちよつと怖いけど……。大丈夫かな……？」

そんなものを作るくらい時間が少し経ったが、前方の敵は足音も聞こえず姿もいまだ見えない。

しかし、この状態が長く続くかというところ、そうでもないだろう。

孝和は時間が経つにつれ、体力を回復させるように努めている。一方の相手も、孝和が動いたときには矢を射るためにある程度構えているはずだ。現状、向こうの方が有利なのは解っているはず。しかも孝和側からの反撃が無いことから、遠距離の攻撃の手段が無いことも推測しているだろう。

「それが判ってるなら、動きたいだろ？せつかく相手が疲れてるのに、時間をやるのか？少しだけ精度を上げるのに、俺の状態を見るのに、少しだけこっちに來たいだろ？……來いよ！」

小声ながらも鋭く言い放つ。自分の考えが正しいかどうかを自問自答する。……多分大丈夫。

『俺なら多少無茶でも、……行く！』

その一念のみを脳裏に描き、盾の裏に身を潜める。狙いはあの鞘の止め具にある紐。アレを掴むことがまず1つ。

2つ目は相手の位置。飛び出して、見て、全力で行く。全力で真正面から突っ込む。それが2つ目。

「お！來たな……そうだ、そうだ。OK、OK。いやOK？おいおい、待て待て」

來た。足音が聞こえる。

ただ、孝和が予想していたのと、違う。

ズン！ズン！ズン！！

「……なんかおつきいよお……。なんだよお……。カンベンしてくれよお……」

孝和が見たところ、現れた相手の縮尺がおかしい。

孝和はちらと隣に刺さった矢を見る。うん、太いし長い。

そのあとに遠くに見えた相手を見る。暗くてしつかりとは見えな
いが、弓を握っている。そして、それに番えられた矢を構え、一歩

一步こちらへと進んできた。

相手は矢を番えた状態でこちらに来る。この「太くて長い槍のような」矢を番えて。

(……3m弱、だよな。……雑魚を倒して、そのあとにボスって、確かに王道だけど、ゲームじゃないんだぞ!? 律儀に出てくんなくて!! 見逃してくれよ……)

あの番えた矢がこの横にあるものと同一ならば、単純に縮尺比で3m弱くらいだと思われる。

(大きさからするとオーガとかのサイズだったっけ? あんなバケモノ弓、直に引けるってどうなのさ!?)

多分矢がまともにあたれば刺さるのではなく、きれいに穴が開く。キールもないし、死ぬだろう。

予想では数人のチームで矢を引いているか、機械式のバリスタに近いものでの射撃と思っていた。それがどうしてこう、対応策の思い浮かばない相手ばかり出てくるのか。

「巨人と戦う方法なんて知らないって……」
目の間を指でぐいぐいと揉む。そのあと見てもやはり大きさは変わらない。

むしろはつきりと全体像が見えたため、より諦観は深まる。

「絶対に、これが終わったら引きこもる。しばらく街でゆっくりするんだ。なんか遠くに行くのちょっと怖い……」

そんなことをつぶやき、軽くトラウマを自覚しながらも、ゆっくりと孝和は腰を上げた。

丁度視認可能な程度の距離に双方が近づいたところで、いきなり床一面に広がる残骸の中から、黒いものがブワッと浮かぶ。

ヒュオツ!!

ガツンツと鈍い音を立て、その浮かんだ黒い鎧だった鉄板が矢で弾き飛ばされる。かなりの勢いで矢と鎧は絡み合い、本来飛んでいくのとは別の方向に飛んでいった。

タツンツ！

床を駆ける孝和の足音がそれに被さる。全力のダツシユで斜め前方5m先に全力で走る。先に射手が撃つか、その前に孝和が駆け抜けるかの勝負だった。

（間に合えっ！！）

走りこんだ左手一本で掴んだ剣を真横に投げ抜く。

ヒュオツ！

キイイイーン！！！！

風切り音を上げた矢と、投げた剣はちょうど射手と孝和の間でぶつかりあう。甲高い金属音と共に剣が碎ける。ひびが入っていたとはいえ、見事に砕け散った金属片が地面に叩きつけられる音が響く。「おおーうーうーっ！」

孝和は小指の先に紐を引っ掛けて、ジ・エボニーを駆け抜けながら拾い上げる。手に持った剣を引く抜くと同時に大きく息を吸い込む。可能な限り肺腑の隅々まで空気を取り込むつもりで、である。

（これで残りは、1つだ！！）

確実に動けるのはこの最後の1呼吸まで。これが尽きれば、あとは目隠しをして崖にダツシユするようなものだ。いつかはわからないが、全力で走っている真つ最中に奈落へ真つ逆さまということになる。

この1呼吸の先はいつ途切れてもおかしくない。だからこそ急ぐ必要があった。

(つて、何だコイツ!?もしかして、【ゴーレム】とかそういう類
!?!?)

考えを声に出すエネルギーすら惜しい。掴んだジ・エボニーを抜き放ち、その目の前の射手である、ツヤツヤとした薄い水色の金属的な光沢を放つ敵を真正面に捕らえ、そう考える。

鎧や兜といったものを全く身に付けず、その体を白地の布で覆うようにしているのは、たしかに【ゴーレム】だった。その布地の下に見えるボディはキツチリと引き締まり、岩を人型に組み合わせたいい加減なものではなかった。まとつている質素な布地は、古代ギリシャのトーガのような印象を孝和に与えた。ただ、ボディと違い頭部はつるりとしたマネキンのもので大差はないようにも見えた。ただし、それでも【ゴーレム】自体の出来は、丁寧に丁寧に磨き上げた上物であるのは、初めて【ゴーレム】を見る孝和にも分かる。

ヒーローのフィギュアをそのままデカくしてみたんだ、その【ゴーレム】を前にして孝和が思ったのはそんなことだった。もっともサイズは全く違うが。

実際のスーツアクターが動かす特撮番組のヒーローではなく、造形師が作りあげるより現実味の無いヒーローだ。

それに丁度あの銀色の有名ヒーローのように、胸の真ん中に魔力を含んだ光が見えるのもそれに拍車を掛ける。ただ、光り輝く青ではなく、くすんだ蒼であるのが、暗闇に浮かび上がって何処と無く禍々しさを感ぜさせた。

だが、現実味が無いということは、より人が想い焦がれる強さとそれから生み出される美しさを備えているのだ。

それは現実的には無意味なものである。例えるならどんなに格好良いロボットアニメがあっても、それは今の技術で本当に造れば重量に関節が耐えられなかったり、動力源に問題があるだろうということとは言ってはいけない真実であった。

だが、ここには魔術がある。人の思いを世界が汲み取り、それを事実へと変質させる技術。

一流の腕のある【ゴーレム】製作者がその想いを形にしたのだとしたら、それは現実となる。科学だけの日本では許されない常識がここでは通じない。造形物への想いはそのまま力となるのだった。

【ゴーレム】はその右手に弓をもち、左手には盾が据え付けられていた。体を覆う防具が無いのは、その体自体が堅固であるからだろう。

その現実離れた戦闘的な筋肉がついたフォームに多少萎縮しながらも孝和の足は止まらない。

「っ！だあああっ！！！！！」

駆け抜け、そのままの勢いで【ゴーレム】の真正面に飛び出す。

2射目を番え、丁度真正面の孝和の頭部を目掛けて【ゴーレム】はその矢を放つ。

顔の横、数センチギリギリをうなりを上げて矢が飛び抜ける。ただし、孝和自身は視線を逸らさずにそれを避ける。

（ははっ！！このスピードならギリで避けれる！！）

要するに真正面から刺突をされている状況と同じなのだ。しかも、その後の「払い」「薙ぎ」の追撃が来ない技にランクは落ちている。

（なら、大丈夫！一流と言えるかもしれないけど、まだ遅い！）

経験したことがあるMAXよりは若干遅い。道場の高弟たちや、ダンブレンの技の方が速いと経験から判断した。

その回避を見て【ゴーレム】は番えた矢を引き絞る。3射目は先ほどの反省を生かし、全力で迫る孝和の接近にギリギリのところまで耐えた。

（っ！来たあ！！）

カツ！イイーーーーン！！！！

今までで最も速く、勢いのある矢が放たれた。音が空を切る音が直に鼓膜を震わす。

(痛っうー！当たってないんだぞ！？マジかよ！)

今回も【ゴーレム】の狙ったのは場所は頭部だった。足元や胴体を避けたのは、その前に掲げられた剣に邪魔されるのを恐れたからだろう。

ただ、先ほどよりは余裕が無いとは言え、完全に避けきつたはずの矢の風切音で、通り過ぎていった側の鼓膜にひどくダメージを受けた。ズキッと刺すような痛みが顔が引きつる。

鼓膜が破れるまではいかないが、キーンとして全く聞こえない。

そのせいで多少バランスを崩し、踏鞴を踏んでしまう。

「うおおおっつー！！」

無理やりに足を前に出す。転びそうになる体を前に運ぶことに全力を傾ける。

その孝和の抵抗の間に、【ゴーレム】は体を入れ替え、盾を前面に弓を後手に回す。

それによりしっかりと足場を固めた【ゴーレム】は、矢が避けられたことを差し引いても有利な立ち居地を得ることに成功していた。一方、息の途切れる最後の刹那、孝和は【ゴーレム】の眼前にたどり着いた。最後に踏み込む右足を軸として、漆黒の剣が盾に向かい真横に振り抜かれる。

そしてこれにより残った1呼吸がついに尽きる。

「行けえええっ！！」

推定2メートルの壁のような重厚な大盾と、光を吸い込む漆黒の神剣がぶつかり合う。

「斬鉄」それは“斬る”為の技。

精錬された金属を“斬る”技の名前だ。“叩き切る”ではなく、技を術を使い“斬る”。

これは本来刀を用いて為す。

ただ、法寿たち人外の達人たちに言わせれば「そんなこと、知るか」とのことで、スクラップになった廃車を持ってきて試し“斬り”を見せられたときの得物は中華包丁・万能包丁・陶芸釜にくべる

薪用の鉦というラインナップだった。

……たしかに“斬れ”てはいた。しかしこれから先に進もうという若者がそんな技を見て引いてしまう事を考えて行動して欲しい。得物に刃が付いていれば、ある程度までの硬度差までなら斬れるのだそうだ、彼らには。

そして、その弟子である孝和はといえば、

「っしやああ!!」

ガッ！キイイーン!!

孝和の技は深々と盾の4分の3程度まで“斬った”。得物自体が一級品どころか、さらにその上の品であることもこの結果に繋がった。

ただ、残りは抑えきられてしまい、力技に頼らざるを得なかった。補強された足先を亀裂に叩きつける。

メッ……キイ!!

亀裂部分から不恰好に盾が歪む。ほぼ完璧に密着状態ということもあるが、【ゴーレム】の左腕をその場に、瞬間的とはいえ釘付けにすることが出来た。

盾の丸みを利用し、半回転しながら途中で止まっていたジ・エボニーを引き抜く。

そのままに、右手側の弓を握る側に袈裟斬りに踏み込む。

キンッ!

とつくにメインタンクは空っぽになっている。止まれば終わる。そんな焦燥すらも頭から叩き出して無理やりに体を動かす。

「ち……っくしょ!!」

……浅い。斬ることが出来たのは、手に伝わった感覚からすると約5cm程度だと思う。

目で見える限り、【ゴーレム】の胸板の奥にある光までは20cmといった所だと推測している。

鈍い痛みが走る鉛のような足に力を込め、横っ飛びに跳ねる。

その孝和を目掛けて【ゴーレム】の右手が弓を上段から振り下ろす。

ドオオオオオーン!!!!

(この感じ、打鞭か!?くそっ!そんな無茶な仕様の弓なんて使うなよ!!!)

弾け飛んだ床が細かな破片となって孝和を襲う。十分に錬られた鋼の弓は、両端それぞれに持ち手が付いた特別仕様だった。そういった打ちすえることを目的に設計された接近戦用の弓である。

最初の一撃をかるうじて避けることに成功した孝和を、床から跳ね返り浮かんだ弓でさらに追撃が襲う。

「ぐはっ!……っあああっ!!!」

跳んで逃げたこととジ・エボニーを間に挟むことで体への直撃を回避したが、剣を掴んだ右手と、5m近く吹き飛んで壁に叩きつけられた背中に鋭い痛みを感じた。

(薬指・小指は、折れたか!……背中は、大丈夫。ああ、鎧着けて正解だったぜ)

「ごろごろと受身をとリ、そのまま立ち上がる。ペキンと鎧の背側から割れる音がする。限界を超えた鎧が割れた。

だが外している暇は無い。体が動くなら進むだけだ。ここで黙って死ぬよりは、生き残って痛みに耐える方が断然良い。

右手はまだ剣を握れる。痛みにも顔を顰めながらも柄を握りこむ。左手は腰の「粗悪品」を掴む。

(……よかった。吹っ飛んでたら洒落にならんって。アホか、俺。

これからは行き当たりばったりで作るの止めよう
孝和は冷や汗を流しながらも駆け出した。

ダンッ

先程と同じように、【ゴーレム】は盾を前に、弓を後ろにして構える。

結果を見れば、先程の勝者は【ゴーレム】側といえた。【ゴーレム】にはぼダメージは無し。孝和は骨折2箇所、ガス欠寸前である。

「これで！ラストだっ！！」

これ以上は無理だというのは間違いない。多少の休息が無ければ動けなくなる前兆は感じていた。それが間違いないと断言できるまでになった。

「ぶっ壊す！！悪く思ふなよ！！！」

孝和は気合と共にさっきと同じタイミングで同じ攻撃を繰り返す。

【ゴーレム】も同じように盾でジ・エボニーを受ける。

ガッ！キイーン！！

孝和は自分を褒めてやりたかった。ここまで「斬鉄」が何度も失敗せずに来るとは思ってもいなかった。

盾を先程の亀裂の真下の位置で同様に斬る。そして同様に斬ったのは4分の3程度。

その後も変わらない。盾にそって体を這わせ、【ゴーレム】の正面に出る。

「そらっ！」

そして、“【ゴーレム】の右手が弓を上段から振り下ろす”直前に今度は剣を“抜かずに”急制動を掛ける。

振り下ろされる弓、そしてその真下には先程でっち上げた「粗悪

品」。

孝和はあえて盾と【ゴーレム】を“盾”にしてその瞬間に備える。

ドンッ！

軽い爆発音と共に、籠手に包まれた火石と散弾代わりのガラクタが破裂する。

(思ったよりはデカイ音がしたな！よし！)

カンシヤク玉程度でいいから相手を怯ませるために「粗悪品のイカサマ爆弾」をでっち上げた。火石が砕けて爆ぜる仕組みから考え付いていたが、テストなしの一発勝負で使うものではない。

ただ、先程の流れを変えるには十分役立った。【ゴーレム】にダメージは見られないが、戸惑いとも言える瞬間的な硬直を起こすことに成功した。

「うあああああ！！！」

イカサマ爆弾を放り投げると同時に、その手はナイフを引き抜いた。その刃先は先程の胸部に向かって走る。

刺すのではなく、柄を握り締め叩きつけるように亀裂にナイフを走らせる。ナイフを包む白銀の光がその鋭さと硬度を引き上げる。

メキッ！

叩き込んだ刃先は細かく破片を飛ばしながらも【ゴーレム】の胸に突き立った。

だが、

「もう少しだけ、行けえ！！！」

右手のジ・エポニーを離す。振りかぶった勢いそのままに、右の拳をナイフの柄頭めがけて叩きつける。

インパクトの瞬間、体中からかき集めた全力で勝負に出る。視界の端に、【ゴーレム】の右足が跳ね上がり自分の腹辺りを目掛けて

飛んでくるのが見えた。

意図的にそれを無視する。逃げたところでその先の未来につなげるための余力は無い。この一撃で【ゴーレム】が壊れるか、壊れずに孝和がミンチになるかの2択であった。

ドウツッ!!!

籠手で覆っていたとはいえ、ナイフの柄は金属製でしっかりと作りになっていた。そこに思い切り殴りかかるのだ。しかも杭打ちのようにハンマーの代わりを行う右手がどうなるかは言うまでも無い。

だが、それでも往く。往かざるを得ない。

柄頭に触れた瞬間に渾身の一撃に、しっかりと色として見えるくらいの濃度で気功を載せ穿つ。

ちょうど、ナイフの刃先にその光が集中し、鋭い刃として【ゴーレム】の蒼い光をかき消す。

その一方で、【ゴーレム】の右足も、ローキックではあったが結果的に身長差からミドルになって孝和を襲う。

「がつ……！ぐ……つがはっ!!!」

装備を含め100kg近いはずの孝和が、ボールのように吹っ飛ばす。さらには、右手も金属塊をぶん殴ったのだ。籠手の中はどうなっているかは見たくないほどに、ぐしゃぐしゃだと思われた。

「思う」というのは右手の感覚が無いのだ。それも鮮烈に感じる腹部と、甲高く割れる音が聞こえた右上腕骨からの痛みの信号で、脳みそのキャパが満杯になったのも原因かもしれない。

吹き飛んで受身すら取れない孝和はゴロゴロと地面を転がる。その1回転1回転で地面に転がるゴミが、頬や服に覆われているだけの箇所を薄く切る。

最後に大きく跳ねて孝和の体は止まる。丁度リビング・アーマーの骸がうず高く詰まれた場所に仰向けで寝転ぶ孝和は、まるで地獄

に引きずりこまれる亡者の様相だった。

「ち……くしょ……。う、ごげえ……っ！」

自由に動かない右腕と、蹴りつけられた左の上半身は、痛みで力を入れるたびに歯を食い縛らねばならないほどだった。噴き出した汗は先程までの疲労だけでなく、痛みによる脂汗も含みつつ、びっしり背中をぬらしている。

さらには、体力の限界を迎えるほどの駆動をこなした下半身は、まるで根が生えたかのように動かない。ピクピクと痙攣しているようであったが、それでも痛みを伝えてくる律儀さには辟易した。

「ま、じか……。駄目だ、こりゃ……」

右目に入る鮮血からすると、額が割れたか切れたかした様だ。その片目に写る光景に絶望を感じる。

両足でしっかりと大地を踏みしめ、【ゴーレム】が盾を放り投げるのが見えた。さすがに金属の塊。孝和が付けた胸部以外には目立つた傷は無い。

（へへへ……。くそ……。悪いな、皆。こりゃ無理だわ……）

そんなことを考えながら、孝和は自身に死の恐怖が無いことに気付く。自身がおかしくなったのかと思っただが、そうではないと思っ直す。

これも真龍の恩恵なのだろう。ただ、今回は裏目に出ている。死の恐怖は生き抜くための重要なファクターだと言える。

あの全員で転送されたときに、恐怖があれば殿は務めなかったかもしれない。一通り倒した後、皆を追うということもせず、基地に逃げ帰る選択肢を選んだかもしれない。

もっと言えば、デュークとの一騎打ちも避けたかもしれない。

まあ、多分恐怖があってもこれらの選択肢は選ばなかった自信はあるが。

「怖いって、無くなってしまつのも、考え物だな……」

そんな最後のどうにもならないことを考えながら、【ゴーレム】が目の前に来るのを待つ。唯一願うのは、皆が上手くやってくれて、

この【ゴーレム】から逃げ延びてくれることだけだ。

キールをもう少し撫でたりしたかった、とかアリアに試食させるスイーツのレシピがあったのに、とかも取りとめも無く浮かんでは消える。

ただ、最後の最後に

（ははは、嫌がらせだ……。くそつたれ……）

ひりつく顔に薄く笑みを浮かべる。リビング・アーマーの山にあったスケルトンの骨を左手で握る。

ズンズンと【ゴーレム】が孝和の目の前に立つ。もう少しだけ手前に来て欲しい。そうすればその能面のような顔面にこれを投げつけてやれるのに。

そんな、孝和の怨念に引かれたのか【ゴーレム】が一步近づく。

瞬間孝和の目に力が漲る。フォームもなっていない上に、腕だけで投げたにも拘らず思った以上の勢いで骨は飛んでいく。

「つらあー！………はア？」

当たるかと思った最後っ屁は【ゴーレム】がしゃがみ込んだ事で避けられる。

「……お、おい、なんだそれ？……ど、どという冗談だい？」

骸を床にした孝和の前には、変わらずに【ゴーレム】がいる。

ただし、【ゴーレム】は柄が折れたナイフの刃先がめり込んだ胸に右手を当て、膝を立て座り込む。左手は軽く握り締め、床に置かれる。

頭は深々と下げられている。その様子は礼節に満ちたもので、孝和にも【ゴーレム】に敵意が無いことがわかった。

いまだ混乱している孝和の目の前で、その【ゴーレム】の胸が淡

く光り始めた。

くすんだ 蒼 ではなく、
煌びやかな輝きを放つ 白銀 に。

第32話 フライ・ハイ(前書き)

誤字・脱字ご容赦ください。

第32話 フライ・ハイ

孝和と別れた先行班はその身を伏せ、周囲の様子を確認していた。「ここまでとは……。思った以上に酷いな。兵站部の奴らは一体何をしているんだ」

イゼルナは顔をしかめ、怒りを何とか押さえ込もうと、地面の雑草をプチプチ引き抜いていた。

イゼルナの視線の先には、くつきりと海軍の焼印が押された木箱が山のように積まれている。内容としては糧食が多い様子だ。だが、ここまで大量且つ無造作に運び込まれているとなると、どれほどの量が今までに運び出されたのだろうか。

「報告書を見たけれど、問題は無いはず……。なら報告者も抱きこんでいる？いや、廃棄予定のものを横流ししているのか？それにしても量が多い……。水増ししてその分をここに回したのね。……。覚悟するがいいわ」

フツフツ湧き上がる怒りの先は、兵站部の主任に向けられようとしていた。たしかその人物は確か王都の文官からの転属のはずだが、ストレイが赴任して少し後にここに来たはずだ。何らかの繋がりがあったのかもしれない。

文官出身の彼は、事あるごとに現場の物持ちの悪さに苦言を呈し、イゼルナたちのような戦闘の前線に立つ者とは徹底的に反りが合わなかった。

節制節制と大声で叫びながら、自分はそれ以上の背信行為に手を染めていたとは……。責任者である彼が大量の軍事物資の横流しに関与していないはずが無い。

鼻持ちなら無いあのハゲめ、徹底的に糾弾してやる。

ほの暗い愉悦が怒りと共に心を満たして行く。

「……………まあ、それは後回しね。皆の様子は？」

軍の腐敗に齒噛みしていたが、目の前の警戒の状況を確認する。ガチャガチャ音を立てながらリビング・アーマーが悠然と通り過ぎる。スケルトンもいるが、先程の入り口付近にいるようなタイプのものとは形が違った。

「ここらには女性型が多いわね……………。嫌な感じ……………」

骨盤の形状からしてこの建物付近には女性のスケルトンが多いように感じられた。その骨は一体何処から用立てたのだろうか。

それに加え、祭壇のあつた入り口付近にもかなりの数がいたのを実際に見ている。それらを集めたのは何処からだったのだろうか。はつきりいつて考えるだけで気分が悪い。

「……………とりあえず配置には付いた。貴女の合図と共に飛び出すが、構わないか？」

マオはイゼルナの葛藤など一切気にも掛けず、マオがそう報告する。ただ真っ直ぐに正面のドアに視線を注いでいる。先程のイゼルナの様子も見ているはずだが、表情からはそんな様子も全く見せていない。

（頼もしい、という評価でいいのかしら？それとも今回の件にそこまでの興味が無いからかしら？）

そんなことを考えながらも手元の雑草を吹いて飛ばし、代わりに愛用の魔法剣を鞘から引き抜く。

「じゃあ、行きましょう。どっちにしても突っ込みますので、中の案内はよろしく！」

手元に魔力を集中。剣に注ぎ込む量はこの後も考え、セーブする。立ち上がり上段に剣を構える。刀身に刻まれた意匠がボウツと淡く光り、暗闇を彩る。

「ハッ！！！」

気合と共に剣先は振り下ろされた。

「……はあ。やっと寝てくれた……」

立て付けの悪いドアを開け、ミリアムは自らに割り当てられた監禁部屋に戻った。鍵は掛けられていない。

それでもドアをしつかりと隙間無く閉める。すこしでも外と自分との間に垣根を作ること、何とか精神的な安心感を保てないかという彼女の無自覚の防衛本能だった。

なにしろ唯一の階段は竜牙兵がしつかりと陣取っているために、武器も無い人間が突破するのは不可能だろう。暴力の権化が扉一枚先にいるため、ひどく心が消耗して行くのは仕方ないことだろう。唯一階にいたときは違い、窓があるため、そこから逃げ出すことも考え付いたが、いかんせん3階ということもある。

さらには鉄棒がはめ込まれ、女の細腕では外す事もままならない。間隔は30cmというところで、頭を出せるギリギリのサイズだ。外を覗き込んだときにこの建物の周りも一部見ることが出来た。

この建物が建っている場所はどうかぼ地になっていて、緩やかな傾斜のある道が張り付いているようだった。

後は鼻をつく潮の匂い。ただし、洞窟内で風の流れが全く感じられないことも原因のひとつだろうが、ひどく生臭い。

それでも海が近いのはわかる。攫われたときの移動時に、波の音も遠くから聞こえていたし、この後は船で移動させられることも知っている。

この国から出るという初めての経験がまさかこんな拉致だとは思ってもしなかったし、少なかつたとはいえ、忘れられない思い出もあった。

「ぐすつ……」

知らず知らず、鼻をすする。手を目元に当てると、スツと一筋涙が流れ落ちる。

「え……？なみ、だ？……そっか、私泣きたいんだ……。そっ、

か……」

一度考えてしまったことで堰を切ったように、涙が流れ落ちる。捕まったときに壁の向こうからは、シクシクと泣いているような声が聞こえていた。時には叫ぶように大声が聞こえてきたこともある。

それを聞いてミリアムは逆に泣けなくなった。取り乱し泣き喚いたところで現状は変わらない。そんなことをして体力を使うよりも大人しくしていざという時の力を残しておくのだ。

襲われた商隊の搜索の過程で、助けが来るかもしれない。脇が甘く、油断する間抜けな看守がいるかもしれない。

淡い希望を心の支えにこの数日を過ごしてきた。結果、大人しくしていたことが功を奏し、アリアの世話役という形で独房からこの部屋に移ることが出来た。

そんな劣悪な現状が徐々に改善されて行くことで、ミリアムは何とか精神の均衡を保っていた。

それがアリアの一言で崩れてしまった。アリア本人にはそんなつもりは無かったのだが、彼女の「助けが来る」という言葉に現実味を感じないことがきっかけだったのだろう。

「……あ、ああ……」

膝から崩れ落ち、目の前にあるベッドに上半身を突っ伏す。

顔に当たるシートに残る、しみがひどく気になった。決して清潔とはいえないシートであるのに、それが今まで気にならなかったことに気付く。

現実逃避に近い思い込みで、自分の境遇を誤魔化していたのだ。周りの様子も目に見えないほどの混乱を、「普通」と思い込んでいた自分が怖い。

「……」

はらはらと涙がこぼれる。慰めてくれる者も無く、ただ孤独に耐えることはひどく辛い事なのだと、彼女は今までの生活のすばらしさとそれを失いつつある恐怖にさいなまれていた。

……ドーンッ！

そんな彼女の耳に遠くから、そして何かを力任せに叩き付けた音が聞こえた。

「え？」

目の周りをシートで拭い、ふらふらと立ち上がる。ちょうどベッドに顔を埋めていたため、軽い揺れを体にも感じていた。気のせいではない。何か外で大きな音がしていた。

鉄棒をはめ込まれた窓は、ちょうど壁の横にすえつけられたベッドの上にある。外が見たいと気が焦るのに、足のサンダルがこんなときに脱げない。

グツと力を込めて無理やりに脱ぎ捨てる。いつもはそんな雑なこととはしたことは無い。サンダルがあさつての方向に飛んでいく。

「えっと……。何？」

顔を鉄棒から出して外の様子を確認する。キョロキョロと周りを見渡すが、ちょうどミリアムが顔を出しているところからは見えないう位置、正面口方向からその音が聞こえてくるようだった。

(何なの？本当に誰かが助けに来たの？本当に！?)

驚きと共にミリアムはさらに身を乗り出す。そんなことをしても、結果的には正面の様子は見えない。

「も、もうちょっと……」

ぐいっと身を乗り出したそのときだった。

『お、おねーさん！！そこ、どいてー！ええええ！！！！』

真下からものすごい勢いで何かが飛び上がって来る。それと同時に、頭の中に声が響き渡る。

ゴーンッ！

「ちよ……っ！！あたっ!？」

驚いたため勢いよく後頭部を、窓から引き抜くときにぶつける。あまりの痛さに星が目の前で飛び散る。

ふわっと飛び上がってきた物が重力に負け、窓の少し上で落下し始める。

(バスケット?)

この場に似つかわしくない、どこかに出掛けるときに使うようなバスケットのようなケース。それが窓の下から飛んで来た。

さらには、そこから、ピョンと何か真っ白なボール状のものが、こちらに向けて飛び出してくる。

ボスン!

軽く鉄棒を揺らし、それが窓にたどり着く。

「ス、スライム?」

どう見てもスライムのようだった。ミリアムが知っている濁った色合いのそれらとは若干違うが、それと非常に良く似ている。

ただ、この辺りでは見かけたことは無い。何故かは知らないが、スライムは海沿いを嫌うことが知られている。それに、こんな警備までされている場所に野生のスライムがたどり着くことなど普通ありえない。

「ど、どういうこと?何でここに、こんなのがいるの?」

あまりの驚きに足から崩れ落ち、ベッドの上で後ずさりする。自分の知らない所で何が起きているのだろう。

『……あの、おねーさん……。ちよつと、いーい?』

またしても頭の中に声が響く。感覚的に子供の声が頭に響くのは少し怖い。

「え?もしかしてこれ、あなた?」

ミリアムは頭を抱え、ベッドの上から後ずさりする。視線を少し

上に上げた先には、鉄棒の30cmの隙間にまだ白いスライムがいる。

『んとね、そうなんだけど。あの、お願いがあるんだけど……。あのそのまえに！ぼくキール！おねーさんは、おなまえ、なーに？』

「え？わ、私はミリアムだけだよ……」

『そっか！ミリアムさんは、アリアさんってひと、しらない？ぼくたちアリアさんと、イゼルナさんのぱばさん、さがしにきたんだ！』
驚きと、困惑がミリアムを襲う。先程のアリアの話が真実だったことと、その助けがモンスターでここまで幼いということに。

「……確かに、この隣の部屋にアリアさんはいるわよ？あなたの探している人だとは思うけど……。本当にあなたが助けに来たの？」
おずおずと目の前のキールに尋ねる。

『ほかにもますたーとか、エーイさんたちもいるよ？あとでいっぱい、いーっぱいつれてククチさんもくるって、いつてたよー？』

ほよよんとしたキールの様子に緊張感や悲壮感は全く感じられない。
い。

「そ、そう……」

急転直下の現状に頭が付いていかない。ただ、助けが来ているのが判ったことはよかった。ただし、この子のいう「いっぱい」はどのくらいなのだろうか。そして、「あとどのくらいで」来るのだろうか。

『あの、おねーさん？だいじょうぶなの？……あと、それでね……』

『どうやら一気に流れこんだ情報を整理する間の数瞬、意識が飛んでいたようだ。』

「……あ、ごめんなさい。大丈夫、大丈夫。それでどうしたの？」
もう一度目を軽く拭う。今度は安堵のために一筋頬を涙が伝う。
『その、ね？んと……その……えと……』

キールの様子は、もじもじとろたえている様に感じられる。

「？」

ミリアムはその様子に小首をかしげる。

とりあえず、落ち着いたのだから、キールのその先を待つ。

『じつは、ね……。その、……ちゃったの……』

「え？」

『だからね！ぴったり、はまっちゃってうごけないのー！おねがい！ひっぱってーええ』

ふえええーん、とその後にキールの感情が流れ込む。グニユグニユなんとか体を動かしているが、完璧に鉄製のその枠はキールの丸みを帯びたボディをしつかりと捕らえて離さない。どうやら勢いよく飛び込んだせいで行くにも引くにも、どうにもならなくなってしまうようだ。

「そ、そう……。ち、ちよっと待ってね……」

ミリアムはこめかみを揉み、「本当に大丈夫なのかしら」と少し覚めた感情が自分に湧き上がってくるのを禁じえなかった。

『ありがとー！ぬけたっ　ぬけたっ　ほんとにありがとー。あのね、ミリアムさん。ぼくアリアさんと、んーと、コーンさん？ってひととか、あとほかのひと、さがしにきたんだー。どこかしらなーい？』

ミリアムの協力により鉄の束縛から抜け出たキールはそう尋ねる。ほわほわしたその感じが今の状況に合わない。どうも調子の狂ってしまうのは仕方ないだろう。

「た、多分アリアさんっていうのは隣の部屋で休んでる人のことね。コーンさんっていうのは行政官でしょうね……。ただ、もうここではなくて、船に動かされたはずだわ。もうそろそろ私たちも連れて行かれるはずだったんだけど……。この様子じゃそれどころじゃないでしょうし」

ミリアムは視線を床に向ける。階下より聞こえる怒声と剣戟の音が激しくなってきたのが判った。焦るのは禁物だが、助けに来たのであれば、何も動かなくてはせつかくのチャンスも不意になっ

てしまうかもしれない。

『そっかあ。じゃあさ、とりあえずアリアさんのところで、おねがいしますー。コーンさんとかは、ますたーとみんなで、あとでさがせばいいよねー!』

キールはびよんぴよんと扉の前まで進むと、ミリアムを急かす。

『はやくいこーよ。いそがないと、ね、ね!ミリアムさーん!』

ミリアムはそれにつられ、ドアに向かって歩みだす。すると、ドドツというけたたましい足音がドアの向こうから聞こえた。

ダンッ!

ノックや呼びかけも無しにドアが勢いよく開け放たれる。顔を出したのはミリアムをここまで移送してきた男だった。

今朝の時点では、商隊を襲ったときと同じ色の褪せた服装であったはずが、今は海軍の軍服を着ている。ただし、顔付きまでは変えられるはずも無く不自然さが否めない。生来の下品さが目に見えて判るのだ。

「お、おいつ!手前っ、来いつ!!隣のあの女も連れてこっからトングラだ!あのクソトカゲ、いつの間に逃げ出しゃがった!?お前知ってたんじゃねえかっ!?!?」

口角に泡を飛ばしながら、いきなり怒鳴り散らす。

ミリアムとしてはいきなり怒鳴り散らされた困惑が大きい。

トカゲ?あのリザードの冒険者、マオのことだろうか。だが、ミリアムがここに上げられたのはマオが逃げ出す以前のことであり、逃げ出した報告が無かったのは、怒鳴る男と別の看守が逃走の事実を内密に処理しようと隠蔽したからだ。

しかもその看守は誰にも言わず自分のみで解決しようと、入り口付近にリビング・アーマーたちを多数配置するという暴走までしてのける始末だった。

おかげでこの建物内の警備にまで大きな穴がぼこぼこ見えるこの

状況が出来上がった。

「し、知りませんよ。手を離してください!!」

がっしと腕を掴み、息も荒くミリアムに詰め寄った男は怒りと焦燥で冷静な判断が出来なくなっていた。階下の断末魔の悲鳴もそれに拍車を掛ける。

「竜牙兵がいるんだ!逃げようなんて考えんじゃねえぞ!?!と、とりあえず来い!!」

ミリアムを力づくで部屋から引きずり出すと、男はアリアの部屋の前に移動する。

そしてそのまま、ドアを開ける。

横になったアリアを確認すると、男はホッと息をつく。外にいるマオの姿を見て、取りも為さず彼女たちの様子を確認する必要を思い出し、3階まで上がってきた。

ただ、それに逃げ出したいという心中の恐怖が作用したのは間違いない。

「よしよしこっちは居るじゃねえか……。おい、女ア!!寝てんじやねえよ、とつとと起きやがれ!」

怒鳴り声を撒き散らしながら、男はアリアの寝ているベッドに向かう。

カンッ

そんな男の後頭部に小さな小さな痛みが走る。ころころと足元に小石が転がる。

「こっち!?!」

怒りをあらわにして男は先に部屋に入れたミリアムを見る。その後、後にベッドのアリアを確認した。

そして、この痛みが彼女たちのせいではないことに気付くと後ろを振り返る。

『ていつー!』

振り返った無防備な男の顔面に向かっってきたのは、キールの光輪
ブレイズ・リング
だった。ただし、大きさは本来の手の平サイズではなく、男の顔面を覆うくらいのサイズにまで拡大されている。

「ごばあっ!?!?」

ちょうどアッパーカット気味に入った不意の一撃は、炸裂音をさせて男の意識を吹き飛ばす。ザザツと床を転がり、男は床に大の字で伸びてしまった。

「ちよっ!え、ええええ!?!」

ミリアムはその光景に驚く。不意打ちとはいえ、大の男を一撃で仕留めたのだ。ほわほわした風体に隠されたキールの力量に困惑したのも当然と言える。

『えへへー。ぶいっ!?!』

ポカーンとしたミリアムを横目に、大の字の男を踏み台としてキールはベッドの上によじ登る。

「あら、キール?ふふふ。ごめんね……助けに来てくれたの?」

物音でうつすらと目を開けたアリアは、枕元のキールを抱き上げる。多少熱に浮かされ、ぼーっとしているが少し横になったおかげで、何とか起き上がれるかもしれない。

「つと……。あれ?タカカズはいないの?あなただけ?」

『あとでくるよー。しんがりするって、きいてたけど。あのさ、アリアさんしんがりって、なーに?』

「ふふっ。そうね……。ここから出て落ち着いたら説明してあげるわ」

『そっか、そうだね。とりあえずにげよっか。うん』

よしよしとキールを撫でてアリアはそう言った。

そして、アリアの視線の先には、倒れた男の腰の剣があったのだ。

第32話 フライ・ハイ（後書き）

これは本来は無くてもいい部分もあるかなと思ってはいるんです。

ただ、気分的になんとなく書きたくなかったので蛇足気味ですが投稿します。

次話はもう少し戦闘描写入れてるのを予定してます。

最後に読んでいただいている方に感謝です。

第33話 再起（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください。

第33話 再起

ぐらりと、大きくアリアの体が揺れた。ベッドから起き上がるこ
とが出来ただけで、それ以上に体を動かせるだけの力はまだ回復し
てはいなかった。

「危ない!!」

それを見たミリラムが咄嗟に手を貸す。抱きとめた体は、先程ま
で寝かしつけるために触れていたときと変わらず、ほのかに暖かく
感じられるというレベルではなく普通と比べ、どう考えても熱い。
「駄目です。やっぱりこの状態で動くなんて出来ません……。おと
なしく助けが来るのを待つべきじゃないですか？」

後発で救出部隊が来るのはわかっていているのだから、彼女はこの
ベッドで休んでいるべきなのは間違いない。

ただ、それが正しいかという微妙な情勢になったのもまた、間
違いないのである。

『アリアさん。どうしたの？きもちわるいの？』

アリアに抱きかかえられていたキールが騒ぐ。体ごとベッドの上
に戻されたアリアは薄く苦笑いを浮かべる。

「大丈夫……。って言うわけにも、いかないか……。ごめんね、キ
ール。私、ちよつと動けないわ……」

悔しげに歯を食いしぼる彼女の顔は、熱により赤みが差し壮絶な
表情となった。視線の先にはいまだ倒れ伏す男の腰の剣に注がれて
おり、ここまで人の物が欲しいのも久しぶりだと苦笑した。

『そっか！じゃーね、ぼくがなんとかするよ!』

へへん！とおそらく人と言う“胸を張った”状態になったキール
がそう言い出す。見た感じとしては少し後ろに重心が乗ってるかど
うかという格好だったが。

『えーと……。けがしてるとかじゃなくて、まりよくぎれ、なんだっけ？』

ミリアムに確認を求める。起き上がる際に何度も注意されたのを聞いて、キールがそう判断していたことに驚くミリアムは、ただ頷くしかない。

『んーと……。そしたら、ちよつとまってるね……。んと、んと……。こーいうかんじでいいかなあ？』

ギンツ！

そんなキールの言葉と共に、目の前に球形の魔方陣が書き出される。術式自体は神の祝福ユクテ・フレスに似通ったものであったが、細かなところの違いがある。

さらに言つと、

『じじ、いらなーい。そんで、こじは、あそことくつつけといて……。こじは、ぐにってまげてー。……。んんー？やっぱりこじもいらなーい。かわりに、ここのやつ、そのままつかって……。』

えいえいつとキールが呟く度、球状のあちこちの魔術式が書き変わる。場合によっては半分近くの式が抜け落ち、新たに書き記されていくその様にミリアムは戦慄する。

「ちよ、ちよつと！な、何これ……。球形魔方陣の簡易構築！？上位権限による段階的構成掌握と、更新過程の反作用を完全制圧して……。あつちのは削除項目のパターン別形成と、術式分解後の効率的運用方式の構築、よね……。」

全部しかるべき機関により長い時間と潤沢な資金を費やした上で、ようやく「実現できる可能性」が生まれたばかりと聞いている分野に属する筈の物である。

まちがってもほいほいと目の前で、しかもこんな場所で簡単に行われていい類の物ではない。

ぎゅつと、自分の指に残る跡を知らずになぞったミリアムは、は

つとして手を離す。

そこにあるはずの指輪は目の前で大の字になった男に奪い取られている。

それに気付くと彼女は男の上着のポケットを探る。右・左と探り、ズボンのポケットから自分の指輪を奪い返す。

「……うーん？これ、でいいかなあ？あ、もーすこし、くにゅつ、てかんじ、かなあ？うん！ここ、じゃまー。……よーし、できたっ！！」

ミリアムが指輪を嵌めると同時に、キールの完成の音が響く。

「ほ、本当に？こんな短時間で？」

アナライズ
声に若干の震えが混じる。おずおずと指輪のはまつた手を掲げ、解析の術を行使する。

本来、こういった術の開発や改良は個人では難しい。いや、今現在開発・改良については個人の入り込む余地はないと言っている。

膨大な数の術式を反発させないように組み上げ、さらには「使える」ように洗練させなければならない。

発動はする。しかし発動に使われる魔力が人の扱える枠に収まらなかった。こんな術式は塵芥のごとく存在する。その逆もまた言うまでも無い。

その山となつた塵芥を研究し、「使える」ように術式をいじる。

幾千幾万もの膨大な量のパターンを試し、失敗した中から考えられるパターンをさらに絞り込んでいくという、気の遠くなる作業が必要なのだ。

金のかかる学問だが、将来に向けて研究する価値は大きい。だからこそ、国や貴族、大商人が研究者を囲い込むことになったのだ。

アナライズ
解析もそういった点から派生した術だ。最初は敵の術に干渉する阻害魔術だったはずが、消費魔力が大きい上、展開にも時間が掛かる非常に使いにくい術だった。

その本質である術を阻害する部分を削除して、術の組成部分のみを読み取る初級術に組みなおした。魔術に関係する学徒であれば読

み取りと理解だけならば容易い。

だから、キールの展開した球状魔方陣がどんな物かも読み取るだけならば容易い。

「嘘……。問題なく使えるの……？発動もするし、術の変質も起きて無い……。でもそんなことが……」

半ば呆然としながらも、成り行きを見守る。

球状魔方陣は、次の瞬間にはテーブル上の水差しの上に移動していた。

『じゃあ、えいつ！』

薄く光ると同時に、魔方陣は水差しの水を勢いよく吸い上げ、その内側に球体として溜め込んだ。その後、魔方陣はサイズを徐々に狭めながら、水の球体と同じサイズになり、さらに一回り小さくなって、空中に留まる。

パンツ！

軽く風船のはじける音に似た音が響く。すると、空中に留まっていた魔方陣はちょうど真下に当たる部分が裂け、水をその下の水差しに注ぎ込んでいった。

重力に負け、水が注ぎ込まれると同時に徐々に魔方陣も縮んでいき、最後にはビー球サイズになって消えていった。

『かんせーい！アリアさん、ぐぐつと、のんでー！』

ピョンとベッド脇の床に飛び降り、呆然としたミリアムの横に並ぶように跳ね行く。

「……まあ、じゃあいただくわ……。ありがとうね、キール」

アリアは躊躇い無く、水差しから白く輝く不思議な液体と化した「それ」を器に注ぎ、口をつける。

そのあまりに自然な様子に行方を止めるのも忘れ見入ってしまったミリアムは、その液体が安全かどうかの確認をしていないことを思い出す。

「ちよつ！待つて！」

ミリアムが声を上げたときには、クイツと液体がアリアの喉を過ぎていったのが見えた。

「！！！？……カハツ！？グホツ、グホツ！！！」

そのすぐ後にはアリアが急に咳き込み始めた。

「だ、だからそんな無造作に飲み込んだじゃ駄目よ！本当に大丈夫かなんてわからないんですから！？」

喉を押さえ、激しく咳き込むアリアは、詰め寄るミリアムを片手を挙げて押しとどめる。

「ゴホツ……ゴホツ……。あ、ああ……くつ……！！キツツいわね

……！！ほとんど生のバーデン酒みたいだわ。喉が焼けそうよ……」
バーデン酒というのはこの世界の酒の一種だ。金持ちの嗜む高価な酒だが、酒精が強いため、あまり女性や酒に弱い者には好まれない。

ただ、アリアが仕える戦神ラウドの信者のほとんどが、現役や引退した戦士や、軍やそれに似た類の集団の者達であり、奉納品としてバーデン酒は人気があった。そのため毎年のように溜め込まれるそれを消費する必要がある、神殿の関係者は好き嫌いに関わらず消費する必要に駆られるのだ。アリアも強い酒は好きではないが、薄めたり少量ではあるがよく飲んでいた。

「バーデン酒みたいって？これ、お酒なんですか？」

「ああ、違う違う。そんな感じの喉の焼け方したからよ。一気に体中流れた感じは、お酒の気持ちよさみたいなものとは違うけれど……」

ミリアムの疑問にアリアは答え、ベッドから起き上がる。

先程までのふらつきや、気持ち悪さ、気だるい熱気も感じない。

その代わり、酔ったかのような高揚感がある。体に残る熱も、軽い運動後に感じられる物と同じようで、行動に支障は無いだろう。

「……大丈夫。全快とは言わないまでも、戦える。階下と合流しましょう。後続の足手まといになるのだけは避けたいわ。ミリアム、

あなた武器は使えないと言ってたけど、魔術師でしょう?」

そう言いながらアリアは床に転がる男の剣を取る。鞘から抜いて軽く振ると、顔を歪めた。

「え、ええ……。でも、私!」

「戦えませんか」なんて言ってる状況じゃないの。戦えないってことは、もしかして冒険者じゃなくて学院関係者とかってこと?」

アリアの質問にミリアムはうつむきながらも答える。

「先日亡くなりましたが、歳の離れた兄がそうでした……。教員をしていたんですが学院の執行部と反りが合わなくて、15年ほど前に田舎に越しまして……。私の術はその兄からのものです。だから、研究用の補助魔術が殆どで戦闘系の術は無いに等しいんですよ!」

「……それでも、協力して頂戴。今の私はせいぜい7割程度しか動けそうに無いわ。できるだけ下の負担を減らさないと、逃げ切れないかもしれないし……」

「でも!私っ!」

突き放すようなアリアの言葉にミリアムが詰め寄る。

『だいじょーぶっ!ぼくもがんばるから!みんなすぐに、きてくれるよっ!!だから、ミリアムさん、がんばろ?』

アリアとミリアムの間キールが体を入れてくる。ずずいつと移動しながら、明るくミリアムに語りかける。

「で、でも……。キール君、危ないのよ?怪我をするかもしれないのよ?」

「あ、大丈夫よ。キールは回復術も使えるから。そこらのベテランクラスの神官が足元にも及ばないくらいなの、ね?」

軽い調子でアリアは続ける。その間に足元を、転がっていたブーツでしっかりと固め、男からベルトごと剣を奪い取る。

半回転して男が仰向けになると、その顔面はこんがりと焦げている。軽い呻きが聞こえるので、一応念のために色々と装備を剥ぎ取る。

仕上げに寝床のシーツなどを使い、簀巻きにしてそのまま転がして

おく。

「……………本当、ですか……………？」

『えへへへー。ぼく、ぷるふえっしょなるっ！！！！』

キールがガサゴソ作業中のアリアの代わりにふんぞり返りながら応える。孝和との日々の生活の中で覚えたばかりの言葉であるが、本人は実はよくわかってなかったりもする。

まあ、あくまでキールの的に“なんとなく”なので問題はないのであるが。

「ああ、あんまり深く考えない方がいいと思うわ。私もそうだったし……………。気にしたら心が折れるわよ、ボツキリと芯の芯からね」

分捕れるだけの装備一式を男から分捕り、軍装に身を包むアリアは着替え終わった神官服を無造作にベッドの上に放り投げる。

男の着ていたものという抵抗感が多少あるが、嘔吐物で汚れた服よりは大分ましだった。しかしサイズが合わないものを無理にベルトで縛り上げたため、体のラインがモロに出た。

「これは……………少し恥ずかしい、かな？まあ、仕方ないか……………」

袖口や足元も捲り上げた格好は、お世辞にも凛々しいとは言いにくい。

『なんていうか……………。アリアさん、へーんなかつこうだねー』
率直な感想がキールから掛けられる。

「ふふふ、私もちょっとそう思うわ。でもちょっと試してみたいこともあるから、ねえ？」

ちらりとキールを見てアリアは不敵に笑うのだった。

「それで、結局“アレ”はどうするんです？あなただけで勝てるんですか？」

そーっと通路の影から下に向かう階段を伺う。そこには“アレ”

が居る。

「……………うーん……………。難しいかしら、やっぱり？」

階段前に鎮座した竜牙兵【ドラゴントウース・ウォーリア】は幅広いのバスタード・ソードと赤黒いショート・ソードを両手に持ち階段下を警戒していた。

おそらく、部屋で伸びている男が下からの襲撃に備えて命じていたのだろう。

それを確認してから少しはなれた場所に動く。

「でもこの格好なら、行けないかしら？もしかしたら躊躇するかもしれないし、あの男も何かそういった命令できるアイテムを持ってなかったあら……………。まあ特定の動きとかだったらわからないけど？」
目に付くもの何にでも襲い掛かるのではマジックアイテムとしては失格だ。どういったものか判らないが何かしら除外されるポイントがあるはずだ。

男を起こして確認することも考えたが、正直に吐くかも判らないし、何より時間が無い。

「……………まあ、その通りですか……………。それでも、準備だけはしていきましょう？これくらいしか私は協力できませんし……………」

そういつとミリアムは両手を組み合わせ祈るように膝立ちになる。ブツブツとつぶやきながら、焦点の合わない視線の先にいるアリアとしては、多少居心地が悪かった。

アイス・ウォール
「氷晶壁！」

低く抑えた掛け声と共にアリアの周りをキラキラとした氷の粒が飛び回る。

「へえ……………。これは初めて見るけど、もしかしてさっき言ってたお兄さんの研究成果？」

アリアの質問にミリアムは頷く。

「はあ、はあ……………。ええ、そうですね……………。う、上手くいって良かった……………」

息も絶え絶えに答えたミリアムはとても疲弊したように見える。

「大丈夫？これ、複合魔術のようだし、大変なんじゃないの？」
返事する余裕も無いのかミアムは頷くだけだった。

「……あ！飲んだ後は保証しないけれど、よければこれ、どうぞ？」
アリアの周りを跳ぶ氷の粒を追いかけるキールを片手であしらいながら、ミアムに金属製の水筒を渡す。

それは男の持ち物だったが、中身の酒を部屋の水場にぶちまけて、残ったキールの魔力水を注いでみた物だ。

「いただきます……」

ガツと掴み、そのまま口に一口分だけ啜る様にする。

「……ガツ！？」

大声を出せないため、口を両手で覆い声を押さえる。

「ね？そうなるでしょう？」

涙目でブンブン縦に首を振る。湧き上がる熱気が喉を焦がす。

「んーと、ねえ……。やつぱり、しっぱいしちやつたかなあ？」

結果その“不思議水”の作り手は「どっかへんだったかなあ？」
と疑問符を背負っていた。

カッ……カッ……

靴底が床面を軽く叩く音を聞きながら、前へ前へとアリアは竜牙兵の元へと近づいて行く。

カッ……カッ

その音に気付いた竜牙兵は、その体を階段から半分だけアリアに向ける。そして両手の剣を軽く握りなおし、アリアの接近に備える。

「GRRRUU……」

空気を振るわせる唸り声とその空洞の頭蓋骨を通して響く。その

声からひしひしと感じる敵意は勘違いではないだろう。

(やっぱり……。そう上手くはいかないみたいね……。どこらへんまで“行ける”かしら?)

アリアはゆつくりと手を剣に伸ばす。その足は先程よりさらにゆつくりと階段に向け移動を続ける。

「GYAAAAA!!!!!!」

すでに竜牙兵の視線は完全に階段方面から外れ、アリアに正対する。

ダンッ!!

アリアと正面で向き合った竜牙兵は、自分の警戒ラインを超えたアリアを敵と認識した。床を撥ね飛ぶようにアリアの前に移動する。その膂力を遺憾無く発揮し、バスタード・ソードの矛先はアリアだった。

「つちいっ!!!!!!」

バスタード・ソードはすんでのところで回避に成功する。袈裟に振るわれるそれを、沈み込むように体を低くし空振りさせると、逆から来る赤に染まるショート・ソードを剣で抑える。

しかし、純粋に膂力が違った。竜牙兵はショート・ソードを片手で扱うというのに、相對している両の手で振るうアリアを押し込むという結果を見せている。

さらには、そのショート・ソードがほの暗い赤い光を放つ。

ポオッ!!!!!!

勢いよくショート・ソードから炎が吹き上がる。それを予期してアリアは剣を滑らせるように竜牙兵の真横に移動する。

「熱ッ!!!!!!」

それでも熱気がアリアの肌を焦がす。ただ、ミリアムの補助魔術

による多少の熱気の軽減のおかげで、何とか剣を握る手には力が入る。

初見で持っているショート・ソードが何らかの魔術的付与がされたものであるのは解った。剣の色味からして火炎系統のものであると見越して、冷気のコーティングと剣勢を食い止める衣を纏ったのだ。

ミリアムが“出来る”と宣言したので念のため頼んでみたのだが、結果的には成功といえるだろう。

ただ、初手で袈裟に振るわれたバスタード・ソードをアリアに向け振りぬこうと、右腕が肩口から動く。

だが、

「V W W O O O U A A ! ! ?」

竜牙兵の右腕が、ガクンと何かに掴まれたように大きく動く。

勢い良かったたきつけられた剣は、地面に突き立っていた。もちろんそんなことは竜牙兵も承知の上であつたはず。

そこから十分に引き抜き、アリアを分断するため振りぬいたはずだつた。

その不可解な状況に竜牙兵は、眼球がないにもかかわらず、顔をバスタード・ソードを握る右腕に向ける。

「! ! ? G W H A A U ?」

突き立ったバスタード・ソードの柄がいつの間にか、うっすらと霜で覆われていた。

そして、柄から剣先に視線が動く。すると、剣だけではなく地面までもが完全に凍りついていた。

一筋の氷の線がまっすぐ通路の先に続いている。その先にいるのはミリアムとキールの2人だつた。

ミリアムは力強く地面に両手をつけ、祈るかのように目を閉じている。その地面には方陣が精緻に刻まれている。その冷気を放つ陣を発動し、剣ごと地面を凍らせたのが彼女なのは間違いない。

「クロウル、ラリーズ氷結乃蛇……!!」

彼女のつぶやきは竜牙兵に聞こえただろうか。すぐさまミリムは片手で横に置いた水筒に口をつける。

その途端、剣の半ばまでだった氷が、柄を握る右手にまで一気に成長する。

傷みを持たないが故の竜牙兵が見せた失策を見逃さず、アリアは真横に回りこんだ勢いのまま、剣を足元に落とす。

「ああああああっ！！！！！！！！」

急に圧力を失ったショート・ソードが空を切り、がら空きになった肋骨部にアリアの輝く気孔の拳が叩き込まれた。

さらには、アリアの通ってきた通路方向からは特大の光輪フレイズ・リングが飛んできた。

氷はさらに成長し、足首までを覆い始めていた。避けるに避けられず、竜牙兵はその2撃をそのままに受けるのだった。

第33話 再起（後書き）

久しぶりに時間ができてPC開くと、結構時間が空いてました。

見てくださるすべての方に感謝を。

第34話 合流（前書き）

誤字・脱字ご容赦ください

第34話 合流

「ちよっ！！まっ、待てえ！！！？無理！無理だつて！！？」

ドンッ！ドンッ！！ドンッ！！！

地面を踏み鳴らす音が無情にも孝和の声を打ち消す。焦りと恐怖を内包したその声を無視して、騒々しい音はさらに勢いを増していく。【ゴーレム】は助走を十二分にとり、加速度をさらに増していく。

「うそ！うつそ！！嘘だろうが！？」

バシバシと自分を抱えた【ゴーレム】を遠慮なしに叩く。ただ、満身創痍の孝和の全力は、すでに5歳児にすら負けるほどの脆弱さである。

がっしりした【ゴーレム】にとっては何の痛痒も与えることはない。

ドガンッ！！！！！！！

今まででもっとも大きな、炸裂音といっても良いくらいの轟音が響き渡る。

「駄目だっ！？うわあああああああああつっつあああああ
あ……………！！！」

ドップラー効果を残しながら、孝和の絶叫は徐々に小さくなっていったのだった。

ベキイツ！！

真横からのアリアによる衝撃と、その斜め方向からのキールの一撃は、竜牙兵をその場から吹き飛ばす。

ただ、右腕と右脚を覆った氷結クロウル・フリーズ乃蛇の氷の塊は、その場に竜牙兵を貼り付けにしていた。

結果として、破砕音と細かな骨を周囲に巻き散らかしながら竜牙兵は吹き飛んでいく。完全に氷に埋まった右腕はバスタード・ソードとともに氷像としてその場に残された。脚部についてはいまだ固定されきつてはいなかったこともあり、そのまま竜牙兵の胴体についたままであった。

「GYAAAAA!!!!!!!!!」

周囲に響き渡る怒声が、相對していたアリアたちを怯ませる。

「くっつ！」

右腕を失いながらも、竜牙兵の戦意はまるで変わることはない。むしろアリアたちを油断ならない敵対者と認識したことにより、さらに先程よりもその悪意は増したといえる。

さらに、奇襲を優先せざるを得ない状況だったとはいえ、竜牙兵を飛ばした方向が悪かった。

丁度キールたち援護術師チームからは死角となるのだ。ミリアムやキールが動けば良いことかもしれないが、竜牙兵に目標とされた場合にキールはともかくミリアムがまずい。

冒険者というわけでもなく、戦闘の基礎を学んでいるわけでもない学者肌の人間に、いきなりベテランクラスの剣戟を受けることはどう考えても無茶といわざるを得ない。

だからこそ、アリアは体を走る震えを押さえ込み、叫ぶ。

「来なさいっ！バケモノっ！！」

半身に剣を構え、竜牙兵の動きに備える。ミリアムたちを狙うには、アリアの位置を過ぎる必要がある。階段の前に陣取る形になったことにより、敵の増援にも柔軟に対処できるアリアはこの場で最前線の拠点となったといえた。

つまり、ここで竜牙兵をpushさえ込む限りミリアムには危険はない。(でも、さっきのでかなり持ってかれたわね……)

周囲を飛ぶ氷が先程までと比べ、その密度を希薄にしていた。熱気に炙られた為に蒸発した分と、剣圧に抗して砕け散った分が消し飛んだのだ。

「あの様子じゃ、もう一度は無理でしょうし……」

チャージしながらの術行使はミリアムにとつてかなりの無理だったのだろう。ちらと視線を竜牙兵を捕らえたまま横に向けると、ミリアムが蹲る様に地面に突つ伏している。

自身のキャパを超える氷結クロウル・フリーズ乃蛇の連続行使と強制的な持続は、彼女の精神力を削りきったのであろう。

時々口元に水筒が向けられるがあまり回復しているようには見えない。キールの不思議水は確かに魔力を回復はするが、比較的魔力容量の多いアリアの感覚としては7割。元来魔力容量の多い人にとつてもせいぜい6割といったところではないだろうか。

つまり魔力を使い切ってしまったえば、術の種類によればまったく使えないのである。

「じゃあ、私ができるしかないじゃない？」

隻腕とはいえ、竜牙兵は強い。その隻腕にあるショート・ソードはすでに炎を纏い、先に見える竜牙兵の顔を赤々と照らし出す。

間違つてもあまり見たい顔ではない。照らされたことでおどろおどろしい風貌がありありとわかつてしまう。

「GRUUU……」

静かに深く唸る竜牙兵は徐々に体を沈みこませる。両の脚は地面を力強く掴み、突進の姿勢をとる。

「くっ……！やっぱりそうくるわよね……」

失った右腕を計算に入れて考えても、アリアより竜牙兵のほうが重い。極端な話、1対1であれば単純なゴリ押しで十分対処できてしまうのだ。

この避ける場所が極めて少ない通路という状況下であれば、竜牙兵は突進し、渾身の一撃を振るい、その過程のどれかでアリアを穿てば良い。

剣であれ、炎であれ、その体躯であれ。つまり竜牙兵のチョイスは正解といえる。

一方のアリアはそうはいかない。突進してくる竜牙兵の攻撃をかわし、行動不能にするかそれに近いダメージを与える必要がある。

ただし、

(そんな選択肢なんて、ないのよね……)

剣を構えてはいるが、その一振りでは敵を止められない。脚、腕、腹、そのどれを狙おうともその後の攻撃が続くであろうことは間違いない。

頭を狙う策もあるだろうが、相手もそれをさせないため、一瞬の勝負に出るのだろう。何しろ相手は痛覚がない。痛みでは止まらないのだ。

すると選択肢は一つ。気功を乗せた拳打となるであろう。先ほどの奇策による肋骨部の竜牙兵へのダメージは、少し離れた位置からも見て取れるほどだ。

本来、死骸から創られた竜牙兵は生命力を忌避する。“生きる”力に極めて弱いのだ。そういった点でマジックアイテムといえども、アンデッドの一種といっても良い。

肋骨付近ははまだ煙を上げ、竜牙兵へとダメージを与え続けている。顔面の一部にも焼け焦げた跡がくつきり残っていた。アリア個人の感触としても、気功の一撃は硬いはずの竜骨をやすやすと砕いたと感じられた。

で、あるならば

「来なさい！死せる者が生有る者に害を為すものではないわ。あなたの本意ではないとはいえ、あるべき姿……骨は骨に戻りなさい！！」

ダンツと床をたたくように脚を踏み鳴らす。邪魔になる剣を横に除け、半身になって竜牙兵に向かい、煌々と上がる気炎がその拳をさらに光らせる。

その光の威力を身を持って知った竜牙兵がさらに姿勢を低く低くする。振るわれるだろうショート・ソードは気炎を上げたアリアに呼応するようにさらに吹き上げる炎を強くする。

両者ともタイミングを窺う。先に動くほうが有利なのか、それとも動き出したことを確認してからの方が余裕を持って対応できるのか。

その結論に先に辿り着いたのは、竜牙兵の方だった。

足元の床面が砕け散りながら飛び散る。その勢いを持った竜牙兵がアリアへの突進を敢行した。

先程の肋骨部のダメージと治まらない浸潤が結論を後押しした。

時間を掛けて睨み合いをするのは、自分が不利になる可能性があるかと判断し、動く。

「G A A A ! ! ! !」

アリアの拳が届かない距離から、ショート・ソードが振りぬかれる。

剣に纏わり付いていた炎が明確な意思の元、アリアを包み込むように広がっていく。

「少しだけでいいの！もって！！！！」

視界全体が炎に覆われながらも、そこ目掛けてアリアも前進する。アリアに残された氷結の鎧はわずかではあるが、それでも最後の一滴まで彼女を守りぬいた。

ジリジリと炙られ、焦がされながらも、アリアは炎の壁を自身の拳で打ち抜く。術が消し飛ぶと同時に彼女は壁を抜け、竜牙兵の眼前に躍り出る。

それを待ち構える竜牙兵は、突破してきたアリアを刺し貫くように残された左腕で刺突の構えを取っていた。

炎と、それを突破してきたときに備えた刺突の2段構えであった。しかも、これは限界にまで体を引き絞ったものであった。現状で竜牙兵が出来る最も早く力強い一撃である。

たたらを踏んで急ブレーキを掛けたアリアは、自身に向け飛んでくる剣先をしっかりと目で捉える。同時に両足に残された力を回避のみに注ぎ込む。

「くつつ……!?」

予想をはるかに超える速度の一閃はアリアの右胸をかすめる。だが、それはギリギリ脇腹を1cmほど切る程度で、多少の出血程度のダメージにとどまり、致命傷とはならなかった。しかも炎を纏っていた刀身は極度の熱を持ち、更なる出血を防いでくれた。

ブレーキを右足で掛け、そのまま左腕に渾身の力を籠め、殴る。ガツンと竜牙兵の先程とは逆側の肋骨とぶつかる感触が拳に残る。そのまま体を預けるように連撃。打ち付けたまま上に持ち上げる要領で、ヒビの入った肋骨をゴツソリ持っていく。

「WHOOOO!!!」

竜牙兵もそのまま攻撃を受け続けるだけではない。スラスト状態のショート・ソードを手首を返して自身の腹部に突き刺すように放つ。

いわゆる自決するかのようなその一撃は、死というものから縁遠いという特性が可能としたものだった。

ただ、自らをアリアとともに貫く一撃は実に有効とも言える。“普通”の神経では放たれない一撃は、“普通”を相手とする経験を一切無意味と為さしめる。

「残念!当たらないわよ!」

アリアはザツと地面に向け体を低くする。アリアがこの一撃を回避できたのは神官という職の特異性にある。“普通”の生者ではなく、死を纏う異質な敵との経験とその対策。年月を重ねることで増

える死者との戦闘時の対応策と失策は山のように増えていく。

そこには所謂、“自爆技”への対応についても膨大な量がある。

この一撃も、予想の範囲内であったに過ぎない。

そんなことは知らない竜牙兵は、ただ自身を傷つけるだけだった攻撃を無意味に行い、両腕が完全に無効化され、何も出来なくなつてしまつたのである。

その体をねじるしかなかった下顎に向け、アリアは全身のバネで体ごと飛び出すかの様な豪快なアッパーカットを放つ。

「だつっあああああつっ！」

とはいえ、先程からの攻防はアリアとしても限界に近い動きである。ベキツと響いたのは竜牙兵の顎だけでなく、アリア自身の拳からの音でもあつた。

「痛つっ！」

吹き飛んでいく竜牙兵をその目で見ながら着地。飛び上がったときには両足の力は抜け切つていた。着地と同時に膝が笑い出し、崩れるように倒れる。

その倒れ伏した状態で竜牙兵を見る。顎が完璧に無くなつていた。ただし、アリアの側も右拳はかなり痛めていた。当たり所の悪い薬指は折れてしまつている様だ。

（た、立たないっ！！）

這いずりながらも壁に手を掛け、地面から立ち上がる。仰向けになつた竜牙兵はピクリとも動かない。それでも警戒は解かない。まだ無事な左腕に残る気を集中し、起き上がるそぶりがないか注視する。

『だいじょうぶ？アリアさん、いたそーだよ？でも、なんとかなつてよかつたねー』

警戒をいつまで経つても動かない竜牙兵から、階段方面にシフトしようとしたところで、邪魔にならないように隠れてもらつていたキールとミリアムがこちらに向かつてきた。

キールはともかく、ミリアムはひどい顔だ。術の行使もあるだろ

うがそれ以上に、戦闘行為が彼女の精神をガリガリと削り取ったということだろう。

真つ青な顔には生気も感じられず、しきりに口元を押さえ、吐き気と戦っているように見えた。

「まあね……。とりあえず生き残ったんだし、良かったんでしょうけど。ミリアム、つらいようなら一度吐いてしまえば？ だいぶ楽になると思うけど？」

そのアリアの提案にミリアムは弱弱しく首を横に振る。

「いえ……。いま吐いてしまうと、魔力が回復しないから……。我慢しないと……」

その言葉から判断すると、極度の緊張から来る吐き気のようなのだ。確かに回復途中なら胃が受け付けなくとも、キールの“不思議水”は飲み込んだままにしなくてはならないだろう。

「そうね。今、魔力切れになると動けなくなってしまうものね。無理させてごめんなさい。でも、あなたの協力で“これ”、なんとかなったのよ。本当にありがとう」

ニツと笑顔を見せて笑い、背にした竜牙兵を親指で指し示す。

青ざめながらもミリアムは首肯し、苦笑いに近い微笑をアリアに返す。

その瞬間、完全に全員の意識が竜牙兵を遺骸と見做してしまった瞬間に、

「……syuuUoooo……aa……」

下顎が丸々無くなったせいで、空気の通りが変わったのだろう。

先程までの氣勢は無くなったかのような気の抜けた音が周囲に響く。ギョツとしたアリアが後ろも見ず、その場からミリアム突き飛ばす。自身はそのままとキールを庇う様に抱え込み、腹這いになる。

ブンッ

今まで完全に倒されたと思っていた竜牙兵が、飛び起きるととも

にその脚でなぎ払うような蹴りを放つ。

「うあ……つづあつ……！」

アリアの丁度肩口付近に勢いよく蹴り足が激突し、そのまま浮かんだ体を竜牙兵が壁面に向け、叩き付ける。

アリアの口からは言葉にならない呻きが漏れる。背中に壁が激突した衝撃で、肺から一切合財全てを吐き出されてしまった。

「ア、アリアさん……だめっ！！ばかあっ！！！」

突き飛ばされた先で恐怖により腰を抜かしてしまったミアムとは違い、ギリギリのタイミングでアリアが庇ったキールは、幸運にも蹴り飛ばされることなく無事であった。

それもあり、幽鬼がごとく起き上がり風切音をさせる竜牙兵を、食い止めるための術を最大威力で放つ。

形として、右腕で振り下ろそうとしていたショート・ソードが、
ブレイズ・リング
光輪とぶつかり合い光を撒き散らす。

バガンツ！！

響き渡った炸裂音と、閃光が収まったときには竜牙兵はそこに立っていた。ただ、先程までとは違い、隻腕の竜牙兵に残された右手が、ショートソードごと手首とともに地面に転がっていた。

シュワシュワと新しく煙を噴き上げる右手を見つめ、竜牙兵はキールに視線を移す。緩慢とした動きではあったが、キールに向けられた敵意はすぐに消え去った。

脅威度としてはアリア・キールともに同じくらいであったこともあり、まずすぐに“処理”できるアリアを排除することにしたのである。

残された攻撃手段である脚を、壁に寄りかかるアリアの胸部に乗せ、ミシミシと力を籠めていく。

「ぐっつ……！！？がっつ……！！！！！！？」

先程受身も取れずに叩きつけられた影響が色濃く残ることもあり、

アリアは力が入らなかった。双方とも満身創痍だが、いま止めを刺されそうになっているのはアリアの側だ。

それを見ているキールは、攻撃するべきなのかそれともアリアの回復するか、2択で瞬間的にパニックになってしまっていた。

そこでアリアは最後の力を込め、必死に胸に乗った脚を除けようとその足首を掴み押し戻す。

だが、結果として徐々にではあるが脚は胸に食い込んでいく。

『そのあし、どけるんだっ！そんなことしちゃ、だめなんだいっ！』

一瞬のキールの混乱も落ち着き、その脚に向け2回目の光輪が放たれた。
ブレイズ・リング

だが、狙う場所の予測ができていたのだろう。勢いよく胸元から脚を大きく引き上げ、それを回避した。しかも、その後には速度を持ったスタンプでさらにアリアの胸元に痛撃を加えてくる。

「がっ……はっ……！」

口元から血の混じった唾が吹き出す。口を切ったのではなく、どこか内臓にダメージがあるのだろう。その量は傍目から見てもかなりひどく感じられた。

ミリアムはその様子にさらに恐怖を感じ、キールは自分のしたことでアリアがさらに傷ついたことにショックを受けてしまった。

アリアにしても、ダメージがひどく意識も薄れてきたのだ。

手詰まりとはこういうことを言うのだろう。誰もが自分の限界を徐々に感じ始めていたときである。

「……………目だっ！？……………ああああああっっっ！！」

唐突に悲鳴が聞こえる。徐々に大きくなるその声は、建物内ではなく外から聞こえてきている。

しかも何故かこちらに近づいてきている。

ここは3階だというのに。

ドッゴオオオオオオオーンンン！！！！

あり得ないほどの轟音とともに、壁面が勢いよく吹き飛ぶ。中から外へではなく、外から中へ向けて、壁であったはずの石材が粉塵とともに転がり込んでくる。

それを見て、竜牙兵はアリアに乗せた脚を除け、吹き飛んだ壁と逆側に飛ぶ。

状況の不確かさから危険と感じたのだろう、瀕死のアリアではなく、新たな警戒対象としてその吹き飛んだ壁を見つめる。

しかし、“見つめる”という選択肢は悪手であった。

「! s Y o o o W w a ……! ?」

いまだ晴れない粉塵の向こう側、壁のあったはずの場所から腕が“ぬっ”と出てくる。ただ、明らかに位置が高い。どう見ても腕が突き出された位置は地面から2 m以上はある。

更に言うなら、縮尺がおかしい。腕のパーツとして比率は正しいが、サイズが段違いに大きい。

光沢がおかしい。生物的な質感がなく、金属的な滑らかな曲線を描いている。それでいて、薄暗いこの通路にぼんやりとライトブルーに光るということ自体が想像できる範囲を超えていた。

「……え？なに！なに！！うわわわわっ！！！！？」

キールの困惑が周囲にまき散らかされる中、それを合図にしたかのように、粉塵の中から巨体が煙を掻き分けるように勢いよく姿を現す。

孝和と戦い、頭を垂れた【ゴーレム】がそこに居た。孝和と戦っていた時のほの暗い鬼火のような蒼ではなく、精練された透き通る青が全身を包んでいる。胸部からは煌びやかに白銀の魂が燃えてい

た。その配色は整ったフォルムには見事に映え、洗練された武の美しさがそこに描き出されていた。

ただ、それは【ゴーレム】がどの立場なのかわからないミアムには恐怖の対象でしかなかった。突如現れ、自身の横を煙を纏わせながら駆け抜ける【ゴーレム】に限界を超えた心は、ヒツ、という短い悲鳴とともにあっけなく気絶という選択肢を選び取ったのだ。

「おっとお……！危ないですよ……、って、気失ってんのか」

ミアムの上半身を受け止めたのは、血に染まる全身に万遍なく粉化粧でまだらな赤白のカラーリングとなった孝和だった。

「まあ……。ギリギリだったみたいだから結果的にはOKだな。そう、思つとけ、俺……」

孝和の目線の先には、今まさに竜牙兵に殴りかかるとする【ゴーレム】と、呆然とそれを眺める青白い顔のアリアが見えた。

ダンッ！！

踏みしめた床が大きく足の形に窪む。圧倒的な重量感の踏み込みは、その巨体を瞬時に竜牙兵の眼前に割り込ませる。

警戒のため、崩れ落ちた壁面を向いたこともあり、竜牙兵は振り上げられた拳をバックステップで回避することに成功する。

大振りなその一撃を、十分に余裕を持って対処することに成功した竜牙兵は、そのまま体勢を整える為の制動に動きを変える。

だが、踏み込みの圧が大きいということは、足に運動エネルギーが残っていることを指す。動物では不可能な関節分への負担を、頑強“過ぎる”関節で完全に無視して拳動が続く。

脚をそのまま前に出す。そのスタンスが右構えから左構えにスイッチしているが、その佇まいに何の違和感も感じない。

淡々と何事もなかったかのように、今度は大振りではなく、よりコンパクトにかつ鋭いストレートが竜牙兵の胸部に抵抗を感じさせずに打ち込まれる。

先程の大振りのテレフオンパンチが、完全に罨であったことに気付くには十分すぎる精密さであった。

着地の両足がそろうタイミングで放たれた拳は、腕部の損傷の激しい竜牙兵に防ぐ術は無く、そのまま後方の壁に向かって叩き付けられることになる。

「gg……ggvagg……！」

叩き付けられたそのままの勢いで、跳ね返ってきたところに追撃が来る。

実に3度目となる踏み込みにより、またも【ゴーレム】は巨体に見合わぬ疾風の体捌きを見せる。

今度は拳ではなく、包み込むように頭部を右手が掴む。落ち窪んだ眼窩に指を掛け、しっかりとその頭蓋を握る。

そしてそのまま右脚を跳ね返ってきた胸部にあて、後方の壁にめり込ませるようにして竜牙兵の動きを止める。

先程のエリアにしていたことが、そのまま自分の身に降りかかってきた状態となる。そうして竜牙兵がまだかるうじて残る、右上腕骨で【ゴーレム】を払いのけようと抵抗を開始した。

しかしながら、硬質なその体には一切の傷も付くことは無く、何の痛痒も見せない【ゴーレム】は、竜牙兵に触れる手脚に力を込める。

メキィー！！バキッ！！ミシミシィー！！

けたたましく周囲に骨が碎ける音が響き渡る。足で踏みつけられた胸部は肋骨どころか背骨の一部までもが折れ飛び、地面に破片を撒き散らす。左の手は抵抗していた右上腕骨を掴むと、そのまま握りつぶす要領で細かな塵へと変えていく。

そして頭蓋を掴んだ右手は、胴体部分から力任せに頭部を引き干切る。

ゴキイツ！！！！

いままででもっとも大きな音がして首と胴が離れた。その後体は、だらんと力を失い【ゴーレム】の右脚がどけられると、その場にゴミのように積まれる形となった。

その様子を確認した【ゴーレム】は、右手の竜牙兵の頭蓋骨を興味を失ったように後方に投げ捨て、念には念を入れた“処理”を開始した。

積み上げられた体部分の骨を真上から踏む。すでに力の失せた、ただの骨であるだろうが、背骨や腰骨、脚部を二度と繋がらないようにベキベキに折り砕いた。

「な、何よ……。あれ……」

命を救った闖入者は、あつという間に自身が苦戦していた竜牙兵を屠り、自身が失念していた完全な沈黙を敵に対して与えている。

その有り様はまるで、樹を切り倒し、枝を落とし、皮を剥ぎ、適当な大きさに切り分けて薪を作るような淡々とした作業工程を見ているかのようだった。

感情としては助かった安堵感よりも、目の前の【ゴーレム】の真意を掴みきれない恐怖感のほうが勝っていた。

その精緻な体に確かにある、圧倒的な暴力が自分に向けられる可能性はゼロではないのだ。

そんなことを考えていると、

「あー、と、なあ……。もういいんじゃないか？そこまでにしとけよエメス……」

どこか困ったかのような気の抜けた声が後ろからかかる。確かつい最近も聞いたことのある声だった。

ズキズキ痛みで気が遠くなりそうな体を何とかひねり、声の主を正面に見据える。

相手もこちらに気付いたのだろう。へらっ、と苦笑いしながらこちらに微笑みかけてくる。

「うわ、アリアもスタボロじゃんか！キール、悪いけど俺もアリアも治療急いでくれよ。もうさすがに限界だわ、俺……」

そういうと孝和はアリアの正面の地面に座り込む。確かに双方とも無事を喜び合うよりも先に、治療が必要だろう。

血だらけの再会はどうしてなされたのだった。

「……で、アレ。一体何なの？と、いかかどういいう経緯な訳？」

孝和の命により周囲を警戒することになった【ゴーレム】こと、エメスは少しはなれた階段前で下に向けての警戒をしていた。

そこで感謝を述べ、簡単に現状の確認をすることになったのだが、「いや、俺としても何がどうなってるのかサッパリだったりするんだけど……」

ポリポリ頭をかく孝和。キールによって怪我は治ったが、髪にこびりついた血はどうにもならない。どこと無く気持ち悪くて髪の毛を触るたびに、固まった血が地面に落ちる。

しかも粉化粧までしたものだから、服全体もどこか埃っぽい。止血していたあたりはドス黒く変色し、お世辞にも清潔とはいえないだろう。

孝和としてはこんな所からはさっさと逃げたいのだが、さすがに理由のわからない同伴者がいるのでは動けないとアリアが止めた。

まあ、階下から聞こえてきた戦闘音もだいぶ静かになったようなので多少の時間はできたろうとの判断だった。

一方、主目標のアリア救出を果たした孝和としては、残りの目標のアデナウ・コーン氏や、他の皆の様子も気になってはいる。

だから本当に簡単に且つ、手短かに説明することにした。

「まあ、なんとなく解ったけれど……。無茶したわね。あんなところから“跳んだ”の？」

この建物はすり鉢状の区画に建っているらしい。大穴となった壁から外を覗き込む。たしかに隣の空間の通路はこの3階よりは高い位置に見える。そこから螺旋状に道があり、下に通じている。

ただし、孝和によると下から登ったのではなく、その高い位置の通路から助走をつけて「跳んだ」のだというのだ。目測で優に10mは軽く超える。

「そんなつもり無かったんだよ？キールの光輪ブレイズ・リングほい光が見えたからさ……。あそこ目指そうって言ったただけなんだよ。そしたら“跳んだ”」

「えーと、あのエメス君が、勝手に？」

孝和の首がカクンと縦に揺れる。腕の籠手をはがしたり、胸甲の金具が外れなくて四苦八苦しながらも言葉を続ける。

「なんか協力してくれる感じだったから、頼んでさ。抱えて運んでくれたんだけど、止められなくて。そのまま、ダダダッ、ポーンッ、ドカーン、だよ」

流れを擬音で表現して恨めしそうにエメスを見る孝和。まあ、怒ってはいない。そのおかげで間に合ったのも確かだろう。

『ねー、じゃーさっ。あのエメスくんはおともだち？』

胡坐を組んだ孝和の横でミリアムを診ていたキールが訊ねる。

「まあ、そう、かなあ？」

『じゃあ、ちよつといっってくるー！』

ぴよんぴよん飛び跳ねながらエメスにキールが突撃する。

「……いいのかな。ほんとに」

まだ孝和としてもあの【ゴーレム】のことはよくわからない。便宜上呼称を必要としたので、とりあえずよくRPGで、メカとか人形系のモンスターに入れる名前で呼んだところ、気に入ったのかそのままこちらの指示通りに動いてくれるのだ。

由来としては“真理”のローマ字読みだ。さすがにEは刻んではないだろうし問題ないだろう、たぶん。

エメスの近くまで跳ねて行ったキールは、じーっと数瞬エメスを見つめ、エメスもそれに気付く。

ちよつとの間、見つめあい差し出されたエメスの手に、キールがぴよんと跳び乗る。そのまま肩にキールを乗せ、エメスは警戒を再開する。

『ねー！ますたー！！たかいー！ー！！』

こちらに楽しそうに語りかけてきたキールに苦笑しながら手を振る。

するとミリアムが気付いたようで、ううつと目をゆっくりと開けた。

「あ、大丈夫です？救助ですんで、動けそうならこのまま行きますけど？」

「え、ああ……。アリアさんの言ってた方ですね……」

アリアと孝和の2名を視界に捉え、ゆっくりと起き上がる。

「あの、あの【ゴーレム】って……」

震える指でエメスを指差す。

結果、またも孝和は同じ説明をすることになったのだった。

第34話 合流（後書き）

こちらに来ていただいているすべての方に感謝を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916o/>

価値を知るもの

2011年10月8日18時15分発行